

# 鶴翔会

令和5年4月1日発行 2023年 134号

岡山医学同窓会報



H. Tanabe



実習風景

## 表紙の写真

---



たなべ ひろし  
田部 浩 (1888～1968)

明治21年東京生まれ。大正3年岡山医学専門学校卒業。卒業後大正4年1月、病理学教室に助手として入局、教務補助となって講義を分担し教授を助けた。また、講義のかたわら淡水産魚類を中間宿主とする吸血類の研究を行い、大正7年3月京都帝国大学医学部病理学教室に移ってから研究を続行し、数種の新吸虫を発見した。大正11年3月、文部省在外研究員としてドイツ・フライブルグのアショフ教授に師事し、地方性甲状腺腫に関する研究を行った。大正13年8月帰国、同年9月病理学教室教授に就任した。大正末期から昭和の初期にかけて教室の研究は大いに進み、教授は寄生虫の研究とともに、日本学術振興会第三委員会（流行性脳炎）の委員として日本脳炎の病理解剖学的所見を詳しく追及し、昭和12年には脳炎にしばしば認められる「胞隔性肺炎」について貴重な業績をまとめ、これを日本病理学会の特別講演として発表した。

昭和16年戦火が激しさを増す中、当時、教授の研究は、日本脳炎の病理の他、この脳炎により注目された胞隔性肺炎の実験的研究をはじめ内分泌系の病理に関する研究が主体であった。

敗戦当時の病理学教室の状況は惨たんたるもので、物資不足の現実下に病理解剖及び実験は続けられ、特に進駐軍命令による日本脳炎の解剖は昼夜なく、また、停電

下、蠟燭のもとでしばしば行われた。教授は教室の再建を進めると同時に、昭和27年第41回日本病理学会総会の会長を担当し、研究も大いに進展した。特に、骨折と内分泌腺の変化、結核の感染とシ्यूブ、脾臓の病理等と人体病理を主体とした病理形態学的研究は教授在職中の最盛期を築いた。この時期のすぐれた業績は住血吸虫皮膚炎の研究である。島根県宍道湖畔に発生した湖岸病、或いは水田皮膚炎と呼ばれる風土病の解明で、棕鳥住血吸虫の病原体発見は学会で高く評価され、日本進駐のGHQのハンター大佐一行の研究列車が東京より現地宍道湖畔にさしむけられた。この一連の研究により、昭和25年浅川賞、昭和26年中国文化賞、昭和28年桂田賞を受賞した。

昭和29年3月、定年退官により岡山大学名誉教授となったが、退官後は、大阪医科大学教授に就任し、湖岸病の他に、肺トキソプラズマ症の研究に専念し、昭和30年には、水田皮膚炎の研究に対して、厚生大臣から第7回保健文化賞が授与された。

昭和43年8月、教授は病により他界されたが、教授のオルソドックスの中に見出されるユニークな生きた病理形態学観及び学者としての人間味は多くの同門により慕われ、「清流」の余韻を残した。

(参考：岡山大学医学部百年史)

<b>巻頭言</b>	<b>1</b>
岡山大学病院長 前田嘉信	
<b>ご挨拶</b>	<b>2</b>
岡山大学長就任 那須保友	
退任 榎野博史	
岡山大学院医歯薬学総合研究科長就任 成瀬恵治	
退任 伊達 勲	
退任 伊藤 浩	
退任 木浦勝行	
退任 八木孝仁	
退任 草野展周	
退任 千田益生	
岡山大学学術研究院医歯薬学域 精神神経病態学分野教授就任 高木 学	
岡山大学学術研究院医歯薬学域 脳神経内科学分野教授就任 石浦浩之	
岡山大学学術研究院医歯薬学域 病理学（腫瘍病理）分野教授就任 山元英崇	
岡山大学学術研究院医歯薬学域 泌尿器病態学分野教授就任 荒木元朗	
岡山大学学術研究院医歯薬学域 消化器・肝臓内科学分野教授就任 大塚基之	
新医療研究開発センター企画運営部並びに次世代医療機器開発部教授就任 櫻井 淳	
<b>会員動向</b>	<b>15</b>
人の動き（受賞者、人事異動、役員異動など）	
学位授与	
会員訃報	
<b>クラブ報告</b>	<b>20</b>
岡山大学医学部ラボサークル 三前英恵	
医学部硬式庭球部 山下晃一	
<b>会員のこえ</b>	<b>22</b>
編集者への手紙 坪井修平	
<b>同期会だより</b>	<b>24</b>
岡山大学医学部四〇会岡山犬島牛窓同窓会（第18回 四〇会同窓会） 藤井靖久	
<b>支部だより</b>	<b>26</b>
令和4年兵庫県鶴翔会総会 山本満雄	
東京支部だより 三宅健介	
令和4年度 鶴翔会 山口県支部総会 青 雅一	
<b>学生だより</b>	<b>29</b>
解剖実習を終えて 田村郁人	
解剖実習を終えて 錦織 巧	
解剖実習を通して 吉原由佳子	
会報誌編集委員の任期を終えて 武内恵太	
学生編集委員を務めて 六車明日香	
西日本医学生学術フォーラム2022 三前英恵	
<b>歴史の広場</b>	<b>34</b>
The National Hospitalとヒューリングス・ジャクソン 久山秀幸	

<b>随 想</b>	<b>42</b>
バイオロンジル会／人材を育てる試み 難波正義 「糖尿病」の病名変更に拍手 坪井修平 目医者をつぶやき「外来手術センター」 松尾俊彦	
<b>新聞より</b>	<b>46</b>
岡山大学医学部・岡山大学病院並びに鶴翔会会員に係る新聞記事など（2022.9.1～2023.2.28） 名医の系譜Ⅴについて（山陽新聞掲載）	
<b>教室だより</b>	<b>73</b>
海外への留学生一覧	
<b>岡山より</b>	<b>101</b>
令和5年度 岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会合同総会について 会費納入について（お知らせ） 令和4年度卒年次別会費納入状況 令和4年度 Student Doctor認定式 令和4年度 岡山大学医学部医学科 学位記授与式 第117回 医師国家試験の結果 事務局からのお知らせ 鶴翔会だより『教育研究を進めるもの3』 山田雅夫 岡山大学病院医科系診療科別役付職員一覧 鶴翔会会報 投稿内規	
<b>編集後記</b>	<b>111</b>



## 巻 頭 言

岡山大学病院長 前 田 嘉 信

岡山大学ではこの4月から新学長に那須保友先生がなられ、新体制がスタートいたします。また、医歯薬学研究科長には成瀬恵治先生が新たに就任されます。豊岡伸一医学部長とともに大学、研究科、学部、病院が同じベクトルを持ち協調して進んで参りたいと思います。

さて、このGW明けには新型コロナウイルス感染症が5類に移行する予定です。スペイン風邪が3つの流行波の後、3年かかって収束しましたが、COVID-19パンデミックが宣言された2020年3月には、この感染症の収束に3年もかかるとは予測できませんでした。人類はワクチンを手にしりましたが、自然感染後免疫に比べて、どう感染症の収束に影響するのか不明でした。結果的には、流行を繰り返す度に予想通り“弱毒化”していくが、流行の周期は短く、収束まではやはり3年以上を要したことになります。

先行きが不透明で将来の予測が困難なVUCA時代であって、未知のウイルス感染症パ

ンデミックは今後も起こるでしょうし、ウクライナ侵攻に伴うエネルギー価格の高騰もいつ収束するかわかりません。一方、わかっていることは、病院には提供する医療の価格決定権がなく、大学病院にあっては運営費交付金が減少していくが、人事院勧告等で人件費は上昇していき、医療機器や医療材料のコストが増大していくことです。社会保障の財源は有限であり、人口が減少し必要病床も減少することから、どうしても埋まらない急性期病床は減らして効率化しないと職員の給与が払えず、医療機器への投資もできなくなります。

経済的成長期ではない医療界において、病院間でのいたずらな競争は避けなければなりません。ポストコロナにおける病院経営の改善を外に求めるのではなく、内なる構造改革が必要なのではないかと考えます。ピンチはチャンス、恰好！（よしきた！）と、皆様とともに挑戦していければと思います。

今号の格言・名言（選者：読み人知らず）

*Luck is what happens when preparation meets opportunity.*

*Seneca, Roman philosopher*

## ご挨拶

### 岡山大学長に那須 保友氏 ご就任



#### 誇りと希望の学都・岡山大学 ～不易流行の経営改革～

同窓会の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、令和5年4月より第15代国立大学法人岡山大学長に就任致しました。

母校を卒業してから約40年、岡山大学医学部そして先輩方に

育てていただきこのような機会に恵まれましたことを大変光栄に感じます。

学都構想は千葉喬三先生によって提唱され、森田潔先生が「美しい学都」、榎野博史先生が「美しい学都」を唱え「実質化」されてきました。私は、それらがゆるぎなく持続的に発展し続ける仕組みの構築を学長としてのミッションといたします。そのためには「不易流行の経営改革」が必要であると提唱いたしました。大学経営における不易流行を以下に定義します。

**不易：**岡山大学に関わる人々、そしてこれから関わる人々（マルチステークホルダー）の持続的で多様な幸せ（well-being）の実現を追求すること。

**流行：**国内外の社会情勢を見極め、国の施策や地域の思いを先取りし先導する組織経営改革・人材育成・研究を行うこと。

国立大学法人を取り巻く環境は大変厳しい状況にあることは皆さまご存知のことかと存じます。教育・研究・社会貢献等において大学が果たすべく社会から期待されている役割も多様化しております。わたくしは、榎野博史前学長の下で理事（研究担当）として4年間、岡山大学の経営に深くかかわってまいりました。特に財源の多様化を通じた経営基盤の強化、適切なリスクマネジメント（ERM: Enterprise Risk Management）とガバナンス体制による大学経営力強化、教職員の人事労務マネジメント強化については引き続き推進してまいります。

学生・教職員は言うに及ばず、岡山大学に関わる、もしくはこれから関わるすべての方々の物心両面の幸せ（well-being）を追求した大学経営を推進し、岡山

大学が地域と地球の課題解決を通して人類社会の持続的発展に貢献する「誇りと希望の学都」を目指します。引き続き本学へのご指導並びにご鞭撻を心よりお願い申し上げます、学長就任の挨拶とさせていただきます。

#### 略 歴

- 1981年3月 岡山大学医学部卒業
- 1986年4月 岡山大学医学部附属病院 医員
- 1986年7月 社会保険広島市民病院 医師
- 1989年4月 財団法人積善会附属十全総合病院 部長
- 1991年4月 岡山大学医学部附属病院 講師
- 2004年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科泌尿器病態学 准教授
- 2010年1月 岡山大学病院新医療研究開発センター教授
- 2013年9月 岡山大学病院 副病院長
- 2015年6月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科泌尿器病態学 教授
- 2015年8月 岡山大学 副理事
- 2016年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 研究科長
- 2019年4月 岡山大学 理事（研究担当）・副学長

### 榎野 博史学長 ご退任



#### しなやかに超えていく実りの学都に

同窓会の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。岡山大学長として6年間の任を終えるにあたり、これまでお世話になった皆様にご挨拶を申し上げます。

まず始めに、同窓会の皆様方からの多大なご支援並びにご協力により、約1年遅れとなりましたが、2021年11月3日に岡山大学医学部創立150周年記念式典を無事執り行うことができました。本当に有難うございました。

2017年の学長就任にあたって私は「しなやかに超えていく実りの学都へ」を榎野ビジョンとして掲げ、当時の国内では未だ十分に認知されていなかったSDGsを岡山大学の全活動に取り入れることに力を注ぎました。その後、同窓会の皆様や経済界のみならず、岡山

県・岡山市・倉敷市・真庭市等との産学官連携によりSDGsの輪が拡がり、2017年末には第1回ジャパンSDGsアワード特別賞「SDGsパートナーシップ賞」を首相官邸で当時の安倍内閣総理大臣から表彰されました。さらに、創立70周年を迎えた2019年に、岡山大学ビジョン2.0「岡山から世界に、新たな価値を創造し続けるSDGs推進研究大学」を掲げ、ニューヨーク国連本部でのハイレベル政治フォーラムで我が国を代表して、本学のSDGs大学経営について講演ができたことは、私にとって大変印象深い出来事でした。

また、本学のグローバル・エンゲージメント戦略の下、新たに米国国務省を通じたCritical Language Scholarship (CLS) プログラムを開始し、毎年夏には、25名の優秀な留学生にSDGs学習を提供しています。CLS留学生の中で、アンダーソン君とナタリーさんは、フルブライト奨学金を獲得して再び来学し、岡山の地域研究に取り組んでいます。その他にも、ユネスコや国連貿易開発会議 (UNCTAD) など国連機関との繋がりを通して、アジア・アフリカ諸国から国を代表する若手研究者が岡大キャンパスに集まり切磋琢磨するなど、本学はまさに世界の学生達に開かれた「共育共創」のSDGsキャンパスとなりつつあります。

150周年式典のご挨拶でもお伝えしましたが、これからの50年間は、コロナをはじめとする新興感染症や気候変動・地震等に伴う大規模災害などが、これまでとは比較にならない頻度や規模で発生することが懸念されます。この時代の転換点にあたって、これからのヘルスケア (健康) は、ヒトの健康だけでなく、人類を含む全ての共同生命体の根源としての「地球」の健康、すなわち「Planetary Health」という観点から、サステナビリティとウェルビーイングに価値を置いて、人間の健康を考え行動することが強く求められています。そこで岡山大学では、第4期中期目標期間の2022年からは、2050年に向けた長期ビジョン2050「地域と地球の未来を共創し、世界の革新に寄与する研究大学」を掲げ、現在全学を挙げて「ありたい未来を共に育み、共に創る研究大学」の実現に取り組んでいます。

特に研究力強化は国立大学の最も大きな使命であり、私の病院長時代には臨床研究中核病院や橋渡し研究支援拠点の採択に尽力し、学長を拝命後は、がんゲノム医療中核拠点病院に採択され、本学は中国・四国地域大学の取り纏め役のみならず全国的なヘルスケア

の拠点の一つになりました。2020年度には「国立大学イノベーション創出環境強化事業」に、2021年度と2022年度には「国立大学経営改革促進事業」に、2022年度には「共創の場形成支援プログラム地域共創分野育成型」に採択され、トータル3年間で約9億円を獲得して、現在のローカルSDGs活動や長期的な大学経営改革に繋がっています。また、その新たな象徴とも言えるCLTを活用した木造建築として、隈研吾氏監修による共育共創コモンズ (愛称: OUX (オックス)) が今年1月に学内に完成しました。この建物も、「Planetary Health」に基づき環境に優しいカーボンニュートラル・脱炭素社会を目指す本学と岡山地域とのローカルSDGsの一つと言えます。

岡山生まれ岡山育ちの私は、振り返ってみると幼少の頃には自宅近くの医学部が昆虫採集の場であり、教育学部附属中学校に通い、医学部に入学してからも坂出市立病院での研修、ノースウエスタン大学への留学以外は岡山大学にお世話になるなど、この70年余の人生の殆どの時間を岡山大学で過ごした事になります。

その岡大生活の最後の締めくくりとして、去る1月13日に、皇居の松の間で行われた「講書始 (こうしょはじめ) の儀」に参上し、天皇陛下が年頭に各学界の第一人者に賜られる講義を陪聴できる大変有難い機会にも恵まれました。併せて、後継者についても、皆様のご理解とご支援によって、非常に頼もしい次世代にバトンタッチすることができ大変嬉しい限りです。

今後も岡山大学医学部・岡山大学並びに鶴翔会の皆様益々ご発展されることを祈念しまして、私の退任の挨拶とさせていただきます。

## 略 歴

- 1967年 6月 米国Emmaus High School卒業
- 1968年 3月 岡山県立岡山大安寺高等学校卒業
- 1975年 3月 岡山大学医学部卒業
- 1975年 9月 坂出市立病院勤務
- 1977年 1月 岡山大学医学部附属病院医員 (第三内科)
- 1984年 7月 米国Northwestern大学医学部 (病理) 客員助教授
- 1996年 4月 岡山大学医学部第三内科教室教授 (現 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科腎・免疫・内分泌代謝内科学)
- 2009年 4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科長
- 2011年 4月 岡山大学病院長、国立大学法人岡山大学理事
- 2017年 4月 国立大学法人岡山大学学長



## 岡山大学院医歯薬学総合研究 科長に成瀬 恵治教授 ご就任



### ご挨拶

鶴翔会の先生方には、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

伊達勲研究科長の後任として、令和5年4月1日付で大学院医歯薬学総合研究科長を拝命しました。誌面をお借りしてご挨拶申し上げます。

私は名古屋大学医学部医学科を1988年に卒業しました。医学部生の時から昼夜を問わず研究に没頭する生活をし、卒業後はすぐに大学院に進学しノースカロライナ大学チャペルヒル校へ交換留学をし神経生理学の研鑽を積みました。名古屋大学在職中は文部科学省在外研究員としてハーバード大学にてBiomedical Engineeringの研鑽を積み循環器系・生殖系メカノバイオロジー研究を展開し「メカノメディスン」というブランディングをしました。奇しくも医歯薬学総合研究科が発足した2005年に岡山大学へ異動し、基礎研究のみではなく臨床応用を目指した研究を展開しています。

研究科長としての以下の取り組みをしたいと思いません。

- (1) 本学の強みの一つである革新的医療技術創出拠点としての医療系において国際研究拠点及び次世代研究拠点を形成し、TOP10%論文、国際共著論文の増加をはかります。その為には、医学系・歯学系・薬学系の研究シーズなどを精査し、一層の連携強化を目指します。さらに、私の専門とする生体医工学における経験を活かし、研究科横断的な知の創造の場も新たに創出して、医歯薬学だけに限定されないイノベーションに繋げます。
- (2) 人材・知・資金の好循環によるイノベーションエコシステムを構築するために、研究科間連携促進を目的とした窓口として、学内におけるイノベーション創出機能の集約化と強化による戦略的活動を実施する組織を構築・運営します。またその実現を推進するために、リーダーシップを発揮して民間企業などとの共同研究による外部資金獲得増加を目指します。
- (3) 大学院における定員充足は、本学、特に本研究科

における最重要課題の一つといえます。この課題の解決に向けて、新たに構築された学位プログラムに基づき博士後期課程学生の処遇向上並びにアカデミア及び産業界を含めた、多様なキャリアパスの確保を本研究科が全学的な戦略の下で一体的に推進することで、優秀な人材が積極的に学びやすい環境を構築・整備します。

- (4) これまでJST創発的研究支援事業タスクフォースとして、若手研究者の申請書ブラッシュアップ、模擬面接などを行ってきた経験を駆使し、研究支援人材や研究資金の優遇措置を含めた総合的な支援策の強化により、優れた若手研究者の活躍を支援し、自由な発想で挑戦的研究に取り組み、その能力を最大限発揮できる魅力的な研究環境を整備・向上します。

大学は知の創造を行う崇高な場であり、本学の医療における特色と強みの一つは、医歯薬学総合研究科だけではなく保健学研究科やヘルスシステム統合科学研究科といった、連携・協働によるシナジー効果を強く期待できる複数の研究科及び臨床研究中核病院にも指定されている大学病院を有していることです。私は研究科長として大学執行部と方向性を共有し、部局を越えてつながり、岡山大学全体の研究力強化と優れた研究人材の確保・育成・輩出に努め、本研究科が地域社会や世界とのイノベーションにおいて先駆的役割を果たすことができるよう、しっかりとリーダーシップを発揮して本研究科の一層の発展に貢献します。

同窓会員の皆様からの更なるご指導・ご鞭撻、そしてご支援を賜ることができましたら幸甚に存じます。どうぞ宜しく願い申し上げます。

### 略 歴

- |          |                            |
|----------|----------------------------|
| 1988年3月  | 名古屋大学医学部卒業                 |
| 1989年5月  | ノースカロライナ大学チャペルヒル校<br>交換留学  |
| 1992年3月  | 名古屋大学大学院修了                 |
| 1992年4月  | 長寿科学振興財団レジデント              |
| 1993年4月  | 名古屋大学医学部生理学 助手             |
| 1994年4月  | 名古屋大学医学部生理学 講師             |
| 1998年10月 | ハーバード大学医学部・文部科学省在外<br>研究員  |
| 1999年4月  | 名古屋大学医学部 助教授               |
| 2004年1月  | ストレックス(株)設立                |
| 2005年10月 | 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科研究<br>科 教授 |
| 2021年4月  | 岡山大学医学部 副医学部長              |
| 2023年4月  | 現職                         |

## 伊達 勲教授 ご退任



### ご挨拶

1982年に岡山大学医学部卒業後41年が経過し、2023年3月末をもって定年退職いたしました。この間、国立岡山病院（現岡山医療センター）の3年間と米国ロチェスター大学の2年間を除き、36年間に岡山大学で脳神経外科医として過ごして参りました。2000例を超える脳手術を行い、大過なく定年を迎えることができたのも、同窓の皆様のご指導ご鞭撻の賜物と深く感謝申し上げます。

私は脳神経外科医の手ほどきを岡山大学病院と国立岡山病院で受けた後、大学院に入学し、当時の第3解剖（現脳神経機構学）と留学先のロチェスター大学で細胞の脳内移植と神経再生の研究を行いました。この間学んだ神経科学の知識と技術がその後academic neurosurgeonとして研究と臨床の二刀流を進める礎となりました。また、第2解剖（現人体構成学）のご協力により早期から行っていた臨床解剖実習は手術技術の向上に大きく貢献できたと思います。

脳神経外科には6つのサブスペシャリティ（腫瘍、血管、脊髄、機能、外傷、小児）があります。2003年教授就任後はこれら6つの分野のいずれについても研究と臨床の循環を大切に、学会活動・論文発表を積極的に行ってきました。学会シーズンには毎週のように学会に参加する必要がありましたが、各学会の理事や理事長を務め、教授在任中に15の全国学会を主催することができました。各分野での最先端の治療に力を入れ、毎年550件の手術を岡山大学脳神経外科全体で行ってきましたが、この数字は全国の国立大学病院で5本の指に入る数字となっています。

副病院長時代には岡山大学病院の救急部を高度救命救急センターに格上げするために尽力いたしました。センターの先生方のその後の努力は素晴らしいもので、搬入救急患者の急増などに現れています。過去2年間は医歯薬学総合研究科長を務め、学修者主体の大学院改組の一翼を担いました。改組1年目となる2023年度の医歯薬学専攻は定員をオーバーする状況となり、大変嬉しく思っています。

コロナ禍の終息がまだ見えない中ですが、鶴翔会の皆様のご健勝を祈念し、引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしく願い申し上げます。

ありがとうございました。

### 略歴

- 1982年3月 岡山大学医学部卒
- 1982年4月 岡山大学脳神経外科入局
- 1982年12月 国立岡山病院脳神経外科
- 1988年6月 米国ニューヨーク州ロチェスター大学 研究員
- 1991年9月 岡山大学脳神経外科助教
- 1999年11月 岡山大学脳神経外科講師
- 2003年4月 岡山大学脳神経外科教授
- 2011年4月 岡山大学病院副病院長
- 2019年4月 岡山大学医学部医学科長
- 2021年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科長

## 伊藤 浩教授 ご退任



### ご挨拶

2023年3月末日をもって定年退職を迎えるにあたり、これまでご支援を賜りました鶴翔会同窓の先生方に心より御礼を申し上げます。

私の経歴は少し変わっています。大阪にある循環器専門の民間病院（桜橋渡辺病院）で23年

間勤めた後、岡山大学循環器内科の教授になるという前代未聞のコースです。世界的に評価される臨床研究はしていましたが、研究力とともに臨床を強化するためにこのような機会を与えられたものと理解しました。循環器内科は1991年創立の若い科であり、私が赴任した2009年当時、スタッフも少なく、診療領域も限られていました。医局員の献身的な協力もあり、今では冠動脈・末梢動脈へのインターベンション、心房細動や難治性不整脈へのカテーテルアブレーション、カテーテルによる弁膜症、ASD、PFOへの治療、心臓リハビリテーション、成人先天性心疾患の集学的治療、腫瘍循環器学そして心臓外科と共同で重症心不全患者に対する補助人工心臓治療など、先進的な治療を幅広くかつハイレベルで行うことができる体制になりました。

着任当初、中四国にある多くの関連病院も設備と人手の不足に悩まされていました。循環器内科はヒトの命を救う科であり、関連病院の整備は喫緊の課題でし

た。現地に足を運び、病院長と設備の充実策を練り、そして医局からは人材の補充をしていきました。今ではどの関連病院の循環器内科も各地域で信頼される存在となることができました。

研究に関しても医局員に機会を与え自由な発想をサポートすることにより、大学だけではなく関連病院から国際学会での発表や英語論文の投稿が相次ぐようになりました。その成果が認められ、2022年3月に第86回日本循環器学会学術集会を岡山大学が主幹校になって開催しました。岡山大学が日本でも一流の循環器内科であることを認められた証であり、医局員にとっても素晴らしい経験となりました。

岡山大学は“患者”のためなら診療科の垣根を越えた協力が得られやすいというとても恵まれた環境でした。これからも循環器内科は新たなチャレンジを続けて行きます。同窓の先生方の温かいサポートをよろしくお願いいたします。

#### 略 歴

- 1982年3月 大阪大学医学部卒業
- 1982年4月 大阪大学大学院医学研究科内科学第一講座 入学
- 1986年3月 同 卒業
- 1986年4月 大阪大学医学部第一内科研究生
- 1986年7月 桜橋渡辺病院内科 医員
- 1996年6月 同 副部長
- 1999年5月 同 部長
- 2007年4月 桜橋渡辺病院心臓・血管センター センター長
- 2009年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科生体制御学講座（循環器内科学） 教授

2016年夏、米子で講演後にホテルで倒れて以後、十分なパフォーマンスを発揮することができず、私自身も非常に歯がゆい思いをしておりました。大学病院業務、日本肺癌学会、日本呼吸器学会の理事としての職責、学術雑誌の編集委員、査読者の仕事も十分にできない時期があり、自分がこのポジションにいてもいいのか？と自問しておりました。私の我儘であります。不自由な体でその年の11月には診療と学術活動に復帰させて頂きました。2022年には新型コロナウイルス感染症に邪魔はされましたが、Hybrid形式で4000人規模の日本肺癌学会学術集会を岡山で現地開催することができました。私の健康状態を危惧するお話も学会本部からうかがっておりましたが、周りには優秀なスタッフがおられますからご安心くださいと返答しておりました。また、市原英基講師、久保寿夫助教、川崎医療センターの瀧川奈義夫教授の力を借りながらではありますが、日本癌治療学会のG-CSF適正使用ガイドライン、日本呼吸器学会の間質性肺炎合併肺癌に関するステートメントを委員長としてまとめることが出来ました。また“放牧”と揶揄されていたかつての大学院生たちの研究、EGFR遺伝子改変マウスの樹立（京都大学高田 穰教授との共同研究）、EGFRチロシリン酸化酵素阻害薬と血管新生阻害薬との併用効果、alectinib耐性株の樹立と耐性機構の研究などは、現在も大学院生たちに受け継がれています。これらは岡山肺癌治療研究会（OLCSG）の仲間と一緒にやった臨床研究とともに私の小さな誇りでもあります。

長きにわたり私を援助してくれた岡山大学医学部同窓の皆様、数多くの恩師、大学病院の先輩、同僚、後輩と多くの医療スタッフ皆様に心よりお礼申し上げます。また家庭のことを全く顧みなかった私に代わり、2人の息子を育て上げてくれた今は亡き妻にも深く感謝しております。本当に有難うございます。

## 木浦 勝行教授 ご退任



#### ご挨拶

2023年3月末を持ちまして、岡山大学を定年退職することを同窓の皆様にご挨拶申し上げます。ご指導を頂いた素晴らしい恩師の皆様、先輩、同僚、後輩、病院の医療スタッフの皆様、友人・家族に支えられやっとな退任まで漕ぎ着けました、と言うのが今の私の偽らざる思いです。

#### 略 歴

- 1983年3月 岡山大学医学部卒業
- 1983年4月 岡山大学医学部第2内科入局
- 1992年1月 岡山大学医学部附属分子細胞医学研究施設助手
- 1992年4月 岡山大学医学部附属病院助手（第2内科）
- 1993年7月 米国ニューヨーク州立大学バッファロー校病理分子免疫生物学部門（Postdoctoral fellow）（～1995年6月）
- 1993年9月 博士（医学）取得
- 2000年4月 岡山大学医学部附属病院講師（第2内科）
- 2003年10月 岡山大学医学部・歯学部附属病院講師（呼



吸器内科)  
 2005年7月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科病態制御科学専攻  
 血液・腫瘍・呼吸器内科学分野助教授  
 (現准教授)  
 2011年5月 岡山大学病院呼吸器・アレルギー内科教授

## 八木 孝仁教授 ご退任



### ご挨拶

私、八木孝仁は 令和4年度(2023年3月31日)をもちまして定年となり、長年勤めさせていただいた岡山大学病院を退職させていただくこととなりました。現在も含め在任期間中は関係の皆様方にひとかたならぬご支援をいただきましたことを

心より御礼申し上げます。1989年、折田薫三教授からの命を受け留学より帰国し先輩の影響もあって知らず知らずのうちに移植の道へ進んでいました。田中紀章助教授が生体肝移植体制の整備に尽力され、1996年8月には末期原発性胆汁性肝硬変(PBC)患者に本学で最初の生体肝移植が施行されました。当時肝胆膵外科の症例は急速に増え続け2005年には年間肝切除120例、膵切除40例弱、生体肝移植37例を記録するに至りました。一方でスタッフにかかる負担は大きく、この窮地を乗り越えるためにスタッフの労働過重の減免が急務となりました。まず考えたのは生体肝移植時間の短縮です。動脈吻合を直視下に行うことにより約105分の手術時間の短縮と、特に成人例での出血量の減少を達成できて論文化させていただきました。

2006年12月には中四国初となる脳死腎移植を我々第一外科スタッフで行うことができました。さらに2010年7月に改正されたばかりの脳死移植法下で、中四国最初の脳死肝移植を同年9月には行うことができました。また2012年9月には全国に先駆けて脳死肝腎同時移植を手がけ、その後2例、現在3例の肝腎同時移植症例を経験しています。在任中に肝移植500例到達を一つの目標にしておりましたが達成は微妙なところで

す。このように移植の道を歩んできた結果、藤原教授はじめとする教室員ならびに同門の先生方のご支援の下

2015年3月には第27回小腸移植研究会を、2021年6月には第39回日本肝移植学会を主催させていただきました。

私が30余年にわたりつとめさせていただくことができましたのもと感謝しております。肝胆膵領域の外科手術にも技術革新の波は押し寄せてきており、当科で現在積極的に推進しておりますロボット手術が膵臓・肝臓手術の標準術式になる日も遠くないかもしれません。当科の担当しております領域は特に「死」との距離が近く、僅かな見逃しが患者さんの「死」に直結することから、わが肝胆膵外科チームにはことさら厳しい管理を要求してきました。外来初診の患者さんにも十分時間を取って、必ず私が手術の術式まで丁寧に説明することを心がけてきました。私が時間をかけることによって病棟医のリスクを少しでも減らし、彼らと「死」の間の距離をとることができるの思いからです。

肝移植こそ究極のチーム医療であることを認識していただき、移植早期からそれを実践しご指導賜りました。藤原教授をはじめ教室員と同門諸先生方、とりわけ肝胆膵外科医師のご尽力はもとより、消化器内科チーム、麻酔科チーム、放射線科チーム、小児科チームおよび移植コーディネーターの皆さんに御礼申し上げます。さらには移植医療を当院の中心的医療の一つとして積極にご支援いただいた病院執行部・病院事務の皆様方のご尽力を忘れるわけにはいきません。私個人として誇れるものはございません、ただ唯一誇れるものがあるとしたら皆様の、すなわち岡山大学病院の、先見性・チーム力・突破力です。皆さんに支えられて今日までつとめることができました。今後の皆様のご多幸とご活躍を祈念して私の退任挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

### 略歴

昭和58年(1983年)に旧第一外科(折田薫三教授)入局。国立岩国病院で2年間、光輝病院にて4年間の研修。平成元年(1989年)半年間の米国ネブラスカ大学・ピッツバーグ大学への肝臓移植留学。平成6年(1994年)から第一外科医員。平成8年(1996年)3月に肝臓移植実験で学位取得。平成9年(1997年)末から第一外科助手。平成17年(2005年)から岡山大学医学部・歯学部附属病院(肝胆膵外科)講師。平成19年(2007年)からは診療科長を兼務。平成22年(2010年)から消化器・腫瘍外科学 准教授。同年 岡山大学病院 肝・胆・膵外科 教授。

## 草野 展周教授 ご退任



### ご挨拶

このたび2023年3月末をもって定年退職を迎えるにあたり、これまでご支援を賜りました同窓各位にご挨拶申し上げます。最後の3年間はCOVID-19の流行があり、感染対策に振り回されましたが、感染症法の2類相当から5類相当へ対応が変わる予定になり、感染対策にも目途が付きまして。

岡山大学には2000年5月からお世話になり、小出典夫先生のもとでICT（Infection Control Team）の立ち上げに関わりました。最初はサーベイランスに重要な微生物検査室の整備をすることから始め、病院全体におけるICTの整備を行いました。2003年にはレジオネラの問題が発生しましたが、リンクドクターやリンクナースの多大なる協力を得て、問題を解決することができました。2004年には感染対策の強化のために、感染制御部門としての感染制御部が整備され、現在もCOVID-19対策等に活躍しています。

2003年10月には感染症内科を立ち上げ、病院全体の感染症の診断と治療に対する支援を開始し、抗菌薬適正使用支援としてのAST（Antimicrobial Stewardship Team）の整備も行いました。その後はHIV患者の診療を引き継ぎ、エイズ拠点病院として岡山県で2番目に患者数が多くなりました。感染症や感染対策について少しは貢献できたのではないかと考えています。

医学部、病院の諸先生方を始め、ご支援頂きました関係各位に感謝するとともに厚く御礼申し上げます。最後になりますが、鶴翔会の先生方のご健勝とご活躍ならびに母校の益々の発展を祈念し、退任のご挨拶といたします。

### 略 歴

- 1983年3月 長崎大学医学部卒業
- 1987年3月 長崎大学大学院医学研究科修了
- 1987年5月 琉球大学医学部附属病院検査部助手
- 1996年3月 文部省在外研究員（米国、ジョンズ・ホプキンス大学医学部）
- 1997年4月 琉球大学医学部附属病院感染対策室副室長を兼務
- 2000年5月 岡山大学医学部附属病院中央検査部助教授

2003年10月 岡山大学医学部・歯学部附属病院感染症内科長併任

2004年4月 岡山大学医学部・歯学部附属病院感染制御部副部長兼務

2011年5月 岡山大学病院感染症内科教授

## 千田 益生教授 ご退任



### ご挨拶

2023年3月末をもちまして定年退職を迎えるにあたり、今までご支援いただきました皆様に感謝を込めましてご挨拶を申し上げます。

1977年に岡山大学医学部に入学し、医学部サッカー部に入部しました。整形外科教授の田辺

剛造先生がサッカー部の顧問をされており、いろいろお世話になりました。学生時代はサッカーに明け暮れ、御蔭で岡山県学生ベストイレブンに2回選んでいただきました。同級生の皆様には大変助けていただき感謝しております。整形外科に入局し、大学院では理学療法部の長島弘明先生、武智秀夫先生にリハビリテーション医学についてご指導いただき、厳しい中にも楽しい生活を送りました。

大学院卒業後、肢体不自由児施設である高知県立子鹿園で3年2か月働かせていただきました。江口寿榮夫園長のもと、脳性麻痺や先天性股関節脱臼、内反足などの疾患を経験させていただきました。高知は大変良い所で思い出深い所です。その後、井上 一教授のもと、岡山大学整形外科に助手として戻りました。関節リウマチの足、脊椎、スポーツ医学など様々な分野を経験させていただきました。1993年、脊損で有名なAustralia Royal Perth Rehabilitation Hospitalに留学し、John K. Ker先生をはじめたくさんの先生にお世話になりました。1999年にリハビリテーション部助教授になり、リハビリテーション医療を実践してきました。その頃から天満屋女子陸上部、また2004年からはファジアーノ岡山のチームドクターとして選手を診ております。森田 潔先生が病院長の時代に、総合リハビリテーション部のスタッフ数を飛躍的に増やしていただき、大変感謝しております。現在は理学療法士27名、作業療法士8名、言語聴覚士4名、看護師1名のスタッフで充実したリハビリテーション医療を実践し

ており、全国国立大学病院の中では常にトップ3に入っております。2010年には総合リハビリテーション部教授に就任させていただきました。スタッフ数が増えますと様々な問題が生じ、社会保険労務士の宮崎さん、鹿田保健管理センターの皆様、中瀬管理官などたくさんの方々にお世話になりました。士長や副士長の努力もあり、だいぶ働きやすい、仲の良い職場になってきたと思います。2022年11月には、Diversity and Inclusionをテーマに日本リハビリテーション医学会秋季学術集会を岡山で開催いたしました。榎野学長をはじめ、岡山大学の皆様、同門の皆様には講演、座長など大変ご協力いただき、誠に感謝しております。御陰様で、大変盛会で皆様に喜んでいただきました。

総合リハビリテーション部は、皆様のご支援がなければ成り立ちません。感謝申し上げるとともに、今後ともどうかよろしく願い申し上げます。

#### 略 歴

- 1983年3月 岡山大学医学部卒業
- 1987年3月 岡山大学大学院医学研究科（整形外科学専攻）修了
- 1987年4月 高知県立子鹿園医療係長
- 1990年6月 岡山大学整形外科助手
- 1993年4月 Australia Royal Perth Rehabilitation Hospital留学
- 1997年4月 岡山大学整形外科講師
- 1999年4月 岡山大学医学部附属病院リハビリテーション部助教授
- 2004年4月 岡山大学病院総合リハビリテーション部部长
- 2007年4月 岡山大学病院総合リハビリテーション部准教授
- 2010年11月 岡山大学病院総合リハビリテーション部教授

## 岡山大学学術研究院医歯薬学域 精神神経病態学分野教授に高木 学氏 ご就任



#### ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、令和4年10月1日付で、岡山大学学術研究院 医歯薬学域 精神神経病態学分野教授を拝命した高木学（たかきまなぶ）と申します。岡山大学医学部を卒業して

27年になります。今日まで数多くの先生方、特に黒田重利教授、内富庸介教授、山田了士教授をはじめとする教室、同門の先生方、メディカルスタッフの皆様、そして平成8年卒の同期の先生方に多大なご指導とご助力を賜りました。この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。私は統合失調症に興味を持ち精神科の門を叩きました。統合失調症の病態解明基礎研究、臨床基礎精神薬理学、そして最近「8年越しの花嫁」で知られる抗NMDA受容体抗体脳炎の臨床と研究を専門としております。そして、大学院生や後輩の先生方の指導を通じ、精神科の膨大かつ多彩なフィールドの面白さを彼らから逆に学び、今は精神疾患全てが臨床と研究の対象となりました。社会医学的要素が強い精神医学は、おいでくださる患者様一人一人が多彩な人生を経験しておられ、私を常に育ててくださいます。日々、飽きることは一切なく新鮮で、私の天職だったのかもしれませんが、また、13か所の施設で勤務させていただいたことは、私の柔軟性を高めたと共に、多くの貴重な人脈を得ました。私にとって最大の宝と思っております。私は、先代山田了士教授の方針であった多様な精神医療に柔軟に対応できる優れた多彩な人材を多く育てることを継続すると共に、「繋がる」要素を加え、多様な専門領域の医師が診療、研究、教育に携わり、精神科や他科の医師、看護師、薬剤師、公認心理師、精神保健福祉士、作業療法士などのメディカルスタッフが互いに繋がり大きな力とすることで、人に尽くすことを教室の理念としていきたいと思っております。岡山大学精神科神経科そして患者様を今後とも宜しくお願い申し上げます。

#### 略 歴

- 1996年3月 岡山大学医学部卒業



2002年3月 岡山大学医学部神経精神病態学教室大学院卒業  
 2004年4月 ジョンスホプキンス大学精神科（米国）（A. Sawa教授）留学  
 2007年4月 岡山県精神科医療センター、精神科救急病棟医長  
 2008年6月 岡山大学病院精神科神経科助教  
 2017年6月 岡山大学病院精神科神経科講師  
 2022年10月 岡山大学学術研究院医歯薬学域精神神経病態学分野教授

## 岡山大学学術研究院医歯薬学域 脳神経内科学分野教授に 石浦 浩之氏 ご就任



### ご挨拶

この度令和4年11月1日より岡山大学学術研究院医歯薬学域脳神経内科学教授を拝命致しました石浦浩之と申します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

私は東京都の小平市、東村山市という郊外で育ち、平成14年に東京大学を卒業致しました。脳の研究を行いたかったことから、内科研修の後、辻省次教授の主宰する東京大学神経内科に入局致しまして神経内科の修練を開始しました。その間、外勤先で出会った家族性疾患の患者さんの遺伝子解析を行い診断がつけられたことが遺伝学を勉強するきっかけとなりまして、大学院に入学する前から研究室に通って遺伝子解析をさせて頂いておりました。

大学院のテーマは遺伝性痙性対麻痺の診断システムの構築と分子疫学の解明でしたが、その後大学院時代に次世代シーケンサーが導入され、近位筋優位遺伝性運動感覚ニューロパチーの原因遺伝子を同定することができました。また、良性成人型家族性ミオクロームスてんかんの原因がイントロンの5塩基リピート伸長変異であることを発見することができました。実は当教室の前教授阿部康二先生からDNA検体を供与頂き、東京大学で収集していた家系と比較したことが本疾患を解明するにあたっての大きな一歩になっておりまして、本学との不思議なご縁を感じております。最近では、神経核内封入体病（白質脳症、末梢神経障害）、

眼咽頭遠位型ミオパチー（筋疾患）という一見別個に見える疾患がCGGリピート伸長変異によって生じることを明らかとし、これらの疾患が新たな疾患スペクトルをなし、また共通の病態機序が潜んでいる可能性を指摘させて頂きました。

脳神経内科は治りづらい疾患が多いと言われ続けておりますが、最近の新規治療法の開発には目覚ましいものがあります。ここ岡山の地において、最先端で最善の医療を提供することを第一に教職員一同努力して参りたいと存じますし、遺伝医療にも力を入れていきたいと考えております。研究面でもリピート伸長病を含め、ハイレベルの遺伝学的研究、病態解明研究を行うことのできる体制を早々に構築したいと考えています。最後に、進歩甚だしい脳神経内科分野を志し、我々と一緒に歩んでくれる将来の仲間との出会いを楽しみにしております。

今後ともご指導、ご支援賜れましたら幸いです。何卒よろしくお願い申し上げます。

### 略歴

2002年3月 東京大学医学部医学科卒業  
 2002年6月 東京大学医学部附属病院内科  
 2003年6月 関東中央病院内科  
 2004年6月 東京大学医学部附属病院神経内科  
 2006年4月 国立国際医療センター（現国立国際医療研究センター）神経内科  
 2011年3月 東京大学大学院医学系研究科脳神経医学専攻神経内科学 修了  
 2011年4月 日本学術振興会特別研究員  
 2012年4月 東京大学医学部附属病院神経内科助教  
 2020年4月 東京大学医学部附属病院脳神経内科講師  
 2022年11月 岡山大学学術研究院医歯薬学域脳神経内科学教授

現在に至る

## 岡山大学学術研究院医歯薬学 域 病理学（腫瘍病理）分野 教授に山元 英崇氏 ご就任



### ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、令和4年12月1日付で、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科病理学（腫瘍病理）教授を拝命いたしました山元英崇と申します。伝統ある岡山大学医学部の一員に

加えていただき、大変光栄に存じますとともに、身が引き締まる思いでございます。

私は平成11年に九州大学医学部を卒業後、すぐに病理学の道に進み、九州大学病院で病理診断の研鑽を積むとともに、医学研究院形態機能病理学の一員として研究・教育にも携わって参りました。近年ではがんゲノム検査への対応など病理部のマネジメントも担ってきました。

専門は骨軟部腫瘍と頭頸部腫瘍の病理です。どちらも組織像のバリエーションが多彩で、いわゆる希少がんと呼ばれる腫瘍も多く、病理診断が難しい領域とされています。私は、分子生物学的手法も取り入れて、診断精度の向上、病態解明や新しい疾患単位の確立に関わる研究を行って参りました。一例をあげますと、頭頸部癌でも相当な頻度でHPVが関与しており、HPV感染や他の遺伝子異常の有無により、頭頸部癌は性質の異なるいくつかのグループに分けられることがわかり、将来的には分子亜型に応じた個別化治療につながっていけばと期待しております。今後も幅広い領域のがんの病態解明、診断、治療の発展に貢献できるよう、他の基礎・臨床教室とも連携して、分子病理学的な研究を進めて参りたいと思います。

病理学教室のもう一つの使命は、地域医療を担う病理診断医の育成です。岡山大学には多くの関連病院がありますので、病理医を一人でも多く育て派遣できるよう、教育に邁進して参りたいと思います。とはいえ、私自身、不慣れなことがまだたくさんありますので、若い教室員と一緒に汗をかきながら、共に成長していければと考えております。

末筆ではございますが、鶴翔会の先生方におかれまして、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

### 略 歴

- 1999年3月 九州大学医学部医学科 卒業
- 1999年4月 九州大学医学部附属病院病理部 医員
- 2004年4月 国立病院機構九州がんセンター臨床検査部 医師
- 2005年4月 九州大学病院病理部 助手
- 2007年4月 九州大学病院病理部 助教
- 2012年10月 九州大学大学院医学研究院形態機能病理学 講師
- 2014年4月 九州大学病院病理診断科 准教授
- 2022年12月 岡山大学学術研究院医歯薬学域病理学（腫瘍病理）分野 教授

## 岡山大学学術研究院医歯薬学 域 泌尿器病態学分野教授に 荒木 元朗氏 ご就任



### ご挨拶

鶴翔会の先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。令和4年12月より、岡山大学泌尿器科の教授を拝命させていただきました荒木元朗（あらかもとお）と申します。那須保友前教授の後任で令和5年開講110年を迎える教室

の第11代目の教授となります。これまでご指導、ご支援頂いたすべての方に感謝申し上げます。

私は、平成10年4月に岡山大学泌尿器科に入局し、大学院では尿路のMRSAの分子疫学的研究をさせていただきました。その後東京女子医大で2年間腎移植の研修を、米国クリーブランドクリニックで腎虚血再灌流障害の研究を2年、米国3年目から臨床研修に移行し腎移植を、4年目はマイアミ大学で癌を、5年目にオクラホマ大学でロボット手術などの臨床フェローをさせていただきました。これらの海外臨床フェローシップはいずれも日本人初でした。

帰国後平成21年に公文教授（当時）就任以来の念願であった第1例目の腎移植を行い、令和5年まで150例を超えてなお1年生存率100%、1年生着率100%と世界最高の成績を維持しています。ヨーロッパ・アジア初となるロボット自家腎移植にも成功致しました。基礎研究は腎虚血再灌流障害の研究を継続しています。またともに研鑽を積んだ和田耕一郎先生は島根県

での腎移植の再開を担うべく令和3年島根大学泌尿器科教授に就任いたしました。

私は世界一の泌尿器科であるクリーブランドクリニックへの留学を通じてオールラウンドな診療体制の構築が一流の条件と実感しており、岡山大学も癌や腎移植だけでなくバランスよく発展させる所存です。

さらに研究については若手の自由な発想を伸ばすことに尽力したいと思います。渡部昌実新医療研究開発センター教授と定平卓也助教はベンチャーを立ち上げておりこれを支援していきたいと考えます。

私は国内外で様々な貴重な経験をさせて頂きました。これらの経験を次世代に伝えつつ、常に新しいことに挑戦するリーダーでありたいと思います。そしてお世話になった皆様に御恩返しすべく、医療を通じて地域、日本、そして世界に貢献する決意です。

今後ともご指導ご鞭撻の程何卒よろしくお願い申し上げます。

#### 略 歴

1998年4月	岡山大学泌尿器科入局
1998年7月	津山中央病院
2001年1月	東京女子医科大学泌尿器科腎移植フェロー
2022年9月	米国クリーブランドクリニック リサーチフェロー
2004年7月	米国クリーブランドクリニック 臨床フェロー（腎移植、膵臓移植）
2005年7月	米国マイアミ大学・臨床フェロー（泌尿器科癌）
2006年7月	米国オクラホマ大学・臨床フェロー（ロボット手術、内視鏡手術）
2007年9月	岡山大学泌尿器科助教
2008年11月1日～2009年1月31日	韓国ヨンセイ大学・臨床フェロー（ロボット手術）
2012年4月	岡山大学泌尿器科講師
2021年11月	岡山大学泌尿器科准教授
2022年12月	岡山大学泌尿器科教授

## 岡山大学学術研究院医歯薬学域 消化器・肝臓内科学分野 教授に大塚 基之氏 ご就任



#### ご挨拶

岡山大学医学部同窓会・鶴翔会の先生方におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。この度、令和5年1月1日付で、岡山大学学術研究院医歯薬学域 消化器・肝臓内科学の教授を拝命いたしました大塚基之（おおつかもとゆき）と申します。伝統ある岡山大学医学部の消化器・肝臓内科（旧第一内科）を担当させていただくこととなり大変光栄に存じます。関係諸先生方には厚く御礼申し上げます。

消化器内科は診療対象となる臓器・疾患が幅広く、大きく上下部消化管領域・肝臓領域・胆膵領域に分けられます。私の消化器内科診療での専門は、自身が消化器内科医を志した医学部卒業当時の東京大学消化器内科の教授だった小俣政男先生と同じ、肝臓領域となります。いまでこそB型肝炎・C型肝炎は経口抗ウイルス薬で極めて容易に制御ができるようになりましたが、これまでの診療を通じてその劇的な進歩を体感する機会に恵まれました。肝臓領域以外でも、例えばH. pyloriの除菌療法や炎症性腸疾患に対する生物学的製剤の進歩、各種の癌に対する分子標的薬や免疫チェックポイント阻害剤の導入など薬物療法の進歩に加えて、肝癌に対するラジオ波焼灼療法や消化管癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術、胆膵管や消化管に対するステント留置術などのインターベンション技術も含めて消化器内科診療の進歩には著しいものがあります。

いっぽう、非アルコール性脂肪肝炎（NASH）とそれ由来の肝癌の増加や、依然として悲惨な胆膵癌の予後改善・早期診断法の確立など、喫緊で解決しなければならない課題も残っています。今後はこれらの未解決の分野で、自身が体感してきた消化器内科学の進歩をこれからの世代の消化器内科医に体感してもらいたいと考えますし、その進歩を我々自身の手で達成したいと考えています。

末筆ではございますが、鶴翔会の先生方には引き続きご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

末筆ではございますが、鶴翔会の先生方には引き続きご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



## 略 歴

- 1994年3月 東京大学医学部医学科 卒業  
 1995年6月 総合病院 国保旭中央病院 医員  
 2002年3月 東京大学大学院医学系研究科 修了  
 2004年7月 米国スクリプス研究所 免疫微生物学部門 研究員  
 2009年3月 東京大学医学部附属病院 消化器内科 助教  
 2012年10月 科学技術振興機構 (JST) さきがけ研究員 (兼任)  
 2016年4月 東京大学大学院医学系研究科 消化器内科学分野 講師  
 2023年1月 岡山大学学術研究院医歯薬学域 教授

## 新医療研究開発センター企画運営部並びに次世代医療機器開発部教授に櫻井 淳氏 ご就任

## ご挨拶

春光うらかな季節を迎え、鶴翔会の先生方におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

このたび、令和5年4月1日付けで新医療研究開発センター企画運営部並びに次世代医療機器開発部教授を拝命いたしましたので、謹んでご挨拶を申し上げます。

このたび、令和5年4月1日付けで新医療研究開発センター企画運営部並びに次世代医療機器開発部教授を拝命いたしましたので、謹んでご挨拶を申し上げます。

私は平成14年に鳥取大学医学部を卒業し、平木祥夫名誉教授が主宰する岡山大学放射線医学教室に入局いたしました。診療では画像下治療（インターベンショナルラジオロジー）を専門とし、金澤右名誉教授並びに平木隆夫放射線科教授に師事いたしました。香川県立中央病院では、青木淳・現昭和大学教授のご指導によりステントグラフト指導医の資格を取得いたしました。これまで他診療科の先生方や放射線医学教室同門の多くの先生方には、画像診断、画像下治療のみならず、臨床研究や学位指導、医師としての心得など多大なるご指導を賜り、そのご厚意に心より御礼を申し上げます。

平成25年、当時岡山大学病院副院長であった金澤名誉教授のご推薦により、我が国の創薬の要である、独立行政法人医薬品医療機器総合機構（PMDA）への出向の機会をいただきました。故・近藤達也前

PMDA理事長との面談では、PMDAの抱えるわが国発のシーズ実用化という大きなミッションについて、熱をもって教えていただいたことを今でも鮮明に記憶しております。PMDAでは主に医療機器審査について、規制並びに臨床研究推進の観点から学び、またグローバル企業治験についても、規制当局として数多くの経験を積ませていただきました。また岡山大学病院は、平成25年に厚生労働省の臨床研究中核病院整備事業に採択され、その後平成29年3月には医療法上の臨床研究中核病院の承認を受けました。私は平成27年に新医療研究開発センター企画運営部に着任し、臨床研究中核病院の運営に関わる体制整備や法令への対応等に努めました。また同時に次世代医療機器開発部では、日本医療研究開発機構（AMED）次世代医療機器連携拠点整備等事業の実務責任者として、医療機器開発人材育成や、医療機器シーズの開発支援に従事しております。特に、平木隆夫放射線科教授らのグループでは、自らも薬事担当者として、国内初のCT透視ガイド下針穿刺ロボットによるFirst-in-human試験（特定臨床研究）に従事し、引き続き医師主導治験を実施中であり、このような革新的シーズの開発には、画像誘導下治療やPMDAでの薬事審査の経験が生かされており、また新医療研究開発センターや放射線科のチームメイトにも支えられ、大きなやりがいを感じております。

昨今、ドラッグラグと呼ばれる「米国と日本での薬事承認申請の遅れ」の話題からシフトし、「ドラッグロス」と呼ばれる「海外承認、日本未承認の医薬品の増加」という社会課題が表在化しつつあります。海外で使用可能な医薬品が日本の患者様へ届かない事態を回避すべく、わが国発のシーズの実用化やグローバル治験への参加など、岡山大学のみならず日本の医療機関が取り組むべき課題は山積しています。もとより微力ではございますが、わが国の創薬や医療機器開発のボトムアップ、並びにそれを支える研究支援体制の整備のために、初心を忘れず邁進する所存です。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

## 略 歴

- 2002年3月 鳥取大学医学部医学科卒業  
 2002年4月 岡山大学医学部附属病院放射線科入局  
 2002年7月 国立病院呉医療センター放射線科医師  
 2003年7月 姫路聖マリア病院放射線科医師  
 2005年7月 永生病院放射線科医師  
 2006年4月 岡山大学医学部・歯学部附属病院放射線

科医員（常勤）

- 2008年4月 香川県立中央病院放射線科医師
- 2013年4月 独立行政法人医薬品医療機器総合機構医療機器審査第一部審査専門員（臨床医学担当）、岡山大学病院非常勤講師
- 2015年4月 岡山大学病院新医療研究開発センター講師
- 2017年10月 同准教授
- 2019年4月 岡山大学研究推進機構医療系本部長（併任）
- 2021年7月 岡山大学病院病院長特命補佐
- 2023年4月 岡山大学病院新医療研究開発センター教授



# 会 員 動 向



## 受 章

旭日小綬章 (昭44) 松 山 正 春  
 従五位 (昭33) 小 谷 秀 成  
 公衆衛生事業功労 厚生労働大臣表彰  
 (昭41) 國 富 泰 二  
 〃 (昭56) 西 井 研 治  
 救急医療功労 厚生労働大臣表彰  
 特定非営利活動法人NPO救命おかやま  
 (昭53) 副理事長 津 島 義 正  
 〃 (昭52) 副理事長 石 井 史 子  
 精神保健福祉事業功労 厚生労働大臣表彰  
 (昭55) 原 田 俊 樹  
 〃 (昭54) 吉 村 勲  
 国民健康保険関係功労 厚生労働大臣表彰  
 (昭47) 衣 笠 和 孜  
 学校保健功労 文部科学大臣表彰  
 (会員) 太 田 隆 正  
 公害健康被害認定審査等業務長期従事  
 環境大臣感謝状 (昭60) 中 田 昌 男  
 公衆衛生事業功労 岡山県知事表彰  
 (昭51) 青 景 和 英  
 〃 (昭52) 八 代 義 弘  
 〃 (昭42) 林 洋 光  
 へき地医療事業功労 岡山県知事表彰  
 (会員) 塩 出 純 二  
 地域医療事業功労 岡山県知事表彰  
 (昭52) 小 倉 俊 郎  
 〃 (昭51) 田 邊 高 由  
 がん征圧事業功労 岡山県知事感謝状  
 (昭35) 守 谷 欣 明  
 公衆衛生事業功労 岡山県保健福祉部長表彰  
 (昭50) 守 安 文 明  
 〃 (平2) 上 野 芳 樹

〃 (会員) 大 野 広 子  
 〃 (昭54) 服 部 功  
 〃 (昭46) 難 波 玲 子  
 〃 (会員) 宮 島 厚 介  
 〃 (昭47) 石 井 良 夫  
 〃 (会員) 近 藤 秀 則  
 岡山県教育関係功労 岡山県教育委員会表彰  
 (昭56) 川 上 登 史  
 〃 (昭57) 大 道 卓 也  
 〃 (昭55) 西 村 正 隆  
 〃 (会員) 内 藤 好 宏  
 〃 (昭58) 袖 木 正 行  
 〃 (会員) 萩 原 秀 紀  
 〃 (昭58) 角 南 宏 二

公衆衛生事業功労 岡山市保健所長表彰  
 (会員) 酒 井 章 文

岡山県医師会会長賞  
 (一社) 児島医師会代表者 (平2) 田 嶋 憲 一  
 〃 赤磐市・岡山市瀬戸地域休日内科  
 診療所開設委員会  
 (平18院) 代表者 吉 井 莊 哲

岡山県医師会会長 (特別賞)  
 岡山県禁煙問題協議会  
 (昭56) 会長 西 井 研 治

岡山県医師会学術奨励賞 (平20) 萩 谷 英 大  
 〃 (令4院) 田 邊 綾

天晴れジョイボスアワード大賞  
 (平13院) 石 井 亜矢乃  
 天晴れジョイボスアワード奨励賞  
 (平3) 繁 光 薫

このたびの受賞に対し、会員一同心からお慶び申し上げますとともに、今後益々の御健勝をお祈り致します。

※会員の方が各賞を受賞された場合は事務局にご連絡ください。

## 医学部・病院関係

**定年退職**  
 脳神経外科学分野 伊 達 勲  
 循環器内科学分野 伊 藤 浩  
 呼吸器・アレルギー内科 木 浦 勝 行  
 肝・胆・膵外科 八 木 孝 仁  
 感染症内科 草 野 展 周  
 総合リハビリテーション部 千 田 益 生

**教授就任**

精神神経病態学分野 高木 学  
 脳神経内科学分野 石浦 浩之  
 病理学（腫瘍病理） 山元 英崇  
 泌尿器病態学分野 荒木 元朗  
 消化器・肝臓内科学分野 大塚 基之  
 新医療研究開発センター 櫻井 淳

**准教授就任**

医療情報化診療支援技術開発講座 長谷井 嬢  
 周産期・小児救急医療学講座 早田 桂  
 聴覚支援センター 片岡 祐子

**講師就任**

周術期管理センター 清水 達彦  
 低侵襲治療センター 黒田 新士  
 周産期医療学講座 大平 安希子  
 新医療研究開発センター 内田 大輔  
 組織機能修復学 高尾 千佳  
 精神科神経科 岡久 祐子

田邊 綾 救命救急・災害医学  
 突沖 貴宏 呼吸器・乳腺内分泌外科学  
 徳増 一樹 総合内科学  
 徳増 美穂 免疫学  
 橋本 望 精神神経病態学  
 潘 禹 麻醉・蘇生学  
 韓 言言 病理学（腫瘍病理）  
 藤原 みわ 呼吸器・乳腺内分泌外科学  
 松橋 美波 整形外科学  
 溝渕 有助 麻醉・蘇生学  
 道端 達也 疫学・衛生学  
 御船 朋代 腎・免疫・内分泌代謝内科学  
 梁 茵 システム生理学

**関連病院関係**

**退会**

凶南病院（高知県）

**名称変更**

さきがけホスピタル（旧こころの医療たひようの丘  
 ホスピタル）（岡山県）  
 広島はくしま病院（旧広島通信病院）（広島県）

**学位授与**

**博士**

**令和4年9月22日（医歯薬学総合研究科）**

ABUGRI BRIGHT OSMAN 麻醉・蘇生学  
 安部 優子 呼吸器・乳腺内分泌外科学  
 大谷 晋吉 麻醉・蘇生学  
 岡上 昇太郎 消化器・肝臓内科学  
 梶原 友紀子 呼吸器・乳腺内分泌外科学  
 河原 聡一郎 消化器・肝臓内科学  
 木村 聡 麻醉・蘇生学  
 黒岡 直子 腎・免疫・内分泌代謝内科学  
 小崎 吉訓 救命救急・災害医学  
 小西 大輔 消化器外科学  
 杉浦 聡 臨床薬剤学  
 竹内 桂子 消化器・肝臓内科学

**令和5年3月24日（医歯薬学総合研究科）**

ACOSTA GONZALEZ HERIK RODRIGO 泌尿器病態学  
 浅野 洋介 腎・免疫・内分泌代謝内科学  
 荒木 宏之 消化器外科学  
 池田 賢太 皮膚科学  
 石田 智治 総合内科学  
 板野 純子 血液・腫瘍・呼吸器内科学  
 岩崎 慶一朗 循環器内科学  
 鷓川 聡子 循環器内科学  
 馬越 紀行 放射線医学  
 浦口 健介 耳鼻咽喉・頭頸部外科学  
 大岩 雅彦 麻醉・蘇生学  
 大島 義孝 精神神経病態学  
 太田 智之 形成再建外科学  
 大重 和樹 総合内科学  
 岡田 知明 循環器内科学  
 岡本 佑子 循環器内科学  
 小川 俊博 消化器外科学  
 小田 香織 腎・免疫・内分泌代謝内科学  
 小原 隆史 救命救急・災害医学  
 片山 聡 泌尿器病態学  
 河村 浩平 循環器内科学  
 神原 由依 血液・腫瘍・呼吸器内科学  
 衣畑 俊希 細胞組織学  
 金高 圭甫 整形外科学  
 郭 豫晟 麻醉・蘇生学  
 小出 祐嗣 循環器内科学  
 小橋 真由 消化器・肝臓内科学  
 駒越 翔 形成再建外科学  
 小松 泰浩 消化器外科学  
 近藤 秀則 整形外科学  
 佐藤 浩平 整形外科学



佐藤 浩明 消化器外科学  
 柴田 祐助 腎・免疫・内分泌代謝内科学  
 清水 大 呼吸器・乳腺内分泌外科学  
 朱 一丹 呼吸器・乳腺内分泌外科学  
 須井 健太 消化器外科学  
 梶原 彰子 小児医科学  
 千田 真友子 精神神経病態学  
 高田 暢夫 消化器外科学  
 高見 優男 総合内科学  
 田 潤 循環器内科学  
 津高 慎平 呼吸器・乳腺内分泌外科学  
 土屋 弘樹 小児医科学（発達神経病態学）  
 津村 宗近 耳鼻咽喉・頭頸部外科学  
 戸嶋 俊明 消化器外科学  
 鳥家 鉄平 心臓血管外科学  
 中島 充貴 循環器内科学  
 難波 悠介 循環器内科学  
 西井 和也 血液・腫瘍・呼吸器内科学  
 二萬 英斗 呼吸器・乳腺内分泌外科学  
 野島 剛 救命救急・災害医学  
 服部 靖彦 脳神経外科学  
 土生 裕 疫学・衛生学  
 卞 之宏 脳神経内科学  
 樋之津 健二 精神神経病態学  
 姫井 人美 消化器・肝臓内科学  
 兵頭 勇紀 小児医科学（発達神経病態学）  
 廣瀬 一樹 整形外科学  
 付 静雯 麻酔・蘇生学  
 本郷 貴識 救命救急・災害医学  
 正井 加織 脳神経機構学  
 松木 宣嘉 疫学・衛生学  
 宮原 宏幸 小児医科学  
 村井 智 脳神経外科学  
 廻 勇輔 血液・腫瘍・呼吸器内科学  
 森本 栄作 腎・免疫・内分泌代謝内科学  
 山田 裕士 精神神経病態学  
 山之井 智子 麻酔・蘇生学  
 横田 雄也 総合内科学  
 李 春寧 病理学（免疫病理）

萩山 明和 疫学・衛生学  
 藤田 悠紀 細胞生理学  
 前田 夢咲 細胞生理学  
 YU HAIBO 脳神経内科学  
 吉澤 智香子 細胞生物学  
 LI XINXUAN システム生理学  
 LI QIANG システム生理学

令和4年度（令和5年3月）  
 岡山大学医学部医学科卒業生

青山菜々子 赤尾 侑哉 赤嶺 透子 浅桐 育男  
 浅野 晃太 安部 太貴 荒木さくら 安藤 碧  
 安藤 史恩 安藤 航 石井 康道 井上 佑太  
 宇佐美佳耶 氏家 正皓 浦上 直人 浦田 里奈  
 太田 瀬菜 太田 直希 大槻 和平 大槻 啓剛  
 大坪 玄武 大西 由真 岡 亮太郎 岡本 裕貴  
 岡本 亮太 折田 沙穂 垣羽 優 梶川 浩宇  
 加藤 唯真 上舞 直 川上 遥 川月 章弘  
 木原 啓太 金 晟烈 木村 智一 木山 満就  
 小杉 菜月 小谷 勇人 小寺 未来 小林 哲也  
 湖山 恵多 昆 堯明 近藤 章敏 近藤 輝  
 齊藤 悠紀 坂本 慎弥 佐々木寿算 澤江 誠吾  
 島崎 海渡 清水 崇司 白石 佑太 末原 由悠  
 鈴木総一郎 関家 滉太 曾我部大輔 高尾 明央  
 高嶋香菜子 高瀬 ミキ 高見 昂秀 滝瀬 悠斗  
 武内 恵太 竹川 裕則 巽 千裕 田中 真之  
 田中 美世 田中 佑樹 谷田 貴 千代延稜太  
 辻 暁里 辻元健太郎 津田 彬 寺田 知世  
 土井廉太郎 富岡 領太 豊田 俊明 永井 詩織  
 中井 利宣 中嶋 祐斗 中谷 明意 中村 望  
 仲村 龍斗 西岡 瑛 西村 奈保 納所 直宏  
 野口 陽平 萩原 萌 波多野 護 林田慎太郎  
 原 和輝 伴場 友香 檜垣 侑里 東端 政樹  
 東森 凌司 檜尾 享佑 藤井 健史 藤井 裕嗣  
 古田口 惟 細田 健斗 堀口 裕紀 本多 慶  
 本田 洋一 増田 倫敦 松尾 奈美 松岡 雅人  
 丸橋 和幹 三澤 賢人 三谷 嘉史 六車明日香  
 本林 葉名 森 翼 森 郁太 森元 陽  
 守屋 淳 八井田 覚 薬師寺絢太 安井 健人  
 矢野 園子 山川 航平 山口真優奈 山崎 拓人  
 山本 浩貴 山本 悠介 吉田 朱里 吉田 翔一

修士

令和5年3月24日（医歯薬学総合研究科）

大磯 和真 細胞生物学  
 岡崎 善弘 疫学・衛生学  
 河野 慶治 公衆衛生学  
 西條 雅貴 細胞生理学

鶴翔会役員

令和4年度末任期満了に伴い、改選の結果次のとおり選出されました。

- 会 長 豊岡 伸一
- 副会長（学内） 前田 嘉信
- 成瀬 恵治
- 副会長（学外） 金澤 右
- 幹 事（学内） 大内 淑代
- 藤原 俊義
- 大塚 文男
- 和田 淳
- 松下 治
- 幹 事（学外） 松尾 信彦
- 浜家 一雄
- 太田 武夫
- 小田 慈
- 西堀 正洋
- 監 事（学内） 浅沼 幹人
- 監 事（学外） 池田 敏

事務局からのお詫びと訂正

昨年9月発行の岡山大学関連病院長会名簿において誤りがありました。以下のとおり訂正し、お詫び申し上げます。

46頁 邑久光明園について

- 梶平 将太先生の岡大関係教室等 (正) 整形外科学 ← (誤) 呼吸器外科学
- 松田 直樹先生の岡大関係教室等 (正) 呼吸器・乳腺内分泌外科学 ← (誤) 呼吸器外科学
- 土生 智大先生の岡大関係教室等 (正) 呼吸器・乳腺内分泌外科学 ← (誤) 呼吸器外科学

136頁 寺岡記念病院について

- 病院名称 (正) 社会医療法人社団陽正会 寺岡記念病院 ← (誤) 社会医療法人社団陽生会 寺岡記念病院



## 会 員 訃 報

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

昭19専	松田 一雄	2022. 11. 3
昭22	野中正寛	不明
昭23	勝矢 修	2021. 4
昭23	中川 清	2022. 7. 31
昭25	佐藤 泰正	2022. 7. 7
昭25専	土井 勝三郎	2022. 10. 3
昭26	金政 泰弘	2022. 10. 4
昭26	津田 昭次	2022. 3. 4
昭26	徳永 学	2020. 9. 5
昭26	三上 純一郎	2022. 3. 14
昭27専	小河 博之	2022. 11. 24
昭27専	林 政江	2022. 9. 4
昭28	由井 豊	2021. 1. 20
昭29	岸 昭典	2022. 10. 16
昭29	齋藤 邦雄	不明
昭29	深江 省三	2023. 2. 19
昭30	岡田 和夫	2022. 11. 26
昭30	内藤 孝和	2022. 10. 21
昭30	三村 宏二	2022. 10. 27
昭31	竹内 亨	2023. 2. 7
昭31	渡辺 好政	2022. 9. 25
昭32	河西 浩一	2022. 8. 18
昭32	竹本 茂	2022. 11
昭32	森田 善雄	2023. 1. 28
昭33	小谷 秀成	2022. 10. 31
昭34	尾崎 光泰	2022. 12. 31
昭34	後藤 勇	2022. 12. 27
昭34	宮本 恒弘	2022. 10. 15
昭35	小山 高司	2022. 11. 19
昭35	竹馬 浩	2022. 9. 26
昭35	横山 太郎	2023. 1. 26
昭36	石本 康彦	2022. 12. 17
昭36	金井 熙	2023. 2. 5
昭37	高原 二郎	2022. 9. 24
昭41	目黒 文朗	2022. 9. 23
昭43	土居 偉瑳雄	2022. 11
昭44	有光 哲雄	2022. 10. 21
昭44	岩本 光正	不明
昭44	宇佐美 謙治	不明
昭44	川合 淳	不明
昭44	河野 勝昭	不明
昭44	小坂 恭一	不明
昭44	森 修	不明

昭44	渡久地 正和	不明
昭46	川島 周平	2022. 10. 5
昭46	武内 國太	不明
昭46	湊 宏司	2022. 11. 4
昭48	細木 宣男	2023. 1. 1
昭51	納所 治	2020. 6. 15
昭54	藤井 孝治	2023. 2. 28
昭58	岡田 正比呂	2022. 5. 3
昭60	坂田 恭子	2022. 7
平6	池田 紀代子	2022. 8. 23

# クラブ報告

## 岡山大学医学部ラボサークル

部長 三前 英恵

時下、鶴翔会のみなさまにおかれましてはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

医学部ラボサークルの部長を務めさせていただいております、医学部医学科4年の三前英恵と申します。

名前はラボ「サークル」ですが部活です。創設当初は本当にサークルだったのですが、部に昇格後も変わらずラボサークルと名乗っています。何度かラボ「部」に変えようかという話も出たのですが、歴代の先輩方への敬意と通称である「ラボサー」の語感の良さから変更しないことにしました。

ラボサークルには現在21名が在籍しています。「ラボ」サークルなので、部員は医学研究に関心がある学生だったり、研究室に通って研究活動をしている学生だったりです。

活動の1つとして、ART室と連携して研究に興味のある学生の支援をおこなっています。研究室と学生をつなぐことを目的として開催している「ラボツアー」には、嬉しいことに毎回多くの学生が参加してくれます。学生にとって、偉い先生のいる教室の門を叩くことはなかなかハードルが高いことです。このハードルが少しでも低くなって、研究に対する興味が一層深まるお手伝いができればと思います。

また、日ごろの研究の成果を発表する場として、西日本医学生学術フォーラムにも参加しています。2022

年度は岡山大学主催だったのですが、発表・運営の両面で部員が活躍してくれました。来年度も参加できるよう、各々研究に励んでくれるだろうと期待しています。

正直なところ、活動についてはまだまだ模索中です。今後は論文の抄読会や、コロナ禍が収束次第、学外の研究室訪問もできればと考えております。

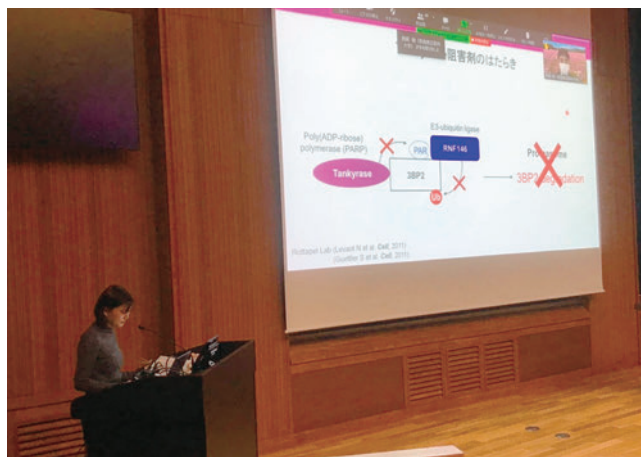
今回、会報に寄稿する機会をいただき大変光栄に思います。少しでもラボサーについて興味を持ってもらえるような内容になっていれば幸いです。最後になりますが、みなさまのますますのご健勝とご多幸をお祈り申し上げますとともに、今後ともラボサーの活動を温かく見守っていただければと思います。何卒よろしくお願い申し上げます。

## 医学部硬式庭球部

主将 山下 晃一

時下、鶴翔会の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。医学部硬式庭球部の主将を務めさせていただいております、医学部医学科3年の山下晃一と申します。

現在医学部硬式庭球部は、男子が医学科23人、保健学科1人、女子が医学科12人、保健学科5人の合計41人で活動しています。部員全体の練習としては週3回行って、そのほか校内のテニスコートで各々自主練にも励んでいます。目標としては、3月に行われる中四国新人戦、5月に中四国大会、8月に行われる西医体で優勝することを目標に、幹部を中心に練習メニューを試行錯誤しながら限られた練習時間でより強



2021年西日本医学生学術フォーラムの様子



くなることができるように練習に励んでいます。部員全員が『強い岡大』を目指すために全体練習はもちろんのことながら、自主練にもしっかりと取り組み、数少ないレギュラー枠を競って切磋琢磨することができています。また、テニスを楽しむということにも重点を置いているので、初心者から始めた部員であっても経験者や先輩に丁寧に指導してもらうことによって楽しくテニスをしながら、メキメキと上達していています。

2022年は新型コロナウイルスによって直前まで開催されるはずであった西医体も急遽中止が決まるなど、大会参加という点に関して言うと不完全燃焼の年でした。練習のモチベーションの一つでもある大会が開催されなかったことで、部員もモチベーションを保つことが難しい状況であったと思いますが、それでもチーム全体でしっかりと目標をたてて、今年は開催されるであろう大きな大会にむけて練習を続けることができたと考えています。また、感染対策によって会食が禁止されていた時期もあったので部員間のコミュニケーションをとることすら難しい時期もありましたが、先輩後輩の垣根を越えた練習中の意見交換など、部員内での共通目標によってチーム一丸となり同級生だけではなく先輩、後輩と良い関係性を築くことができていたのではないかと思います。

2023年こそは新型コロナウイルスの感染もある程度収束して、大会が開催されることを切に願ってこれからも部員全員で練習に励んでいく次第です。今後とも医学部硬式庭球部の活動を温かく見守っていただければ幸いです。

最後に改めまして鶴翔会の皆様のみますますのご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。





## 会員のこえ

### 編集者への手紙

昭40 坪井修平

本誌第133号(2022年10月)13～14頁に掲載されたルネッサンス基金の用途及び決算について、14～18頁の提言と合わせて田口鶴翔会事務局長から同号66頁にご回答を戴き、ありがとうございました。

謝意の反面、大いなる疑問も禁じえませんでした。ルネッサンス基金募金活動の主体は岡山大学医学部長、岡山大学病院長、岡山大学院医歯薬学総合研究科長、岡山大学ルネッサンス基金管理委員会委員長となっており、提言の宛先は医学部、鶴翔会、鶴翔会報編集委員会で、いずれも鶴翔会事務局ではありません。当事者の方々からは今なおご返信が無く、怪訝に思っています。

遑って、一昨年、会員にとって重要な鶴翔会報への投稿原稿や訃報の取り扱い、会報の編集委員会と事務局の関係等について、会長と編集幹事に速達便で問い合わせしましたが、回答が頂けず、当惑致しております。また、以前、アメリカの医学部主任教授を務める本会会員が、編集幹事から面談のアポイントメントを戴きながら、来日後、面談の再確認の電話をしたところ「キャンセル」のご返事で、大変驚き失望した由です。

何故このような信じ難い事態が生じるのか、その根本原因を考えました。

研究、教育、診療、指導、人事、会議、論文、学会、講演、応接、折衝と膨大な業務を担う教授職の上に鶴翔会や鶴翔会報、ルネッサンス基金のお世話に割く時間は殆ど残されていないのでは、と深い同情の念が湧いてきました。そうであれば、現役教授は鶴翔会等の雑務から解放されるべきではないかと、考えるに至りました。

鶴翔会報にも次のような率直な提言が掲載されており、医師会長経験者や病院長経験者、他学教職経験者等有力な学外会員の登用を真剣に考える時が来ているのではないかと、思います。オンライン会議を活用すれば、居住地の遠近は問題外です。鶴翔会の発展のためには、役員任期も1期5年、通算2期迄といった会則の思い切った変更を行うべきではないか、と確信しています。

- 1) 池田重政会員「編集者への提案」会報88号(2000): 鶴翔会会長は岡山大学医学部長又は医学科長、副会長3名の中2名は大学病院長・医学系研究科長又副科長、他の1名は幹事同様、評議員の互選、総会の議決、会長委嘱による、とありますが、鶴翔会の大多数を占める学外会員の意思が反映し難いのではないのでしょうか?→…無回答。
- 2) 松尾俊彦会員「同窓会を活用しよう!」会報98号(2005): 医学部長が同窓会長になるのは、同窓会としての活力を失わしめる方向に働いているように感じられます。→…無回答。

(※参照 各大学医学部同窓会長(現職、前職):市中病院長…名大・熊大・長大・神戸大・山口大 医学部長…東大・京大・東北大・広大 名誉教授…阪大・新潟大・金沢大 他大学教授…九大・千葉大・北大 医師会長…鳥取大)

そのほか、大学病院についても苦い思い出があります。数年前、紹介させて頂いた肺ガン患者さんからガン告知のインフォームドコンセントについて涙の抗議。2例目は大学病院前で突如昏倒した若い女性。同行者から畑仕事中の私に緊急電話があり、電話紹介したところ、30分待った挙句、無診察で他院にたらい回しにされ、後日医療費の請求書が届いたと、強いクレーム。それぞれ担当科に書面とメールで問い合わせ致しました。→…無回答。

尤も、丁重な返信を下さり、貴重な時間を割いて面談に応じて頂いた会長、編集幹事もいらっしゃいました。病院に関しても上記の2件以外は、詳細な情報提供書を戴き、感謝の二字あるのみです。

ところで、昨今「岡山大学を正常化する会」や匿名のSNSで、恣意的人事や公金の取り扱いについて、母校の正常化、民主化を熱望する書き込みが世界中に拡散されています。私は卒業生の一人として、母校の名誉失墜と受験生への悪影響が心配になり、微力ながら関係者の方々に手紙や面談で早期円満解決をお願いし、相応のご見解をお聞かせ頂きました。

2023年1月27日、新聞に「岡山大学病院コロナ交付金19億円超過受給か」に続いて、2023年2月3日「岡山大学病院不適切会計」の大きな活字が紙面を踊り、更に写真週刊誌にも暴露され、愕然としました。ほどなく、私の最も恐れていた岡山大学医学部志願者の激減が現実となりました。2月4日の新聞に「国公立大二次試験志願状況」が掲載されており、昨年の540人、5.5倍が263人、2.8倍と半減していました。



これらの報道の裏には、前述の社会通念上理解困難な会員への対応も或る面で相通じる所がある、と受け止めています。

かくなる上は、最近話題になっている「糖尿病」の「高血糖症？」への病名変更同様、「岡山大学医学部」も「〇〇〇〇医学部」と名称変更も検討の余地がありそうに思えます。私はそれほどに極端な妄想？に悩まされ、悲憤慷慨の毎日を送りながら、識見・信念・決断・先見・情熱・忠恕・無私・清廉・潔白・剛腕のリーダーの出現を待望する今日この頃です…。

(なお、この手紙の宛先は、医学部、鶴翔会、鶴翔会報、ルネッサンス基金、病院等の当事者の方々のつもりですので、ご回答、よろしく願い申し上げます。)



## 同期会だより

### 岡山大学医学部四〇会岡山犬島牛窓 同窓会（第18回 四〇会同窓会）

昭40 藤井 靖久

昭和40年卒クラスの卒後57年目の第18回四〇会同窓会が、令和4（2022）年12月17日ホテルグランヴィア岡山で18時から開催されました。この会は、2019年の倉敷同窓会以後、コロナ禍の所為で2度（今治、津山で開催予定）もキャンセルされ、3年半ぶりだったためか、参加者は33名（26名と夫人6名、講師1名）と予想以上に盛況でした。

まず恒例の集合写真撮影の後、小林完治君の開会の挨拶、続いて最近3年間の物故者4名（片岡新君、古川哲君、古元重光君、田中茂人君）を含む全29名に対して黙祷をささげ、ご冥福をお祈りいたしました。

次に坪井修平君の座長による田口博之鶴翔会事務局長の「岡山大学医学部の現状」という招待講演があり、150年にわたる岡山大学医学部の大河なる軌跡をビデオなどで詳細な解説説明があり、参加者一同母校の更なる発展を期待いたしました。

続いて前回世話人の石川紘君による声高らかな「ブラボー」の乾杯によって開宴いたしました。

宴も一段落して、全員のスピーチが始まり、仕事や趣味など近況報告や認知症やフレイルの予防法などの秘策？が披露され、お酒も進み、和気あいあいのうちに3時間があっという間に過ぎてしまいました。

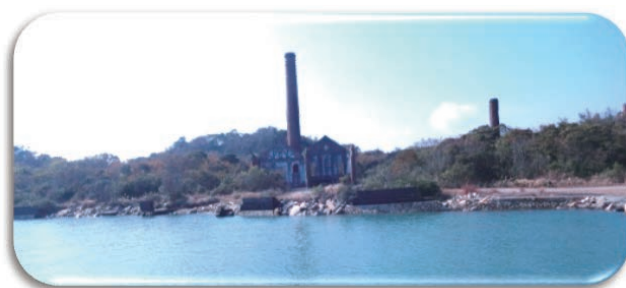
2次会は19階のアプローチで行われ、学生時代のビーコン、グルッペでのポリクリ、クラブ活動など青春時代を謳歌した思い出に時が経つのも忘れて語り合いました。



翌12月18日は犬島・牛窓観光でした。懐かしい中島の対岸京橋からチャーター船で旭川を下り、犬島観光を行いました。銅精錬所の遺構である煙突をみながら犬島精錬所美術館やF邸 F-Art Houseなどの観光島巡りを行いました。犬島から見える島々は浮き上がって見え、それは冬の蟹気楼だそうです。再乗船後犬島を一周し、小豆島などを眺めながら牛窓へ遊覧しました。

ホテルリマーニで美味しい瀬戸内料理に舌鼓を打った後、記念撮影をし、マイクロバスで牛窓オリーブ園・展望台に行きました。「日本のエーゲ海」といわれる牛窓諸島（前島、黄島、黒島など）の多島美を満喫しました。

道中、230ha・東京ドーム56個分の広さを誇り、8万世帯1年間の消費電力を供給している、90万枚と日本一のソーラーパネル群を車窓から眺めながら、ホテルグランヴィアに帰り、お別れ茶話会の後、再会を期して閉会いたしました。





コロナ感染症もまだ減少しないなかで、健在55名全員、男子の平均寿命を超え、腰や膝痛等による外出困難者十数名を数えながら、参加者26名と予想以上に大勢の方が参加したことは喜ばしいことでした。これは、心身ともに元気な間に旧交を温めておきたい気持ちとともに、今回の世話人（石津ご夫妻、奥田、小林、坪井君）

の緻密な企画、案内状、詳細な近況報告によるものと、感謝致しております。

次回は今年秋ごろ愛媛県で開催の予定です。

（今回の同窓会開催以前に、四〇会では二人がコロナに罹患していました。当日は33人も集まり、クラスター感染が心配されましたが、杞憂に終わり、案ずるより産むが易し、でした…）。





## 支部だより

### 令和4年兵庫県鶴翔会総会

山本 満雄 (昭52)

2022年10月1日(土)に兵庫県鶴翔会総会が神戸支部担当で開かれました。兵庫県鶴翔会は西播地区、神戸地区、阪神地区の3支部よりなり、順番に総会を各地区が交代で開催しています。本年度は、神戸支部が担当となり、神戸市元町近くのラッセホールにて午後2時より開催しました。コロナ禍のため、3年ぶりの開催となりました。参加者は、20名でした。

総会は初めに昨年度亡くなられた兵庫県鶴翔会会員への黙祷が行われました。総会開会のあいさつに続いて、鶴翔会事務局長の田口博之様より「岡山大学の近況」をお話いただきました。2020年に創立150周年を迎えた岡山大学医学部は、地域・世界へと優れた研究者と医療人を育成・輩出し、良質な医療・保健の維持と発展に貢献してきています。その中で、本医学部のあるべき姿として「日本を代表する医学教育・医学研究の国際拠点を目指して挑戦を続けるキャンパス」を掲げています。現在、臨床研究、橋渡し研究、ゲノム医療などで国から中四国地方唯一の中核拠点病院として認められています。医学教育では診療参加型臨床

実習の拡充など国際水準に適合した教育カリキュラム改革を推進しています。また、学部教育から大学院教育と初期研修へのシームレスな接続を実現しています。岡大卒業生として非常に心強く、誇りに思いました。

次に議題として、阪神支部の今後について意見交換を行いました。2020年朝比奈支部長ご逝去後、阪神支部が休眠状態となっています。今後、会員皆様の意向をアンケートでお聴きして、次回総会までに阪神支部の存続か、神戸支部との合併などの方向性を示したいと思えます。

学術講演は、岡山大学総合内科学教授 大塚文男先生に「岡山大学総合内科の取り組みとコロナ禍での対応」と題して講演いただきました。3年前より新型コロナウイルス感染症が日本のみならず全世界で猛威をふるい、新型コロナウイルス感染症罹患後の問題を抱えている患者さんも多くいます。海外の報告では罹患後の半数以上の患者さんに、全身倦怠感や睡眠障害、不安・抑うつなどの症状が出現しており、適切な医療のサポートが必要な方もいます。また、その症状は多種多様で、診療は複雑となっているため、診療体制の整った環境で、体系的に診断・治療を行うことが重要です。岡山大学では、国内でいち早くコロナ・アフターケア外来を開設し、新型コロナウイルス感染症罹患後の種々の症状に悩む患者さん、ならびにその担当医からの紹介の受け皿となり、診療方針の決定とマネジメントを総合的に行っています。地域の医療機関とも連携して患者さんの診療を行うことも必要です。大塚





教授のもと、アフターコロナ分野の先進的な功績に大きな感銘を受けました。

講演会後に集合写真を撮りました。西播支部長林 充先生、前支部長瀧谷泰博先生、姫路赤十字病院新院長岡田裕之先生、姫路聖マリア病院院長金廣有彦先生ほか、西播支部より多数の先生方に出席していただき、深く感謝致します。大塚文男教授と田口事務局長にも参加していただき、3年ぶりの懇親会となりま

した。参加者各自登壇してもらった自己紹介も、少しお酒が入ったためか和気あいあいとした中で行われました。出席された先生方々は、歓談とお互いの旧交を深め、非常に和やかなうちに無事終了いたしました。最後に、西播支部長林先生に来年の総会担当の挨拶をしていただきました。また、総会のお世話、司会進行をしていただいた神戸大学麻酔科教授溝渕知司先生に深謝いたします。

## 東京支部だより

鶴翔会東京支部長  
三宅 健介 (昭59)

新型コロナウイルス感染症の影響が続く中、令和4年度鶴翔会東京支部 役員会・総会を、11月5日(土)に、昨年に引き続きオンライン形式で開催いたしました。参加者数はオンラインにもかかわらず例年通りで、約20名でした。最初に、開会挨拶、物故会員への黙とう、会務報告に続いて、昨今の支部会員の減少等、支

部の諸課題について、会員による多くの意見交換がありました。田口鶴翔会事務局長にもご参加いただき、これらの課題について貴重なご意見を賜りました。その後、豊岡伸一岡山大学医学部長による「岡山大学医学部の現在とあるべき姿」と題する講演を拝聴し、母校の現状についてばかりでなく、ご自身のご研究についてもわかりやすく紹介していただき、その後活発な質疑応答がありました。講演会終了後、例年通り参加者の近況報告などをおして親睦を深めることができました。来年はオンサイト開催ができるよう、パンデミックの収束を祈るばかりです。

## 令和4年度 鶴翔会 山口県支部総会

支部長 岩国医療センター  
青 雅 一 (昭56)

令和4年11月13日、鶴翔会山口県支部総会が岩国医療センター看護学校において開催されました。昨年度に引き続きコロナ禍のため、懇親会無しの総会となりました。今年度は昨年よりお願いしていた岡山大学病院新医療研究開発センター 臨床研究部の堀田勝幸教授と鶴翔会事務局長の田口博之様をお招きして、県内各地から30名余りが集い、総会に続き講演を拝聴いたしました。

支部長挨拶に続き、庶務報告では会員の動向、叙勲と物故会員の報告がありました。令和2年度の秋の叙勲で、斎藤大治先生(昭42)が瑞宝中綬章、西村公一先生(昭51)が旭日双光章を授章されましたので、斎藤大治先生には支部長が自宅にお届けしたことを報告し、総会に参加されていた西村公一先生には総会の席上、支部長から花束の贈呈がありました。また今年度も、中川 清先生(昭23)、荒川 清先生(昭44)、前

田昌則先生(昭57)、の3名の先輩方がご逝去なさいましたので、黙祷を捧げ御冥福をお祈りしました。このあと会計報告と監査報告が行われました。令和3年度の会費納入率は90.4%と、高い結果となりました。

総会に続き特別講演に移り、堀田勝幸教授より「臨床研究のこれまでとこれから」と題してご講演いただきました。続いて事務局長田口博之様より「岡山大学の現状」と題した岡山大学の近況報告を拝聴しました。総会の最後に新入会員の紹介があり、岩国医療センターの初期研修医の先生方から自己紹介がありました。

総会に続いて別室に移って写真撮影のあと、残念ながら今年度もコロナ対策のため、懇親会なしで解散となりました。最後に閉会のご挨拶と来年度の総会のアナウンスを行い、盛会裏に総会を終えることができました。

堀田勝幸教授と田口博之事務局長様には電車の時間までの間、三井 清先生(昭36)ほか5名とともにかなり距離をとった2席に分かれて座り、アクリル板で仕切られたマスク会食とさせていただきます。なんとも寂しい話ですが、このご時世ですので、大変失礼



ながら医療者の基準で対処させていただきました。懇親会取り止めのせめでものお詫びのしるしに、支部長セレクトの「雁木」と「五橋」の季節限定品をお土産にお持ちいただきました。岩国の酒をご堪能いただけたかと思います。

## 学生だより

### 解剖実習を終えて

医学部医学科2年 田村 郁人

「この部屋に横たわっているのは、すべて一人の尊厳を持った人間である」という事実を常に肌を感じながら行う2ヶ月間の実習は、精神的に決して楽なものではなかった。実習を共にした約120人の仲間も皆きつと同じ思いを抱えていると思う。想像とかけ離れた姿のご遺体を目の当たりにし、私の目の前で倒れた見学生もいた。我々と同じ人間の身体を自らの手で「解剖する」ということは一般的な常識や倫理を超えた行為であり、それを行う私達は相応の責任を持って実習にあたらなければならない...という考えは実習前後で変化していない。

実習が始まった当初、その責任とは「目の前の方の身体の組織の一欠片、血管や神経の一本も無駄にせず全てを学びに還元すること」にあると考えていたが、それは驕りだとすぐに思い知らされた。膨大な数の血管や神経が結合組織や臓器と複雑に絡み合い、そしてその全てに名前と機能がある。今までは領域や系統ごとに区別して認識してきた全身の器官が、隔てられることなく相互に繋がりに関係しあっている。目の前のご遺体の血管や神経の走行と、座学で習った構造が全く一致しない。そして私達よりはるかに知識と経験を蓄えているであろう先生方ですら判断に困るほどの多様な所見。

人体の複雑さと緻密さに圧倒され続け、自分の認識の甘さと無知を突き付けられ続けた2ヶ月間だった。しかし、そうした経験によって機械的な構造や位置関係によって全身の器官をとらえるのではなく、その本質的な機能に目を向け、すべてを有機的なつながりとしてとらえようと努力するようになった。その意識が芽生えてから、例えばこの血管はどこから出て何を栄養するのか、なぜこの筋肉が人体に必要なのか、この神経が損なわれることで何がどのように障害されるのか...など、今までモノクロだった知識に色がついていったような、不思議な感覚がある。

そして、実習を通して「人間の尊厳」について深く考える瞬間が多くあった。どのご遺体にも名前があり、年齢がある。解剖が進み、身体をあらゆる視点から深

く観察するにつれ、その方が生前にどのような生活をされていたのかも自然と分かってくる。どのような種類の仕事をしていたのか、最期まで元気に動いていたのか、寝たきりの生活を過ごしていたのか、何を食べていたのか...筋肉の付き方、皮膚や内臓の状態、様々な情報が自分に呼びかけてくる。私が解剖したご遺体は、筋肉の付き方や全身の血管は健康そのものであったにも関わらず、右肺がほぼ機能しておらず、左肺よりも小さく萎縮していた。最期はとても苦しかったのだと思う。

実習中、手を動かしながら無意識に名前を呼びかけてしまい、同じテーブルの仲間に驚かれたことがあった。ご遺体は決してただの物質でなく、人格や意志と共にそこに在るのだという感覚がそうさせたのかもしれない。「目の前のご遺体は、医学生にとっての最初の患者」という先生の言葉の意味を、解剖が終わりに近づくにつれ深く実感するようになった。身体と生活は決して分かつことができないものであり、病気を診ることはその人の生活、人格に向き合うことではじめて可能になるのだと知った。それが、自らの身体をもって私たちに教えてくれたことなのだと考えている。

自らの献体を志願して下さった方とそのご家族、幾度となく疑問に応じて下さった先生方、共に実習を乗り越えた仲間に感謝と畏敬の念を申し上げ、この文の結びとさせていただきます。

### 解剖実習を終えて

医学部医学科2年 錦織 巧

二か月にわたる解剖実習が終わった。長期間でしかも久々の対面授業であり、新鮮な時間を有意義に過ごせた。思えば、この実習を通じて得られた気づきがいくつかある。

まず、医学生としての自覚と医師になることの難しさへの焦りである。初回の授業でご遺体を前にした時、私たちの学びと将来の医学のためにその身を捧げてくださったことへの感謝と共に、解剖させていただくことの責任を強く感じた。私は大叔母が地元の大学に献体していたので話は多少聞いていたが、実際に解剖してみると、その難しさと責任感の板挟みになり、あっという間に時間が過ぎていった。予習をしていても神経や静脈を同定することはとても難しく、果たして自分が将来現場で活躍できるのか不安になった。外科医



はこんなに細かで慎重な作業を、内科医は見えない臓器たちを想像する力を働かせ、小児科医はご献体よりもずっと小さな身体を扱う、数年後自分がその職務を全うできるよう、この焦りをばねに勉強に勤しみたいと感じた。そして、逆説的であるが、実習により座学の重要性を強く実感した。筋肉や臓器を観察する中で、これまで学習してきたことは全て一本の筋が通っていることを痛感した。と同時にタコソボのようにぼつぼつと勉強してきた自分を恥じた。

また、解剖実習の二周目では他大学から学生が見学に来られるのだが、彼らに説明しているときに、自分が解剖学をなんとなく理解しているだけということを感じさせられた。薬学科や看護学科、理学療法学科などの学生が来られ、それぞれにとってベストな学びが提供できるよう尽力したが、それは自分の理解度の指標にもなった。

解剖実習を通じて学んだのは単なる解剖学の知識だけでなく、自省や将来のビジョンも含まれていた。このような充実した学びを提供して下さった関係者の方々に感謝の念がやむことはない。今後の私の学習でその意識を紡いでいきたいと思う。

## 解剖実習を通して

医学部医学科2年 吉原由佳子

解剖実習が始まる前、私の胸は漠然とした不安だらけでした。実習前の講義で、ともしび会の話聞いていた時、御献体下さった方のご遺族の方はどのような思いで、そして何を教えるために私たちにご遺体を預けて下さったのだらうかと考えていました。解剖実習は「医師になるために医学部で学ぶということがどのような意味を持つのか」について考える大切な機会であったように思います。また、人の体の構造を見せて頂けたことは非常に大きな経験でした。複数の御献体を見せて頂きましたが、これまで教科書で学んできた一般的な構造と全く同じ御献体は見られず、人の体は多様であることを実感しました。また、実際に神経や血管の走行を追うことで神経支配や灌流域を確認出来た時には、人の体のつくりの繊細さに感動すると共に、神経や血管の走行一つにも意味があるということを知りました。この経験は解剖実習をさせて頂けたからこそその経験だと思っています。

私が少し苦労したことをお話します。手の解剖をす

る際、私が担当させて頂いた御献体の手は硬く握られていました。このままでは手掌の観察が出来ないため、手を開く作業が必要です。握りこんだ手を開く作業は初学者の私にとっては非常に難しく、時間がかかりました。担当していた教員に対し、この御献体の手掌の観察を諦めたいと話をした際、許可がもらえませんでした。実習計画に遅れ焦っていたために実習をこなすことに必死になっていた私は少し不満に思っていました。しかし、教員は苦勞しながらこの御献体で見せて貰うことに意味があるというのです。今振り返ってみると、私はともしび会の方にご協力頂いているという意識が無かったように思います。どんな思いで御献体頂いているかを少しでも考えれば、このような傲慢な考えに至らなかったように思います。苦勞しつつも見せて頂けて本当に良かったです。

今回、私なりに全力で実習に取り組んだつもりです。実習を乗り越えて達成感を覚えると共に、観察が叶わなかった部分も多くあり悔しい気持ちもあります。今回、皆様にご協力頂いたことで、次は私が社会貢献してゆくための責任を与えて貰ったように思っています。今後医師となり与えて頂いた社会的責任を果たしていけるように、私なりに学び続けたいと思います。

## 会報誌編集委員の任期を終えて

医学部医学科6年 武内恵太

時下、鶴翔会の先生方におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。約2年間、学生委員として鶴翔会会報誌の編集に参加させていただきました、医学部医学科6年の武内恵太と申します。

思い返せば5年次の4月、学生委員として選任された旨のご連絡が突然舞い込み、自分のような平凡な一学生に務まるものなのか不安に感じたことを鮮明に覚えております。というのも、失礼を承知で申し上げますと、会報誌に触れる機会が稀に実家へ帰省した際少し目を通す程度で、私にとってはあまり馴染みのない存在であったのも不安の要因でありました。その一方で、同期の六車さんと共に学生の代表として任せただけのことを非常に光栄に感じていたのも事実で、自分なりに考えながら貢献できればと前向きな気持ちで臨みました。

編集会議では自分からなにか画期的な案を提言するようなことはやはり困難でしたが、編集委員の先生方



や事務局方からの問いかけに対して、在校生目線の意見を可能な限り伝えて参りました。また時には、ご高名な先生方との面談の機会をいただいたこともありました。鶴翔会への熱い想いと期待を伺っている中で、この会報誌が持つ意味合いの大きさに気が付き、卒後も大学とのつながりを維持することの重要性を知る貴重な時間となりました。短い期間ではありますが2年間の任期を通して、たとえ微々たるものであったとしても、会報誌の改善に貢献できていれば幸いに思っています。

さて、私自身もとうとう国家試験を控える身となった今、大学を卒業し医師としての人生をスタートさせることが目前に迫って参りました。編集委員としての役割は終えますが、今後はこの会報誌を通して後輩たちの成長を見守ると同時に、尊敬する先生方の新たな業績やご活躍を拝見するのを楽しみにさせていただき、いつかは私もその仲間入りができるよう精進していく所存です。

末筆ではありますが、鶴翔会の先生方のさらなるご発展をお祈りするとともに、今後ご指導ご鞭撻いただける機会がありましたら、何卒よろしくお願ひ申し上げます。この度は会報誌編集委員として活動させていただき、ありがとうございました。

## 学生編集委員を務めて

### 医学部医学科6年 六 車 明日香

岡山医学同窓会報初の学生編集委員として2年、会報に携わらせていただいた。声をかけていただくまでは至極遠い存在であった鶴翔会。初めて関わることになったものの、編集作業はおおよそ事務局の方々が進めてくださっており会議ではあまり発言することができなかつたことが心苦しく思われる。最後にできることとして、様々な機会をいただいた中で考えた同窓会報へのアイデアをこの場を借りて記したい。

会報をより面白くするために、まずは興味をそそられる読み物の種類について5つに分類してみた。1つ目は、話題にのぼるもの。サッカーワールドカップで日本が活躍していることが話題になれば、特段のサッカーファンでなくとも試合をみてしまう状況は記憶に新しい。ドストエフスキーの著書「カラマーゾフの兄弟」を尊敬する友人複数人から勧められたことで読んだ経験からも、様々な場で耳に入るものは徐々に興味

の対象となることを実感する。2つ目に、実用的なもの。模試の解説やガイドラインのように、実務に必要なコンテンツは必然的に目を通そうとする。3つ目として、自分に関係があると思うもの。女性ならジェンダー問題、勤務医なら過重労働といった、自身が情勢を知りたいと感じる話題であれば、興味をもって情報を収集するだろう。4つ目に、続きが気になるもの。人には未完了のタスクをより優先的に遂行する心理的傾向があるようだ(Ovsiankina, 1928)。未完の状態が続く連載物をついつい読み進めてしまうのはこれによるものだろう。5つ目は、記録。先祖の戸籍や過去の論文など、何かを調べたくなつた時、まずは記録をさかのぼらなければならない。大勢に読まれるものでなかつたとしても、未来のニーズを満たすために欠かせない書物の役割だ。

以上を鑑みると、会報がさらに広く読まれる書物となるためには、話題性、実用性、読者との関連性、連続性、記録性がキーワードになる。現在の会報は、人事・教室報告やクラブ活動報告など、記録性と特定読者との関連性に重点を置いたものとなっている。今後はOB/OGの先生方による診療のハウツー記事を連載して実用性や連続性を持たせてみたり、働き方改革といったより一般的なテーマについて関連病院の実例を特集し、話題性や多くの読者との関連性をもたせてみたりすれば、広く興味を惹きつけ会員同士の交流も活発化するのではないだろうか。

学生編集委員となり思わぬところで「会報に載っていたね」と声をかけていただいたり、坪井先生や池田先生といった熱心なOBの先生とお話する機会をいただいたりし、鶴翔会に多くの人が心を寄せていることを実感した。伝統は、踏襲することが目的ではなく、先人から受け継がれたものを発展させていくことが本質であると思う。岡山大学のOB/OGの皆さんから受け継いだバトンを、よりよい形で後輩に渡せるよう、卒業後も鶴翔会に関わっていきたい。

最後に、いつも本当に温かく学生の私たちを気遣ってくださった鶴翔会事務局の皆様、編集委員の先生方、その他すべての関わってくださった方に心から感謝いたします。鶴翔会の今後ますますのご発展をお祈り申し上げます。

## 西日本医学生学術フォーラム2022

実行副委員長  
医学科4年 三前英恵

2022年12月17日、岡山大学鹿田キャンパス講堂にて西日本医学生学術フォーラムが開催されました。当フォーラムは西日本の医学生が医学研究を通じて交流する、いわば「サイエンス西医体」です。今年度はコロナ禍のためハイブリッド形式での開催となりましたが、現地・オンライン合わせて近畿・中国四国・九州の10大学から約90名の医学生・教職員が参加しました。

参加のみなさまからは「想像以上に学生間交流が盛り上がっていた」「各演題のレベルの高さに驚いた」とのお声をいただきました。また、特別講師として岡山大学ラボサークル創設者である守本祐一先生（東京大学国際高等研究所ニューロインテリジェンス国際研究機構 河西研究室特任研究員）にご講演いただきました。学生時代から医学研究の分野で活躍する大先輩からの貴重なお話は、学生から大好評で、時間がいくらあっても足りないくらい質問の手が挙がっていました。

当日は通信トラブルもありましたが、みなさまのご協力のおかげで無事フォーラムを終えることができました。開催にあたり尽力して下さったすべての方へ厚く御礼申し上げます。今後ともあたたかいご支援のほどよろしくお願いたします。

クリスマス間近だったのでスタッフは腕章の代わりにサンタ帽 or トナカイ角を装着しました。

岡山大学代表として発表して下さった5年の瀬谷海月さん、4年の栢野功政さんからコメントをいただきました。写真と合わせて掲載いたします。

### 【医学科5年 瀬谷海月】



口演発表をする瀬谷さん

この度、西日本医学生学術フォーラム2022にて講演発表をする機会をいただきました、岡山大学医学部医学科5年の瀬谷海月と申します。私は岡山大学救急救命科で臓器移植と医療用ガスの研究のお手伝いをしており、このフォーラムでの発表は一昨年に続き2回目となります。学生として学会に参加する、まして発表するのは大変光栄なことですが、なかなかの緊張を伴



参加者全員で集合写真（前列中央に守本先生）



います。私が本フォーラムで初めて学会発表をした際も、同じ学生で、また研究に興味ある人たちに囲まれたことで大いに刺激を受け、その後の研究活動の糧になりました。まして、今年はホームグラウンドである岡山中、かつ数年ぶりに対面で行う学会となり、前回以上に緊張感をもって臨むこととなりました。とはいえ、サンタ帽やトナカイのツノを付けた同級生たちスタッフがクリスマスの雰囲気盛り上げてくれたおかげで、難しい議論が飛び交う中にも楽しいひと時になったと思います。今後も研究に興味がある、あるいは研究に取り組む学生が、同じように研究に邁進する学生たちや専門家と交流する場として、本医学生学術フォーラムを活用していただければ嬉しく思います。次に6年生となる私ですが、本学会で得た経験と刺激を糧に、さらに研究に励んでいきたいと思っています。

#### 【医学科4年 栢野功政】



ポスター発表をする栢野さん（向かって右のサンタ帽）

鶴翔会の皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。この度、西日本医学生学術フォーラムにてポスター発表の機会をいただきました。医学部医学科4年の栢野功政と申します。私は現在、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科組織機能修復学分野で基礎研究をしています。3年前からバイオインフォマティクスにのめり込んでおり、ドライ解析を主軸として研究活動をしています。私は研究が好きなので将来研究者になりたいと考えています。一方で、皆様もご存知の通り医学科の学生のほとんどは医師を目指しています。研究の道を志す医学生にとって、研究について語り合う友人と出会う機会は残念ながらそう多くはありません。そのような状況において西日本医学生学術フォーラムは、研究活動をしている医学生が一同に会する貴重な場なのです。私は脳弓下器官のシングルセルRNAシーケンス解析について発表させ

ていただきました。短い時間ではありますが他大学の方々と議論することができて非常に有意義な経験でした。今後も機会を見つけて積極的に発表していきたいと思っています。最後になりますが先日鳥取大学医学部医学科統合生理学の教授に着任された檜山武史先生をはじめ、今まで4年間私を指導してくださった先生方にご場をお借りしてお礼申し上げます。今後とも精進していきますので温かく時に厳しく見守っていただくと幸いです。

# 歴史の広場

## The National Hospitalと ヒューリングス・ジャクソン

昭48 久山秀幸

19世紀以降の神経科学、臨床神経学において百年以上にわたって中心的役割を担ってきた病院は、パリのサルペトリエール病院 (Salpêtrière Hospital) (写真1) とロンドンのThe National Hospital Queen Square (NHQS) (写真2) であるといわれている。

サルペトリエール病院の歴史は古く、1656年、ルイ14世はパリの火薬工場のあった場所にサルペトリエール施療院 (Hospice de la Salpêtrière) を建てさせた。18世紀末のフランス革命の頃には、多くの患者と囚人がいた。施療院には、精神病患者が収容され、手足に枷をはめられていた。1795年にフィリップ・ピネル (Philippe Pinel, 1745-1826) が、その縛めをときその心を精神の病として近代精神医学の道を拓き、サルペトリエールは精神科中心として知られるようになった。

その後、1861年にシャルコー (Jean-Martin Charcot, 1825-1893) が、サルペトリエール病院の医長として勤務するようになり、てんかん、神経梅毒、および脳卒中を含む多くの病態を解明し、19世紀後半に神経学の基礎をつくった。シャルコーの元で学んだバビンスキー (Joseph Babinski, 1857-1932) は、1903年にバビンスキー反射を発見した。ちなみに、ピネルの弟子



写真2 The National Hospital Queen Square (1982年撮影)

のエスキロール (Jean Esquirol, 1772-1840) は、1838年の著書で、てんかんに関し全身けいれんをおこす大発作 “grand mal” と全身けいれんに至らなく短時間で終止する小発作 “petit mal” を区別した。

一方、ロンドンのNHQSの基礎が築かれた時代は、ビクトリア朝中期で、産業革命による都市化現象と貧富の格差が大きくなる社会問題もあった。困窮者に対する社会的救済はなく、クリミア戦争終結後まもなくで医学教育も充分ではなく、看護婦も専門職として確立されていなかった。

このような時代背景のなか、ロンドンのセントパンクラス・キングスクロス (St. Pancras & King's Cross) 周辺で慈善活動に奉仕していたチャンドラー (Chandler) 姉妹 (図1) の献身的努力は、NHQSの設立に大きな影響を及ぼした。姉妹と弟は、幼いころ



写真1 サルペトリエール病院附属礼拝堂 (1983年撮影)



図1 チャンドラー姉妹



に両親を亡くしたため祖母と一緒にセントパンクラス周辺で質素に暮らしていたが、祖母がおそらくは脳血管障害により半身不随になったこともあり、麻痺患者をはじめとする神経疾患患者救済の施設の設立に力を注ぐようになった。チャンドラー家は裕福でなかったため、数珠玉細工の花かごや小さな貝殻の装飾品などのチャリティーにより、4年がかりで200ポンドを集め、その浄財を基金としてロンドン市に病院設立を訴えた。その後、ロンドン市長も積極的にかかわり、1859年11月に病院開設が決定した。なお、ナイチンゲール (Florence Nightingale, 1820-1910) が、聖トーマス病院 (St. Thomas' Hospital) 内に看護学校を開校したのは1860年である。

病院の開設場所はブルームスベリー (Bloomsbury) のクイーン・スクエア (Queen Square) が選ばれた。ブルームスベリーには、大英博物館の中核となった建物のモンタギュー・ハウス (Montague House) があり、1759年にここでハンス・スローン卿 (Sir Hans Sloane) のコレクションが一般公開されたのが、現在の大英博物館の前身である。1848年にこの建物は今の大英博物館にみられるようにギリシャ風になり、1857年に円形閲覧室が中庭の中央部に建設され、その後、発展し、現在約800万点の常設コレクションを有し世界最大となった。当時、ブルームスベリーにはロンドン大学の本部、ダーウィン (Charles Darwin, 1802-1882) が働いた生物学研究所などもできアカデミー地域になった。ブルームスベリーは現在でこそロンドンの中心街近隣といえるが、16世紀初頭のこの近くは、野生動物が出没する樹木が茂った荒野で鷹狩が行われていた。19世紀半ばもブルームスベリーより北は荒野が続き、彼方にはハイゲート (Highgate) やハムステッド (Hampstead) の丘を望むことができた。

1860年の春にNHQSは8床のベッドで開院した。最初に着任した医師はラムスキル (J. S. Ramskill, 1825-1897)、2番目にこの病院の医師になったのはブラウン・セカード (C. E. Brown-Sequard, 1817-1894) であった。彼のNHQS在籍期間は4年半という短期間であったが、臨床神経医としての評価は高く、臨床講義も人気があり、Lancet誌上にも請われて掲載されることになっていたが、この企図は実現しなかった。彼はフランス人のように思われているが、生地のもーリシャス島は英国領であり、国籍は英国籍で、後年フランスで生活するようになりフランス市民権を取得した。

チャンドラー姉妹は、開院決定後も、この病院を安息の場でもあるように努力したが、妹のルイーザ (Louisa) は不幸にして開院直前に亡くなった。姉の

ジョアンナ (Johanna) は慈善活動を継続し、毎年2,000ポンドを超える寄付金を集め、開院後10年間にわたって週1回患者の慰問を続けた。しかし、1875年に脳卒中のため自宅で亡くなり、ハイゲートの墓地に埋葬された (写真8c)。永年病院の運営委員を務めていた弟のエドワード (Edward) も1881年に亡くなった。チャンドラー姉妹の精神は現在も受け継がれており、その功績はNHQSの玄関にある石碑に刻まれている (写真3)。

ブラウン・セカードに触発され神経学の道に入った一人がヒューリングス・ジャクソン (John Hughlings Jackson, 1835-1911) である。英国神経学の父といわれる彼は、イングランド北部のヨークシャー (Yorkshire) の農家に生まれ、ヨークの医学校で学んだあと、1856年にロンドンの聖バーソロミュー (St. Bartholomew) 病院で学業を終えた。哲学者ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) に啓

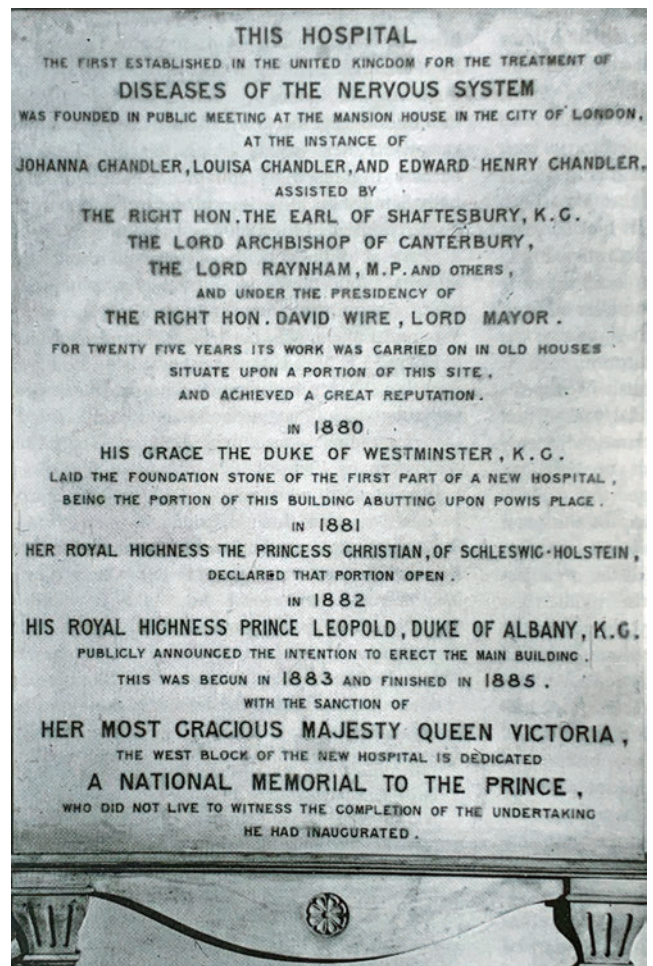


写真3 NHQSの玄関にある石碑

(この病院は、ジョアンナ、ルイーザ、エドワード・チャンドラーの懇請により英国で最初に神経疾患の治療のために設立された。……本館の建設は1883年に着工し1885年に完成しビクトリア女王陛下の承認を得た。)



発され、ジャクソンの興味は医学より哲学方面に向き、これがのちの神経病に対する思考に大きく影響したと言われている。

1862年にジャクソンがNHQSの職に就いた時の彼の初任給は年俸50ポンドであった。開院当時の婦長の年俸が21ポンド、看護婦は14ポンドであった。

彼は着任後しばらくの間、病院における地位には恵まれなかった。温厚で口下手であり、周囲があまり彼を理解しなかったためと思われる。

ちなみに、ジャクソンと同世代で同じヨークシャー出身のイザベラ・バード (Isabella Bird, 1831-1904) は、1878年来日し、北海道などを旅し「日本奥地紀行」という紀行文を残したが、その中では、当時東京-横浜間の鉄道料金が3等で1分 (1/4円) = 約1シリングとあった。当時の1ポンド=20シリングで1ポンド=5円位であった。1880年頃の1ポンドは今の5万円くらいの価値があり、1860年頃は、1ポンドは今の6~8万円くらいと思われる。

その後、NHQSの患者は次第に増え、外来診療のスペースも不十分となり、1876年の年次報告書で管理委員会は以下の結論を出した。病院の近隣に合理的コス

トの土地を探す。病院内の解放されたスペースを再配分し、特に看護婦の仮眠施設と付き添いの宿泊施設、快適な空間をつくる。この増改築により総面積 22,500平方フィートの新しい病院を建設でき180床以上を増設できるようになる。土地の取得に当たっては地権者不明のため取得するのに9年もかかり、他の土地でも取得に5~6年かかるなど、多大な労力と資金を要したが、1885年に病院の本館が完成した (図2)。この建設に要した総事業費は10万ポンドであった。

当時のNHQSには全国から多くの神経学者が集まり活躍していた。1886年に撮影された写真には、ジャクソン、ホースレイ (Sir Victor Horsley, 1857-1916、世界で初めて脊髄腫瘍の摘出に成功、また骨ろうを發明)、フェリアー (Sir David Ferrier, 1843-1928)、ガウアーズ (William Gowers, 1845-1915、ガウアーズ徴候)、ビーバー (Charles Beever, 1854-1908、ビーバー徴候)、マーカス・ガン (Marcus Gunn, 1850-1909、マーカス・ガン瞳孔)、バスティアン (Henry Bastian, 1837-1915、バスティアンの法則) など多くの著名な神経学者がみられる (写真4)。

その後も病院の運営費は、慈善事業により賄われていたが、1948年から基金が立ち上げられ運営されている。一方、チャンドラー姉妹の精神は病院内に浸透し、その後も寄付が続いている。NHQSの脳神経外科関係への寄付としては以下のような大口の寄付があった。

1975年にゴフ・クーパー家から30万ポンドの遺贈を受け、ロンドン大学の脳神経外科部門が設立されバレンタイン・ローグ (Valentine Logue, 1913-2000) は教授に任命された。イギリスと南アフリカで不動産業を営み成功したハリー・ゴフ・クーパー (Harry Gough-Cooper) が、不幸にもreticulum cell sarcomaで亡くなり、そのとき神経学研究への支援としての寄



図2 1885年に完成した病院の本館



写真4 1886年に撮影、左から右に、後列：Horsley, Beever, Cumberbatch, Buzzard, Brudenall Carter, Ormerod, Adams; 前列：Gunn, Bastian, Jackson, Ramskill, Radcliffe, Gowers, Semon, Ferrier

付であった。

私がNHQSに留学していた1982年には、中東のご高齢の女王が後頭蓋窩の大きな神経鞘腫の手術のため入院していた。残念ながら術後亡くなったが、遺族から100万ポンド（当時の為替レートで5億円）の寄付があった。このとき担当医のサイモン教授（Lindsay Symon, 1929-2019）は、別のエピソードを話された。教授が手術した王族の患者に大変感謝され、「お礼に何かぜひプレゼントしたいので何でも言ってくれ」と言われ、ゴルフのフルセットを伝えた。患者はゴルフのことをよく知らなかったので14本のクラブなどを説明した。後日、「14のクラブは用意できたが、2つにはスイミングプールがついていない。それでも良いか」と連絡があった。

1990年には、タヴィストック（Tavistock）家からの寄付により、NHQSに7床の脳神経外科専用集中治療室タヴィストックユニットが開設された。

1995年にサイモン教授は退官された。NHQS在籍中多大な業績を残され、中でもサイモン教授が1981年に提唱された脳虚血におけるペナンプラ（ischemic penumbra）の概念は、教科書にも掲載されるようになり、現在の超急性期脳梗塞治療の原点になっている。

2022年9月8日にエリザベス女王が亡くなられた。エリザベス女王とNHQSに纏わることとして以下のことがあった。前述のバレンタイン・ローグ教授の父ライオネル・ローグ（Lionel Logue, 1880-1953）は、女王の父ジョージ6世の吃音の治療を行った（本誌第118号2015年4月に掲載）。また、神経内科教授のロジャー・ウィリアム・ギリアット（Roger William Gilliatt, 1922-1991）の父で産婦人科医ウィリアム・ギリアット卿（Sir William Gilliatt, 1884-1956）は、チャールズ新国王とアン王女の誕生に立ち会った。

多くの著名な神経学者の中でもヒューリングス・ジャクソンは傑出していた。ジャクソンは、神経学の基本的理念を「神経系の進化と解体」（The evolution and dissolution of the nervous system）で明確にした。彼は、スペンサーの進化論の思想を神経系の構造と機能の考えに導入し、階層構造論（hierarchy of the nervous system）を提唱した。この階層構造論において、最低階層は反射機能および自律神経機能、中等階層は知覚および運動機能、最高階層は、認識・行為・判断・思考などの高次神経機能を担当するとした。

神経疾患については、ジャクソンは階層構造の解体（dissolution）と定義した。彼は、神経疾患の症状は常に陰性（negative）と陽性（positive）の様々

な度合いの組み合わせにより構成される（duality of symptomatology）と考えた。

クリッチレイ（Macdonald Critchley, 1900-1997、NHQSに37年間在籍、元世界神経学会会長）の著書には、これらのことに関連して以下のように記載している。

脳の局所的な軟化により間違っただけの言葉を発する言語障害の患者は、軟化が言語障害の「原因」であるという臨床的見解に誰も反対しない。しかし、厳密に言えば、言語障害の原因は軟化した脳ではない。なぜなら軟化した脳はもはや脳ではないからである。軟化していない健康な部分での活動で誤った発声をする。軟化は、患者の陰性（negative）の状態と一致する。陰性（negative）の状態は、陽性（positive）の現象を引き起こすと言うことは言葉の乱用であり、陰性（negative）の状態は何も起こさない。陽性（positive）症状は間接的に引き起こされたものであり、言ってみればその出現を「許される」（permitted）のである。

ジャクソンは、神経心理学など広範囲の領域で多大な学問的功績を残したが、その筆頭はてんかん学であるといわれている。

「てんかん」（epilepsy）の語源はギリシャ語の“epilambanein”-捕える、攻撃する-であるから、人が神あるいは悪魔に攻撃され、捕えられたということを示して、「神聖病」とされていた。

ヒポクラテス（Hippocrates, 紀元前460-376年頃）学派の医師たちの考えは、各臓器の働きについては粗雑であった。脳は他の臓器と同様に体液を分泌し、それが体のすべての部位に浸透していくと考えた。この体液が変質し脳に戻って脳卒中やてんかんなど引き起こすと推測していた。しかし、彼らはてんかんが脳の病気であると述べ、神経疾患を驚くほど明晰に書き記している。例えば頭部外傷による髄膜炎について、傷口は「燻製の肉のように」変色し、そしてけいれんが普通は体の一側に起こる。「もし傷が頭の左側にあるならけいれんは体の右側に起こり、傷が右側であれば左側に起こる。死は7～14日目頃にやってくる」。

ギリシャの医学者ガレノス（Claudius Galenus, 129-200）は、古代における医学の集大成をなした。彼の学説はその後ルネサンスまでの1500年以上にわたり、ヨーロッパの医学において支配的なものとなった。彼もヒポクラテス同様に体液により体が支配されていると考え、てんかん発作は濃い粘稠な体液または漿液が脳の構造を変えるか心の息吹の通過を阻害して脳室の中に蓄積させることにより脳が傷つけられて起こるとした。



ルネッサンス時代にもてんかんは「神聖病」と思われていた。てんかん発作のように思われる様子について、悪霊にとりつかれた息子をイエスの下に連れて来た話があり、ラファエロ (Raffaello Santi, 1483-1520) が描いた「キリストの変容」にこの光景が表されている (図3)。

1860年頃までは、てんかんは社会的な異常、「神聖な病気」(sacred disease)とされ正体は推測の域であったが、ジャクソンは、てんかんを疾患の1つとしてとらえた。ジャクソンは、聖メアリー病院 (St. Mary's Hospital) に勤務していた時の論文で、てんかんについて「発作は有害な雑草の花のよう」(the fit as the flower of a noxious weed)と表現した。

1862年にジャクソンがNHQSに転勤し、彼は「神経学」のてんかん学としてとらえ始めた。ジャクソンは、臨床診療で多くの劇的な症例を経験し、けいれん性障害のさまざまな症状に好奇心をかきたてられ、ブラウン・セカードらの協力で、てんかんのさまざまなタイプの症例を研究した。

ジャクソンは、各てんかんが特定の発作パターンを示すことを理解するには、詳細な臨床観察と正確な記録が必要で、「解剖学的、生理学的経験から考慮すべきで、腫瘍など中枢神経疾患を合併していないか、脳

の一部が未完成でないか」などの問題意識を持つ必要性を繰り返し述べた。当時は、電気生理学的データを活用することができなかったため、臨床医にとっては実際の発作はめったに観察できず研究は困難であった。

ジャクソンが研究を始めた頃、てんかんは、シュレーダー・ファン・デル・コルク (Schroeder van der Kolk, 1797-1862) の橋延髄領域内の発射病変であるとの仮説もあった。しかし、ジャクソンは、「てんかんと呼ばれる特定の部位はないが、放電病変が無数の部位にあるので、無数の異なるてんかんがある。」と述べ、1873年、ジャクソンはてんかんを、「時折、突然、過度に、そして急速な局所的な灰白質の放電」と定義した (a definition of epilepsy as comprising occasional, sudden, excessive, rapid and local discharges of grey matter)。

彼は、脳のどの部分でも不安定になる可能性があるため、正確な位置、程度、および不安定性の焦点の程度に応じて、多くのタイプのてんかんがあるとした。

一方、ジャクソンがロンドンに転居する数年前、トッド (Robert Bentley Tod, 1809-1860) は、発作に関与した手足の一時的な麻痺を報告し、放電した病変の活動に続く倦怠感によるものと考え、これはトッド麻痺またはてんかん性片麻痺として知られるようになった。

ジャクソンは、明らかにこれまでとは違ったけいれんに興味を引きつけられた。親指と人差し指、顔と舌、まれに足の親趾など体の異なる部分にけいれんが先行し、その後、けいれんはゆっくりと広がり、さらには全般化し、原則として意識は失われ、回復すると一時的に力が失われるが、気づかないほど穏やかな場合があることを報告した。これはジャクソンてんかんとして知られた症候群であるが、彼はめったにこの用語を使わなかった。彼の表現のいくつかは、「片麻痺てんかん」、「線条体てんかん」、「てんかん様発作」であったが、それらのどれも気に入らず、「一側性に始まるけいれん」を彼はもっとも好んで用いた。

一方、フランスのブラヴェ (Louis François Bravais, 1801-1843) は、1827年に「片麻痺性てんかん」の25例に基づいて、発作後片麻痺を含む一連の片側てんかん発作現象を報告した。これはジャクソンが1870年に報告したものと非常によく似ているが、ブラヴェは一側のけいれん現象が一側にとどまると信じていたのに対し、ジャクソンは身体の両側に及ぶ可能性があるとした。しかし、ジャクソンは、てんかん発作に言及するときにはいつでも、「1824年ブラヴェによって最



図3 ラファエロが描いた「キリストの変容」の一部



初に記述された」というフレーズを括弧内に挿入した。

シャルコーは、ジャクソンの研究を最大限に評価し、1877年に以下のように記載している。

英国ロンドンの大学者ジャクソンは、「一側性に始まるけいれん」について徹底的に分析した。私はこの疾患を「ジャクソンてんかん」と呼び、この名は不滅である。ブラヴェ（フランス人）とジャクソン（イギリス人）をリンクさせ、ブラヴェ・ジャクソンてんかんについて話すとき少し長い話になるが、ブラヴェの報告に比べるとジャクソンの研究はきわめて重要であり、彼の名は真にてんかんの病態の解明者の名に値する。「ジャクソンてんかん」という局所的、一側性の発作は別として、てんかんは一般的にジャクソンのスペンサー哲学である。科学的分析にかけられたとき、詳細な発作の兆候は、ジャクソンの鋭い類推により神経機能が解明される。

ちなみに、シャルコーはパーキンソン病の名付け親でもある。本疾患は、1817年に英国のジェームズ・パーキンソン（James Parkinson, 1755-1854）により振戦麻痺（shaking palsy）という小冊子で初めて報告された。彼が記載した症状は、寡動・安静時振戦・姿勢保持障害・前傾姿勢・小字症などであった。その後、1888年にシャルコーによって再評価された。シャルコーは筋強剛についても記載し、彼の提唱により本疾患はパーキンソン病と呼ばれるようになった。シャルコーが改名を提唱した理由は、本当の意味での「麻痺」はみられないためであった。なお、シャルコーは、この渺たる小冊子を求めて英国のマンチェスター医師会図書館室に行き熟読したと言われている。

てんかんの治療薬としては、当時、多くの薬が試されたが、どれも効果はみられなかった。唯一有効な薬として、臭化カリウムが1857年から使用されるようになった。本剤は、チャールズ・ロココク（Sir Charles Locock, 1799-1875）によりてんかん患者の他の病気のためにたまたま使われたところ、てんかん発作が著明に減少した。皮膚の発疹や眠気、行動の鈍化などの副作用はあるものの、この薬剤は半世紀以上もの間、てんかん治療の唯一の有効な薬であった。

一方、ビクター・ホースレイは、1881年にNHQSに脳神経外科医として勤務し、サルの大脳皮質にアブサン酒を注入して刺激を与え全般発作を誘発させた。彼のNHQSでの最初の手術は難治性てんかんをもつ若い男性のてんかん焦点に対する外科的治療であった（写真5）。彼は、癩痕組織周辺の興奮性焦点を切除し発作は改善されたと報告した。

同じ頃の1881年、ロンドンで開催された国際医学会

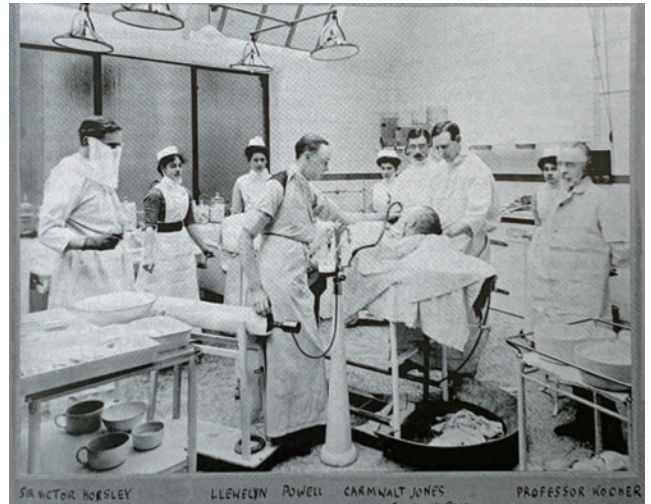


写真5 1906年の手術室、左端はホースレイ、右端は手術見学のコッヘル教授（ベルリン大学）

で、ジャクソンの影響を受けた同院の神経病理学者フェリアーは、大脳皮質運動領を手術的に切除して作った片麻痺のサルを供覧した。これを見たシャルコーが「これこそ患者だ!」「C'est un malade!」と感嘆したという有名な話がある。

ジャクソンの私生活については、1865年、30歳の時に11年間の恋愛期間の後、28歳のいとこエリザベス・デイド・ジャクソン（Elizabeth Dade Jackson）とノーサンプトンの聖ジャイルズ教会（St. Giles Church）で結婚した。

ジャクソンと妻は、クイーン・スクエアから少し離れたベッドフォードプレイス（Bedford Place）に暮らし始めた。エリザベスの母親メアリー（Mary Smith Jackson）は、1867年に65歳で亡くなるまで彼らと一緒に暮らしていた。結婚生活は幸せで、ジャクソンからニュージーランドの弟トーマス（Thomas）に宛てた手紙には、次のように書いている。「妻はいつも素晴らしく私と一緒に考えてくれ私は飽きません。私は健康に過ごしていますが、お金はあまりありません。私は同世代の誰よりも幸せです。」

ジャクソン夫人についてはほとんど知られていない。ジョナサン・ハッチンソン（Jonathan Hutchinson）は、彼女は「最も堪能で教養のある女性」であると述べている。彼女の残された唯一の写真は、彼女が優しい顔をしていることを示している（写真6）。彼女は献身的に夫の仕事を手伝い、彼の厄介な手書きを書き写すことができた。ジャクソン夫人は、子供たちの物語を書き、1879年に「A Day at Uncle Ben's」が出版された。短くてシンプルな童話であるが、当時の社会的慣習の興味深い様子が示されていた。



写真6 エリザベス・デイド・ジャクソン

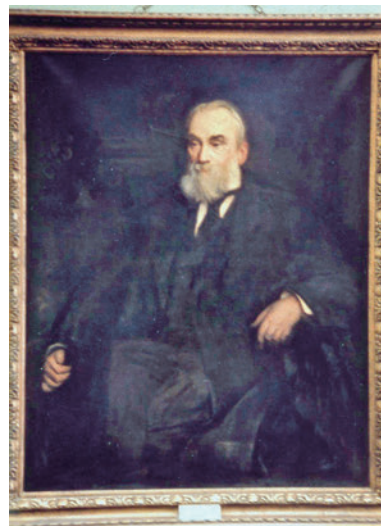


写真7 NHQSの玄関に掲げられているヘンリー・ロング・ジャクソンの肖像画（1982年撮影）

ジャクソンには子供がなく、彼らの幸せは比較的短かった。11年間の結婚生活後、ジャクソン夫人は1876年5月に亡くなった。彼女は40歳近くのととき敗血症性脳血栓性静脈炎を発症した。皮肉なことに彼女の致命的な病気は、一連のジャクソンてんかんの継続によって複雑化したと言われている。ジャクソン夫人は、ビクトリア女王の侍従医であったウィリアム・ジェンナー卿（Sir William Jenner, 1815-1898）の診察も受けた。彼女の夫と他の著名な医師の治療にもかかわらず、ジャクソン夫人は亡くなりハイゲート墓地に埋葬された。

1901年、ジョンズ・ホプキンス大学のウィリアム・オスラー教授（William Osler, 1849-1919）は、ジャクソンに彼の論文のコレクションの出版を要請した。それに対しジャクソンは、「最近の論文の多くは古すぎて再発行できません。しかし、私は出版を依頼され非常に刺激を受け、私が行ってきたことを整理した本を作りたいと思っています。頑張ります。」と答えた。ジャクソンの活躍した時代には、学術論文といった形

式が整ったものはなかっただけではなく、彼の論文の多くが講演のために準備されたもので論点が整理されているとは言い難いところがあったので、オスラー教授が依頼したものと思われる。しかし、その後ジャクソンの健康状態は決して良くなく、ほとんど何も書くことができなかった。

ジャクソンは、難聴とめまいの発作があり、仕事を続けることができなかった。1904年5月に弟トーマスに宛てた手紙には、「左耳が聞こえなくなり、迷路めまいの発作を起こしました。片目は近視で、他方の目で本を読みます。」と書かれている。晩年には科学的、社会的生活への積極的な参加はできなくなった。視力も次第に低下し孤独な生活となり、1911年10月7日に肺炎で亡くなった。彼は妻のエリザベスと共にスペンサーも眠るハイゲート墓地に埋葬された（写真8 a、b）。

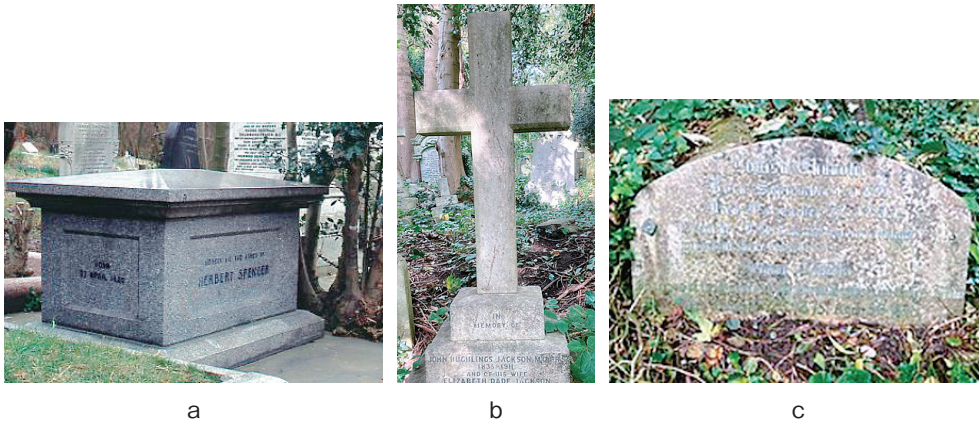


写真8 ハイゲート墓地にある スペンサー(a)、ジャクソン夫妻(b)、ジョアンナ・チャンドラー(c)の墓碑（スペンサーの墓碑は1982年に撮影）

生前に同僚から贈られていた肖像画は、現在もNHQSの玄関に掲げられている（写真7）。

#### 参考文献

1. 馬場正之：The National Hospital, Queen Squareの120年、神経内科、16：595-602、1982
2. Critchley M. et al: John Hughlings Jackson, Father of English Neurology, Oxford University Press, 1998
3. Gowers E.: Queen Square and the National Hospital 1860-1960, Edward Arnold, 1960
4. Holmes G.: The National Hospital Queen Square 1860-1948, E. & S. Livingstone, 1954
5. イザベラ・バード：「イザベラ・バードの日本紀行」時岡敬子訳、講談社学術文庫、2018
6. Shorvon S. et al: Queen Square: A History of the National Hospital and its Institute of Neurology, Cambridge University Press, 2019
7. Walker E.: The Genesis of Neuroscience（神経科学創世記－石島武一 訳）、工学図書、2005
8. 山鳥 重：「ジャクソンの神経心理学」、医学書院、2014





# 随 想

## バイオロンジル会／ 人材を育てる試み

公益財団法人岡山医学振興会  
岡山大学名誉教授  
昭36 難波正義

英語と日本語を融合させた造語ですが、たやすく理解できると思います。保田立二教授(在任1988-2012年)がつくられた言葉です。いま、はやりのバイオのことを、いろいろ話し合う会を医学部で企画された勉強会です。大変よい企画だったと思っています。

会はほぼ毎月1回開催され、週日の午後5時か6時ごろから、1-2時間、講演と質疑応答がありました。開会が午後5時以降であったことは、各科のその日の業務が大体終わり、なるだけ多くの研究者、大学院生、医学部学生などが集まれるようにと考えられたからです。私も出来るだけ都合をつけて出席しました。

自分の専門領域にだけに留まらず、横断的な広い生物学的知識をもつことは、医学部で研究を進めるために大変重要です。そのような環境で新しい独創的研究が期待されます。その意味で、バイオロンジル会の存在意義は大きかったと思います。

ただ、残念なことは、多くの出席者がセミナー室に集まり、活気が溢れた会になることはほとんどなかったことです。そして、保田教授の退任とともに、バイオロンジル会もなくなりました。

私がスタンフォード大学医学部に留学していた1973年の後期の授業に、「染色体の構造」という大学院博士コースの講義がありました。この授業は、全学の学部学生、大学院、研究教職員、医師など誰でも聴講でき、午後7時-9時まで2時間、毎週1回ありました。私も同僚の研究員に誘われ出掛けたところ、150人ほど入る講義室が一杯なのです。階段教室の通路の階段に座っている人もいます。ノーベル賞を受賞した教授も後ろの方の席に見えます。

講義の始めに担当教授が、このコースを選択している人に挙手を求めたところ、20人ほどが手をあげました。あとは、全員聴講者です。驚きました。新しいことを学びたいという意欲に溢れる人達の多さです。米国でイノベティブな人材が多く育ち、ノーベル賞が

多いのは当然だと痛感しました。また、夜、誰でも聴講できる柔軟な授業体制の組織もうらやましくなりました。

いま、当財団で考えていることは、医学部の教員が比較的自由になれる夕刻に開催できる「勉強会」です。近年、日本の大学の世界ランキングが低下していることの一つの要因は、人材が育っていないことだと考えています。上記のバイオロンジル会では科学的な話題だけでしたが、科学以外に、他の分野で活躍されておられる方々にも話をさせていただき、幅と深みのある人材育成を目指したいのです。岡大医学部の将来の発展には優秀な人材が必須です。

そのような会があればと夢見るのですが、上に述べたバイオロンジル会とアメリカでの授業経験を比較すると、実現は無理だと、悲しい気分になります。学ぶことへのエネルギーの違いです。

いま、財団が先頭にたって旗を振っても、誰もついてこないでしょう。しかし、現職の教授の方々が医学部の将来の発展を熱く真剣に考えられ、「人材育成」を目指す会を創られ、中心になって動かれる方がおられれば、財団として大いに支援できます。

新年にあたり、岡大医学部の将来の発展を祈念して！そして、財団へのご寄附をよろしくお願いします。

(2023-1-18)

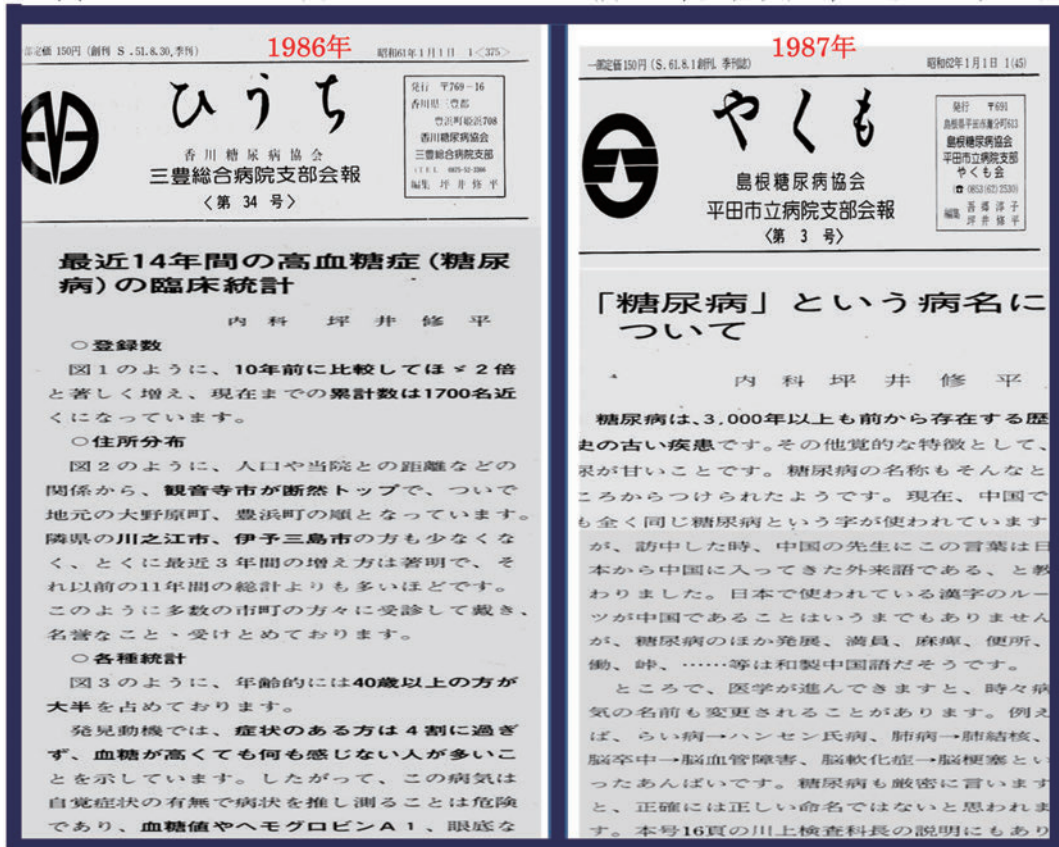
## 「糖尿病」の病名変更に拍手

昭40 坪井修平

はじめに

2022年11月の各新聞に次のような記事が掲載されていた。「日本糖尿病協会は、患者の大半が『糖尿病』という名称に不快感を抱いていることなどを踏まえて、今後1、2年のうちに新たな病名を提案したい考えだ…」「同協会が患者を対象にしたインターネットによるアンケート調査で、回答者約1,000人の9割が病名に抵抗感・不快感を持ち、変更を希望する人が8割に上り、『尿』という言葉が負のイメージであることへの懸念が多かった。そのほかの理由として、怠惰、自己責任、不摂生、ぜいたく病といった悪いイメージがあるとの意見があった」

私はほぼ40年前から、「糖尿病」の病名を「高血糖症」に変えるべきだと痛感し、患者会機関誌にも「高血糖症(糖尿病)…」と表記していた(図)。東北大学の



G教授も糖尿病の病名変更を強く主張されており、意を強くした私は日本糖尿病学会にも働きかけたが、大半の臨床医が「糖尿病」の病名に慣れ親しんでいたため“螳螂の斧”と一笑に付された。

この度の報道に快哉を挙げる所以である。

尿糖強陽性で血糖正常、逆に高血糖でも尿糖陰性の方が稀ではないこと、勤務医時代に少なからぬ医原性低血糖患者を診たこと、漫才師が糖尿病患者を笑いの対象にしたこと、糖尿病患者は生命保険へ加入出来なかったこと、ヤング糖尿病患者は就職や結婚で不利益を蒙ること等々、私は様々な苦い経験を積んでいた。

・教師の夢が無残に散った哀れな青年

私は昭和40 (1965) 年に卒業し、インターン修了後第一内科に入局した。昭和43 (1968) 年、研修出張後、糖尿病研究班に配属され、腎性糖尿に興味を抱いた。岡山大学保健管理センターで学生達の健康診断を行い、無害蛋白尿や無害糖尿の学生を稀ならず診ていたからである。

ある年の日本糖尿病学会総会に出席した際、会場近くの道端に虚ろな目をした、肢体不自由な青年が横たわり、父親が傍に立てかけた看板を示しながら、低血糖の恐ろしさを訴えていた。青年は広島大学教育学部

卒業後、教員試験に合格して健康診査を受けたところ、尿糖強陽性と判明。近医を受診、糖尿病と診断。経口血糖降下薬を処方されるも尿糖は不変で体調不良となり、糖尿病の悪化に因ると診断され、更に血糖降下薬を追加。やがて意識障害をきたし、脳性麻痺状態に陥る。当時は血糖測定が容易でないため、尿糖の有無のみで診断されるケースが稀でなく、全国の医原性低血糖死が数百人に上る、と平田幸正鳥取大教授 (後年東京女子医大教授) が警鐘を鳴らされていた。経口血糖降下薬が登場する以前に、「糖尿病」の病名が「高血糖症」に変更されていれば、このような低血糖による廃人や死者は生じなかったのではないかと残念に思っている。

ある患者が足にできた大豆大の腫瘍を心配して、整形外科を受診したところ「ガングリオン」と診断された。「ガングリオン」と聞いた途端に癌の一種と勘違いして、目の前が真っ暗になり、帰路、跨線橋から走ってきた電車で飛び込んだという。我々医療人は、病名だけでも死に直結する恐れのあることを知っておきたい。

- ・脳卒中として救急搬送された低血糖昏睡患者  
昭和46 (1971) 年、香川県・三豊総合病院に内科代



謝内分泌科医長として赴任した。糖尿病外来を開始するに当たり、市販開始直後の血糖測定器レフラクタンスメーター（24万円、現在の貨幣価値で80万円）を購入して頂いた。

他方、その頃は脳神経外科医の養成が始まって10年にも満たず、脳神経外科は大都市の中核病院しか標榜されていなかった。多くの医療機関で脳卒中（脳血管障害）は厄介者扱いで、その診療は内科や外科の片手間仕事の感があり、大半は脳脊髄液検査が診断の決め手であった。私はインターン生や研修医の頃、先輩の精神科医から頸動脈穿刺脳血管造影法（CAG carotis angiography）、眼科医から眼底検査の手ほどきを受けた。そこで、CAGと検眼鏡を駆使して、脳卒中も私の専門分野になった。脳卒中の診断と治療は寸秒を争うと考へ、日時を問わず、救急車を受け入れ、要手術例は主として60km東方の香川県立中央病院へ搬送していた（CAGは、1974年、当時脳卒中の研究、臨床の世界トップクラスで、日本脳卒中学会の前身である脳卒中研究会を主導していた秋田脳研へ国内留学して自信を深め、眼底検査は糖尿病性網膜症のみならず微小血栓やくも膜下出血の硝子体出血、脳腫瘍・慢性硬膜下血腫の鬱血乳頭の診断にとっても重宝していた）。ほどなく地元医師会の理解も得て「脳卒中は動かすな！」の常識？は非常識となり、発作直後の脳卒中患者が救急搬送されるようになった。その中、完全昏睡例も少なくなく、くも膜下出血や劇症脳出血、脳幹梗塞のほか、低血糖昏睡も稀ではなかった。叩いても抓ってもビクともしなかったが、全身汗びっしょりで頰脈を認め、一瞬で低血糖昏睡と診断した。血糖値が20～30mg/dlと極端に低値であることを確認した後、ブドウ糖注入で直ぐ手足が動き始め、付き添って来た家族はびっくり仰天であった。ただし、1昼夜以上経過して発見された患者は、救命出来なかった。血糖降下薬の多くはデアメリンSやジメリン等であった。当時は、HbA1cの検査は登場しておらず、血糖検査が時折行われる程度で手軽な尿糖検査中心の糖尿病治療が行われており、「糖尿病」の病名を「高血糖症」に変えるべきではないかと、痛感させられた。

#### ・糖尿病患者を笑いものにした夫婦漫才

大阪で夫婦漫才を観た。妻が糖尿病の夫に「あんたはコレジャから」と、右手の手首をだらりと下げる仕草で満場の笑いを誘った。怒り心頭に発し、帰宅後すぐ夫婦に抗議文を送るも、梨の礫だった。そこで、プロデューサーに矛先を向けたところ、丁重な詫言状が届いた。

余談：京都の劇場では、有名なコメディアンが脳卒中の患者を真似て、

片手をブラブラさせ、片足を引きずりながら走り、笑いをとっていた。直ちに怒りの手紙を送ったが、返事はなかった。以後、そのコメディアンをTVで見ると、直ぐチャンネルを切り替えて溜飲を下げている。

#### ・1型糖尿病の女性栄養士Kの採用を拒否した病院長夫人

Kは中学1年生の時、1型糖尿病を発症するも、ほぼ良好なコントロールを保ち、短大に進み、栄養士の資格を得た。運良く自宅から近い私立病院が栄養士を募集しており、採用試験を受けた。ところが、書類審査で、厨房を牛耳っていた院長夫人が「糖尿病」の病名を見た瞬間、採用拒否を通達。Kは泣きながら主治医の私に訴えた。私は直ちに良好な関係にあった院長を通じて、院長夫人と談判。糖尿病があってもコントロール良好であれば、健康な人と変わらない仕事が出来ること、インスリン注射や血糖自己測定により、克己心が強く、自己管理が優れていること等を話した結果、一転採用となる。その後、Kは幼馴染の青年と結婚、子どもにも恵まれ、職場でも一目置かれる栄養士になっていた。

・これまでに、白痴→知的障害、精神分裂病・気狂い→統合失調症、老人性痴呆→認知症、癩病→ハンセン氏病、盲→視覚障害、つんぼ・おし・聾啞→聴覚・言語障害、成人病→生活習慣病、脳卒中・中風→脳血管障害、脳軟化→脳梗塞、脳溢血→脳出血、ちんば・びっこ→跛行、いざり→這行、啓蒙→啓発、老人→高齢者など多くの病名、呼称を差別語！病態からみて誤り！として、変更された。「糖尿病」の病名は差別、病態両面から誤っており、早急に「高血糖症」に改められることを切望してやまない。

#### おわりに

昨年暮れ、知己の日本糖尿病協会会長、京都大学医学部名誉教授の清野 裕先生にエールをお送りしたところ「糖尿病学会員の中には、新たな病名について『高血糖症』は軽すぎると、反対意見も少なくなく、何か知恵を絞る必要があります」と即座に丁重な礼状を戴いた。糖尿病のコントロール不良のため失明や人工透析に至る患者が見られる反面、肥満や大量飲酒者のHbA1cが10%超ながら、減量や断酒で完全に正常化するケースも少なくないので、重すぎて患者を脅すような病名に変更すべきでない、と私は確信している。



## 目医者をつぶやき 「外来手術センター」

昭60 松尾俊彦

2023年3月6日、念願の外来手術センターが岡山大学病院で稼働しました。手術部管轄で全診療科に対応する3つの手術室からなるセンターで、眼科、皮膚科、形成外科、耳鼻咽喉科、整形外科、心臓血管外科、乳腺内分泌外科、肝胆膵外科、消化管外科が当初から利用します。外来診療棟の東隣にあり連絡橋でつながる歯学部棟（東棟）3階が医科診療に転用され、昨年9月、眼科、精神科、形成外科の外来が移転し、その同じ階に外来手術センターが整備されています。これまでの経緯として、2003年10月、医学部附属病院と歯学部附属病院が統合されて医学部・歯学部附属病院が設置され、2007年1月、医療法上の名称を岡山大学病院に改め、診療スペースの有効活用を進めてきました。歯学部棟3階は、もともと口腔外科外来と歯学部附属病院の手術室（3室）と病床（20床）があったのですが、2007年11月、完成した新入院棟に口腔外科病床を移転統合し、2022年9月、歯科の各診療科を歯学部棟1階と2階に集約して空いたスペースです。ちなみに早期に精神科が移転した外来診療棟2階の跡地は拡張した内科外来になっており、4階の眼科外来の跡地は隣の腫瘍センターの拡張とペインクリニックに活用される予定と聞いています。

2018年4月発刊の岡山医学同窓会報（参考文献）に紹介しましたように、これまで日帰り眼科手術では外来看護師が手術患者の術前術後のオリエンテーションや中央手術室への送り迎えを忙しい中行なってきました。現在は外来診療で手術日程を決め、手術説明と同意取得を行った後、当日でも外来手術センターの静かな環境で専任看護師による術前オリエンテーションを予約実施できるようになりました。手術当日は外来手術センターのゆとりのある空間で一貫した術前術後ケアを行なえるようになりました。

外来手術センターの手術枠が増えたことによって、中央手術室での眼科枠の割り当てはその分減り、他診療科へ振り分けられます。今の中央手術室は20室あり運用面では比較的楽になっていますが、2012年まで使用した昔の手術室は13室しかなく、振り返れば目いっぱいの状態を看護師長の調整によって皆で協力してなんとか凌ぐという綱渡りの日々でした。私にとって特に思い出深いのは、産科救急で緊急帝王切開の手術室

がないから、1室で1日10人以上連続する眼科手術（白内障や硝子体手術）を一旦中断して、緊急帝王切開を実施したことです。私が眼科患者の皆様にご事情を説明すると快く待ってくださったことありがたいことでした。安全な手術のためには人や場所や物の「ゆとり」が何より大切だと思います。外来手術センター稼働に伴い中央手術室の手術枠にゆとりが生まれて安全な医療の基盤になるよう祈っております。

### 参考文献

目医者をつぶやき「急性期病院の日帰り眼科手術」.  
岡山医学同窓会報 2018；125：16.

# 新聞より

岡山大学医学部・岡山大学病院並びに鶴翔会会員に係る新聞記事など (2022.9.1 ~ 2023.2.28)

掲載年月日	媒体	見出し	備考
2022/ 9/ 3	山陽新聞	17 がんサイバーの軌跡	骨肉腫 12歳で発症 患者、医師として前向きに 濱田全紀 (岡大病院総合リハビリテーション部)
2021/ 9/ 3	読売新聞	25 救急搬送困難続く	第7波 熱中症 県「軽症は利用控えて」 桐山英樹 (平6)
2022/ 9/ 5	山陽新聞 MEDICA	11 がん診療に尽力 岡山画像診断センター	多くの協力得て導入実現 PET/CTで詳細画像 金澤 右 (昭56) 加地充昌 (昭58)
		12 多職種で支える精神科医療	治療抵抗性統合失調症の治療 岡 沢郎 (平7)
		働き盛りの人への健康講座	PSAってご存じですか? 河合裕也 (平30)
		13 市民に新時代の医療を	脳卒中センターコア施設としての役割 ～カテーテル治療と顕微鏡手術～ 徳永幸司 (昭63)
		14 幼保・小学校教職員向け研修会	先生、同級生らの支援が大切 岡山小児糖尿病協会 樋口洋介 (平20)
2022/ 9/ 6	山陽新聞	28 潰瘍性大腸炎 AI診断	悪性度高低79%的中 河原祥朗 (実践地域内視鏡学)
		27 カンボジア小児がん患者	あす胸の腫瘍摘出 中原康雄 (平12)
2021/ 9/10	山陽新聞	30 松岡良明賞贈呈式	泌尿器がん治療 津島知靖 (昭53)
2022/ 9/19	山陽新聞 MEDICA	11 心筋梗塞や心筋炎	重症症例に治療の扉開く 津山中央病院「インペラ」導入 心臓のポンプ機能補助 県北初 松本三明 (昭58) 山中俊明 (平27院) 今村繭子 (平30)
		12 多職種で支える精神科医療	認知症の人の意思決定を尊重する支援を 安田華枝 (平9)
		働き盛りの人への健康講座	肺がんの確実な診断のための一手 原 尚史 (平24)
		13 市民に新時代の医療を	急性白血病に対する新規薬剤による治療 山本和彦 (会員)
		高度医療で地域を支える	冠動脈の新しい検査FFRctについて 岡 岳文 (会員)
2022/ 9/23	山陽新聞	30 泌尿器がん治療追究	患者苦痛緩和へ指針作成 「松岡良明賞」津島氏に聞く 津島知靖 (昭53)
2022/ 9/25	読売新聞	27 病院の実力 胃がん	ロボット手術 高い安全性 倉敷中央、岡山済生会総合、岡山大
2022/ 9/26	山陽新聞	21 新型コロナワクチン	5～11歳接種率低迷 冬場の再拡大懸念 森島恒雄 (名誉会員) 青山興司 (昭43)
2022/ 9/27	読売新聞	25 新型コロナウイルス感染者の「全数把握」の見直し	県医師会 届け出対象外者を懸念 体調悪化時 迅速に相談を 松山正春 (昭44) 橋原幸二 (昭48)
	山陽新聞	25 コロナ全数把握簡略化	負担減 医療機関歓迎 平田 洋 (平5院) 辻 尚志 (昭54) 松山正春 (昭44)
2022/ 9/28	読売新聞	25 県公安委員長に就任	三村由香里 (平3)
	山陽新聞	27	
2022/ 9/29	山陽新聞	26 カンボジア男児退院	がん患い来日 腫瘍全摘出 中原康雄 (平12)
2022/ 9/30	山陽新聞	29 新たな救急医療確立へ	吉備中央町「デジタル田園健康特区」指定半年 実証事業準備着々 救命士がエコー検査 牧 尉太 (岡大病院周産期医療)
2022/10/ 1	山陽新聞	31 ワクチン3回目接種後の発熱	抗体量一時的に急上昇 頼藤貴志 (疫学・衛生学)
		3 名医の系譜V 1	医学教育 国立の医師養成機関へ 菅 之芳 岡山医学校校長 (旧教育職員)
2022/10/ 2	山陽新聞	3 名医の系譜V 2	福祉を支援 十次、アダムスを支える 菅 之芳 岡山医学校校長 (旧教育職員)

掲載年月日	媒体	見出し			備考	
2022/10/ 2	山陽新聞	18	岡山たからもん	世代を超え、互いの良さを生かして未来へ向かう	クラスメートは19歳から82歳	岡田 茂 (昭39)
2022/10/ 3	山陽新聞	3	名医の系譜V 3	自学出身 紛争収拾に尽力も辞任		赤木五郎 (昭10)
2021/10/ 4	山陽新聞 MEDICA	15	手術に欠かせない麻酔とは	侵襲、ストレスから患者を守る		中塚秀輝 (昭58)
		16	多職種で支える精神科医療	大人の発達障害と精神科併存障害		渡部一予 (平10院)
			働き盛りの人への健康講座	まぶたで困っていませんか?		小松星児 (平25院)
		17	市民に新時代の医療を	新しい消化器内視鏡診療について		西村 守 (平3)
			高度医療で地域を支える	感染症心内膜炎について		増田善逸 (平5)
2022/10/ 5	山陽新聞	4	名医の系譜V 4	皮膚科初代		谷奥喜平 (名誉会員)
2022/10/ 6	山陽新聞	3	名医の系譜V 5	大腸内視鏡検査	画期的技術習得へ渡米	瀧上隆夫 (昭53)
		28	両備禮園記念財団奨励賞・教育助成金贈呈式			喜多村真治 (岡大病院腎臓・糖尿病・内分泌内科)
2022/10/ 7	山陽新聞	3	名医の系譜V 6	新検査法を導入	挿入は早く、観察正確に	瀧上隆夫 (昭53)
		31	「変形性膝関節症」で新手術	本来の脚に近い形に		難波良文 (平5)
2022/10/ 8	山陽新聞	3	名医の系譜V 7	大腸がん手術	10年生存率 中四国屈指	赤在義浩 (昭58)
2022/10/ 9	山陽新聞	3	名医の系譜V 8	直腸がん手術	シンプルで美しく	赤在義浩 (昭58)
2022/10/10	山陽新聞	3	名医の系譜V 9	手外科	内視鏡で切開、機能温存	橋詰博行 (昭52)
		25	カードで意思表示を	臓器移植法25年 県臓器バンク		田中信一郎 (昭50)
2022/10/12	山陽新聞	3	名医の系譜V 10	拠点病院	実績重ね全国から患者	橋詰博行 (昭52)
2022/10/14	山陽新聞	3	名医の系譜V 11	肝臓専門病院	黎明期のがん手術医に	松田忠和 (昭49)
2022/10/16	山陽新聞	3	名医の系譜V 12	多様な治療法	病状に合わせ適切処理	松田忠和 (昭49)
2022/10/17	山陽新聞 MEDICA	3	名医の系譜V 13	精神療法	悩む患者と“異体同心”に	堀井茂男 (昭48)
		11	乳がん早期発見、治療を	10月はピンクリボン啓発月間		今田孝子 (平7)
		12	高齢社会における循環器医療	虚血性心疾患	～90分が勝負 急性心筋梗塞～	廣畑 敦 (平8)
		13	市民に新時代の医療を	新時代の医療をつなぐ～入退院管理支援 (PFM) センター～		白井正明 (昭58)
高度医療で地域を支える	直腸がん外科治療にロボット手術を導入			西崎正彦 (平5)		
2022/10/18	山陽新聞	3	名医の系譜V 14	精神科病院	五つの「あ」療法広める	堀井茂男 (昭48)
2022/10/19	山陽新聞	3	名医の系譜V 15	岡山博愛会	発祥の地で後継の一步	更井哲夫
		18	病院の実力 肝臓がん	進行前は手術・焼灼		倉敷中央、岡山大
2022/10/20	山陽新聞	3	名医の系譜V 16	体制整備	医療と福祉で奉仕貫く	更井哲夫
2022/10/21	山陽新聞	25	産科専門医を派遣 寄付講座設置	井原市民病院に来月から	小児救急も毎週1回	岡山大
2022/10/23	山陽新聞	27	終末期医療 在り方学ぶ	臓器移植法など説明		松山正春 (昭44)
		27	子宮頸がん	ワクチンで予防を	接種率向上へ県啓発 動画や出前講座	小川千加子 (岡大病院産婦人科)
2022/10/23	山陽新聞	26	岡山大 ホームカミングデー コロナ対応考える講演会	医療・行政連携平時から	救急、集中治療「医師増員が課題」	内藤宏道 (救急医学) 今城沙都 (平22)
	読売新聞	31	病院の実力 肝臓がん 岡山編	脂肪肝から発症 割合増		倉敷中央、岡山大
2022/10/29	山陽新聞	28	岡山大新学長3候補出そろふ	来月21日選考会議		金澤 右 (前岡山大学病院長) (昭56) 那須保友 (岡山大学研究担当理事) (昭56)
2022/10/30	山陽新聞	3	名医の系譜V 17	脳血管内治療	米で学び先駆者の道へ	衣笠和孜 (昭47)



掲載年月日	媒体	見出し			備考	
2022/10/31	山陽新聞	3	名医の系譜V 18	開頭手術	海外から「神の手」評価	衣笠和孜 (昭47)
2022/11/ 1	山陽新聞	3	名医の系譜V 19	李登輝前総統治療	技術が日本政府動かす	光藤和明
2022/11/ 3	読売新聞	24	秋の叙勲 県内71人			松山正春 (昭44)
2022/11/ 4	山陽新聞	3	名医の系譜V 20	心カテーテル	完全閉塞治療90%成功	光藤和明
2022/11/ 5	山陽新聞	3	名医の系譜V 21	生体肺移植	危険を乗り越えて成功	伊達洋至 (昭59) (名誉会員)
2022/11/ 6	山陽新聞	3	名医の系譜V 22	米国医師免許取得	本場で肺移植の腕磨く	伊達洋至 (昭59) (名誉会員)
		13	岡山大学病院ドクターインタビュー	漢方 役割と効果	全体像把握し不調和正す	大塚文男 (岡大病院総合内科) 植田圭吾 (岡大病院漢方臨床教育センター)
	16	11月12日はいい皮膚の日	家庭での傷の初期対応 中までしっかり洗う		川上佳夫 (岡大病院皮膚科)	
2022/11/ 9	読売新聞	23	コロナ第七波	感染者最多 医療が疲弊		藤田浩二 (平19)
2022/11/16	読売新聞	14	病院の実力 肺がん	早期なら縮小手術も	放射線治療で根治も選択肢	岡山大病院、倉敷中央、岡山医療センター
2022/11/17	山陽新聞	14	岡山大安寺高校創学60周年記念座談会			槇野博史 (岡山大学長)
		28	地域医療の課題議論	岡山大学医学部1年生シンポ 実習成果を発表		岡山大学医学部医学科1年生
2022/11/21	山陽新聞 MEDICA	11	全国糖尿病週間	「自己責任ではありません」 「負い目を感じない社会に」		四方賢一 (岡大病院新医療研究開発センター)
		12	専門病院の力～地域医療を支える～	頸椎の病気		時岡孝光 (会員)
		13	高度医療で地域を支える	化学療法および化学療法センターについて		武田洋正 (平25院)
地域から求められる医療機関へ	総合周産期母子センターにおける小児外科			中原康雄 (平12)		
2022/11/22	山陽新聞	28	岡山大学長に那須氏			那須保友 (岡山大学理事)
2022/11/23	山陽新聞	31	「誇りと希望の学都に」	岡山大次期学長 那須氏に聞く	産学官連携進め地域還元	那須保友 (岡山大学理事)
2022/11/24	読売新聞	33	那須氏が抱負「努力していく」	岡大次期学長		那須保友 (岡山大学理事)
2022/11/29	山陽新聞	26	運動能力向上遺伝子を特定	腱の成長に関与 マウス実験		中道 亮 (岡大病院整形外科) 浅原弘嗣 (平4)
2022/12/ 4	山陽新聞	28	小児の気管支喘息診断減	コロナ流行後 岡山大分析 感染症対策影響か		松本尚美 (疫学・衛生学)
2022/12/ 5	山陽新聞 MEDICA	12	高齢者における循環器医療	脳梗塞と不整脈		橘 元見 (平30院)
		13	地域から求められる医療機関へ	肺がん治療の最前線	患者さんに適切な治療を提供するために	藤原慶一 (平8)
2022/12/ 6	山陽新聞	28	アナフィラキシー炎症 増幅	血管のタンパク質関与 新たな治療法へ道筋		西堀正洋 (岡山大学特任・特命教授)
2022/12/ 7	山陽新聞	26	重い反応の対処法は	ワクチン接種研修 医療従事者再確認		中尾篤典 (岡大病院高度救命救急センター)
			東南アジア支援充実へ	ジャパンハートと岡山医療センター協定		久保俊英 (昭59)
2022/12/14	山陽新聞	22	救命士がエコー 課題は	来年の実証実験に備え講習会		牧 尉太 (岡大病院救急科)
2022/12/17	山陽新聞	15	岡山イノベーションコンテスト2022	ビジネスプラン部門 一般の部 大賞受賞	ヒト臓器チップによる製薬イノベーション	高橋 賢 (システム生理学)
	山陽新聞	31	コロナ病床増す逼迫度	第8波岡山県内利用率58%	スタッフ感染増 一般医療影響も	川崎医科大、岡山医療センター、津山中央病院
2022/12/19	山陽新聞 MEDICA	13	高度医療で地域を支える	新ドクターカー運行から半年、地域の救命率が向上		前山博輝 (平19)
		13	地域から求められる医療機関へ	慢性腎臓病 (CKD) をターゲットにサポートする		太田康介 (平元)
2023/ 1/12	山陽新聞	20	病児保育施設を新設	岡山大鹿田キャンパス内 市内7か所目		岡山大学病院

掲載年月日	媒体		見出し		備考	
2023/ 1/12	読売新聞	16	がん治療 飛躍めざす	第34回SGHがん研究助成金授与	長崎讓慈 (腫瘍微小環境学) 藤原英晃 (岡大病院血液腫瘍内科)	
2023/ 1/13	山陽新聞	26	里海からの警告 豊かな循環へ	プラ汚染 化学物質 魚介に仲介	難波正義 (名誉会長)	
		27	岡山県コロナ病床使用率70%	数字以上に厳しい 岡山県対策本部会議	医師ら欠勤500人 松山正春 (昭44)	
2023/ 1/14	山陽新聞	25	コロナ病床確保病院	コロナ補助で7億円黒字使用率最大6割	会計検査院公表	
2023/ 1/16	山陽新聞 MEDICA	15	岡山大学病院ドクターインタビュー	神経性やせ症 命に関わる心の病気	欧米で実績 FBT実践	岡田あゆみ (岡大病院小児医療センター)
		16	予防から始めよう～明日の健康を守るために～	けんしん受診のすすめ		江原英樹 (会員)
			専門病院の力～地域医療を支える～	FDG-PET		奥村能啓 (旧教育職員)
2023/ 1/17	山陽新聞	22	矢野恒太の功績学ぶ	講演会 出身の角山小児童ら	第一生命保険を創立 矢野恒太 (名誉会員)	
2023/ 1/18	山陽新聞	26	川崎医科大学長に砂田氏		砂田芳秀 (昭58)	
2023/ 1/21	山陽新聞	25	コロナ5類引き下げへ	「日常戻る」「気緩めず」	県内医療機関、保健所、学校	
		24	オミクロン対応ワクチン	発熱や倦怠感減少 3回目より「軽く」54%	岡山大調査	頼藤貴志 (疫学・衛生学)
2023/ 1/22	読売新聞	21	病院の実力 変形性膝関節症	人工関節 原則60歳以上	阿部信寛 (平2)	
2023/ 1/27	山陽新聞	24	岡山大病院 コロナ給付金	19億円過大受給か	岡山大学病院	
		24	岡山大病院長 前田氏を再任		前田嘉信 (岡山大学病院長)	
2023/ 1/28	山陽新聞	25	県コロナ感染 第8波ピーク越えか	ワクチン接種/救急適切利用 医師ら動画作り訴え	病床や人手不足 8人が医療の窮状報告 頼藤貴志 (疫学・衛生学) 他、岡山県感染症専門家有志	
2023/ 1/31	山陽新聞	25	バイオマス発電燃料用	木材圧搾 一瞬で脱水 ローラー式 コストと時間大幅削減	大原利章 (免疫病理学)	
2023/ 2/ 1	山陽新聞	22	コロナ下 入試シーズン本格化	受験生マスク、手洗いを家族も感染対策心がけて	藤田浩二 (平19)	
2023/ 2/ 3	山陽新聞	26	岡山大学病院不適切会計	14年度赤字額大幅減少計上	「手続きミス」 岡山大学病院	
2023/ 2/ 4	山陽新聞	17	コロナ後遺症、一人で悩まないで	後遺症、倦怠感が最多 5割が治療終了、回復まで約半年	大塚文男 (総合内科学)	
2023/ 2/ 5	山陽新聞	7	岡山テックグランプリ入賞		高橋 賢 (システム生理学)	
2023/ 2/ 6	山陽新聞 MEDICA	12	専門病院の力～地域医療を支える～	前立腺がんのサイバーナイフ治療	津野和幸 (昭60)	
		13	地域から求められる医療機関へ	新しい皮膚病診療-診断技術と治療の進歩-	浅越健治 (平3)	
		14	アルコール依存症 苦しむ人の希望に	手記 (最後の一杯) 翻訳	橋本 望 (平16)	
2023/ 2/ 7	山陽新聞	23	読書三昧	近刊私の一冊	中尾一志 (旧教育職員)	
2023/ 2/11	山陽新聞	23	岡山大学病院に県立ち入り調査	コロナ交付金過大受給問題	岡山大学病院	
	読売新聞	27	県 書類や病床状況確認か	岡山大学病院に県立ち入り調査	岡山大学病院	
2023/ 2/12	山陽新聞	19	山陽新聞を読んで	書き手の思い 心に響く	永井 敦 (昭57)	
2023/ 2/17	山陽新聞	23	睡眠障害の後遺症増	コロナ・オミクロン株患者倦怠感、頭痛も	岡山大学病院調査 大塚文男 (岡大病院総合内科)	
2023/ 2/18	山陽新聞	30	岡山大 医学部長	豊岡氏を再任 任期は5.4.1～7.3.31まで	豊岡伸一 (呼吸器・乳腺・内分泌外科学)	

掲載年月日	媒体	見出し			備考	
2023/ 2/20	山陽新聞 MEDICA	11	岡山大学病院ドクターインタビュー	上部早期胃がんでの観音開き法再建	ロボット手術で逆流防止	黒田新士（消化管外科・低侵襲治療センター）藤原俊義（消化器外科学）
		13	高度医療で地域を支える	放射線治療の普及に向けての課題		尾形 毅（平16）
		13	地域から求められる医療機関へ	安全・確実な脳外科手術を目指して～経験と化学技術の融合～		吉田秀行（平5）
		14	ヒトのからだを知ろう	川崎学園特別講義 第9回「神経細胞」		砂田芳秀（昭58）
2023/ 2/21	読売新聞	25	4回目副反応出現率低下	ワクチン発熱 2回目比べ半減	岡山大調査	頼藤貴志（疫学・衛生学）
2023/ 2/22	山陽新聞	28	岡山大 大学院医歯薬学総合研究科長	成瀬氏を新任 任期は5.4.1～7.3.31まで		成瀬恵治（システム生理学）
		28	岡山大 大学院保健学研究科長	廣畑氏を再任 任期は5.4.1～7.3.31まで		廣畑 聡（平4）

【お断り】媒体に偏りがあり、また、見落としている記事もあるかと思われませんが、何卒ご容赦ください。鶴翔会会員の先生方におかれましては、岡大医学部・岡山大学病院・鶴翔会会員に関する新聞・雑誌の記事の情報をお寄せいただければ幸いです。



# 名医の系譜Vについて（山陽新聞掲載）

医療先進県岡山の礎づくりに貢献した各分野の先駆者らにスポットをあてる「名医の系譜」V部が、2022年10月から11月に掲載されました。

先人に加え、この50年で進歩してきた各医療分野のパイオニア12名の記事が22回にわたり掲載されました。（文面は阪本文雄・前山陽新聞社会事業団専務理事がまとめられています。）

3 内政・総合 2022年(令和4年)10月1日 土曜日

## 名医の系譜 V

1

2021年11月3日、岡山大医学部創立150周年記念式典が開かれた。榎野博史岡山大学長が「150年の伝統の中で築いてきた強い絆となややかなネットワークを広げ、医学部の多様性、包括性、国際性を今後高めていきたい」とあいさつ。伊原木隆太岡山県知事、越宗孝昌医学部創立150周年記念事業後援会長（山陽新聞社相談役）らがお祝いの言葉を述べ、全国から集まった同窓生ら120人と共に創立150周年を祝った。

### 医学教育

菅 之芳 岡山医学校校長 ㊦



岡山医学校の第1期卒業生と菅之芳校長（後列右から2人目）ら教授陣（1888年）

岡山大医学部は1870年の岡山藩医学館に始まる。生田安宅、明石退蔵ら漢方医、蘭方医が教授になり医師養成を始めた。翌年、廃藩置県で岡山県が発足。財政基盤の弱い県行政の中で生田安宅を中心に県病院を運営、医学教場を維持していく。

80年岡山医学校は開校した。その前年、岡山県病院を新築、付属してあった医学教場が独立、医学校となった。場所は現在の岡山市北区天神町、岡山東税務署の一角。当時の医学校の見取り図をオラ

立図書館で発見した元新見公立短大教授の石田純郎氏は「東側が県病院、西側が医学校。講義室、実験室、病室、診療室などがあつたと話す。

進歩的な思想で知られる県令高崎五六は薩摩藩士。同郷の明治政府高官大久保

利通に近く、75年から9年間、岡山県政の基礎づくりの権勢を振るった。この高崎が足守藩出身の緒方洪庵門下の長与専齋・内務省衛生局長に人選を依頼、東京大医学部第一期卒業の清野勇医学士を県病院長兼医学教授として迎え、翌年、2期卒業の菅之芳を岡山医学校初代校長兼県病院副院長に迎えた。54年江戸の生まれ、藩医の家に養子に入られ、医学を学び岡山へ。内科医。端正な顔にひげを生やし、ハイカラーのワイシャツを着た写真が残っている。岡山城下の一等地に立派な校舎が建ちその後、3期

卒の山縣中芸、4期卒業生東一郎を加え、教授陣に東大医学士4人が入り質の高い近代医学教育が展開された。82年、文部省は東大卒業生が3人以上いる医学部を甲種医学校に認定。岡山医学校の卒業生は無試験で医師開業免許が与えられた。1期卒業生は11人。平野謙吉、矢部辰三郎らの名前がある。2期卒業生は万代常閑、山合徳治郎ら13人。定員50人だが勉強しない者は卒業させないという菅校長の厳しい方針がうかがわれる。85年、森有礼文部大臣が岡山医学校を視察。関西第一の医学校」と称賛した。

88年1月の山陽新報「森文部大臣は第三高等学校医学部は岡山に置く」と告示と伝えた。多くの県立医学校は廃止、岡山医学校は国立の医師養成機関として生き残った。「広島も同じ甲種医学校。岡山、広

医療先進県岡山の礎づくりに貢献した各分野の先駆者らにスポットをあてる「名医の系譜」V部では先人に加え、この50年で進歩してきた各医療分野のパイオニアらを取り上げる。

## 国立の医師養成機関へ



# 名 医 の 系 譜 V 2

1901年3月19日の山陽新報1面に「孤児院音楽幻燈会」の見出し。石井十次が1887年開設した岡山孤児院の基本金募集の幻燈会で、主旨説明を菅之芳第三高等学校医学部長が集まった人たちにしたと報じている。岡山医学専門学校へ昇格する直前のことだった。実は菅之芳校長は十次の孤児事業の強力な支援者だった。82年、十次は岡山医学校に入学した。3年生の年末から正月にかけて菅家に居候。2人は同じ屋根の下で起居しお互いの人間性に触れ、師弟関係を超えるつながりを持つようになる。

「朝晩お祈りをする十次の影響を受け菅校長はキリスト教に入信する。十次は孤児たちを診察する医師の派遣から資金不足に悩む孤児院の経営についても相談するまでになつていく」と元新見公立短大教授の石田純郎氏は話す。孤

## 福祉を支援 菅 之芳 岡山医学校校長 ㊦



右から菅之芳、林源十郎、1人おいて石井十次、徳富蘇峰、大原孫三郎、1903年

# 十次、アダムスを支える

児が増え、運営費が逼迫し財源の安定化を図るため芝居小屋で開いたのが音楽幻

教師アリス・ペティー・アイオニアと言われた2人の活動を医療で下支えた医療福祉の先駆けであった。岡山博愛会病院の更井哲夫理事長は「菅校長は私たちの病院設立の大恩人、開院後もそうでした。十次にもアダムスにもキリスト者としての愛の奉仕で

燈会だった。岡山孤児院が財団法人になると菅は大原孫三郎らとともに評議員になった。1908年3月、十次は腎臓炎と診断され菅は主治医として面会謝絶した。この年から宮崎県茶臼原への孤児院移転が始まり、10年、十次は死去。48歳の生涯を閉じた。

菅の福祉への支援は、岡山孤児院だけではなかった。アメリカンボードの宣

大正に入って岡山医学専門学校は桂田富士夫教授が休職となった事を発端に、学生が復職運動、同盟休校、文部省へ直訴など、いわゆる岡山医専騒動が起きた。菅校長は1913年責任を取って辞任した。岡山医学校から始まり、岡山の医学教育に33年間足跡を刻んだ。岡山市で内科医院を開業、脳卒中を起こして翌年死去した。

(阪本文雄・前山陽新聞社会事業団専務理事)



# 名医の系譜 V

3

1954年、岡山大眼科教室教授に就任した。2年後、日本眼科学会で宿題報告「眼圧の自動調節機能について」で、緑内障では眼内圧の自動調節機能があることを明らかにした。眼球開壁術を開発、今日の硝子体手術の基礎を築いた。

「紛争未解決のまま大学を去るのは社会に対して申し訳ない」

69年5月3日、赤木五郎岡山大学長は辞表を提出した。この前年9月から岡大紛争が始まり、大学改革を求めて学生は全学集会、大衆団交、バリケード封鎖、全学ストと行動は激化した。捜査に入った警官隊と学生が衝突、投石を頭に受けた警官が死亡。大きな局面を迎えていた。

赤木は評議会で「紛争処理は学長に大幅な裁量と権限を」と主張した。正常化へ大学の一時閉鎖、校舎を封鎖したバリケードの撤去などを考えていたが、認められず、責任を取って退任した。

7月、国会に大学は紛争收拾のため6カ月休止できるなどを盛り込んだ大学管理臨時

## 赤木 五郎 岡山大学長

### 自学出身

教職員に見送られ、つえを突いて岡山を去る赤木学長 1969年5月14日



たとしてもそれは大学の自治を侵すものではないという判断に至った

大学を離れ、民間病院院長の肩書ではあったが、自説を通した。節を曲げぬ人だった。この法案が成立、やがて全国の大学紛争は下火になっていく。

措置法案が提出された。衆議院文教委員会公聴会で赤木は公述人として賛成意見を述べた。「暴力を排除し、校内の秩序を回復、真剣に大学再建について話し合えば、根本的解決が得られる。そのため警察の力を借り

の赤木は、岡山大卒業で初の自学出身者だった。明朗闊達、55歳の若さで行動力があり、期待をもって迎えられた。

60年に工学部が新設され、赤木は法文学部を法学部、文学部、経済学部へ改組、薬学部、歯学部を新設する10学部構想を打ち出し、実現に向けて経済学、農芸化学科、電子工学科など学科を新設し10学部へ布石を打っていった。大学進学率が上がり大学間競争が激しくなり、総合大学化は生き残りを賭けた課題だった。その矢先の学園紛争であり、学長退任だった。

10学部が実現したのは80年、岡山大の後輩小坂淳夫学長の時だった。辞表を書いた日、来客があった。翌年、開学を目指す川崎医科大学設立期成会の川崎祐宣理事長が「医科大の初代学長に就任してほしい」と三顧の礼をもって話す。(敬称略)

(阪本文雄・前山陽新聞社 会事業団専務理事)

# 紛争收拾に尽力も辞任



# 名医の系譜 V

4

東京大助教授から信州大教授を5年務め、1960年岡山大学教授に就任した。皮膚泌尿器科から独立した皮膚科教室の初代教授。当時の皮膚科研究は欧米の文献に学ぶ記載皮膚科学であった。その中で、50歳の谷奥喜平は新しい皮膚科学である実験皮膚科学に取り組み旗手と言われ、大きな期待をもって新生皮膚科講座に迎えられた。

臨牀の柱として、アレルギー、化学療法、形成外科を挙げた。「皮膚科の治療は戦後の80年近く大きく進歩しましたが、今、考えても先見の明があったと言えるテーマを掲げられています」と岡山大皮膚科教室の森実真教授は話す。

研究一筋の教授生活だった。朝一番に教授室に入り、帰宅は午後10時過ぎ。元日しか休まなかった。木曜日は教授回診、抄読会、土曜日はアレルギー研究会、代謝研究会、

## 皮膚科初代

谷奥 喜平 岡山大教授



学会で発言する谷奥教授 | 1970年11月(退官記念自録より)

さらに各自の実験の進行具合を発表する研究報告会、英会話勉強会などびっしり若い皮膚科医を指導した。「私の夢ではありますが」と言いながら仮説を立て、それに向かって実験し、実証する医学徒であった。

## 「考える科学者」と評価

皮膚変化として現れる皮膚病は言わば病変の「場」であり、その場の背後にある原因疾患を探る病態の解明。内臓疾患などの皮膚表に注目し考えながら患者を診ることを教えた。皮膚疾患の病理解明に生理学、生化学、免疫学からアプローチする「考える皮膚科学者」と評された。

在任中、野原望、吉田彦太郎、荒田次郎、植木宏明、高岩堯、小玉肇、森口隆彦らを教授として送り出した。76年、皮膚科研究同好会を立ち上げた。基礎研究が重要でありその発表、討論の場が必要と訴え、大藤重雄京都大教授、佐野栄春神戸大教授らの賛同を得た。定年退官の時であり、実験、基礎研究に力を入れた21年に及ぶ教授生活に終止符を打った年だった。同好会は81年、日本研究皮膚科学会に格上げされ、谷奥の思いは実った。95年、日本研究皮膚科学会が岡山で開かれ、教え子の荒田次郎岡山大皮膚科教授が会長を務

め、岡大皮膚科同門会からの寄付で「谷奥喜平記念講演」を開設。基金から高名な皮膚学者が海外から招かれ、毎年、講演している。

2013年、岡山大皮膚科教室は開講百周年記念講演会・記念式典を開いた。1913年、岡山医学専門学校校長筒井八百珠が皮膚科花柳病学教室を開設したことに始まる。岡山医専ストライキで退任した菅之芳校長の後任として着任、学園紛争を解決、正常化させた。さらに念願だった国立医科大学への昇格、内山下から鹿田キャンパスへの移転に取り組んだが、その直前、病に倒れた。教室には「皮膚病学」などの著書が残る。(敬称略)

(阪本文雄・前山陽新聞社会事業団専務理事)



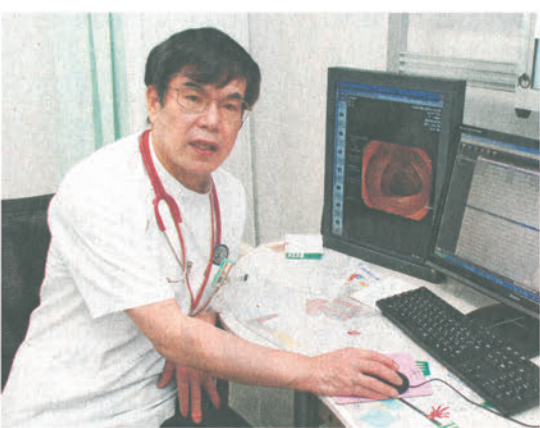
# 名医の系譜 V 5

1978年、瀧上隆夫は倉敷市林、チクバ外科・胃腸科・肛門科医院で医師の第一歩を踏み出した。26歳。院長の竹馬浩医師は岡山大病院第一外科で腕を磨いた大腸がん、肛門疾患のエキスパート。72年、37歳で19床の診療所に手術室をつくり、痔核(いぼ痔)、裂肛(切れ痔)、膿が溜まる痔瘻など肛門疾患の手術を手掛けていた。

瀧上は医学生の時、痔瘻になった。大病院で診察したのは岡島邦雄第一外科助教授だった。後に大阪医大教授になる胃がんの名医。日本医師会が手術をフィルムに記録するシリーズに選ばれた人。「これは肛門周囲膿瘍、痔瘻だ。手術を受けなさい」。山本泰久医局長に「部屋代は夕夕にしてみらっただけだから竹馬先生の所へ行きなさい」と言われた。後に乳がん、胃がん、大腸がんで大病院と肩を並べる治療実績をあげるおおもと病院(岡山市)を開業した実力者だ。

開業3年目の竹馬の入院患

## 大腸内視鏡検査 瀧上 隆夫 チクバ外科・胃腸科・肛門科病院名誉院長



新谷式の大腸内視鏡検査を説明する瀧上隆夫名誉院長

# 画期的技術習得へ渡米

者になった。21歳だった瀧上は単刀直入に話す39歳の院長に心惹かれ退院後も職員旅行、忘年会に誘われ参加。「わしと一緒に大腸肛門の専門医を目指せ」と言われ、考えるようになっていく。卒業式、医師国家試験がすむと院長と机に並んで上京、米ニューヨーク

人教育を飛び越えて異例の直伝の教育だった。医師3年目の春、胃がん手術研修の国内留学へ三重県の大西病院へ行った。そのころ大腸内視鏡検査の実践セミナーの案内が来た。仲間をあげ、医師は2人がかりで「2秒前へ、はい2秒引いて」。屈曲する腸管に

沿って検査は難渋しているのを聞いていた。ペテラン医師の仕事で、自分は未経験だった。「マジックじゃ」。岡山に帰っても繰り返した。竹馬は「そんなにすごいのなら、技術を学びに米国へ行ってみよう」。つてを探すと順天堂大卒業が分かり、なんと竹馬の知り合いが親しいことが判明。紹介者ができて航空便で手紙をやりとりし、やっとOKが出た。1年半近くかかっていた。「マジックじゃ」と叫ぶ若い声。名医の鮮やかな手技にあこがれ「新しい医療技術を習得したい。これからは内視鏡の時代」という心の叫びに気付いた竹馬はすべての費用負担を約束して送り出した。瀧上の意欲と師弟のきずながアメリカへの道を開いた。(敬称略)

(阪本文雄・前山陽新聞社 会事業団専務理事)

で座り、瀧上は外来患者のカルテの記入から始まり手術室では患者を真ん中に前立ちし、切開するメスさばき、止血、糸で縫い合わせる吻合、緊張した師弟関係の中、すべてを目で見て頭に入れ、体で覚えた。通常の医局での新人教育を飛び越えて異例の直伝の教育だった。医師3年目の春、胃がん手術研修の国内留学へ三重県の大西病院へ行った。そのころ大腸内視鏡検査の実践セミナーの案内が来た。仲間をあげ、医師は2人がかりで「2秒前へ、はい2秒引いて」。屈曲する腸管に

在住の新谷弘実医師の検査を見た。8例の検査で肛門から挿入し盲腸までいとも簡単、10分以内に到達させた。そこから内視鏡を肛門まで引きながら目をこらし観察してがんなどの病変部を目で見て写真撮影し、確定診断できる機能は、レントゲンで体外からの画像診断に比べると格段の進歩だった。しかも患部の摘出など治療もできる。画期的な医療技術の登場だった。新谷はスムーズに内視鏡を進め見事に使いこなした。しかし、国内では曲がりくねった腸管内で内視鏡をどう進めるか、そこで足踏みしていた。長い時には5〜6時間かかり、前に進めず途中やめもしばしば。難しい検査で患者は痛さで悲鳴をあげ、医師は2人がかりで「2秒前へ、はい2秒引いて」。屈曲する腸管に



# 名医の系譜 V 6

1982年3月、瀧上隆夫の米ニューヨークでの生活が始まった。新谷弘実医師はマウントサイナイ医大外科教授、ベス・イスラエル病院内視鏡部長で大腸ファイバースコープの大家。毎日20〜30人の患者があり、検査は胃が13万円、大腸が20万円、ポリプ切除が30万円。腕利きの名医には高額の治療費が当たり前のアメリカだった。

毎朝9時、出勤する新谷を待ち受け、その日のスケジュールを頭に入れる。1カ月もすると先生がしたいことがわかるようになった。信頼され、順調に仕事が進みだした。空いた時間ができるので講演要旨をまとめたスライドをノートに書き写した。カルテも患者の訴える症状、スコープに写した腸内の凹凸や発赤、ヒランなどの病変、それから判断した診断、名医がたどる思考回路を探索し1500例を記録した。

毎日実施する検査に立ち会い、その手順は頭に入っている。新谷式検査の骨子が浮き

## 新検査法を導入 瀧上 隆夫 チクバ外科・胃腸科・肛門科病院名誉院長



大腸の内視鏡検査、治療をする瀧上隆夫名誉院長

彫りになってきた。まず、鎮痛薬を静脈注射し患者を無痛にし寝た状態で内視鏡を挿入する。空気を吸引して腸管をへこましてアコーディオンのように手繰り寄せ直線化して、中へ進める。肛門から盲腸まで170秒前後あるが短縮すると70秒のファイバーで検査できる。鎮痛剤を使用する無痛の検査、さらに空気を入れて腸管を膨らませ屈曲する腸に沿い進入させる

日本の従来の方法に比べると早く、正確な革命的な新技術だった。7カ月の研修は終わった。岡山に帰って、新谷式を自分の手で内視鏡をどう操作し直線化するか、悪戦苦闘した。肛門から直腸を経て30秒の所にS状結腸があると。文字通り曲がりくねっている。腸に沿って曲げ、その後伸ばす。それを繰り返して直線にする。そして下行結腸、横行結腸の曲がり

角にもでこぼこがある。この3カ所が難関。大腸の内径は3〜4cm、内視鏡は直径1.3cm、腸壁は厚さ3〜4mm。操作が未熟だと、薄く柔らかい腸壁を突き刺し穴があく。結腸はポリプができやすく大腸がんの7割近くは直腸、S状結腸で発生する。ここは念入りにチェックする。毎日繰り返して内視鏡操作を行い、検査のポイントが分かってくる。

2021年の検査数は胃6千例、大腸7千例。瀧上の通算検査数は両方とも10万例を超えた。盲腸までの挿入時間は3分前後。「挿入は早く、観察は正確に」。がんとポリプの切除は1万5千例。実績数から中四国を代表する消化器内視鏡医と言われる。瀧上に弟子入りした医師が岡山県内、全国で活躍している。

「壁を越え新谷式が可能になりました」。竹馬浩院長に報告できたのは半年近くたった。それまで病院の内視鏡検査は年間50例、大腸ゼロだった。1983年胃700例、大腸200例になり、その後大腸内視鏡検査が飛躍的に伸び県外からの患者が増え、痔から大腸肛門外科の専門病院になった。

毎朝、5時55分起床。6時40分出勤。すぐ病室へ直行する。「おはようございます」と患者に声をかけ、全員の顔色を見る。00年院長になり19年名誉院長になっても変わらず。元日以外は年中無休。患者思いの良医である。趣味は将棋。佐藤康光日本将棋連盟会長の指導を受け、将棋の世界でも「岡山に瀧上あり」と言われる。(敬称略)

(阪本文雄・前山陽新聞社会事業団専務理事)

# 挿入は早く、観察正確に

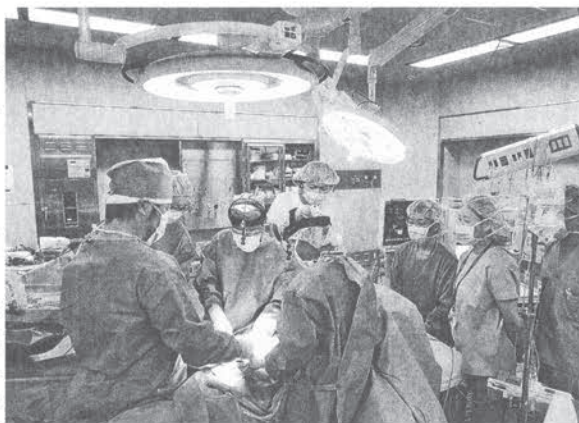


# 名医の系譜 V 7

1993年、赤在義浩は岡山市の岡山済生会総合病院消化器外科に2度目の赴任をした。大腸がん手術を担当することになった。間野清志、北村元男、広瀬周平らが前任者。戦後の岡山を代表する外科医がメスを振るっていた。40歳を前に、岡山のがんセンターと言われる病院の外科医としてまさに正念場、身の引き締まる思いがあった。先輩たちの手術を学ぼうと大腸がん患者のカルテの読み込みのため、病歴室にももった。土、日曜日も弁当持ちで通った。休日、時間外は冷暖房が切れ、夏は窓を開けぬれタオルを首に巻き、冬はダウンを着込んだ。術前診断、手術内容、病理検査報告書、看護記録、死亡後の解剖記録を読み、データを集積した。「過去のカルテや死亡後の解剖所見を調べ、お前ならどうするか、問い続けてきた」と振り返る。

## 大腸がん手術 赤在 義浩 岡山済生会総合病院診療顧問

# 10年生存率 中四国屈指



大腸がん手術をする赤在医師(中央) 2022年

14年間かけ3954例に上った。年間300例の手術をこなし、その合間を見ながらの作業だったが、術前術

再発を防ぐ手術、無駄な切除による合併症、後遺症の発生など反省点も明らかにした。すべ

きでないことを明確にし、必要な切除の精度を高めキチンと切り取る根治性の高い手術、生存率の高い手術を目指すようになった。

手術した10年間の10年生存率を比べてみる。リンパ節転移なしのステージI、IIは82%から94%へ向上し、リンパ節転移を伴うステージIIIは56%から80%へ、肝臓転移、遠いリンパ節転移を認めたステージIVは14%から33%へと成績が向上していた。全国集計と比べても優れ、ステージIIIで10%も高かった。大腸がん手術では中・四国で屈指の実績を上げた。

後の経過を知ったことで、大きな成果があった。術後、がんが肝臓、肺、副腎、骨だけでなく、膝臓、脾臓へ転移していた。局所再発が多かった。腹部の大きな動脈周囲リンパ節への単独転移もまれではなかった。

「転移させない手術、局所再発を防ぐ手術、無駄な切除による合併症、後遺症の発生など反省点も明らかにした。すべ

手術に没頭すると六感がさえ、集中によって判断力が臨機応変、場面、場面で適切に展開していくようになる。難しい手術もていねいに手を動かす作業を積み上げこなし

赴任前の10年間と赤在が(阪本文雄・前山陽新聞社会事業団専務理事)



## 名医の系譜 V 8

大腸がんの中でも肛門に近い直腸がん手術は難関だった。その周囲の骨盤内にはぼうこう、肛門など重要臓器がある。骨盤内の自律神経を温存することにより、これらの臓器の機能を低下させないことがまず求められる。次に局所再発を防ぐこと。転移リンパ節などの完全切除を目指すには、従来より拡大して側方リンパ節を廓清する。自律神経温存手技を行い直腸間膜全切除に側方リンパ節廓清を加える手術法。安全に摘出できる進化した手術法を確立し、骨盤内の局所再発は3分の1に減少、10年生存率は20年間で43%改善した。「この手術で患者の性機能、排尿機能は温存できた。日本発の画期的治療法として世界に紹介されて

### 赤在 義浩

岡山済生会総合病院診療顧問 ㊦

### 直腸がん手術



「シンプルで美しい手術をしたい」と話す赤在医師

いる」と赤在義浩は話す。国立がん研究センター中央病院(東京)を中心に臨床試験で、赤在は直腸がん研究班に所属。2010年までの7年間で42例の手術(臨床試験)を行い、側方

慎重に準備し過去のカルテから根拠となるデータを集積。確実にがん病巣を切り取る手技を磨き、新しい手術法を確立、さらに根治を目指す。「ガイドラインに沿った手術では治らなかつたものが、改良した新しい手術法で治るようになる。今日の奇跡を明日の常識に、という言葉を思い浮かべている」

廓清による局所再発率を9%低下させ、10年生存率が10%以上向上することを証明した。学会が示した治療ガイドラインに沿った標準的な手術という常識にとらわれず、

「私が大切に思い、積み重ねてきたことはシンプルで美しい手術」と強調する。兵庫県立豊岡高校を経て1983年岡山大学医学部を卒業、第一外科入局。岡山済生会総合病院(岡山市)では消化器外科部長、特任副院長などを歴任。現在はがん診療連携拠点病院総括責任者、診療顧問。

週末は児島湾周辺20〜50キロを走る。毎年春休み、秋の初め、夫婦で日本アルプスを山歩き。「ランニングはあくまで訓練で、趣味は山。登山と手術はリスク管理が大事」と言う。(敬称略)  
(阪本文雄・前山陽新聞社会事業団専務理事)

## 「シンプルで美しく」



# 名医の系譜 V

9

1993年、岡山大病院整形外科で手では初めての内視鏡手術が行われた。指にしびれ、痛みが出て、激しくなる。と眠れない手根管症候群。執刀は手外科研究班長の橋詰博行助手。手首を1センチ開き直径6ミリの筒の中にカメラを入れ、手根管内へ。手首から手の中央へ伸びる正中神経が圧迫され症状が出ていた。カメラに映し出された映像を見ると骨と骨をつなぐ靱帯が神経を圧迫していると判明。ナイフを筒の外側にあるスリットに沿って入れ、靱帯を切り離した。わずか15分で終了。日帰り手術で、手のひらを切開けないので翌日から手は使え、しびれ、痛みは解消した。

それまでは手の中央から手首にかけて8センチほどを切開、2〜3週間ギブス固定し入院していた。患者負担が少くない低侵襲手術の始まりだった。

橋詰は手、肘、肩を得意分野とし、特に手外科のスペシャリスト。指が曲がったまま

## 手外科

橋詰 博行 笠岡第一病院院長 ①



手術用の内視鏡を点検する橋詰院長 2011年1月

# 内視鏡で小切開、機能温存

元に戻らないばね指、手首で骨折する橈骨遠位端骨折、そして手根管症候群が症例の多い治療対象。整形外科は人工関節、骨折など

「機能を温存する」が治療の最優先課題。切開は小さく、皮下の組織を展開

ハンマー、ノミを使いダイナミックな手術、治療が多いが、手外科はマイクロサージャリー（微小外科）など繊細で丁寧な手技が求められる。

54年東京大から着任した児玉俊夫教授が岡山大学整形外科教室を開講した。リウマチ、人工関節と並んで重要な治療の重要テーマにした。児玉教授、津下健哉助教授（後の広島大整形外科教授）、高杉仁講師、赤堀治岡山済生会病院整形外科部長、橋詰と岡大整形外科の70年近い歴史の中で手外科が名医によって受け継がれてきた。

84年から7年間、岡山済生会病院で赤堀に鍛えられた。手、指は多くの骨と関節でできており、骨が組み合わされて関節があり、クッションの役割をする軟骨。二つの骨を結合する線維の束・靱帯。曲げる、伸ばす、握るなどの動きをつかさどる筋肉と腱。これらが手首から指先までにある血管と神経が付随している。「まず、解剖学的にそれぞれ骨と関節と靱帯の構造、どこに腱や血管と神経が走っているか、頭に入れて」と橋詰。

患者を挟んで赤堀と向かい合う。手術用のはさみを多用する手術医が増えているが赤堀はメス1本。体組織にやさしく、切り口がきれいという理由。ゴム手袋をした手でピンセットを持ってほぼ円形になった針をミリ単位の間隔で縫っていく。腕から指先に力を入れずやわらかく針を運ぶのがコツ。全国でも指折りの手外科医の手法を盗もうと橋詰も必死だった。30代の7年間、赤堀を師と仰ぎ、手の手術に明け暮れ、専門医へと腕を磨いた。（敬称略）

（阪本文雄・前山陽新聞社 会事業団専務理事）



# 名医の系譜 V 10

手の外科医として一人前になった橋詰博行は1991年、母校の岡山大病院に帰り、整形外科助手、講師、助教を務めた。

ある日、井上一教授から海外の医学誌を見せられ「手術管症候群の内視鏡手術が開発されている。始めたらどうか」と勧められた。従来の方法で問題なくやっているので気にはしていなかった。ところが、国内で日本赤十字病院(東京)整形外科の奥津一郎部長がどの部位でも応用できる内視鏡治療システム「USE system」を世界に先駆け開発していた。それが海外で導入されていたのだ。

93年、日本手外科学会で奥津の発表を聞き、どうしても内視鏡手術をしたいと思いつきを繰り返した。「わからんのなら、うちへ来なさい」と言われ、教室の若手を連れ東京へ。到着早々、午前4件、午後4件手術室へ入れてもら

## 拠点病院 橋詰 博行 笠岡第一病院院長 ㊦



ばね指の手術後、患者に説明する橋詰院長  
2015年2月

透析肩に対する内視鏡下烏口肩峰靭帯解離術も習得した。肩・肘・手関節・指関節すべてにおける関節内・

科大教授、阿部信寛同大教授、田中雅人岡山労災病院副院長、井上一岡山大名誉教授らとまとめ、内視鏡手術を肘、肩、股関節、脊椎・脊髄、頸椎、腰椎などにまで拡大していると報告した。

05年、笠岡第一病院院長に就任した。手外科のスペシャリストとしてばね指、手根管症候群などを手術している。20年の手外科治療実績で手根管症候群など変性疾患327件、全国4位の手術数だった。病室から瀬戸内海を望む絶景の地にある148床の病院はこの15年間で手外科の拠点病院になり、全国から患者が集まっている。

等岡諸島の真鍋島へ往診に出かけ、離島の医療にも心を配る。病院経営を学び、宮島厚介理事長とともに岡山県南西部医療圏の中で、井笠圏域の地域医療の核になる病院を目指している。(敬称略)

い、立ち会い、内視鏡手術もさせてもらった。ついでにばね指に対する18G針による経皮腱鞘切開術も習得して帰った。

2003年、岡山医学会雑誌に「整形外科領域における内視鏡視下手術の進歩」の論文を三谷茂川崎医

学会開催にも取り組み5年から毎夏、「上肢外科サ

その2カ月後、再び上京、

雑誌に「整形外科領域における内視鏡視下手術の進歩」の論文を三谷茂川崎医

学会開催にも取り組み5年から毎夏、「上肢外科サ

学会開催にも取り組み5年から毎夏、「上肢外科サ

# 実績重ね全国から患者



# 名医の系譜 V 11

1974年4月、松田忠和は岡山大病院第一外科に入局した。新人教育を受け、兵庫県姫路市、愛媛県新居浜市、倉敷市の病院で消化器を中心にした外科手術を学び、5年後大学病院に帰り第一外科医局員になる。三村久助教授の肝臓移植研究班に入った。犬を中心にした動物実験で2体を並べ、止血し血管を切断する肝臓の摘出、血管を縫い合わせる埋め込み。一睡もせず3日間で20例したが犬は死んだ。少しずつ原因が解明、成功へ3年かかった。6年間で2千例行ったが、データに使えたのは50例だった。

同時に臨床で肝臓がん手術をチームで実施した。手術時間は10時間を超え、出血量も多く、術後早期の死亡例もあった。黎明期の中で、肝臓がんの手術医として一歩を踏み出した。31歳。週2日手術をし、医局に泊まり患者の術後

## 肝臓専門病院 松田 忠和 松田病院院長・理事 ①



肝臓手術をする松田忠和院長 2008年4月22日

# 黎明期のがん手術医に

管理に対応した。夜中も目が離せず靴を履いたまま仮眠した。肝臓は横隔膜の下

機能維持するか。切開、止血、吻合、一つ一つの処置が生命に関わり医療技術

55年、父和雄が自宅を改造した木造2階建てに21床の外科松田病院(倉敷市鶴形)を開業した。和雄は慶応大医学部を卒業、心臓血

管外科医を志し東京女子医大の神原任教授に師事、その後岡山市の神原病院に勤務。岡山大病院第一外科にも入局、海外留学を待っていた時、家運が傾き、開業した。

にあり胃の隣にある。肝動脈、門脈、肝静脈から枝分かれして臓器全体に大量の血液が流れている。肝臓がんに再発が多く血管にも浸潤する。ポインントは手術時間を短くし、切除による出血をどう抑えるか。がん病巣を切除する時、どれだけ肝臓を残し肝臓がん手術医として6年間の修練。37歳になっていた。

85年、松田病院消化器外科部長で実家に帰った。肝臓がん手術医として6年間の修練。37歳になっていた。55年、父和雄が自宅を改造した木造2階建てに21床の外科松田病院(倉敷市鶴形)を開業した。和雄は慶応大医学部を卒業、心臓血

管外科医を志し東京女子医大の神原任教授に師事、その後岡山市の神原病院に勤務。岡山大病院第一外科にも入局、海外留学を待っていた時、家運が傾き、開業した。86年、鉄筋7階建ての新病棟が完成、外科、胃腸科、整形外科、脳神経外科、泌尿器科、内科、麻酔科の1605床。消化器外科、交通事故の救急対応が中心だったが、肝臓専門病院を目指し、大きく転換をはかっていく。「父が私のために最新の手術室を作ってくれた。肝臓がん治療は私が手術医として生涯をかけて取り組むライフワークになった」。大学病院から専門病院への挑戦が始まる。(敬称略)(阪本文雄・前山陽新聞社会事業団専務理事)



# 名 医 の 系 譜 V 12

岡山大病院(岡山市)、岡山、広島、香川の関連病院から肝臓の手術適用になった患者が松田病院(倉敷市鶴形)へ紹介されて来る。

統計を見ると、松田忠和が松田病院で手術を始めた1985年から60歳になる2008年まで働き盛りの23年間で、肝細胞がん512例を執刀。5年生存率64・6%、全国集計を11・2割上回った。後半の10年間は215例、ステージⅠが82・4%、Ⅱが78・3%、Ⅲが55・9%。手術時間3〜4時間。大半がステージⅢであることを加味するとかなりの好成績だ。

進行した肝細胞がんは肝動脈に養われており、肝動脈を詰まらせる塞栓物質に抗がん剤を混ぜて、がん細胞を死滅させる肝動脈塞栓術が効果的だった。1987年、この治療法の権威者の山田龍作和歌山県立医大放射線科教授を訪問。直接指導を受けに何回も通った。これが患者には必要

## 多様な治療法

松田 忠和 松田病院院長・理事長



肝胆膵外科について話す松田忠和理事長(左)と達雄副理事長

# 病状に合わせ適切処置

だと思つと、飛び込んでいく行動力があつた。

さらに、カテーテルを留置して抗がん剤をがん病巣に直接注入する化学療法も

高くなった。

2000年からはラジオ波焼灼術を始めた。体外から針を刺してラジオ波で焼き切る。腫瘍が2、3個あ

始めた。門脈に腫瘍がかかっていたら肝動脈を閉塞できなくなるので、この治療が有効になる。自分でカテーテルを熱処理して先を曲げ血管の奥まで進むようにして留置する。病状を改善させて切除手術をすれば残せる肝臓が大きくなり手術の安全性も

2000年からはラジオ波焼灼術を始めた。体外から針を刺してラジオ波で焼き切る。腫瘍が2、3個あ

20年、忠和の長男達雄が副理事長として帰って来た。39歳。慶応大医学部を卒業、同大病院一般消化器外科、がん研有明病院で消化器がんの手術を行い、2年間シカゴ大の中村佑輔教授の下でがん免疫を研究。18年から2年間岡山大病院肝胆膵外科の八木孝仁教授について最も難しい三つの

臓器のがん手術を学んだ。八木は肝臓移植研究班にいた忠和の後輩で1996年、生体肝移植を実施、成功に導いた。達雄は「父の肝臓専門病院をさらに発展させ、肝胆膵の専門病院を目指したい。がん治療の最前線で学んだ経験を倉敷で発揮したい」と話す。

忠和の肝臓手術は40年を超え、2千例に及ぶ。情にもろい熱血漢。丸い柔らかな顔に筋を通す一徹さを秘める。晩年の15年間、2人で手術をしてきた食道がんの名医上川康明顧問医は「すごい勉強家。頭(知識)と手(技術)に裏打ちされた手術は見事」と言う。

達雄、忠和、上川の3人で手術に立ち、肝から肝胆膵へ後継者の手技を見守る日々だ。(敬称略)

(阪本文雄・前山陽新聞社会事業団専務理事)



# 名医の系譜 V

13

1966年、堀井茂男は香川県立高松高校を卒業、岡山大学医学部に入学した。小学校5年生の時、父直一が岡山大病院で胃がんの手術を受ける時、一緒に訪れたことがあった。「お医者さんの学校があるんだ」と知った。自宅で療養していた父はがんが肝臓に転移し亡くなった。人間の命のはかなさを知った。2、3年後には祖父母が亡くなった。中学、高校では「生きる」ことを考えるようになり、人生論全集、アフリカ・ランパレネで医療活動しノーベル平和賞を受けたシュバイツァー博士の伝記を買って読んだ。教養課程から医学部へ進み鹿田キャンパスの掲示板に「坐禅会」の案内があり、同級生3人と参加した。生化学教室の教授室。ヒタミンの研究で海外にも知られる水原舜爾教授が床に赤いじゅうたんをひいてくれ「数を数えて息を整える。これを数息法と言

## 精神療法

堀井 茂男 慈生病院理事長 ㊤

無念無想―静かに座る堀井茂男医師(右)  
||2010年9月



う」と教えてくれた。線香1本を立て、無念無想の一炷香。消えるまで約40分間、両手を前に合わせ背筋を伸ばし、ひたすら座る。心がすっとしてすがすがし

い気持ちだった。初めて触れた日本の精神文化の一端。毎週の座禅は1年間続いた。手先が不器用だったので、内科系と考えていた。ごく自然に精神神経科医への道を選んだ。精神神経科は心を扱う精神療法と薬

と細胞が脱落すると認知症、変性すると神経麻痺、不安が増すとアドレナリン系が活発化、抑うつ状態はセロトニンが減少、幻覚、妄想はドーパミンが増える、など心の動きと神経伝達物質の関係が明らかになり精神病の治療には薬物療法も重要になる。

堀井は精神療法の研究室に所属、テーマは内観療法と森田療法に決まった。内観療法は浄土真宗の身調べを応用した自己啓発法。森田療法は神経質の治療法。不安と葛藤し作業で自然と親しみ畑を耕し行動で不安を淘汰する。内観療法は奥村二吉岡山大名誉教授が臨床導入。横山茂生(後の川崎医科大教授)、洲脇寛香(阪本文雄・前山陽新聞社会事業団専務理事)

# 悩む患者と「異体同心」に



# 名医の系譜 V

14

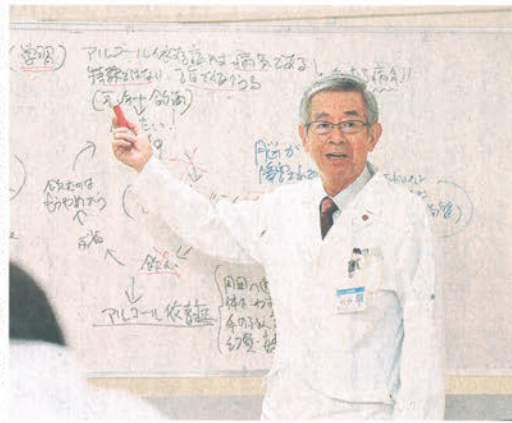
岡山県民の3割近くが「こころの病い」を持っている。岡山いのちの電話協会によるかつての調査である。働き過ぎ、人間関係の難しさ。それが不安、不眠、抑うつを生み、職場でも、家庭でも、地域でも、うつ病、ストレス障害の人たちが増えている。「精神科医療は大きく変化している。古くからある精神病だけでなく、不安、ストレスから起こる心の病。それは日常生活から起きる病気でだけでもなりうるし、増えている」と堀井茂男は話す。

ストレスが原因で起こる不安障害、強迫性障害などの神経症性障害と神経伝達物質のバランスが崩れることが原因と考えられているうつ病、双極性障害の気分障害などがある。うつ病患者の約1割はアルコール依存症になる。

1977年、岡山大病院精神神経科に入局、これらの疾患の診断と治療に必死の毎日だった。画像診断、神経伝達物質、脳波などの検査をして確定診断を下す。患者の訴え、悩みをしっかりと聞いて治療は症

## 精神科病院

堀井 茂男 慈圭病院理事長 ㊦



「話をじっくり聞く。一緒に考え、ともに歩む心が大事」と言う堀井茂男理事長(2014年11月17日)

# 五つの「あ」療法広める

状態を抑える薬物療法と精神療法として内観療法、森田療法を導入する。絶食内観、集中内観も積極的に取り組む。アルコール依存症、神経症などに効果が確認できた。精神科医として一通りのことができるようになったのは30代半ばを過ぎていた。大学病院の病棟医長、外

来医長、医局長になり医師の当番表の作成、入院患者の担当医、関連病院への医師派遣などの仕事が増えてきた。

38歳になった時、精神神経科教室同門会があり、研究会発表と懇親会が開かれ、大重弥吉慈圭病院院長から

86年、慈圭病院の勤務が始まった。20年間、外来、入院で患者と向き合った。2007年、藤田英彦の後を受けて院長に就任した。翌年、岡山いのちの電話協会理事長になった。同協会は1984年、波多野二三彦弁護士、奥村二吉岡山大名誉教授らで発足。堀井は同協会開設前から電話

呼び止められた。「うちへ来い。待っている」。濃厚で、人を包み込むような人柄。静かな声ではっきり言われた。

慈圭病院は伊原重彦、大重ら精神科医が理想の精神科病院を作ろうと52年、岡山市南区浦安本町に開院。完全開放型病棟、患者家族会

70歳半ばになった今も座禅を組み、夜間の電話相談の受話器を持ち、こころの病んだ人たちを支え、ともに生きようとしている。

奥村二吉の「原事実について」「大重彌吉遺稿集」を編集、人生の師へ恩返しもした。(敬称略)

の結成など全国に先駆けて地域に開かれた先進的な取り組みをしていた。「40歳になったら腰をすえて患者と向き合い治療をしたい」と決めていた。4年前にも「うちへ来い」と言われていた。腹を決めた。

座禅を再開した。朝5時に起き、大重邸の茶室で一炷香。2人並んで約40分座った。大重は耕雲庵立田英山老師の人間禅に入り澄徹庵月桂の道号を持ち四国、岳南道場の師家をする禅者であった。

相談を受ける聞き方を指導。「寂しい人と同じ気持ちになつて一緒に考える共感的理解を」と。2015年からは全国50カ所ある岡山いのちの電話連盟理事長になった。「ストレスの多い今の日本。孤独、孤立、つらい思いをする人の自殺予防へ大事な役割を果たしている」

内観療法と森田療法、二つの精神療法から学んだ「あせらず、慌てず、諦めず、あるがまま、ありがとう」の五つの「あ」療法を今、講演で広めている。

(阪本文雄・前山陽新聞社 会事業団専務理事)



# 名医の系譜 V 15

大きな十字架が岡山博愛会病院(岡山市中区江崎)の玄関の壁面にある。「社会福祉法人 岡山博愛会病院」の文字。玄関を入ると、創立者アリス・ペティー・アダムスの写真と略歴、業績が柱に掲示されている。1891年、25歳のアメリカンボードの宣教師として岡山に着任。クリスマスに子どもたちを自室に招いたのが始まり。

貧しい人々を救済するため、保育園、幼稚園、私立小学校、手に職をつける洋裁・和裁の学校、無料で治療する施療院などを開設と書いてある。明治の時代から100年を超えて地域の人々の生活を医療と福祉で支えてきた。だから社会福祉法人なのであり、設立の理念はキリスト教精神。その活動拠点がこの病院である。

岡山博愛会病院は1905年、花畑施療院として岡山市御幸町に開院、52年同市門田屋敷に岡山博愛会病院と改称

## 岡山博愛会

更井 哲夫 岡山博愛会理事長 ①



診察室で話す更井哲夫理事長

# 発祥の地で後継の一步

し認可された。御幸町が分院になり、2010年、現地に統合して新築移転した。

「やあー、ごっしょい」。

夫博愛会主事は呉海兵団から復員後、理事の同意を得て臨時理事会を開き解散決議無効を決議。病院の薬を保管し戦時下の博愛会を守

ったのは母・美子であった。「私は1947年、復興第1号の門田屋敷の博愛会診療所・産院で生まれた。父の岡山一中の同窓生大原總一郎氏の助けて水島の紡績女子寮の廃材で建てたものだった」。良夫は老人ホーム、教会など次々再建していった。

翌年、自分の進路の相談のため、岡山大学長になった。(阪本文雄・前山陽新聞社会事業団専務理事)

白衣に身を包み、大きな声で迎えてくれた更井哲夫理事長(内科医)。アダムスが御幸町に築いた施設、病院は1945年の岡山空襲で全面焼失。戦災で復興不可能と判断した理事会は解散決議した。34年、アダムスから後継指名された更井の父・良夫博愛会主事は呉海兵団から復員後、理事の同意を得て臨時理事会を開き解散決議無効を決議。病院の薬を保管し戦時下の博愛会を守ったのは母・美子であった。「私は1947年、復興第1号の門田屋敷の博愛会診療所・産院で生まれた。父の岡山一中の同窓生大原總一郎氏の助けて水島の紡績女子寮の廃材で建てたものだった」。良夫は老人ホーム、教会など次々再建していった。

更井は72年、岐阜大医学部を卒業、岡山大病院第三内科へ入局。大藤真教授の下で免疫内科医になった。文献を読み、実験し、治療に明け暮れ、リウマチ、全身性エリテマトーデス、膠原病などに取り組んだ。23歳から10年間、大病院で鍛えられ、呉共済病院内科・アレルギー科医長として独り立ちした。

研究、治療、学会発表が順調にいき、米留学の話を進めていた時だったが、自らの運命に従う決断をした。帰宅して母に報告。「いいの？ 苦勞するわよ」と言われた。(敬称略)



# 名医の系譜 V

16

経済成長を果した日本、岡山県内の病院、福祉施設で労働組合が攻勢に出て労使関係の正常化、経営の改善などを求めた。博愛会分院でも難問が山積していた。理事長の息子である更井哲夫への風当たりは強かった。黙々と働くしかなかった。ポケベルを持ち、患者に何かあるとすぐ呼び出され治療した。当直も週1〜2回ありよく働いた。隣接する老人ホームの入院患者をすべて受け入れるようにすると分院の収支は黒字に転換した。博愛会勤務を始めて7年後の1988年、分院長になり、97年、理事長に就任した。50歳。病院、社会福祉法人の経営者になったばかりの身に大きな課題が待っていた。

分院のある発祥の地では老人ホームの建て替えが必要だったが、用地の拡大ができなかった。病院の本院、分院も老朽化し、個室が少なく、耐

## 体制整備

更井 哲夫 岡山博愛会理事長 ㊦



「キリストの愛を持って医療と福祉を」と話す更井哲夫理事長(左)と中尾一志院長

# 医療と福祉で奉仕貫く

震災準に適合せず、二つに分かれる効率の悪さもあつた。このすべてを解消するには新築移転しかなかった。

院患者の診療報酬削減を打ち出し、内科中心の病院経営を目指した更井は再度経営の見直しを迫られた。院

岡山博愛会発祥の地には御幸町クリニック、岡山博愛会保育園、在宅総合支援

センターなどを新設した。高齢者支援、保育・福祉ニーズなど変化する地域の人々の生活を支えるサービス提供体制の整備も進めた。

本院から車で10分の岡山市中区江崎の幹線道路沿いに1.5畝の用地が見つかり、貯めていた自己資金で購入。2010年、鉄筋コンクリート4階建ての病院が完成した。

国は高齢化に伴い介護保険の療養病床の廃止、在院日数による入院の切替えが実現。地域の病院との連携で紹介患者が増え、内視鏡医、皮膚科医、整形外科医らの非常勤派遣で外来を充実した。リハビリ職員を70人超にし、職能訓練、離床訓練が進むなど、新しい収入源の確保、若い人材で売り上げを増やし人件費比率を抑えるなど経営改善は進み、収支は好転した。

1966年、岡山博愛会創立75周年記念講演会が開かれ、社会事業家でノーベル賞候補にも挙げられた賀川豊彦が講演した。夜は更井家に泊まった。9歳だった更井は賀川から洗礼を受け祈りの生涯をたどる。母美子が賀川の粗末な上着や穴のあいた靴下を繕っていたのを覚えており、今を生きる無言の教えになっている。(敬称略)



# 名医の系譜 V 17

1980年7月、岡山大脳神経外科教室の衣笠和孜医師は米ニューヨーク大の神経科学研究所に留学した。医学部全米ランキング3位の名門。マンハッタンのど真ん中、高層ビルに囲まれキャンパスはあった。2年近く脳神経の化学的実験でデータを集積し論文を書くのが目的だった。

脳神経外科医になって8年目、香川県立中央病院(高松市)、国立岡山病院(岡山市)で開頭手術を学んだ。手術では頭皮、頭蓋骨、硬膜、くも膜など重層になっている脳組織を外側から開けていき、脳実質に到達する。脳髄液に浮いた状態で不安定な脳は前頭葉、側頭葉などに分かれ、やわらかく、こわれやすく、毛細血管が走って出血しやすい。0.3ミリの微細な作業を手術顕微鏡で丁寧に行う技術が必要で脳外科手術は全診療科で最難関と言われる。指先が器用で集中力がある衣笠は脳腫瘍、くも膜下出血などの手術をマスターし脳神経外科医として自信を持つ

## 脳血管内治療 衣笠 和孜 岡山療護センター長 ①



脳血管内治療について話す衣笠岡山療護センター長

よつになつていった。大学では論文が重視され、研究で成果を出そうと米国で実験に精を出す日々が始まった。

ある日、放射線科のアレックス・バレンスタイン教授が開頭せずに脳血管内治療をしていると聞いた。驚いた。「そんなことができるのか」とにかく見てみたいと思ひ、いきなり治療室を訪ねた。小柄であご

ひげを生やした40代の精悍な感じの教授に自己紹介した。「先生の脳の血管内治療を学びたい」と言った。飛び込んで来たアジアの留学生。顔をまじまじと見つめながら、快諾してくれた。

朝9時から夕方までは脳神経の研究、早朝6時から夕方以降はバレンスタインの治療室へ通った。大腿動脈から直径2ミリのカテー

テルを刺入、2、3分もすれば、脳内へ。欧米では脳、心臓などの造影検査は放射線科医、内科医がカテーテルを臓器内へ入れて検査を行い、その技術が治療へと進展していった。バレンスタインがレントゲンの画像を見ながら慎重に進めるカテーテル操作は目からうろこの連続だった。日本では開頭に1、2時間かかり、さらに病巣切除に5、6時間かかる。バレンスタインの血管内治療はシンプルスでスムーズ。1時間で終わる。

最大のメリットは脳実質に触れなくてすむことだ。デリケートな脳を扱わずに、よいのは医師にも患者にも大きな負担がなく、安全性が確保できる。リスクも時間も10分の1。夢のような非侵襲手術だった。

1週間で5、6例を見た。

米国の医師免許を持っていないので治療に参加できないが、治療の手順に従い説明を聞き、メモを取りすべてを記録。脳の血管内治療では世界のトップランナーの特技を目の当たりにした。「日本に持って帰りたい」。夢中になって習得に励んだ。自分からノックして開いた扉の向こうに大きな成果が待っていた。

少年時代、テレビで見た「脳神経外科医ベンケーシー」にあこがれ、この道に入った。米国に来て最先端治療の知識と技術を学び、輝く星に近づいていく。(敬称略)

(阪本文雄・前山陽新聞社会事業団専務理事)

# 米で学び先駆者の道へ

訂正 20日付本面「名医の系譜V」⑥の記事で、

賀川豊彦氏が講演したのが「1966年、岡山博愛会創立75周年記念講演会」とあるのは誤りで、正しくは56年、65周年記念講演会でした。



# 名医の系譜 V 18

1982年1月、衣笠和孜は米国留学を終え、帰国した。脳の血管内治療という収獲があった。岡山脳神経外科の西本詮教授に報告した。脳神経外科教室に研究チームをつくり治療開始を目指すことになり、キャップになった。調べると名古屋大、京都大がすでに研究を始めていた。

課題になるカテーテル操作は脳の血管造影検査で、大動脈へ刺入、脳入口となる頸動脈へ到達。脳内は血管内が細く、不安定になり慎重な操作が求められる、時間をかけて慎重に奥へと進めるなど検査を通してカテーテル操作の経験を積んだ。血管内治療1号は85年、内頸動脈破裂の患者だった。血管撮影して部位を確認、カテーテルを進め病変部で先端からバルーンを出して血流を遮断、風船の中で塞栓物質が化学変化を起して固まるようにして留置、終わった。手術時間は1時間ほど。「驚くほどうまくいった」と言い、その夜は米ニューヨークの日々が思い出された。こ

## 開頭手術 衣笠 和孜 岡山療護センター長 ㊦



脳腫瘍の開頭手術を説明する衣笠岡山療護センター長

れから脳の血管の出血、破裂、閉塞などの治療に血管内治療が進展していく。

大学、医療器具メーカーが閉塞部位を埋めるプラチナコイルなど塞栓物質の開発を進め、血管内治療のターゲットは破裂脳動脈瘤になり、衣笠は萬代眞哉医師と液体の塞栓物質セルロース・アセテート・ポリマー(CAP)を開発。92年、脳神経外科領域で最も権威ある米国の医学誌ジャーナル・オブ・ニューロサージャリー(JNS)に投稿。日本人で初めての特別論文として掲載され、世界に注目された。この時、46歳。留学から帰って10年、大学で血管内治療の研究、臨床に取り組んだ成果だった。

97年、日本脳神経血管内手術研究会が岡山で開かれ、会長を務めた。脳神経外科医千人が参加、破裂脳動脈瘤、脳塞栓などの血栓溶解療法がテーマになり、

# 海外から「神の手」評価

発表と討論が行われた。その後、血管内治療の指導医、専門医の認定制度が決まり、2000年衣笠は全国の指導医1号に認定された。

開頭手術で名医という評価を海外から受けた。1993年、JNSに脳の深部の頭蓋底部の脳腫瘍摘出及び血行再建術に成功した2例の手術論文を投稿した。原稿をチェックし掲載の可否を決める査読委員のコメントに「神の手」と言う言葉があり、難手術を見事にこなした彼の特技をたたえている。「世界の五指に入る脳神経外科医」と大本堯史岡山大名管教授から言われ、今も心に残る。恩師の西本が発見し、西本氏病と呼ばれたモヤモヤ病の最も完成された手術法EDAMS(Ribbon)を開発、(敬称略)

2020年、日本脳神経外科学会症例登録で、脳動脈瘤手術では血管内治療が初めて開頭手術を上回った。1995年から独立行政法人自動車事故対策機構の岡山療護センター長を務める。交通事故で脳に大きな損傷を受け、植物状態の患者の回復を目指して治療に当たっている。西本を顧問に迎え、最晩年まで「きぬさん」「先生」の間柄が続き、学恩に報いた。長幼の序を尊ぶ。

90年に亡くなった父の巖は講道館柔道九段の柔道家。旧制津山中学の「白帯津中」を率いて全国6連覇を達成した。岡山県柔道連盟会長、全国柔道連盟理事。「和孜」とは、人と和しこころと倦まざらむこと。漢文に長じた父の思いを胸に、今を生きる。

(阪本文雄・前山陽新聞社 会事業団専務理事)



# 名医の系譜 V 19

「謝辞(ありがとう)」。

2001年4月24日、台湾の李登輝前総統は倉敷中央病院(倉敷市)に姿を現した。出迎えの人々に声をかけ、手を振り、笑顔で病院に入った。

前年の11月、李は心臓の冠動脈の血流が悪化した。台湾で、光藤和明循環器内科部長立ち合いのもと、冠動脈病変に狭窄防止のステント(網状の筒)を留置した。その後、一部が再狭窄し、血流が悪化。光藤を頼って倉敷へ治療を受けに来た。

病院到着後、心臓カテーテル室に入り、治療が始まった。再狭窄部位を風船付きのカテーテルで血管内部を広げ血流改善(PCI治療)した。新たに狭窄部位が確認され、ステントを留置し治療は2時間足らずで終わった。安全を期して一晩入院した。

実は台湾でのステント留置は、倉敷で光藤が実施する予定だった。しかし、台湾と中国の関係で日本政府のビザ発給は結論が出ず、光藤が海を越え、立ち会った。そしてそ

## 李前総統治療 光藤 和明 倉敷中央病院副院長 ㊤



心カテーテル治療を終えた光藤医師(左)、李登輝前総統(中央)ら。2001年(光藤和明追悼業績集から)

# 技術が日本政府動かす

の後再狭窄部位が確認され、李の希望でやっと倉敷での治療が実現したのだった。

「その技術は日本政府をも動かした。人道的な措置としてビザ発給が実現し治

療を行った。このエピソードは語り継がれるべき歴史である」。18年発行された「光藤和明追悼業績集」の巻頭で公益財団法人大原記念倉敷中央医療機構倉敷中央病院の大原謙一郎理事長は書いてい

る。「日本政府の対応が決まり、病院へ連絡が入ったのは直前だった」。当時、病院の事務長だった相田俊夫理事・相談役は思い出す。「通常診療を遂行することを大前提に受け入れ態勢を整えた。担当者を決め、警備、広報紙

制をとり、情報開示へ入院中、幾度も記者会見を開いた。退院時、ありがととにこやかに言葉をかけてくれた」

李をはじめ、受け入れの陣頭指揮をした高三秀成院長、光藤、相田の4人は京都大の同窓だった。

1年後、台湾から一幅の軸が届いた。「妙手回春」。手に触れば春になるかのような名医をたたえる言葉だった。生き生きとした筆の運びから、全快したことをうかがわせた。

治療した時、52歳の動き盛り。1982年、PCI治療を始め、91年、ステント留置を開始。すでにPCI治療1万例に達しており、生来の手先の器用さとしたトップランナー故に言える言葉だった。(敬称略)

(阪本文雄・前山陽新聞社 会事業団専務理事)

「日本政府的な対応が決まり、病院へ連絡が入ったのは直前だった」。当時、病院の事務長だった相田俊夫理事・相談役は思い出す。「通常診療を遂行することを大前提に受け入れ態勢を整えた。担当者を決め、警備、広報紙

「医療とは技術だ」「世界水準の医療を地域住民に」。後者は病院の創立者大原孫三郎の理念そのものでもあった。

倉敷で地域医療に一生をかけたトップランナー故に言える言葉だった。(敬称略)

(阪本文雄・前山陽新聞社 会事業団専務理事)

「光藤和明追悼業績集」の巻頭で公益財団法人大原記念倉敷中央医療機構倉敷中央病院の大原謙一郎理事長は書いてい

る。「日本政府の対応が決まり、病院へ連絡が入ったのは直前だった」。当時、病院の事務長だった相田俊夫理事・相談役は思い出す。「通常診療を遂行することを大前提に受け入れ態勢を整えた。担当者を決め、警備、広報紙



# 名医の系譜 V 20

1974年、京都大を卒業した光藤和明は、倉敷中央病院（倉敷市）の内科医になった。同級生の和代夫人と学生結婚しており、「2人で勤務できる病院」が条件だった。大学紛争で「医局解体」をクラス討議し学生集会やデモにも参加するシンパ。筋を通して医局に入らず、求人票を見て決めた。

光藤ら若手4人が心臓治療を志し、内科循環器部門に集まった。当時、心不全には胸部X線、心電図などで診断、ジギタリス、カテコラミンなどの投薬が基本であり、根治は心臓血管外科医の仕事だった。この壁を打破しようと新しい検査法・冠動脈造影の習得に小倉記念病院（北九州市）の延吉正清医師の下で研修した。肘の動脈にカテーテルを挿入、心臓の冠動脈へ進め、造影剤を注入し血流を妨げる狭窄や閉塞がないかを撮影する。画像確認できれば、狭心症が確定した。この技術を生かし、81年冠動脈内血栓溶解療法を実施した。心筋梗塞発作の患者の冠動脈にカテーテ

## 心カテーテル 光藤 和明 倉敷中央病院副院長 ㊦



心カテーテル治療をする光藤医師（2005年8月）

# 完全閉塞治療90%成功

ルを進め、血栓を溶かす溶解剤ウロキナーゼを注入、血流を改善させる。心筋梗塞発作の第一選択治療だった。

この年、後に台湾の李登輝前総統を治療する経皮的冠動脈形成術を始めた。駆逐器、薬剤を使い治療しながら

循環器内科医が人工呼吸器など救急蘇生に必要な機器、薬剤を使い治療しながら

（敬称略）  
（阪本文雄・前山陽新聞社会事業団専務理事）

け出しの循環器内科医は6年後、カテーテル操作で血管を広げて心筋梗塞を治療する技術を身に付けた。

倉敷市医師会と連携し西部循環器ブライマリーケアの集いを始めた。症状、検査、治療を最初患者をみる開業医とそこから送り込まれる拠点病院の専門医が35年間、毎月症例検討会を開いた。翌年にはドクターカー・モバイルCCU（心臓集中治療専用救急車）を稼働させた。

「病院の機能を近代化する時期、黎明期にあった心臓の血管内治療をいち早く導入、心臓の倉敷中央病院として知られ、先生はその旗手であった」。同世代の医師として働いてきた山形専院長は話す。

三宅康夫院長（当時）が「救急は医の原点」と予算をつけてくれた。若手医師の熱意が病院を動かし、医師会がネットワークをつくり、二つのシステムが地域医療の中に構築された。

多くの治療困難症例に取り組んだが、中でも完全閉塞した難しい症例の治療に精魂を傾けた。閉塞部位を貫通させるガイドワイヤーの先端の硬さや形状、滑りやすさなどを改良。ダイヤモンドが刃先に塗布されたロータブレードを駆使し、閉塞部位の拡張を行った。慢性完全閉塞を年間400例治療、血流を回復する成功率は90%に達していた。門田一繁循環器内科部長・副院長は「閉塞部位のどこかへ進む入り口がある。その時のポイントは押さないこと。入り口の手掛かりを探し道を開いていった」。押さないと聞いた匠の技を解説する。



# 名医の系譜 V 21

「きょう国内初生体肺移植 岡山大医学部」「24歳女性に母、妹から」。1998年10月28日付山陽新聞朝刊1面のトップ記事。大きな活字が躍る。

執刀医の伊達洋至第二外科助手は、当時39歳。岡山市の自宅で午前5時起床した。いつもより少ない30分間、山道をジョギング。秋の風を感じながらリフレッシュした。新聞、テレビに大きく報道され、目に見えない重圧がかかっていた。

早起きした妻が作ったペーコンエッグの朝食を食べ、午前7時、岡山大病院へ着いた。足早に患者のいる集中治療室（ICU）へ行くと、患者の病状が悪化していた。脈が速く、肺機能の指針となる動脈血二酸化炭素分圧は正常値の2・5倍。今、移植をしなれば、患者に次のチャンスはない。危険を承知で移植に踏み切った。動脈血二酸化炭素分圧はさらに上昇し生命の危機に近かった。人工心肺装置「エクモ」を使うことを決

## 生体肺移植 伊達 洋至 京都大呼吸器外科教授 ①



手術室へ向かう伊達洋至医師(前列左)と清水信義教授ら移植チーム1998年10月28日

# 危険を乗り越えて成功

断。これが功を奏し、肺機能、全身状態がやや安定してきた。

緊迫した雰囲気です。午前11時前、伊達が執刀開始。両方の肺を摘出。感染症を繰り返していったので肺の中に膿がたまり、隣接する臓器

「家内に集中治療室から電話。『お疲れさまでした』と言ってもらった」。日記にこう書いていた。

手術後は拒絶反応をどう抑えるか。感染症を起こさせない。この二つに対しICUに泊まり込み、不眠不休の戦いが始まった。拒絶反応は免疫抑制剤投与でコントロールする。感染症対策は免疫抑制剤を使い過ぎないこと。適度でないと拒絶反応が起こる。血中の免疫抑制剤の濃度を見ながらのさじ加減が大事。濃度が上昇すると尿が出ず、肺に水がたまりダメージを受ける。二人三脚を組む麻酔科医の五藤恵次医師とは米ワシントン大胸部外科の、

（敬称略）  
（阪本文雄・前山陽新聞社 会事業団専務理事）

への癒着が激しかった。膿をこぼさないよう慎重に剥離。非常に難しい摘出だった。

隣の手術室で妹と母から摘出した右、左の肺の一部をそれぞれ50分前後で移植。「これまでアメリカで経験した移植でもない、最も難しい手術」と言う。先の見通せない間の中の手術だったが、埋め込んだ肺に血液を流した瞬間「肺はきれいなピンク色になった。うまくいったと実感できた」。最後に光が差した。移植チームで拍手が起った。みんなが

安どの表情を見せた。午後6時半過ぎ、手術は終わった。

「尿が出なくなる」「レントゲン撮影で肺に陰影が出た」。一進一退しながら術後1週間経過。最悪の状態で手術したことを考えると「予想以上の回復だと思っ」と伊達は振り返る。

12月28日、退院の日が来た。移植後61日目。「玄関で花束を看護師が渡した。自分も心からの拍手を送った。元気な姿を見れば、だれもが肺移植のすばらしさを感じたことだろう。百点満点の2カ月であった」。執刀医の日記はこう締めくくった。

一つの命に日本中が注目した。61日間、大病院にピンと張りつめた緊張感があつたが、移植した肺が機能を発揮し、患者に笑顔が戻った。



# 名医の系譜 V

22

伊達洋至は1984年、岡山大学医学部を卒業、医師になった。前年、ワシントン大のクーパー教授が世界初の肺移植を成功。大きな刺激を受けた24歳の伊達は大学院へ進み、いきなり呼吸器外科で一番難しい肺移植を博士論文のテーマに選んだ。英語の文献を頼りに成犬で肺移植の動物実験に挑んだ。出血死を超えて200例の移植を達成、4年近くたっていた。88年、伊達は大学院を修了、論文「肺移植における Reimplantation Responese (移植後障害) の実験的研究」で医学博士になった。

その年の秋、日本胸部外科学会が東京で開かれた。クーパー教授が「肺移植に関する最新情報」と題して講演。終わると同時にステージ下に駆け寄り、教授の所に留学していた神戸大の良河光一医師が「あなたの下で肺移植を学びたい」と言っています」と紹介。「岡山大の伊達です」と言うのが精いっぱいだった。名前を聞いたクーパー教授は「ああ、忙しくて返事を出していませんでごめんなさい」。3回手紙でお願いしていたのだっ

## 米国医師免許取得

伊達 洋至 京都大呼吸器外科教授 ㊦



肺移植について話す伊達京都大教授

# 本場で肺移植の腕磨く

「無給の研究生ならどうぞ」。ぶっつけ本番の行動が専門を押し開けた。

翌年1月、米セントルイスのワシントン大に着いた。世界中から集まった留学生が7人。40歳前後、腕に自信のある外科医たち。手術の経験も少なく、英語も十分でなく、最年少は

「無給の研究生ならどうぞ」。ぶっつけ本番の行動が専門を押し開けた。

これが認められ、2年目は給料がもらえるようになった。帰国前のあいさつで「肺移植の臨床をやりたい」と決意を表明。「米国医師免許を取得し、アメリカで呼吸器外科のトレーニングを受けたら肺移植医として雇ってあげます」。ボスの言葉に舞い上がった。最終関

門への道筋が見えてきた。91年3月、帰国。岡山大病院に勤務しながら米国医師免許取得の勉強を始めた。試験は年2回、東京と沖縄で行われ、筆記と英語のヒアリングがある。超難関だったが、一発で合格した。

93年再渡米。クーパー教授が紹介してくれたクリブランドクリニック胸部外科フェローとして、手術に専念する日々が始まった。1年間で肺がん、食道がんなど500例をこなした。

米国のドクターたちは伊達の緻密で柔軟なメスさばきに目を見張った。この時、肺移植12例も手術した。

94年クーパー教授の下で肺移植フェローとなった。7カ月間で毎週1例、計25例の肺移植手術をした。

95年帰国、米国での実績もあり、全国の大学から国内で肺移植を行うトップランナーとして注目され3年待った。その間に臓器移植法が成立。98年、満を持し

ての生体肺移植が岡山大病院で行われ、執刀医伊達の沉着冷静な判断と手技で患者の病状悪化というリスクを乗り越え、成功した。

2006年、岡山大大学院教授になった。翌年、京都大教授に就任した。これまで岡山大で59例、京都大で301例を実施。両大学合わせると日本の肺移植の約36%になる。

63歳になった今「若かった私をアメリカが肺移植医として、育ててくれた。岡山大で日本初の生体肺移植を実施できたのは、チャンスを与えてくれた清水信義先生や母校の多くの仲間のおかげ」。今も感謝を忘れない。

豊岡伸一岡山呼吸器・乳腺内分泌外科教授は「米国で腕を磨き、国内初の肺移植を達成された。研究発表でも学会をリードし、今もお肺移植のトップランナー」と言っている。(敬称略)

(阪本文雄・前山陽新聞社 会事業団専務理事)

〓おわり

い上がろうと必死になった。

半年後チャンスが来た。肺移植の保存液の改良プロジェクトチームに選ばれた。抽出した肺を移送する保存液の開発。血液の中の血漿と同じ細胞外液を使うようにして、ブドウ糖も加えた。機能が向上、改良に成功した。

91年3月、帰国。岡山大病院に勤務しながら米国医師免許取得の勉強を始めた。試験は年2回、東京と沖縄で行われ、筆記と英語のヒアリングがある。超難関だったが、一発で合格した。

93年再渡米。クーパー教授が紹介してくれたクリブランドクリニック胸部外科フェローとして、手術に専念する日々が始まった。1年間で肺がん、食道がんなど500例をこなした。

米国のドクターたちは伊達の緻密で柔軟なメスさばきに目を見張った。この時、肺移植12例も手術した。

94年クーパー教授の下で肺移植フェローとなった。7カ月間で毎週1例、計25例の肺移植手術をした。

95年帰国、米国での実績もあり、全国の大学から国内で肺移植を行うトップランナーとして注目され3年待った。その間に臓器移植法が成立。98年、満を持し



# 教室だより

(令和4年9月～令和5年3月)

## 細胞組織学

今期、COVID-19第八波の中、対面授業が再開され会議も対面またはオンラインとなっています。教育面では、医学研究インターンシップで10月から3か月間、医学科三年次生（齋藤さん、高橋君、脇坂君）が当分野にて研究活動を体験しました。11月には細胞組織学特別講義として、近藤洋一教授（大阪医歯大）、佐々木順造名誉教授より対面で、金井正美教授（東京医歯大）よりオンラインで講義いただきました。1月には発生学特別講義として、井関祥子教授（東京医歯大）よりオンラインで、太田訓正教授（九州大）より対面で講義いただきました。研究面では、「ニワトリ網膜色素上皮の分化におけるBHLHE40の関与」*Int. J. Dev. Biol.*誌（衣畑院生、佐藤助教、板東講師、大内教授）、「酸化ストレス誘発性細胞死によるKCNJ13遺伝子ノックアウト網膜色素上皮の突出」*Invest Ophthalmol Vis. Sci.*誌（眼科学分野 神崎医員、森實教授らとの共同研究）（藤田助教、佐藤、大内）、「システニルロイコトリエン受容体1は破骨細胞の分化と骨吸収に必要な」*PLOS One*誌（藤田、大内）、「メダカのEYS欠損変異体は網膜光受容体においてオプシン輸送不全とオートファジーの亢進を示す」*Cell Tissue Res.*誌（佐藤、大内）に論文発表しました。学会活動としては、日本動物学会第93回（9/8-10早稲田大、佐藤）、日本解剖学会第76回中国・四国支部学術集会（10/29-30香川大医、板東）、19th International Conference on Retinal Proteins（10/30-11/4札幌、佐藤）、第45回日本分子生物学会年会（11/30-12/2幕張メッセ、板東、藤田）、第128回日本解剖学会総会・全国学術集会（3/18-20東北大、藤田、佐藤、大内）にて発表しました。（藤田 記）

## 人体構成学

9月から12月にかけて、医学科2年生の系統解剖実習を対面で行いました。新型コロナウイルス感染拡大の状況にらみながらの実習遂行でしたが、無事に終了できたことに安堵しています。限られた期間の中で精一杯の知識を得ようと真摯に実習に取り組む学生の姿が印象的でした。また今年度は薬学部学生やパラメディカルの学生の実習見学を、感染対策をとりつつコロナ禍前と同様の規模で受け入れました。医学科の学生にとっても、他者へ説明する機会を通して人体構造に関わる知識の定着につながる良い機会となったようでした。

11月12日、岡山大学解剖体慰霊祭がJホールにて厳かに執り行われました。ご遺族や本学教職員、学生ら約190人が参列し、献体された方々へ感謝の心をもってご冥福をお祈りしました。本年度は、新型コロナウイルス対策のためJホールで参列できなかった参加者に向け別会場での中継も行われました。学会や

研修会は対面での開催も少しずつ再開され、11月に名古屋で行われた献体実務担当者研修会には技術職員が参加しました。また3月に東北大学で開催される第128回日本解剖学会シンポジウムには、小見山と川口がそれぞれ別途演題提供する予定です。一方、忘年会、同門新年会は昨年同様に中止となりました。

研究面では、新しい顕微鏡システムを導入し、分子生物学的実験とイメージングが行える環境が整いました。10月から1名、O-NECUSプログラムの短期留学生を受け入れています。今年度は医学科3年生のMRIを2名受け入れました。また、小阪らと共に臨床応用を見据えた基礎研究を行っている産婦人科から出向中の博士課程大学院生の入江が、2023年度からの日本学術振興会特別研究員DC2に採用内定しました。

未だ新型コロナウイルス感染「第8波」の終息が見通せない中、教職員・学生が協力して様々な工夫を行いながら、献体業務、教育、研究に携わっています。（川口 記）

## 脳神経機構学

教育では、10月-12月までの3ヶ月間、医学研究インターンシップ（教室配属）で3年生生内3名、学外1名（Andalusian Molecular Biology and Regenerative Medicine Centre (CABIMER), Spain) を迎えました。当研究室では「ラット発達期大脳皮質における発達性読み書き障害原因候補遺伝子の発現解析」「エポキシ樹脂BADGE曝露による神経突起伸長促進作用に関する検討」「ロテノン慢性皮下投与パーキンソン病モデルの腸管における細胞環境の変化」について研究し、CABIMERでは当研究室出身のDr. Francisco J. Díaz-Corralesの指導のもと、網膜変性疾患の治療法開発を目指した研究に取り組みました。

研究活動では、メタルバイオサイエンス研究会2022（京都）で、浅沼教授が日本毒性学会生体金属部会賞を受賞し、「神経保護修飾薬の創薬標的となりうるグリア細胞アストロサイトのメタロチオネイン」と題し受賞講演しました。また、宮崎が「パーキンソン病の脳腸病態を再現しうるモデル動物におけるメタロチオネイン発現変化」について発表し、座長も務めました。11月の第96回日本薬理学会年会（横浜）で浅沼が「パーキンソン病の脳・腸神経変性を再現できるロテノン曝露モデルマウスにおける腸管細胞環境の変化」について、宮崎が「パーキンソン病モデルにおける $\alpha$ シヌクレイン発現と神経変性へのグリア細胞部位特異性の関与」について発表しました。12月には第38回創薬・薬理フォーラム岡山（オンライン）で正井院生が「ストレプトゾトシン脳室内投与による孤発性アルツハイマー病モデルマウスにおけるアストロサイト・ミクログリア活性化の領域特異性」について、進院生が「ロテノン慢性皮下投与パーキンソン病モデルマウスの腸管粘膜上皮におけるHMGB1の特異的な局所とバリア機能破綻」について発表しました。1月にスペインよりDr. Francisco J. Díaz-Corralesが来日し、鹿田会館（旧生化学棟）講堂で「Experimental Models and Innovative Therapies of Retinal Degenerative Diseases」と題し講演し、多くの先生方に御聴講いただきました。2月の第48回岡山脳研究セミナーでは、禅正院生が「大家族における発達性ディスレ

クシアの病因遺伝子の探索と機能解析」について発表しました。

大学院特別講義では、1月に近藤洋一先生（大阪医科薬科大学医学部生命科学講座解剖学教室・教授）に「脳を陰で操るグリア細胞」について講義して頂きました。

宮崎が12月に「食品容器より溶出されるエポキシ樹脂への妊娠・授乳期曝露により惹起される自閉スペクトラム症様の産仔早期脳発達のメカニズムの解明」で岡山医学振興会研究助成（2022年）に採択されました。

研究活動の詳細および発表論文に関しては、教室のホームページ（<https://okayama-medicalneuro.com>）をご覧ください。

（宮崎 記）

## 細胞生理学

同窓会の皆様、こんにちは。細胞生理学です。令和4年9月から令和5年2月の近況をご報告いたします。新型コロナウイルス感染症は、ワクチンは4-5回接種に至りましたが、第8波がどんどん大きくなっています。日本では、屋内は勿論、屋外でも、誰もがマスクをしています。この感染症パンデミックは、一体、いつまで続くのか、誰も見通せない状況です。さて、細胞生理には、令和4年10月から12月末まで、医学部3年生の医学研究インターンシップ（MRI）で、小南羽留花さんと今井彩乃さんが参加しました。小南さんは、僕が直接指導する形で、白神美津穂さん（非常勤研究員）と一緒に、マウス交感神経節を構成する新しい細胞の免疫組織学的解析などに取り組みました。今井さんは、皮膚科から出向の大学院生、浦上仁志医師に実験を習い、ストレスがあると交感神経の働きでアトピー性皮膚炎が増悪する現象のメカニズムについて、特にマクロファージの貪食機能（エフェロサイトーシス）に着目した研究に取り組みました。修士2年生は、前田夢咲さんは唾液分泌の自律神経性調節に取り組み、藤田悠紀さん（吉川宗一郎順天堂大学准教授の元に内地留学、環境エンリッチメントと免疫機能の研究）、西條雅貴君が1月に修士論文を提出し、卒業予定です。修士1年生は田中優樹君（岡大環境理工卒）と重平崇文君（川崎医療福祉大卒）です。博士大学院生は、博士2年の長尾圭君（順天堂大学へ内地留学）、珊瑚 徐（POST-ONECUS、1月から鳥取大学へ内地留学）、また臨床教室との連携で、呼吸器・乳腺内分泌外科から大谷悠介医師と朱医師、整形外科から片山晴善医師と板野拓人医師、皮膚科から浦上仁志医師が参加中です。大学院生を送って下さり、豊岡教授、尾崎教授、森実教授に感謝いたします。秘書小野桂子さんの美味しいパンやケーキ、毎日感謝です。

（神谷 記）

## システム生理学

当研究室は日本学術振興会科学研究費・基盤Aの研究課題「新規メカニカル負荷装置の開発を通じた次世代メカノメディスンへの挑戦」および防衛装備庁安全保障技術研究推進制度の研究課題「メカニカルストレス負荷システムの開発」を継続して行っています。

当研究室の森松助教が、日本生物物理学会サブグループの主

催によるメカノバイオ討論会2022（12月）を開催しました。メカノバイオリロジー分野の若手研究者が活発な発表と議論を繰り広げ、当該分野のますますの発展を予感させるイベントとなりました。

学会発表に関しては、以下のように行いました。第45回日本生体医工学会中国四国支部大会（10月：貝原、小松）。この学会では、当研究室で研究を行なっている心臓血管外科の小松弘明助教が「ヒト単離心筋細胞における長さ張力関係を用いた力学機能評価」の発表にて最優秀若手講演奨励賞を受賞しました。第74回日本生理学会中国四国地方会（11月：高橋、李強）。Cell Symposium: Advances in Therapeutic Application of Stem Cells 2022（12月：高橋）。第100回日本生理学会（3月：成瀬、高橋、貝原、小松、李強、Kamran）。

メンバーに関しては、医学研究インターンシップにて医学科3年生の鎌田尚泰さん、福原慧大さん、山田彩可さんの3名が当教室にて研究を行いました。9月、梁は博士課程を短縮で修了し、学位授与式にて卒業生の代表としてスピーチを行いました。10月、博士課程の王夢雪は令和5年度岡山大学科学技術イノベーション創出フェローシップの選考により、OU Fellowship (type A) を獲得しました。また、10月にO-NECUS留学生として韓曉霞を迎えました。

（高橋 記）

## 分子医化学

魅力ある教育研究分野をつくるべく教育および各研究テーマに取り組んでいます。

人事関係では、本年度1-2月に博士の学位審査があり、石橋啓さん（インプラント再生補綴学:博士）が無事修了しました。

学会活動は、引き続きCOVID-19の影響を受けているものの、対面式やハイブリッド形式の学会が増えつつあります。12月17日には岡山大学が主幹校として、「西日本医学生学術フォーラム2022」を、鹿田会館講堂をメイン会場としてハイブリッド開催しました。医学科5年野島弘二郎さんを実行委員長として、Pre-ART生を含む10名からなる学生実行委員会が運営に当たり、担当教員の大橋とARTプログラム推進室小笠原は準備を担当しました。広報に努めたおかげで、9大学より学生・教職員約90名（オンライン参加者含む）にご参加いただきました。口演発表（12題）の内容は多岐に渡り、レベルの高い発表でフロアからも多くの質問が出ました。一方、ポスター発表（11題）では、3年ぶりの対面発表ということもあり特に参加者間での活発な議論や交流がありました。2月開催の岡山脳研究セミナーでNGUYEN Hoang Duy大学院生が発表を行いました。3月には、大橋が日本軟骨代謝学会に参加しました。ところで、大橋が6月24-25日に第55回日本結合組織学会学術大会を岡山大学鹿田キャンパスで開催させていただくことになりました。記録を遡りますと岡山での開催は1980年の第12回（岡山大学内科 大藤真先生）以来となるようで、大変身が引き締まる思いです。2月1日より演題募集・参加登録を開始しております。ご興味の方は参加をよろしくお願ひ致します。

教育関係では、分子医化学分野は9月から1月まで、基礎病態演習（3年）、医学研究インターンシップ（3年）、分子医化



学講義と実習（1年）を担当しました。講義は対面式で分子医学化学実習は対面とオンラインと取り混ぜて行われました。また、医学科非常勤講師として京都大学・渡辺亮先生、順天堂大学・洲崎悦生先生、東京都医学総合研究所・神村圭亮先生、大分大学・佐々木隆子先生より3年ぶりに対面式での特別講義を拝聴しました。10月から12月には3年次3名（梅岡、菊田、北見）がインターンシップで配属し、3つの研究グループに分かれて研究に従事しました。また、2名（市川、手納）はイギリス、リーズ大学（Kwok研究室）とインディアナ大学（植木研究室）に2か月余り派遣されました。それぞれ、熱心に取り組んでくれました。1月には沖縄科学技術大学院大学・堀哲也先生による大学院特別講義「ホールセルバッチクランプ技術を用いた神経伝達物質放出過程の機能解析」を拝聴しました。（大橋 記）

## 薬理学

令和3年10月より細野祥之教授の新体制が始まり、研究、および学生指導も軌道に乗ってきました。現在の薬理学構成員は細野祥之教授、逢坂大樹助教、王登莉助教、澤田隆介助教、奥舎有加特任助教、研究員の劉克約、花房裕子、渡辺香里、澤成志乃、院生（博士課程）の喬寒棟、宮本理史、中本翔伍、吉川真生、佐藤まどか、家護谷泰仁、外国人非常勤研究員の袁煒文、事務職員の藤田さやか（産休中）、岡内邦江の17名です。1月に着任した奥舎特任助教は米国留学後であり、がん研究推進に向けて大きな役割を担います。

【教育】10～12月の医学科3年生MRI（3名配属）では、①捨てられている献血成分からお宝を探す、②アルツハイマー病の新しい治療標的遺伝子や治療候補化合物を深層学習を用いて探す、③漢方薬の効能の予測、計3演題に各人が取り組みました。①ではゼブラフィッシュでのin vivo CRISPR screeningを目標に、gRNA調整、レポーター遺伝子導入、マイクロインジェクション、標的遺伝子切断確認等の手技を実践し、重要な条件決定を達成できました。②③では、オープンソースから深層学習モデルの構築・最適化を行い、既報にはない標的遺伝子、薬効、および新規候補化合物のスクリーニングに成功したため、ウエット実験による確認という次の研究ステップへ進む道筋が出来ました。3人とも自ら学び、実行する研究の基礎を体得できたと思います。

【研究】新たな助成金獲得として、逢坂助教の“JSTダイバーシティ農業（健康・安全パート：サブリーダー）”があり、全学案件にも尽力していきます。また、大学院生の宮本理史さんが令和5年度OUフェロシップ事業に採択されました。さらに4月から数名の大学院生（修士・博士）の申し込みもあり、今後ますます賑やかになる一方、やや教室が手狭なため新たな研究スペースの確保も今後の課題です。（逢坂 記）

## 病理学（免疫病理）

2022年後半の動きについてお伝えします。8月には、中国からの大学院生、李 春寧が研究を終え帰国しました。ONECUSプログラムで2018年に当教室に来てから6年もの間、

密度の濃い研究を続けてきました。今後のご活躍をお祈りします。9月には、卒後初期研修を終え、その後姫路赤十字病院で半年間の後期研修をお世話になった大学院生の藤井 裕生が教室に戻ってきました。これから診断病理の研鑽と共に、本格的に研究に取り組む予定です。10月には3名の学生がMRIプログラムで当教室に配属され、一緒に研究を行いました。講義・実習は今年から対面方式に戻りました。実習は以前からバーチャルスライドで実施しているのでオンラインとの親和性が高く、過去2年はオンラインでさほど不自由は感じませんでしたが、いざ対面に戻ると、組織上の構造物を直接指差しながら質疑応答でき、学生の理解を逐一確認できるのが当たり前のことながら素晴らしいことだと実感しました。ただ、学生はオンラインでの聴講に慣れてしまったためか、今ひとつ積極性に欠けるような気がします。我々はweb上のやりとりで籠ることなく、教育と研究の活動範囲を広げていきたいと思っています。

（藤澤 記）

## 病理学（腫瘍病理）

吉野正名誉教授が退官後は教授不在の状況が続いておりましたが、12月1日付けで後任の山元英崇が九州大学より着任しました。新体制スタートと同時に、臨床・教育・研究面で精力的に活動を開始しており、今後のご活躍が期待されます。また、吉野には引き続き特命教授として、研究・診断の両面でご尽力いただいております。

人事に関しては西村碧フィリーズが10月より保健学研究科分子血液病理学の講師に赴任しました。学内では9月付で韓言言が学位を取得し、12月に行われた細胞診専門医試験では表梨華と小野早和子の2名が見事に合格いたしました。表梨華は第138回日本病理学会中国四国支部学術集会で優秀演題賞を受賞し、これは2回連続の受賞となりました。国際病理学アカデミー日本支部のスライドセミナーでは田中健大が昨年より引き続き講師を務めました。日本病理学会主催の希少がん病理診断講習会の講師を山元英崇、柳井広之（病理診断科）、佐藤康晴（保健学研究科分子血液病理学）が務め、全国で年間16名が選出される講師のうち3名を教室関係者が占めており、診断面で岡山のプレゼンスを全国に示すことができました。

新体制となったばかりで安定して教室を運営していくにはもう少し時間がかかるかと思えます。教室員一丸となって取り組んでまいりますので、同門の先生方に置かれましては今後ともご支援・ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

（田中 記）

## 病原細菌学

医学部教育では、10月からMRIが始まりました。当分野にはアーカンソー大学派遣2名、北里大学派遣1名、学内1名の計4名が配属されました。アーカンソー大学に派遣された2名の学生は現地で学会発表を行うという活躍ぶりでした。

大学院教育では、修士課程1年生の辻秀真さんが第75回日本細菌学会中国・四国支部総会にて口頭発表を行いました。辻さ

んは3月に開催される第96回日本細菌学会総会でも発表を予定しています。

研究面では、内山准教授が三島海雲記念財団の学術研究奨励金に、後藤助教がロッテ財団、発酵研究所、岡山医学振興会の学術助成金に採択されました。内山准教授が10月に開催された第66回ブドウ球菌研究会、山本助教が第27回日本口腔顔面痛学会学術大会・シンポジウム、後藤助教が翌年2月に開催された第34回日本臨床微生物学会学術大会・学術集会においてそれぞれ発表を行いました。3月開催予定の日本農芸化学会2023年大会シンポジウムでは松下教授が、同月開催の第96回日本細菌学会総会ではシンポジウムに内山准教授が登壇を、客員研究員のAsaduzzamanがポスター発表を予定しています。

10月には金政泰弘名誉教授がご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。金政先生は叙位の正七位を受章されました。(後藤 記)

## 病原ウイルス学

令和4年9月より加藤大和助教が赴任しました。バイオインフォマティクスが専門です。10月より医学科3年生の田中柚衣さん、直井爽大さん、永野貴士さん、小堀貴之さんの4名をMRI(医学研究インターンシップ)として受け入れました。また保健学科4年生の大亀雄輝さんと中野智帆さんを受け入れ、卒業研究に取り組んでもらいました。本田教授の指導のもと、ラボスタッフとともに皆真剣に研究に取り組み、12月には無事に研究成果の発表を行いました。また中国から大学院博士課程学生として劉曼さんが入学し研究を開始しました。第36回中四国ウイルス研究会(徳島)において、本田教授、小川助教と大学院生の李さん、前川さん、佐々木さん、廣田さんが研究成果を発表しました。11月には第69回日本ウイルス学会(長崎)で小川助教、李さんが研究発表しました。2月には来年度の基礎病態演習の担当チームメンバーが決まり、小川助教と加藤助教がオリエンテーションを実施しました。(加藤 記)

## 疫学・衛生学

昨年6月に佐々木助教が着任しました。また、学部三年生の「医学研究インターンシップ」では5名の学生を受け入れました。そのうち2名は、ハーバード大学公衆衛生大学院に配属されました。学んだ経験が大いに活かされることを期待しています。

当講座が事務局をしている岡山県クラスター対策班(OCIT: Okayama COVID-19 cluster Intervention Team)も活動を継続しております。OCITは、医療機関や福祉施設において集団発生した場合などに、速やかに感染拡大防止対策を講じられるよう編成されたチームです。ご協力いただいている学内外の皆様へ深く御礼申し上げます。本年1月4日には、「岡山大学疫学・衛生学分野ニュース(新型コロナ情報)」のVol.3「岡山市におけるワクチンの感染予防・重症化予防効果について」を発行し、講座HPで公開しました。感染対策の参考となる正確な情報を提供しております。また、昨年12月には、NPO法人岡山健康

医学研究会主催にて、感染症疫学基礎研修会をオンライン形式で開催しました。これは主に、感染症対策に従事する自治体職員を対象とした研修会で、様々な角度から新型コロナウイルス感染症を振り返る機会となりました。本年3月には、食中毒疫学研修会を開催予定です。

昨年7月と9月には、高尾准教授が産業医基礎集中研修会を津島キャンパスにおいて開催しました。毎回、定員を超える申し込みがある基礎研修会ですが、岡山大学医師会枠を若干名設けておりますので、お役立てください。

昨年11月には当講座のロゴが完成し、講座HPで公開しております。そのほか、講座HPには、「岡山県内の感染状況・医療提供体制の分析」や「備前市新型コロナウイルス抗体検査事業・中間結果報告」なども掲載しております。今後ともご支援いただきますようお願いいたします。(鈴木 記)

## 公衆衛生学

令和4年9月～令和5年3月の教育活動としては、9月に4年次生を対象とした公衆衛生学の講義・実習、大学院生(博士・修士・MPH)を対象とした臨床研究・予防医学実践論の講義、9-12月に3年次生を対象とした医学研究インターンシップ、1-2月に大学院生(修士・MPH)を対象とした公衆衛生学概論の講義等を行いました。依然COVID-19の感染流行下にありましたが、対面とオンラインの両方を組み合わせた講義・実習となりました。

令和4年9月～令和5年3月の研究活動としては、9月開催のアルコール・薬物依存関連学会合同学術総会では神田教授が、10月開催の日本公衆衛生学会総会では神田教授、久松准教授、福田助教が、同じく10月に京都で開催された国際高血圧学会・日本高血圧学会総会では久松准教授と絹田助教が、12月に東京で開催された国際栄養学会議では絹田助教が、令和5年2月に開催された日本疫学会学術総会では神田教授、久松准教授、大学院生吉田が、それぞれ学会発表しました。

現在行われている研究としては、神田教授が研究代表を務める「高校生eスポーツアスリートにおける心身の健康実態の解明」(基盤C)、「地域住民における測定値自動送信技術を用いた家庭血圧管理状況と血圧変動要因に関する探索的研究」(オムロンヘルスケア株式会社との共同研究)、地域住民における飲酒状況と家庭血圧の両変動およびその関連要因に関する研究(お酒の科学財団公衆衛生学領域助成)、久松准教授が研究代表を務める「家庭血圧の長期縦断研究からみた血圧変動の共振現象及び無症候性脳血管障害との関連」(基盤C)、福田助教が研究代表を務める「壮年期を対象とした伴走型血圧管理支援事業の役割と評価:社会的処方の観点から」(基盤C)などがあります。

現在、博士課程に5名、修士課程に2名、それぞれ大学院生が所属しており、ますます活発な研究教育活動を続けています。(久松 記)



## 免疫学

研究面では9月29日～10月1日に開催された、第81回日本癌学会学術総会（横浜）で西田と鶴殿がシンポジストとして発表と座長をそれぞれ行いました。また、12月7～9日に開催された日本免疫学学術集会（熊本）で大学院生Chaoがポスター発表を行いました。

人事面では、大学院を修了した徳増美穂が10月から助教として着任いたしました。また、助教の工藤が3月に退職予定です。2018年の5月から約5年間大変お世話になりました。この場を借りて、鶴殿教授をはじめ研究室の皆様、そして大学関係者の皆様に御礼申し上げます。

教育面では、医学科3年生の10～12月のMRIに2名が配属され、それぞれ「メトホルミンと絶食による抗腫瘍効果」と「メトホルミンによる老齢マウスCD8+ T細胞の機能改善」をテーマに研究に取り組みました。研究生活の中で体験したこと感じたことを、今後の学生生活にも活かしてもらえれば幸いです。医学科2年生の12～1月の基礎免疫学は、外部講師の先生方も含め、今年度は2年ぶりの対面講義と実習を行いました。COVID-19の感染もいまだ続き、学生にも連日のように感染者が何名か出ておりますが、大きな混乱はなく終えることができそうです。来年度は寄生虫学講義が5月に3年生、年を跨いで1～2月に2年生と、1年に2回開講される予定です。

（工藤 記）

## 法医学

法医学実務面では、令和4年の1年間の剖検数は190体となり、一昨年の173体から増加しました。今年に入ってから1月末までの剖検数は15体となっております。

人事面では、昨年9月より濱口ますみさんが技術補佐員として加わりました。本年度は海上保安部の研修生（医学部研究生）の受け入れはありませんでしたが、昨年10月25日から11月11日にかけて検視官講習（検視官等の養成のための警察大学校が行う講習の一環、法医解剖等の実地研修）として、岡山県警察などから5名を受け入れました。

学術面では、9月には第42回日本小児病理研究会学術集会のシンポジウムにおいて宮石教授が「小児病理医が知っておきたい死因究明と法医学」について発表いたしました。10月には第81回日本公衆衛生学会総会において山崎助教がポスター発表を、第8回法医公衆衛生学研究会（同総会自由集会）では宮石教授と山崎助教が発表を行いました。同月に徳島で開催された第39回日本法医学会学術中四国地方集会においては谷口助教が口演発表を行いました。第40回日本法医学会学術中四国地方集会は本年10月13日、14日に岡山県医師会館において法医学教室開講100周年記念と合わせての開催となっております。

教育面では、法医学講義をほぼ対面で行い、法医学実習も3年ぶりに対面実習を実施しました。医学教育インターンシップでは昨年の10月から12月にかけて、3年生2名を受け入れました。本年1月からは6年生の選択制臨床実習として各期2名ずつを受け入れており、計12名が実習を行うことになっておりま

す。

末筆になりましたが、同窓の先生方のご健勝をお祈り申し上げます。（山崎 記）

## 腫瘍微小環境学

腫瘍微小環境学分野として2年目が終わり3年目に入ります。多くの先生方のサポートもありまして、スタッフ4名、博士・修士などの学生合わせて15名程度、技術補佐員5名の大所帯となりました。興味を持った熱心な医学部学部生さんにも参加してもらって賑やかなラボになっています。

科研費、AMED、民間財団等に複数採択され、複数の企業とも共同研究を行っています。特に2022年度に立ち上がったAMED-CRESTの免疫記憶の班に加えていただき、大変勉強になっています。岡山に着任してから始めたプロジェクトが徐々に成果を出しており、がんネオ抗原に関する論文が*Br J Cancer*、MHCの発現と耐性に関する論文が*Cancer Immunol Res*、抗CTLA-4抗体に関する論文が*Cancer Sci*に受理されました。大きいプロジェクトとしては、ミトコンドリア・免疫代謝の研究で大変面白いデータが出ており、またシングルセルシーケンズから得たデータの続きの成果もいくつか面白い結果になっていて、*Cell*、*Nature*、*Science*の本誌～姉妹誌に複数投稿し、無事Reviewに回っています。受理には1年以上かかるとは思いますが、早く成果を発信できればと思っています。

臨床的な疑問から臨床データや検体を解析することが病気の本体解明に最も近いと考えておりまして、我々の研究は臨床の先生方のご協力なしでは成り立たない研究です。この場を借りて深く御礼申し上げます。また、そのような我々の研究に興味をございましたら是非気軽にお声掛けください（ytogashi@okayama-u.ac.jp）。まだまだ若輩故至らぬ点もございますが、今後とも皆様の温かいご支援並びにご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。（富樫 記）

## 細胞生物学

【研究成果発表】友信奈保子助教が筆頭の論文「Histidine-Rich Glycoprotein Suppresses the S100A8/A9-Mediated Organotropic Metastasis of Melanoma Cells」が*Int J Mol Sci* 誌（2022 Sep 7; 23(18): 10300.）に掲載されました。博士課程4年生Herik Rodrigo AGさんが筆頭の論文「Toll-like receptor 4 promotes bladder cancer progression upon S100A8/A9 binding, which requires TIRAP-mediated TPL2 activation」が*Biochem Biophys Res Commun* 誌（2022 Dec 17; 634: 83-91.）に掲載されました。第81回日本癌学会学術総会（令和4年9月、横浜）に参加し、木下理恵助教、山本健一助教、友信奈保子助教、博士課程2年生 合原勇馬さんが癌進展・転移のメカニズムとその抑制を目指したタンパク質製剤の開発に関する研究成果について発表を行いました。第45回日本分子生物学会年会（令和4年12月、千葉）に参加し、修士課程2年生 吉澤智香子さんがREIC/Dkk-3分子の乳がんにおける機能について発表を行いました。

[受賞、研究資金の獲得状況]研究費の獲得では、研究活動スタート支援、公益財団法人小林財団 研究助成に友信奈保子助教が、新規採択されました。

村田等講師がタマ生化学と新たに共同研究を開始しました。阪口教授が、ノーベルファーマ株式会社、株式会社ホロンシステム、株式会社カイトック、株式会社資生堂と引き続き共同研究を進めております。

今後も教職員一同研究に励んでいきたいと思っておりますので、ご指導の程よろしくお願ひ申し上げます。(木下 記)

## 組織機能修復学

当教室の現況の報告をさせていただきます。

人事関係では、高尾知佳助教が講師へと昇進されました。Pre-ART生の栢野功政さん(4年生)が檜山武史先生のご栄転に伴い当教室へ移籍となりました。檜山先生の下で行ってきたsingle cell RNA Seq解析の技術を存分に奮ってくれております。近いうちに栢野さんならではの研究に取り組んでもらえることと思います。また2023年03月に、医学セミナーの時から当教室に参画してくれていた医学部生の吉田朱里さんが卒業、清水大先生(呼吸器外科)、佐藤浩平先生(整形外科)、太田智之先生(形成外科)が博士課程を修了されました。

学術関係では、高尾助教(当時)と修士1年生の藤澤祐樹さんが8月末に開催されたBrainstorming 2022に参加し二人とも研究奨励賞を受賞しました。その他、各学会で発表を行いました。(第41回日本運動器移植・再生医学研究会(10月頭):藤澤さん、37th日本整形外科学会基礎学術集会(10月中旬):高尾助教(当時)、第45回日本分子生物学会年会(11月末~12月頭):修士課程の皆さん、第35回日本軟骨代謝学会(03月頭):高尾講師・山田大祐助教(学術奨励賞講演)、第22回日本再生医療学会総会(03月末):宝田剛志教授(シンポジウム)、高尾講師、山田助教、藤澤さん)

教育関係では、3年次科目『医学研究インターンシップ』で3名を迎えました。「軟骨シート作成技術の改良」「ヒトiPS細胞由来の肢芽間葉系幹細胞から放出されるエクソソームの研究」「分子動力学シミュレーションによるタンパク質相互作用阻害剤の探索」について熱心に研究に取り組みました。

最後になりましたが、今後とも先生方のご支援並びにご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

(大曾根 記)

## 消化器・肝臓内科学

昨年3月に岡田裕之前教授が退官された後、主任教授不在となっておりましたが、本年1月に大塚基之新教授が東京大学消化器内科より着任されました。「最適医療の実践と次世代医学の創生安全~そしてそのための人材育成」をスローガンに、着任早々より全医局員との面談、研究室の整備など新たな教室の体制作りに着手されており、全医局員新たな気持ちで一丸となって診療、研究、教育に従事しています。

スタッフ人事面と致しましては昨年10月に大腸腫瘍グループ

リーダーとしての診療、研究はもちろんのこと、学部学生教育において卓越した能力を発揮した原田馨太講師(H11)が岡山済生会総合病院へ赴任し、胆膵グループで活躍中の藤井祐樹(H22)が助教に昇任しました。また本年1月に高原政宏(H16)が三朝地域医療支援寄付講座助教に着任しました。

大学院生、医員の人事面では後期研修医の林里美(H30)が専門医プログラムの集大成として赤磐医師会病院へ赴任し、一方で服部直(H27)が姫路赤十字病院から、木村彰吾(H27)が津山中央病院より帰局し、病棟医として消化器内科のさらなる高みを目指すべく日々研鑽を積んでおります。また一年間の病棟医を終了した佐藤亮介(H26)は胆膵グループ、平田翔一郎(H27)は消化管グループに配属となり、診療及び研究に従事しております。さらには昨年10月より大学院生の竹内桂子(H21)が、12月より倉岡紗紀子(H25)、本年2月より牧佳恵(H27)が産休に入りました。

今後は新体制の下、これまでの伝統を継承しつつ、消化器・肝臓内科学教室のさらなる発展のために医局員全員で精進し、同窓の皆様にご協力できるよう努力致しますので、引き続き御指導・御鞭撻の程よろしくお願ひ申し上げます。(川野 記)

## 血液・腫瘍・呼吸器内科学

岡山大学同窓の先生方におかれましては、平素より多大なご支援をいただいておりますことを心より御礼申し上げます。当教室の現況の報告をさせていただきます。

いまだコロナの終焉が見通せない状況ではありますが、前田嘉信教授は、2021年4月より岡山大学病院長として現在に至るまで、大学病院の維持・発展に尽力しております。「患者さんのために、保健・医療の発展のために、自己ではなく社会のために」という理念のもと、コロナ禍の様々な場面におけるチーム医療の実現にご協力いただき、各診療科、同窓の先生方に深く感謝申し上げます。

教室行事といたしましては、2022年11月26日に同門会総会・開講記念講演会を3年ぶりの対面方式で開催いたしました。開講記念講演会では、京都大学大学院生命科学科 教授 高田稜先生より「抗がん化学療法の臨床効果はどう決まる:基礎研究者の視点から」についてのご講演を、本学腎・免疫・内分泌代謝学 教授 和田淳先生より「糖鎖のバイオロジーと疾患」についてのご講演を賜りました。両ご講演とも最先端の内容を本当に分かりやすくご説明くださり専門外の私とその分野の専門家になったのではと錯覚してしまうような素晴らしい御講演でした。この場を借りてお礼申し上げます。また、本年度は、当科木浦勝行教授(呼吸器・アレルギー内科)の退任年度となっております。長年当科の屋台骨を支えてこられた木浦教授は、基礎研究・臨床研究・教育・診療と大きな貢献をされてこられました。この功績の火を絶やさぬよう医局員一同引き続き頑張りたいと思います。

教室の実務体制は、医局長 市原英基、外来医長 浅田騰、病棟医長 肥後寿夫(西8階)・藤原英晃(西3階BCR)、教育医長 榎本剛が担当しております。10月には米国よりがんプロ助教として清家圭介が帰局いたしました。呼吸器・アレルギー



内科の医員は、10月に田中孝明が加わり、1月には血液・腫瘍内科の医員として林野健太が加わりました。

最後になりましたが、引き続き「患者さんのために、医学のために、社会のために」教室員一丸となって診療、研究、教育に取り組んで参りますので、何卒ご支援、ご指導の程よろしくお祈り申し上げますと共に、同窓の先生方のご健勝をお祈り申し上げます。(市原 記)

## 腎・免疫・内分泌代謝内科学

和田淳教授は、教育・臨床・研究・学会活動をはじめ、広く精力的に活動を行っております。

当科は、基礎研究、臨床研究問わず、幅広く研究活動を行っています。和田教授が研究代表者である「尿レクチンAレイ解析を用いた腎疾患診断キットの開発」(令和2-4年度AMED難治性疾患実用化研究事業)で体外診断薬の開発を目指しております。また「糖尿病性腎臓病における糖鎖異常と進展機構」(令和4-6年度基盤研究B)や「糖鎖修飾ソマトスタチンGT-02037の前期第Ⅱ相試験」(医師主導治験)など糖鎖研究に力を入れています。

研究・診療面では、四方賢一先生が日本糖尿病合併症学会のExpert Investigator Award、内田治仁先生が国際高血圧学会ISH2022 Kyoto Best Oral Presentation Platinum Awardを受賞されました。また、大西康博先生が第28回日本腹膜透析学会の優秀演題賞、縄雅翔一先生が第33回日本リウマチ学会中国・四国支部学術集会の若手奨励賞、田原稔久先生が第60回日本糖尿病学会中国四国地方会の若手研究奨励賞を受賞されました。

人事面では、三朝地域医療支援寄付講座の助教を務めていた野島一郎先生が11月より国立療養所邑久光明園に赴任し、同講座の助教である森本栄作先生が1月より当科に帰局しました。また、10月より岡田梨乃先生が医師支援枠医員として病棟業務に従事しております。1月より内山奈津美先生が国保ヘルスアップ事業の医員に復帰しております。

最後になりましたが、同門の諸先生方の御健康と、益々のご繁栄を心よりお祈り申し上げます。(田邊 記)

## 精神神経病態学

令和4年9月から令和5年3月までの教室だよりをお届けします。

令和4年10月1日付で、精神科神経科講師を務めておりました高木学が教授に就任し、新体制での教室運営がスタートいたしました。高木教授就任に際しましては、同門・関連病院・他教室の先生方から多数の温かいお祝いのお言葉やお心遣いを賜り、誠にありがとうございました。この場をお借りして、心よりお礼申し上げます。教室は、医局長・岡久祐子、外来医長・千田真友子、病棟医長・竹之下慎太郎、教育医長・藤原雅樹の新体制で、教室員一同、気持ちも新たに臨床・研究・教育に取り組んでおります。

研究面では第37回日本老年精神医学会で大学院生の林聡が特別奨励賞を受賞しました。また、令和4年9月に橋本望が博士

課程を修了し、学位を授与されました。令和5年3月には大島義孝、樋之津健二、山田裕士、千田真友子の4名が学位取得する予定です。

教室行事としまして、令和4年12月10日に第129回岡山大学大学院精神神経病態学教室同門会臨床集談会を開催いたしました。神戸大学大学院医学研究科デジタル精神部門の曾良一郎教授による「精神生物学からデジタル精神医学へ」の特別講演があり、藤田賞の中島豊爾先生(岡山県精神科医療センター)、奥村賞の松本洋輔先生(岡山大学病院)、Papers of the year賞の大島義孝先生(岡山大学病院)、橋本望先生(岡山県精神科医療センター)の受賞講演がありました。現地開催としましたが、多くの先生方にご参加いただき、盛況のうちに会を終えることができました。皆様からいただきましたご支援、ご協力に感謝申し上げます。

以上、簡単ではございますが、教室の近況をご報告させていただきました。引き続き、当教室にご指導ご鞭撻をよろしくお祈り申し上げます。末筆ながら、同窓の先生方のご健康とご活躍をお祈りいたします。(岡久 記)

## 小児医科学

診療では「小児医療センター」を基盤として、先進的高度医療を提供しています。2012年に設置された当センターは小児科、小児外科、小児神経科、小児循環器科、小児血液・腫瘍科、小児歯科、小児麻酔科、小児放射線科、小児心臓血管外科、小児心身医療科が中心になり、院内・院外の多くの診療科・診療部門との横の連携を発展させています。昨年11月には、オンライン市民公開講座を開催しました。昨年8月には、重篤な小児患者に対して高度集中治療を提供するとともに、小児救急医療の臨床教育を行う「小児救命救急センター」も設置されました。中国四国地方では初になります。

「周産母子センター」ですが、産科婦人科と連携しながら、NICU患者の診療にあたっています。現在、NICUはその診療の実態に比して6床しかありません(GCUはなく「新生児室」のみです)。国立大学病院の中では最低レベルです。岡山大学と岡山県はこの事態を深刻にとらえていました。周産母子医療体制のさらなる強化と人材育成を目的として、2024年後半、当院にはNICU 12床、GCU 12床が設置されます。2025年にはMFICU 6床も加わって、現在の「地域周産母子センター」より「総合周産母子センター」に拡充されます。

広島県と福山市による寄付講座である「小児急性疾患学講座」では、広島県福山市とその周辺地域の医療保健福祉を池田政憲特命教授、鷲尾洋介、津下充らが支援・強化しています。今後、周産母子医療も含めて、当該地域の小児保健医療体制はますます強化されます。本年4月には玉野市による寄付講座である「臨床小児医学講座」も設置されます。同時に、他医療機関との連携や協働もさらに進展する予定です。

岡山大学小児科医局に話題を移します。長年、病棟医長を担当していた栄徳隆裕が川崎医科大学小児科准教授に就任したのに伴って、栗田佳彦が病棟医長を務めています。そして、引き続き、馬場健児が医局長、長谷川高誠が副医局長、藤井智香子

が外来医長、吉本順子が教育医長を務めています。COVID-19の大流行による様々な制約の中で、医局員が丸一となって小児医療の「最後の砦」としての責務を果たしています。

研究面では、各診療グループが高いレベルの成果を挙げています。中国四国の連携施設と協力しながら、小児科同門会として1～2週に1編のペースで英語論文が出されています。トップジャーナルにもいくらか成果を出せるようになりました。海外留学より帰国した栗田佳彦（トロント）、石田悠志（ストックホルム）らが研究面でも牽引しています。小児医科学准教授（小児心身医療科科长）の岡田あゆみが、現役の小児医科学研究者にとって最高の賞である「小児医学川野賞（2022年度）」を受賞しました。この4年間で、岡山大学小児科同門会に所属する小児科医が3度、「小児医学川野賞」の栄冠を受けています。プロ野球で例えますと、最近のオリックスやヤクルトなみの力をつけてきたと言っていると思います。

岡山大学小児科の医局員は、出産や育児などで一時仕事を中断している方も含めて35名程度です。当小児科への「入局者」は毎年コンスタントに6～10名（約半数が女性）ですが、この数字は国内有数です。毎年、当院プログラムにて小児科専門研修を開始する方は5名前、岡山大学大学院（小児医療関連）に入学する方、卒業する方はそれぞれ5名前です。

中国四国の中核的な総合病院の多くは岡山大学病院の連携施設ですが、それらの病院の部長・副部長の小児科医師ら約20名が臨床教授、約10名が臨床准教授、約20名が臨床講師、約10名が非常勤講師として、当院の豊かな教育環境をさらに充実させてくださっています。（塚原 記）

## 発達神経病態学

小林勝弘教授以下、秋山倫之准教授（てんかんセンター副センター長、医局長）、秋山麻里助教（教育医長）、柴田敬助教（外来医長）、土屋弘樹助教（病棟医長）の体制で、教室運営を行っています。医局人事に関しては、前回以降特に変化はございません。

診療については、新型コロナウイルス感染症の動向に左右される部分が多いですが、感染対策に気を使いながら、大きな支障なく続けております。他診療科との連携（小児医療センター、てんかんセンター、結節性硬化症ボード、小児遺伝外来）も同様に継続しております。同門の先生方からの患者紹介を引き続きよろしくお願いいたします。

学会活動は、ハイブリッド開催や現地開催が増えてきたこともあり、現地参加での発表機会が戻ってまいりました。日本てんかん学会（演者：小林勝弘、秋山倫之）、日本臨床神経生理学会（演者：小林勝弘、秋山倫之）、日本てんかん学会中国四国地方会（演者：道上理絵）で、発表を行いました。今年5月25日（木）～27日（土）は、小林勝弘教授を会長として第65回日本小児神経学会学術集會を「先端研究と臨床的洞察の融合に向けて」のテーマで開催予定であり、同門の先生方からのご支援をぜひとも賜りたく存じます。

研究面では、てんかんや神経生理学、代謝物質分析等に関する臨床研究が進行中であり、質量分析計による新規代謝物質測

定システムの構築を続けております。限局性皮質異形成II型による難治てんかんに対する長期継続投与の特定臨床研究も継続中です。

今後とも同門の諸先生方のご指導・ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。（秋山 記）

## 消化器外科学

令和4年9月～令和5年3月の教室だよりをお届けします。

令和4年10月2日（日）には、第88回岡山大学医学部第一外科教室開講記念会を2年振りに現地開催致しました。本年は1922年（大正11年）開講の第一外科教室の100周年にあたる記念すべき年であり、開講100周年記念式典も同時に開催致しました。特別講演には歴史学者の磯田道史先生に「岡山の歴史、医師の歴史」のテーマでご講演いただき、213名の先生方がご参加下さいました。ご参加いただきました先生方、誠に有難うございました。

人事面では、10月より黒田新士が低侵襲治療センター講師に昇任しました。片山哲也は渡辺胃腸科外科病院、岡野 寛は金光病院、高橋洋祐は重井医学研究所附属病院、新田 薫は岡山協立病院、松本真実はチクバ外科・胃腸科・肛門科病院へ異動しました。研究を終えた杉本龍馬は済生会西条病院へ、宮本耕吉は鳥取市立病院へ赴任しました。米国国立がん研究所への留学から帰国した加藤卓也、研究を終えた山田元彦、河崎健人は臨床研修を終えた岡田尚大、外科専門研修3年目の加藤貴光、森分和也、松本 祐、宮田将徳とともに、消化管外科・肝胆膵外科・小児外科病棟で日夜奮闘しております。高橋達也、藤田脩斗、三島顕人、大倉友博、半澤俊哉は病棟勤務を終え、大学院生として研究生活に入りました。

研究・学会活動では、令和4年10月27日（木）～29日（土）に「第38回日本小児外科学会秋季シンポジウム／PSJM2022」を小児外科教授・野田卓男会長のもと開催致しました。現地とWEBのハイブリッド形式にて執り行いましたが、600名の先生方にご参加いただき、盛況のうちに会を終えることができました。皆様からいただきましたご支援・ご協力に厚く御礼申し上げます。

多忙な藤原俊義教授のもと、教室員一同団結し、臨床・研究・教育になお一層努力していく所存です。今後とも教室の運営にご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、同門の先生方のご健勝とご繁栄をお祈り致します。（黒田 記）

## 呼吸器・乳腺内分泌外科学

2022年9月からの教室だよりをご報告いたします。COVID-19が始まって3年、教室もすっかりとWeb会議に慣れ医局会・スタッフ会に加えて研究カンファレンスもすべてWeb開催でどこにいても個々に参加できる状態が日常となりました。年明けからの最大の流行時も、医局内でもやむを得ず感染したり家族の濃厚接触となったりで自宅待機となるものも出ましたが、Webの会には参加できる状態でした。幸い医局内でのクラスター発生はこれまでなく、手術や外来業務も



滞ることなく続けてこれております。今後も豊岡教授のもと一丸となって、研究・臨床ともに新しい知見を発信してまいります。

臨床面では、手術実績はほぼCOVID-19流行前に戻り、肺がんに対するロボット手術や肺移植また乳がん診療におきましては遺伝性乳癌に対する治療や同時乳房再建など高難度の手術数も増加傾向がございます。また、新規薬剤の治験も多く行っております。特に岡山市内の5つの関連施設（岡山労災病院・岡山赤十字病院・岡山医療センター・岡山市民病院・岡山済生会病院）と岡山大学病院で作るCMA-OKAYAMAネットワークでこの度初めて治験の依頼を受け2月より登録を開始しております。今後もネットワークを通じて新規薬剤開発に貢献しながら、地域の診療のレベルアップにも尽力してまいりたいと存じます。研究面では、豊岡教授がプロジェクト代表者を務める「保健医療分野におけるAI研究開発加速に向けた人材養成産学協働プロジェクト」において医療AI人材育成プログラムが整備され、全国から多くの人材がAIに関する研修を受けにいられております。また、当教室の大学院生によるAI研究も実を結び始めており皆様にも成果をご報告できる日も近いと思っております。

人事面では突沖貴宏が米国ノースウェスタン大学への留学から戻り、内分泌センター助教として大学での勤務を開始しております。教室に新しい風を吹き込んでくれるものと期待しております。大学院生では、伊達慶一が研究を終了し岡山医療センター勤務となりました。そのほか中本翔伍、向原史晃が大学院生として研究を開始しております。

いよいよCOVID-19も5月からは5類の感染症となるそうです。本年は当講座開講100周年を迎え、秋には記念式典の開催を準備しております。皆様方が築いてこられた伝統を次の100年に繋ぎ、講座をさらに発展させていけるよう医教員一同尽力してまいります。引き続き、同門の先生方のご支援よろしくお願ひいたします。最後になりましたが、同門の先生方のご健勝をお祈り申し上げます。（校園 記）

## 整形外科

令和4年9月から令和5年3月までの教室だよりをお届けいたします。

数カ月後に迫った第96回日本整形外科学会学術総会（令和5年5月、横浜市で主催予定）の準備を、教室を挙げて行なっております。同門の先生方にも多大なご支援をいただいております。この場をお借りし御礼申し上げます。

教室の行事といたしまして、12月10日に岡山大学整形外科桃整会学術講演会、桃整会総会、岡山運動器フォーラムを開催いたしました。川崎医科大学脊椎・災害整形外科教室 中西一夫准教授による「破壊性脊椎疾患に対する治療戦略（転移性脊椎腫瘍・関節リウマチなど）」の特別講演があり、医局員の他多数の参加がありました。

また同日、第1回児玉記念奨学会賞の授与式が行われました。「児玉記念奨学会」は、令和4年4月、竜操整形外科病院 名誉院長 角南義文先生と高松市の屋島整形外科医院 院長 竹内正光

先生によって、世界で活躍できる研究者を支援したいというお気持ちから整形外科教室初代教授の児玉俊夫先生を記念して創設されました。第1回の受賞者は2名（横尾 賢、岡崎勇樹）でした。横尾 賢は、大学院で腫瘍グループに所属し、滑膜肉腫の新しい血中分子腫瘍マーカーを同定するというインパクトの高い基礎研究論文を発表いたしました。岡崎勇樹は、大学院で膝グループに所属し、内側半月板後根断裂MMPRTに関する論文を中心に多数の論文を発表し、令和4年4月からアメリカニューヨークのHospital for Special Surgeryに留学、研究活動を行なっております。

人事面では、専門研修プログラムで4月より半年間大学病院で研修していただきました山本哲也、石原健嗣、今谷紘太郎、國富康資、塚原 良、横溝大一郎が10月よりそれぞれの病院に戻り、新たに尾下 遼、竹中哲之、須江崇彦、松本健三郎、村上俊太郎、宮本彬義が大学病院での研修に励んでおります。

学術面では、令和5年3月に近藤秀則、金高圭甫、佐藤浩平、廣瀬一樹が学位を取得いたしました。

今後とも鶴翔会の先生方のご支援、ご指導をよろしくお願ひ申し上げます。（雑賀 記）

## 皮膚科学

2022年9月～2023年3月についてご報告いたします。

学術面では2022年9月3日第37回日本皮膚外科学会総会・学術集会大会にて、『臀部皮下腫瘍を主訴に受診し痔瘻と診断した2例』の演題で蓮井が発表しました。9月4日第53回岡山研究皮膚科フォーラムにて、『乾癬モデルマウスを用いたサイトカインコンポーネントEBI3の役割の検討』の演題で大学院生の竹崎が、『BNT162b2 mRNA COVID-19ワクチン接種後に発症したacute diffuse and total alopecia of the female scalpの1例』で研修医の川本が、『脱毛から診断に至った高齢期発症の全身性エリテマトーデスの1例』で岡野が、『粉瘤を発生母地とした臀部有棘細胞癌の1例』で蓮井がそれぞれ発表しました。9月9-10日第37回日本乾癬学会学術大会にて、『減量・代謝改善手術後に軽快した尋常性乾癬の1例』の演題で高須賀が、『セクシマブが奏功した尋常性乾癬の小児例』を松田が、『リサンキズマブで加療した乾癬性関節炎の3例』を倉敷成人病センターに出向した廣瀬がそれぞれ発表しました。

研究面では、MRIの角田亮先生、沼元賢志郎先生の学生2名が配属され、森実教授ご自身が指導を行い『アトピー性皮膚炎における表皮角化細胞の役割』と『乾癬の病態における表皮角化細胞の役割』をそれぞれ発表しました。また現在も科学研究費助成事業やAMED分担研究として、アトピー性皮膚炎、乾癬、悪性黒色腫やEBV感染症を医局内でも行っております。

人事面では令和4年10月より神野が静岡がんセンターより当院へ医員として戻って参りました。令和5年3月、野村助教が、厚生労働省医政局研究開発政策課勤務のため、東京へ出向となりました。令和4年12月に皮膚科専門医試験があり、内藤、立花、神野、安富、石井、森田、篠倉、加藤、中井の9人全員が無事専門医を取得しました。またコロナ下ではありますが、病棟医や関連病院を含む医局員の先生方のおかげで本年度は長尾、池

澤、坂田、村田、川本の5名の新入局員を迎えます。

日頃より当科での活動も、ひとえに他科の先生方のご協力とご支援の賜物と、森実教授をはじめ医局員一同、深く感謝申し上げます。末筆となりましたが、皆様の益々のご活躍を祈念申し上げます。今後とも何卒宜しく願い申し上げます。

(三宅 記)

## 泌尿器病態学

令和4年9月から令和5年3月までの教室だよりをお送りいたします。

7年間教室を主宰してきた那須保友前教授は令和4年3月をもって定年退官し教授不在でしたが、令和4年12月より荒木元朗が第11代目の教授として着任致しました。気持ちも新たに、荒木教授以下医局員一丸となって泌尿器科を盛り上げていく所存です。

人事面では医局長は枝村が、外来医長は小林知子助教、病棟医長は西村慎吾助教、教育医長は岩田健宏助教が引き続き職務にあたっています。9月末で別宮謙介助教がウィーン医科大学へ留学し、関戸崇了が岡山医療センターへ、原博也が我孫子東邦病院へ、松島萌希が姫路聖マリア病院へ出向になりました。10月から姫路聖マリア病院より宇笠誠、令和5年1月から三豊総合病院より尾地晃典が帰局し、泌尿器科専攻医として大学病院での研修を開始致しております。

学会活動ですが、次第に現地開催が増えつつあります。11月5日に開催されました第74回西日本泌尿器科学会総会ヤングウロロジストリサーチコンテストにおいて、関戸崇了が最優秀賞を受賞致しました。このコンテストは40才以下の若手泌尿器科医が自身の研究内容について発表を行うもので、発表、質疑応答共にすべて英語で行われます。岡山大学としての最優秀賞の受賞は、令和2年の丸山雄樹助教に次いでの快挙となりました。また、11月10日から開催された第36回日本泌尿器内視鏡・ロボティクス学会総会において、那須保友前教授がカールストルツ賞を受賞致しました。この賞は日本における泌尿器内視鏡手術と低侵襲医療の発展に大きく貢献した泌尿器科医を顕彰するものです。さらに、12月10日に開催された第5回天晴れおやかまジョイボスアワードにおいて、石井亜矢乃准教授が大賞を受賞致しました。そして令和5年1月22日に開催されました第22回日本間質性膀胱炎研究会において、定平卓也助教が間質性膀胱炎の研究に関しての発表で学会賞を受賞いたしました。

今後とも同窓の先生方におかれましては、御指導ならびに御支援くださいますようお願い申し上げます。(枝村 記)

## 眼 科 学

眼科学教室の近況をご報告いたします。2022年11月19日に、第67回岡大眼科学教室同門会総会・岡大眼科学教室学術講演会をオンライン配信にて開催いたしました。140名を超える多くの先生にご参加いただきました。特別講演では神戸アイセンター病院研究センターの万代道子先生に『iPS細胞由来網膜組織を用いた視機能再建』の演題にてご講演をいただきました。

大きなトラブルなく執り行うことができ安堵しております。来年度の総会では以前のようなリアルでの開催を目指しています。

2022年5月より開設した「ぶどう膜炎」の専門外来では、内科とも連携し、ステロイドや生物学的製剤の導入など、最適な治療を提供できるよう尽力しております。学会発表、論文発表などの学術活動も積極的に行う予定です。

網膜剥離や外傷などの手術を要する緊急患者の受け入れもこれまで通り積極的に行っております。平日9:00-17:00までは眼科外来：電話(086)235-7952、または初診予約担当：電話(086)235-7205、平日時間外および土・日・祝日は眼科病棟：電話(086)235-6708が連絡先となっております。時期によっては病床に限りがあることもございます。誠に恐縮ではございますが入院の可能性のある急患については事前にご一報くださいますようお願いいたします。

今後ともご指導ご鞭撻の程よろしく願いいたします。

(塩出 記)

## 放射線医学・放射線部

令和4年9月～令和5年3月における当教室の活動と現況についてご報告致します。

平木隆夫教授就任から1年が経過し、新体制での教室運営は円滑に行われております。

令和4年度の日本医学放射線学会認定専門医試験においては、7名の受験者全員が見事合格し、鎌村、長尾、大槻が放射線科専門医を、北山、大野、左村が放射線診断専門医を、大川が放射線治療専門医を取得いたしました。

学術面では、日本放射線腫瘍学会第35回学術大会、第137回日本医学放射線学会中国四国地方会等で教室・関連病院から多数の優れた演題発表がなされました。また、主要学術誌への英語論文発表も順調に積み重なっております。

教室関連のイベントとして、研修医画像セミナーを8月、11月に開催致しました。講義内容を充実させ、多くの先生方に画像診断に親しんでもらえるよう、本年度より年3回開催する運びとなりました。今回もWeb開催でしたが、初期研修の先生方を中心として約60名の先生が参加され、ご好評を頂きました。

さらに、12月には、国立大学病院では初となるフォトンカウンティングCTの運用が始まりました。世界でも導入されている施設が少ない最新機器で、従来のCT装置と一線を画する高画質、低線量での撮影が可能です。今後、臨床、研究の両面において活躍してくれるものと期待しております。

以上、簡単ではございますが教室の近況をご報告させて頂きました。同門・同窓の諸先生方におかれましては、引き続き当教室に温かいご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。(富田 記)

## 産科・婦人科学

増山寿教授をはじめ教室員一同、臨床、研究、教育へと日々励んでおります。昨秋からも中国四国産科婦人科学会、日本産



婦人科手術学会、日本女性医学学会などの学会・研究会で、教室から多数の演題を発表いたしました。ひき続き、同門会が丸となって中国四国地方の産婦人科医療の充実に務めて参ります。

続いて人事の御報告ですが、10月には兼森美帆が福山市民病院、谷村吏香が姫路赤十字病院、兼森雅敏が岡山赤十字病院、中村一仁が岩国医療センターに異動しました。江口武志が岡山赤十字病院を退職しました。後期研修1年目の杉原百芳が岡山医療センター、田中佑衣が岡山済生会総合病院、藤川淳が広島市立広島市民病院に異動しました。後期研修2年目の今谷稜子が香川労災病院、小川麻里子が福山医療センター、栗山千晶が岩国医療センター、坂田周治郎が福山医療センター、澤井雄大が姫路聖マリア病院、篠崎真里奈が福山市民病院、谷岡桃子が姫路赤十字病院、西田康平が中国中央病院に異動し、研修を継続しています。福山市民病院の大石恵一、岡山医療センターの川口優里香、姫路赤十字病院の末森彩乃、福山医療センターの杉原花子、三豊総合病院の中藤光里、中国中央病院の谷佳紀(11月より)が帰局し、研修の仕上げに入りました。教室では、11月に早田桂が周産期・小児救急医療学講座准教授に、衛藤英理子が産科婦人科講師に、大平安希子が周産期医療学講座助教に昇任しました。また1月より岡本和浩がOttawa Hospital Research Instituteへ留学いたしました。1月時点の教室内役職は、医局長 衛藤英理子、婦人科病棟医長 小川千加子、外来医長 光井崇、周産母子センター産科部門長 牧尉太、教育医長 久保光太郎の体制で運営しております。

年間出生数が減少している以上に、産婦人科医不足は相変わらずの状況で、同門のベテランの先生方には定年後も嘱託医や非常勤医師として現役を続行いただき厚く御礼申し上げます。2024年には「医師の働き方改革」が開始されます。地域ごとの集約化と機能分担は喫緊の課題です。引き続きの御指導ならびに御支援の程よろしくお願い申し上げます。(衛藤 記)

## 麻酔・蘇生学・集中治療部・周術期管理センター

昨年末からの臨床状況、教室行事、人事異動に関しましてご報告申し上げます。

手術室、ICU診療に関しては、重症コロナ患者数は数少ないですが、手術前後での患者さまの陽性判明、病棟でのクラスター発生などによる医療者欠員が診療体制へ影響を及ぼしております。各診療科と協力しながら診療規制なく乗り切っていければと考えております。

ペインクリニック外来再移転は外来棟4階に向けて協議中です。その他、RRSや院内鎮静などの院内業務も引き続き従事して参ります。

教室の活動として、当科主催の2つの学会(第6回日本集中治療医学会中四国支部会、第27回日本小麻酔学会)が無事終了致しました。ご参加、ご協力を有難うございました。また、コロナ禍で自粛しておりました同門会総会を11/27に松三昌樹同門会長ご指示の下、ハイブリッド形式で開催致しました。懇親会は控え、他大学の新教授に就任されました賀来隆治先生、江

木盛時先生にご講演頂き、多くの先生方と久々に対面でお目にかかれたことは非常に意義ある事であったと思っております。

来年度の麻酔専攻医プログラムは、はじめて岡山県でのシーリングがかかるほど多数の募集を頂き、通常枠以外の連携枠や特別地域連携枠などを利用することにはなりますが、当院では13人の登録者を迎えることが出来そうです。彼らが早く一人前の麻酔科専門医として仕事出来るよう、精一杯教育に取り組んで参ります。

最後になりましたが、2020年4月より清水が務めて参りました医局長ですが、2023年4月から松岡義和と交代致します。関連病院部長先生方をはじめ同門の皆様には人事の件などで多々ご迷惑をおかけ致しました。新しい医局長となりますが、当教室の運営に関しまして引き続きご指導ご鞭撻頂けますようお願い申し上げます。(清水 記)

## 脳神経外科学

感染性コロナウイルスの脅威は薄れつつある印象もあります。強い感染力を維持しておりその影響は依然として少なくはなく、早急に終息することを願うばかりであります。

令和4年7月11日に瀬能孝敏先生(昭和50年徳島大学卒業)が、令和4年10月21日に有光哲雄先生(昭和46年岡山大学卒業)がご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。人事関連では、まず新入局者ですが、大澤尚久先生(湘南鎌倉総合病院勤務)が入局されました。異動・昇任につきましては令和4年8月から令和5年1月の間について記します。令和4年9月には合田雄二先生が香川県立中央病院からまるがめ医療センター勤務となりました。令和4年10月には三宅隼人先生が岩国医療センターから梅田剛志先生が岡山市立市民病院から平田雄一先生が香川県立中央病院からそれぞれ岡山大学病院勤務、家護谷泰仁先生が岡山大学病院から大学研究室に帰局となりました。令和4年12月には河内哲先生が岡山大学病院から住友別子病院勤務、西和彦先生が岡山大学病院から岩国医療センター勤務、藪野諭先生が大学研究室から岡山大学病院勤務、牧野圭悟先生が大学研究室から岡山医療センター勤務、坪井伸成先生が岡山大学病院から福山市民病院勤務、細本翔先生が岡山大学病院から呉共済病院勤務、岡崎洋介先生、山岡陽子先生が大学研究室から岡山大学病院勤務となりました。令和5年1月には金恭平先生が米国アラバマ大学バーミングサム校より帰国後、岡山大学病院勤務、村井智先生が岩国医療センターから岡山旭東病院勤務となりました。

教室の役職は、医局長は藤井謙太郎が、外来医長は平松匡文が、病棟医長は石田穰治が務めました。教育医長・教育企画委員は令和5年1月より春間純から佐々田晋に交代いたしました。

以上、簡単ですが、教室の近況を報告致しました。

末筆となりましたが、同窓の諸先生方の益々の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。(藤井 記)

## 総合内科学

大塚文男教授は、2012年に教授着任されて10年が経過致しました。企画／広報・SDGs担当の副病院長として、引き続き本院全体の改善・改革や広報活動に尽力しています。

教室の動きです。臨床面では、引き続き長谷川功病棟医長・小比賀外来医長を中心に、各診療科や地域医療機関と連携を取りながら診療を進めています。病棟では、オミクロン株による新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の第8波が継続しておりますが、診療科一丸となって対応しています。病棟診療では、4月から新たに病棟医として当科に加わった若手医師もたくましく成長し、周辺地域から紹介される診断困難例・難治例を診療しています。外来は、徳増助教を中心とした「不明熱外来」、植田教授を中心とした「漢方臨床教育センター」、片岡教授を中心とした「女性ヘルスケア外来（内科）」、萩谷准教授による「渡航ワクチン外来」は継続しています。「コロナ・アフターケア外来」（新型コロナウイルス感染症罹患後の長期後遺症に悩む患者さまを対象とした専門外来）は、通院患者数が500名を超え社会的ニーズの高さを感じています。「ワクチン副反応外来」（新型コロナウイルス感染症に対するワクチン接種後の副反応に悩む人への専門外来【岡山県からの委託】）にも継続的に患者紹介があり、こちらも行政と連携をして今後も対応してまいります。今後も地域医療現場の先生方・患者さまのニーズに応えるべく、大学病院の特徴と強みを活かした外来診療を発信して参ります。

教育面です。教育医長の谷山講師のもと、教育企画委員の徳増助教を中心に指導を行っています。専門医制度では、内科専攻医12名、総合診療専攻医5名が大学病院および連携施設で研修を行っています。今年は内科専攻医2名、総合診療専攻医2名がプログラムを完了する予定です。

研究面です。2022年秋には4名の大学院生が新たに総合内科学に入りました。リサーチ／ケースレポート・カンファレンスは引き続き定期開催し、大学院生の学位論文取得・英語論文執筆を目標に若手を中心に積極的に活動しています。学会には第23回内分泌学会中国支部学術集会（9月）、第10回国際レジオネラ会議（9月）、第9回日本糖尿病医療学学会（10月）、第44回日本高血圧学会総会（10月）、第96回医療福祉の質的研究会（10月）、第48回日本神経内分泌学会学術集会（10月）、第65回日本甲状腺学会学術集会（11月）、第92回日本感染症学会西日本地方学術集会（11月）、第32回臨床内分泌代謝Update（11月）、WCCEH Seminar（11月）、医学／医療者教育研究&臨床研究ワークショップー質的研究編 2022（11月）、第14回ホルモンと代謝研究会（11月）、第33回日本リウマチ学会中国・四国支部学術集会（12月）、第127回内科学会中国地方会（12月）、第27回日本生殖内分泌学会学術集会（12月）、第6回日本免疫不全・自己炎症学会総会・学術集会（2月）、第26回日本病院総合診療医学会学術総会（2月）、第90回岡山内分泌同好会（2月）、第5回チーフレジデントミーティング in Japan（2月）と多くの学会・研究会で学術発表を継続しています。

受賞・専門医取得状況です。萩谷准教授が令和4年度岡山県医師会学術奨励賞およびRoche Infectious Disease Award

2022、山本幸近医師が第48回日本神経内分泌学会第5回臨床神経内分泌優秀賞、副島佳晃医師が令和4年度岡山大学病院長賞「楷の木賞」、コロナワクチン副反応外来が令和4年度岡山大学病院長賞「楷の木賞」を受賞しました。また、大塚教授が2022年度両備てい園記念財団研究助成金、赤穂宗一郎助教が2022年度両備てい園記念財団研究助成金および日本腎臓病研究財団令和4年度研究奨励賞、徳増一樹助教が公益財団法人岡山医学振興会 2022年度第22回研究助成金および一般財団法人日本漢方医学教育振興財団 2022年度研究助成、大塚勇輝助教が公益財団法人岡山医学振興会 2022年度第22回教育助成金を獲得しました。また、福安悠介助教が日本東洋医学会漢方専門医に、岡浩介助教・中野靖浩助教が内科専門医に認定されました。

人事面では、大きな変更はありませんでした。

引き続き、各診療科および地域の先生方にご協力頂きながら、地域・社会に貢献できる内科医・総合診療医育成を目指してまいります。今後とも、御指導・御鞭撻の程よろしくお願ひいたします。（萩谷 記）

## 循環器内科学

令和4年9月から令和5年3月までの教室だよりをお届けします。

伊藤浩教授をはじめ教室員一同、臨床・教育・研究・学会活動を精力的に行っています。

人事ですが、上記期間における異動はなく日々臨床と研究に精進しております。

学会・研究会活動ですが、令和4年11月26日に第8回日本心臓リハビリテーション学会中国支部地方会が、三好亭先生を大会長として開催されました。昨年まではいずれの学会もオンライン中心の開催でしたが、久しぶりの現地開催となり、多くの先生方が参加され盛況のうちに終了しました。この場を借りてお礼申し上げます。なお当科関連施設である岡山市市民病院の河村浩平先生が「血管内治療後の下肢閉塞性動脈硬化症患者における歩数計を用いた在宅運動療法の有用性の検討」にて、優秀演題アワードを受賞しました。また同時開催された第121回日本循環器学会中国地方会において、中山理絵先生が「Shear Wave Elastographyは心不全の肝うっ血評価に有用である」にて、YIA最優秀賞を受賞されました。お二人ともおめでとうございます。

最後に教室の実務ですが、令和5年1月より教育医長に吉田雅言先生が就任いたしました。医局長の赤木達、病棟医長の高谷陽一先生、外来医長の三好亭先生の体制は変わりありません。引き続き各診療科および地域の先生方にご協力いただきながら、臨床・研究・教育に励み、やりがいのある楽しい医局を目指したいと思っております。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ致します。（赤木 記）

## 心臓血管外科学

2022年9月から2023年3月の教室の動きをご報告いたします。



2017年に笠原真悟医師が教授に就任してから昨年8月で5年になりました。連携各科のご協力により、診療実績は安定しており、この場をお借りして各部署様に感謝を申し上げたいと存じます。人事面では、迫田直也医師が12月末で退職し、岩手医科大学に異動しました。加藤源太郎医師が香川県立中央病院より帰局し助教となりました。

臨床面では、小児及び成人先天性心疾患部門は笠原真悟教授をはじめとして、黒子洋介医師、川畑拓也医師、小林純子医師、小谷恭弘の5名のスタッフで診療を行っています。廣田真規医師と加藤源太郎医師が担当する成人心臓・血管外科領域では、大動脈疾患の県拠点病院に指定されてから救急受診が急増しており、24時間365日対応できる体制を取っています。引き続き関係各科の皆様にはご協力のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

研究面では、以前より行われてきた心臓移植をはじめ、単心室循環に対する補助循環・再生医療、医用工学を用いた新しい人工血管の開発など、6人の大学院生が14件の文科省科研費のもと積極的に活動しております。またAMED移植医療技術開発研究事業に、「臨床応用を目指したマージナルドナー及び心停止ドナーからの心臓移植に関する研究」が採択され3年間の研究が開始となっております。国家戦略事業の一つであるJSTの『ダイバーシティ農業』の案件は本学の農学部や工学部と共同で行っており、我々は就農者の健康管理を行う課題を進めており、この2年間は教育期間、本採用になればさらに10年間続くと言った壮大な案件となっております。もう一つは12月15日に岸田内閣でも発表されました『デジタル田園都市国家構想』の一つ、吉備中央町で今後展開される健康特区構想で、循環器の遠隔モニタリングとして参画しております。岡山大学の関係者の皆様におかれましては、今後ともご協力のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

現在、教室からは7人が海外で活躍しております。甲元拓志医師はMedical College of Wisconsin、本浄修己医師はThe Hospital for Sick Children, Torontoで、また大崎悟医師は、University of Madisonでスタッフとして10年以上にわたり活躍されています。また、石神修大医師はclinical fellowとしてRoyal Children Hospital, Melbourneで、門脇幸子医師 (clinical fellow)、小林泰幸医師 (research fellow) はThe Hospital for Sick Children, Torontoで研鑽中であり、木佐森永理医師は、米国ワシントンDCにある、Children's National Hospitalでclinical fellowとして勤務しております。

AMEDに出向している藤井泰宏医師は2023年3月で2年の勤務を終え、大学に戻ってくる予定で、新医療研究開発センターと心臓血管外科の2足の草鞋を履いて活躍してくれることを期待しています。

引き続き、教室の活動に御理解と御支援を賜りますようお願い申し上げます。(小谷 記)

## 脳神経内科学

2022年11月より石浦浩之先生が第3代教授として赴任されました。石浦教授は前任地の東京大学脳神経内科において、主と

して遺伝性神経疾患における新たな遺伝子の同定と分子病態機序の解明について数多くの業績を収めておられます。当科は現在に至るまでの約20年間に、神経変性疾患の新規発見や新規治療薬の脳梗塞とALSへの保険適応などの臨床につながる研究を中心に行い、主要な国際誌を含めて800編以上の学術論文の発表を行ってまいりましたが、石浦教授の指導のもと、さらなる飛躍を目指す所存です。

人事面では、松岡千加が広島市民病院でのローテートを終え、2022年10月に帰局して病棟業務を精力的にこなすとともに、大学院に入学して遺伝性神経疾患が疑われる家系の遺伝子解析研究に着手しております。平佑貴は香川県立中央病院において内科専攻医ローテート中です。スタッフ業務については、これまで通り医局長は森原隆太が、病棟医長は柚木太淳が、外来医長は武本麻美が、教育医長は中野由美子がそれぞれ担当しています。

臨床面では、このコロナ禍にも関わらず病棟診療においては年間入院患者数400名を超え、様々な神経内科疾患の診療を担当しています。一般外来および専門外来（認知症、脳卒中、パーキンソン病、ALS、SCD/MSA、神経免疫疾患、ボトックス治療）のさらなる充実化を目指しています。ALS患者に対するMuse細胞治療の治験を継続するとともに、認知症患者に対する診断・検査法の開発に積極的に取り組んでいます。そして今年度も英文雑誌への症例報告の投稿を数多く行っております。

研究面では今季も脳虚血グループ、変性疾患グループ、認知症グループ共に多くの論文が出版され、国内・海外での学会発表も活発に行っております。当科は従来より留学生を積極的に受け入れておりますが、現在は留学生7名と海外からの客員研究員1名と共に研究を行っております。今後もALS、脳梗塞、認知症を中心に病態解明や新規治療開発へ向けて更なる臨床研究・基礎研究を継続して行っていく所存です。今後とも何卒宜しくお願いします。(森原 記)

## 救命救急・災害医学

常日頃から、各専門診療科や地域の先生方には、多大なる応援を賜り深く感謝申し上げます。岡山県の地域高度医療の最後の砦として、病院を挙げて救急患者を積極的に応需した結果、2022年の救急搬送件数は3,924件となりました。まだまだ社会的にもコロナの影響が強く残る中、通常診療との狭間で非常に対応に苦慮する症例も多くありますが、引き続き、地域貢献の期待に応えていきたいと考えています。

臨床面では多発外傷、院外心停止、急性中毒、重症小児、敗血症など幅広く対応しております。4月より病院救急救命士が採用され、新たに特定行為看護師も病棟内に配備でき、多職種が一丸となって普段の診療に当たっているところです。また、急性期における終末期対応や臓器移植に関する勉強会や講習会も適宜企画・開催しております。さらに、今後発災が予想されます大規模災害に備え、大規模地震時医療活動訓練(10月)、中国ブロックDMAT連絡協議会実働訓練(11月)、岡山空港航空機事故総合訓練(11月)などの訓練にも積極的に参加し、消防・警察・行政など、日頃から関係各所との連携を密に図っております。

研究面では、臨床・基礎の両面で意欲的に取り組んでおり、2022年は、原著9編を含む英文22編、和文15編を発表しました。中でも臨床面では救急・集中治療領域においてインパクトのあるCritical care medicineやResuscitationに、基礎面では一酸化炭素やビリルジンの臓器保護に関する研究が、権威あるTransplantation、さらにはSurgeryに掲載されております。9月には2名の学位取得者が誕生し、2022年度末にはさらに3名が学位取得を予定しております。11月には、塚原助教らが開発に尽力しました「ポータブルスプラッシュシールド」が総務省の令和4年度「消防防災科学技術賞《一般の部／消防防災機器等の開発・改良部門》」の優秀賞に選ばれました。さらに、本郷研究助教の「院外心停止蘇生患者における頭部CTを用いた咀嚼筋萎縮と予後の関連についての検討：多機関後ろ向き観察研究」が「公益財団法人岡山医学振興会 第22回 公募助成」に採択され、専門医プログラム地域枠の田邊綾先生が、令和4年度「岡山県医師会学術奨励賞」を受賞するなど、施設を問わず、当科所属の若いスタッフ達が頼もしく活躍しております。

最後になりましたが、今後とも地域救急医療の拠点としての役割を果たすべく、御指導・御鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。(小原 記)

## 形成再建外科学

2023年1月までの当科での活動状況をご報告させていただきます。

2022年10月には木股教授を学会長に第31回日本形成外科学会基礎学術集会を執り行いました。鶴翔会の皆様のお力添えもあり、盛会のうちに終えることができました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

人事面では2022年9月から東北大学・形成外科より今井利郎先生がジェンダー診療のために国内留学で来られました。ジェンダー診療のみならず、頭頸部診療にも非常に熱心に臨床に取り組まれ、23年2月で修了、帰局されました。また、2023年度は当教室としては非常に大きな転換期を迎えます。4月より新たに7名が帰局、7名が大学から異動となり、関連病院等での診療を行います。さらに、岩手医科大学より専攻医の藤田弥子先生が再建診療を学びに来られる予定となっております。

学生教育としてはデッサン教室や県立美術館ワーク等のArtに関連する教育を行っております。Artは形成外科医療のみならず人としての幅を豊かにするものであり、学生のうちからArtの重要性に触れられるような教育を継続して参ります。

研究面においては組織修復学教室と共同で自己凝集化技術によるヒトiPS/ES細胞からの立体軟骨組織の創出の研究を継続している他、整形外科学教室と共同でAIによる形成外科的画像解析に関する研究、乳房再建分野における臨床研究など、形成外科の臨床に繋がるような幅広い分野での研究を行っております。

まだまだ新型コロナウイルス感染症に関連したニュースは尽きませんが、時代の変化とともに、新たな形成外科医療を求められる転換期かもしれません。常に新しいアイデアを出しながら情報の発信を続け、日本の形成外科医療をリードする存在で

いられるように精進して参ります。鶴翔会の皆様におかれましては、今後とも変わらぬご支援・ご指導を賜りますよう何卒宜しくお願い申し上げます。(長谷川 記)

## 老年医学

老年医学分野の令和4年8月以降の近況をご報告させていただきます。

研究面では、国立研究開発法人日本原子力研究開発機構(JAEA)および岡山大学大学院保健学研究科との共同で、「極微量ウラン影響効果試験」を平成19(2007)年度から継続しています。本研究は、ラドンの影響効果の実験的検証(岡山大学成果)及び解析評価から得られるラドンの体内動態のメカニズム(JAEA成果)を双方の成果として得ることを目的としています。令和4(2022)年度、学会・研究会(第46回中国地区放射線影響研究会、日本放射線影響学会第65回大会)でその成果を発表いたしました。

教育面では、高齢者の特性を踏まえた医療に関する最新の知識を学習し臨床・研究に生かすことを目的として平成29年度より開講した大学院博士課程選抜プログラム「臨床老年医学特論」も6年目を迎えました。学部、大学院での講義を通じて老年医学の教育を行っております。

新型コロナウイルスの感染拡大は、研究、教育、診療に影響をきたしていますが、ITツールなどを駆使しながら、少しでも貢献できるよう努力する所存です。同窓の先生方におかれましては、今後ともご指導・ご鞭撻の程、何卒よろしく御礼申し上げます。(光延 記)

## 臨床遺伝子医療学

臨床遺伝子医療学分野の2022年度下半期の活動報告をさせていただきます。

遺伝外来では、各専門診療科の臨床遺伝専門医の先生方をはじめとする皆様のご参画のもと外来運用を行なっています。今期は、神経・筋疾患領域に関する専門遺伝外来を、脳神経内科に着任された石浦浩之教授のご指導のもと開設しました。遺伝性腫瘍領域では、リンチ症候群の院内診療体制に関する定期的な連絡会議を、病理診断科、病理部、消化器内科、消化器外科、婦人科、泌尿器科をはじめとする皆様にご参画いただき開始しました。リンチ症候群診療に必要なサーベイランスやユニバーサルスクリーニングの体制強化に向けた診療科横断的検討を行なっています。

遺伝性腫瘍外来では、婦人科、乳腺外科、消化管外科の先生方にご参画いただき運営しています。小児遺伝外来、周産期遺伝外来では、小児神経科、小児科、産婦人科の各専門診療科の皆様のご参画、ご支援のもと運営しています。遺伝性難聴外来では、耳鼻咽喉科の皆様のご支援のもと運営しています。遺伝性乳癌卵巣癌症候群(HBOC)診療では、乳腺・内分泌外科、婦人科、消化器内科、泌尿器科をはじめとする各専門診療科の皆様との連携を深めながら実践を重ねています。

今期は、臨床遺伝子診療科所属の認定遺伝カウンセラー3名



(十川麗美(チーム代表)、加藤美美乃、二川摩周)が病院長賞(楷の木賞)に選ばれました。第11回日本サイエンスコミュニケーション協会 ベストプレゼン賞、岡山大学ダイバーシティ推進本部男女共同参画室女性教員支援助成金(研究費配分型)受領(いずれも受賞者=十川麗美)があり、認定遺伝カウンセラー自らが学内外に一層のプレゼンスを高めることが出来た下半期となりました。

がんゲノム医療外来とエキスパートパネルでは、引き続き院内外から多くのご紹介をいただき継続して実績を重ねています。今後の全ゲノム解析の次なるステージに向けた準備をゲノム医療総合推進センターと協働して継続しています。

病院全体の取り組みでは、今年度より立ち上げられた遺伝子関連検査に関する院内ワーキンググループに参画しています。遺伝子関連検査に潜在するインシデント対策や医療安全管理について、院内の関係するほぼすべての部署のみならずと改善に向けた協働を行なっています。これまで慣例だった遺伝学的検査の受託先での匿名化が今後必須化されない動きも出てきています。

研究面では、多機関共同研究の中央西日本遺伝性腫瘍コホート研究の代表施設として研究体制の拡充を継続しています。多施設共同で運営する遺伝性腫瘍エキスパートパネルを毎月1回の開催を継続し、各施設で苦慮するケースの共有や相互の一層のレベル向上を図っています。

教育面では毎年4学期に、「ゲノム医療」講義(医学科3年生)を担当しています。プロフェッショナルリズム・行動科学Ⅱ(医学科2年生)では小グループでの遺伝カウンセリングロールプレイ実習を担当しています。今期で3年目を迎えました。これまでのコロナ禍では制限が続いていましたが、今期初めて対面授業を行ないました。

ゲノム医療では全ゲノム解析の新たなステージに入ろうとしています。職種・診療科・部門を超えた横断的な取り組みと強化が一層重要となってきております。多くの、広い分野にわたる専門家、多職種の方々の御指導や御協力を頂いております。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。引き続き御指導御鞭撻の程、宜しくお願ひ申し上げます。(山本 記)

## 薬 剤 部

人事関係では、今期は2名の薬剤師が退職となった。9月付け退職された江角悟薬剤師は10月1日付で神戸学院大学薬学部講師として着任し、10月付け退職された武田達明薬剤師は11月1日付で本学薬学部の助教として、今後は教育と研究活動に専念し精力的に活動している。

業務関係ではなかなか落ち着きを見せないCOVID-19感染拡大に伴い、基本的な感染防止対策の徹底と感染を上げないための行動を部員一同が努め、適宜対応している。地域連携の推進のため、地域保険薬局薬剤師の研修施設としても認可され、感染防止に注意しながら、当院独自の研修カリキュラムによる1名の保険薬局薬剤師の研修を受け入れ、教育活動も積極的に行っている。

学会活動として第43回日本臨床薬理学会学術総会、37th

JSSX Annual Meeting、第19回DIA日本年会2022、第32回日本医療薬学会年会などにおいて研究成果のシンポジウム・講演を行った。また、牛尾聡一郎特任助教がNEDO Technology Commercialization Program 2022において審査員特別賞、木村郁哉薬剤師が第5回岡山テックプラングランプリにおいてHOXIN賞を受賞した。研究費として、牛尾聡一郎特任助教が「JST大学・エコシステム推進型 タートアップ・エコシステム形成支援」に、蔵田靖子薬剤師が「令和4年度男女共同参画室「女性教員支援助成金【研究費配分型】」」、濱野裕章講師が「第3回バイオバンク・ネットワークの試料・情報を利用する研究課題の公募」に採択された。学術論文として、2022年は英文原著論文に24報、和文原著1報の研究成果を発表した。

教育関係では、薬学部5年次の長期実務実習を再開しており、令和4年度は38名の薬学部学生を受け入れた。(濱野 記)

## 自然生命科学研究支援センター光・放射線情報解析部門

自然生命科学研究支援センター光・放射線情報解析部門鹿田施設(光・放射線鹿田施設)のスタッフは寺東宏明施設長(教授)、花房直志准教授、永松知洋技術専門職員、今田結技術職員(特任)、磯辺みどり技術職員(特任)、寺田輝子事務補佐員の6人で、人事に関わる移動はありません。

令和4年度後期の活動としては、定期の放射線業務従事者のための教育訓練講習会(日本語及び英語)を11月8-11日、令和5年2月14-16日に開催しました。また臨時の教育訓練講習会を10月5日、11月29-30日に開催しています。研究活動では、寺東が世話人として第46回中国地区放射線影響研究会(9月7日)をWebにて開催しました。また日本防菌防黴学会第49回年次大会(9月26-27日)において「キャビテーション高電圧パルス放電プラズマによる殺菌効果」の演題で発表を行いました。さらに今田が第4回日本保健物理学会・日本放射線安全管理学会合同大会(11月24-26日)において「内部被曝線量の計算による評価の精度向上の取り組み」の演題で発表を行いました。論文発表は今田らによる「同時使用の制限を行うグループ別管理の導入とその実践のための取り組み」(日本放射線安全管理学会誌、2022、21(2): 64-68)、Teratoらによる「Sterilizing ability of high-voltage pulsed discharge plasma with cavitation for microorganisms including radio-resistant bacterium in water」(Biocontrol Sci、2022、27(1): 41-48)があります。

報告事項として、電気料金の大幅な高騰に伴い光・放射線鹿田施設の利用料金の改定を予定しています。改定利用料金は令和5年4月1日より適用となります。皆様方のご理解とご協力をお願いいたします。(花房 記)

## 動物資源部門

動物資源部門鹿田施設では、飼育設備として今年度、感染実験(BSL3)区域にマウス飼育用個別換気ケージシステムのラック2台を設置した。これにより同区域にてマウス140ケージの飼育が可能となった。また、理化学研究所より譲り受けたマウス用個別換気飼育システム(イノラック)2台を施設3階の化

学暴露実験区域に整備した。飼育可能ケージ数が増加し、またディスプレイケージを使用した飼育が可能となり、より安全に配慮した飼育・実験環境を提供できるようになった。

施設の教育活動では、令和4年10月、12月、令和5年2月に、初心者向けマウス／ラット実技講習会の定期講習会を開催した。のべ34名の学内研究者の参加があった。令和5年度も引き続き、定期的な講習会の開催を予定している。

人事では、マウス飼育エリア担当・特任技術職員の木村亮太が当施設を離れ4月1日より本学大学院医歯薬学総合研究科人体構成学の技術職員として勤務する。また、中型動物担当・特任技術職員の山田進が3月31日付で退職となった。(平山 記)

## 卒後臨床研修センター 医科研修部門

岡山大学医学部同窓会・鶴翔会の皆様、日頃より大変お世話になっております。昨年4月に入職した1年目研修医(32名)は順調に研修を積み重ね、2年目研修医(35名)はもうすぐ2年間の研修を修了しようとしています。

今年度後半は、2年目のみならず1年目研修医もアカデミック活動に精力的に挑戦しました。述べ11名の研修医がオンラインもしくはオンサイトで学会発表を行い、8月の日本下垂体研究会学術集会では副島佳晃研修医が「最優秀発表賞」を、9月の中国四国外科学会総会では中村薫研修医が「優秀賞」を、12月の日本医学放射線学会中国・四国地方回では武川真也研修医が「若手奨励賞」を受賞しました。また、ART生でもある副島佳晃研修医は原著論文を2本とケースレポートを1本、長田栗研修医と山下航矢研修医もそれぞれケースレポートを1本、筆頭者として執筆しました。ご指導いただきました指導医の先生方に厚く御礼を申し上げます。

9月23・24日には新型コロナウイルス感染対策を講じたうえで指導医講習会を開催し、24名の指導医にご参加いただきました。ご参加の指導医の皆様には、優れた臨床指導医をめざして講義の聴講のみならず活発に議論下さり、誠にありがとうございました。現場での研修医指導の実践に、講習会の内容を少しでも活用いただけますと幸いです。

今後も新型コロナウイルスのパンデミックによる状況を鑑みながら、オンサイト・オンライン両方式での病院見学に随時対応し、当院プログラムの3つの魅力である「①多数の協力型病院」との連携を通じた「②オーダーメイド研修」並びに当院の特色である「③科学の視点をもつ臨床医の育成」を全国の医学生に周知して参ります。引き続き、ご指導・ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い致します。(佐藤 記)

## 運動器知能化システム開発講座

運動器知能化システム開発講座は、設立11年目を迎えました。スタッフは2022年4月より鉄永智紀(准教授)、齋藤太一(助教)の2名で活動を行っております。これまで当講座にて開発してきました人工股関節置換術における国産の手術支援ナビゲーションシステムが2022年より臨床使用可能となりました。これまでに一般使用可能となっている海外製品と比較しても遜色な

い優れた正確性があることをこれまで学会等にて報告してきました。引き続きこのナビゲーションシステムを臨床使用しながら、有用性について国内外に発信していく予定です。また、基礎的研究としまして股関節痛の痛みの原因の一つである股関節唇に対するメカニカルストレスにおける反応の研究を行っており、英語論文として投稿し発信しました。

学会活動は、日本股関節学会、日本小児整形外科学会、日本人工関節学会などで成人股関節のみならず小児股関節疾患や人工股関節置換術についての研究成果を発表しました。さらに、日本リハビリテーション医学会や日本小児整形外科学会、講演会やセミナーにおいて座長や講師を務めました。

今後とも産学連携および臨床現場に必要な医療技術を構築し、実践的な運動器医療を提供できるように精進する所存であります。同門の諸先生方には、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。(鉄永 記)

## 先端循環器治療学講座

先端循環器治療学講座は平成22年4月に開講し、循環器疾患の新しい診断、治療に関連する研究を行うことを目的として開講致しました。今年で13年目を迎え、現時点で令和8年度までの継続が決まっています。スタッフは、森田(教授)、西井(准教授)で、2名と少人数でございますが、循環器内科とともに、研究・臨床に精力的に活動しております。研究では、重症不整脈、心臓突然死、遺伝性不整脈疾患、先天性心疾患に伴う不整脈、心臓植込型デバイスやその遠隔モニタリングに関連した研究を行っています。多施設研究として、岡大関連病院に参加していただき、植込みデバイス、不整脈診療の新たな研究も進めています。デバイス植込症例の増加とともに、日々の解析データが膨大となり、時間を要するようになっており、本学工学部の先生方とも協力し、AIを用いた自動解析の開発を行い、異常をより効率よく見いだす方法について検討を始めました。2022年度末から2023年度にかけて、植込みデバイス関連冬期大会、日本循環器学会、日本不整脈心電学会等で積極的に報告、論文作成を進めていく予定です。臨床面では心臓植込デバイスの遠隔モニタリングは日常でも活用し、デバイス障害、重症不整脈発生、心不全早期発見に役立て、早めの対処が可能となっています。今後、新しい血管外植込型除細動器システムを早期に導入することが決まっています。研究・遠隔診療のデータ解析については循環器内科の川田先生、宮本先生、上岡先生、水野先生、増田先生、浅田先生、中川先生や小児科の重光先生など多くの先生方、メディカルスタッフの方々にもご協力頂いており、ここに感謝の意を表させていただきます。今後も臨床研究を進展させ、世界に向けエビデンスの発信を続けていく所存です。COVID-19の流行が早期にコントロールされ、臨床・研究などで多くの方々と直接ディスカッションし、協力できる日が来ることを祈念しております。今後とも、ますますのご指導のほどよろしく申し上げます。(森田 記)



## 地域医療人材育成講座

本講座は平成22年の設立より、地域医療を担う人材を育成するという使命のため、地域医療教育および地域医療連携に継続して取り組んでいます。

本講座では低学年から地域医療教育を行っています。講義のみでは伝えることが難しい地域医療に関して実習を行い、地域医療に尽力される先輩医師の姿、多職種が地域のために尽くしている姿を通して、将来の医師像を学生時代より考えることができるよう取り組んでおります。新型コロナウイルスの影響を受けながらも、3年生全員が6月、8月、9月に実習を行うことができました。県外移動歴やワクチン接種状況などの確認を行った上で、各実習施設の状況に合わせて実習を岡山県内外で実施しております。また、1年生早期地域医療体験実習も9月に地域枠学生9名に加え、一般枠学生43名が様々な実習施設で実習をさせていただきました。11月には1年生実習参加者主催による「地域医療シンポジウム」をオンラインにて開催しました。また、第8回指導医講習会を開催し、地域実習指導医の皆様と意見交換を行いました。関連病院をはじめとするたくさんの医療機関の先生方、スタッフの皆様方のご協力をいただきまして、地域医療体験実習をさせていただいております。この場をお借りして、御礼申し上げます。

地域枠卒業医師4名が後期配置として、初期臨床研修終了後8名が前期配置として令和5年4月から新たに地域勤務を開始するため、岡山県地域医療支援センター、岡山県医療推進課と連携し、合同説明会を10月に開催し、地域枠卒業医師の配置候補病院とのマッチングを行いました。

今年度、岡山大学を主幹、鳥根大学・香川大学・鳥取大学を連携校として文部科学省「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業」に採択されました。この事業では4大学の強みを掛け合わせ、将来の地域医療を担う学生がより輝き、地域で活躍できるように共有を行います。この事業の推進も含め、地域医療を担う医師の育成とより良い地域医療の推進に努力を重ねて参りますので、引き続きご指導ご鞭撻の程よろしく御願い申し上げます。(小川 記)

## CKD・CVD地域連携包括医療学講座

本講座は、2011（平成23）年11月に開講したCKD・CVD地域連携・心腎血管病態解析学講座の仕事を引き継ぎ発展させる目的で、2016（平成28）年11月から3年間の設置、2019（令和1）年11月から3年の設置となり、このたび2022（令和4）年11月から新たに3年間の設置となりました。腎臓専門医と循環器専門医との連携を通じた慢性腎臓病（CKD）重症化や心血管疾患（CVD）合併の予防のための病診連携、県や市など自治体との連携、および一般市民の方への啓発活動、の3本柱を活動目標としております。現在、内田治仁教授（腎臓内科）と吉田賢司講師（循環器内科）より構成されています。

内田は、引き続きNPO法人日本腎臓病協会（JKA）の副幹事長を務め、2022年4月からは岡山県生活習慣病対策推進会議CKD・CVD対策専門部会長を拝命しております。また2022年

度から新たに始まった厚生労働行政推進調査事業の「腎疾患対策検討会報告書に基づく対策の進捗管理および新たな対策の提言に資するエビデンス構築」研究班および厚生労働省科学研究費「腎疾患対策検討会報告書に基づく慢性腎臓病（CKD）対策の推進に資する研究」研究班の分担研究者として、日本全国におけるCKD対策に努めています。

感染対策を十分に施しながら、岡山県内各地で様々な活動を行っています。病診連携におきましては、岡山市CKDネットワーク（OCKD-NET）セミナーを2023年3月にハイブリッド開催しました。2022年12月に新見市CKDネットワークの立ち上げに尽力しました。これで県内ほぼ全域にCKD医療連携ネットワークが設置されたこととなります。県や市など自治体との連携に関しましては、これまでの岡山市、美作市、矢掛町、笠岡市、井原市、新見市、瀬戸内市、津山市に加え今年度は新たに総社市、高梁市、玉野市などとのCKD対策事業を支援しています。県内27市町村それぞれにおける市民向け勉強会を複数行い、さらには薬剤師、管理栄養士など腎臓病療養指導にあたるメディカルスタッフとの多職種連携を強力に推進しております。

研究活動ですが、臨床研究としてOCKD-NET2を新たに開始しました。基礎研究としまして、内田は腎臓病・血管病の検討を、吉田はヒト心臓内幹細胞から心筋細胞への分化制御機構の解明を、それぞれ継続して実施しております。研究の成果は各学会にて報告しております。

末筆となりましたが、今後とも先生方の御指導、御鞭撻の程宜しく御願い申し上げます。(内田 記)

## 小児急性疾患学講座

小児急性疾患学講座、准教授の鷲尾洋介と申します。現在は津下充講師と二人体制で業務を行っております。若輩ではありますが、皆様のご指導を承りつつ活動させていただいております。

福山市から依頼を受けて小児救急医療体制の構築と、周産期医療体制の整備を行う目的で2013年から継続して活動を行っております。周辺病院や岡山大学の皆様方の多大なご協力のもとに小児救急医療体制に関しては2020年10月から福山市民病院で24時間365日の小児2次救急体制を確立し、その後広島県から小児救急医療拠点病院の指定を受けました。以降は岡山大学小児科学医局のサポートを受けながら、急性疾患学講座からは月に3回の市民病院での救急当直サポートを継続しており救急体制の維持を行ってきております。また、周産期医療体制に関しては福山地区での新生児医療体制を継続可能な形で確立していくことを目的に福山市民病院での将来的な高次NICU開設へ向けて調整を行っております。2022年度には福山市民病院で新たに新病棟内に建設するNICUの図面作成、必要機器の選定等を行ってきました。今後は新病棟完成時期とNICU完全稼働までのロードマップの提示を含めて福山市、市民病院と連携していく予定です。毎年継続して行っている、市民への啓蒙活動としての公開講座はコロナ禍の影響でオンラインでの開催が継続しておりますが、来年度は対面での開催ができればと考えており

ます。

今年度一杯で急性疾患学講座は第2期が完了しますが、皆様のサポートをいただいたおかげで2023年度からは第3期が継続されることが決定いたしております。引き続き来年度以降も救急医療体制の維持、周産期医療体制の確立のために尽力して参りますので、何卒よろしくお申し上げます。（鷺尾 記）

## 陽子線治療学講座

津山中央病院での陽子線治療は、2016年4月28日に診療開始され、約7年経過いたしました。岡山大学は津山中央病院と共同でがん陽子線治療センターを運用しております。大学病院では現在、吉尾、井原、杉山の3名が診療にあたっております。今後も各診療科・センターの専門家の先生方と協力して最適な放射線治療を提供してまいります。

陽子線治療は従来からの保険適用であった小児腫瘍、限局性の骨軟部腫瘍、頭頸部悪性腫瘍（口腔・咽喉頭の扁平上皮癌を除く）、限局性及び局所進行性前立腺癌に加えて2022年4月から肝細胞癌（長径4cm以上）、肝内胆管癌、局所進行性膀胱癌、局所大腸癌（手術後の再発）が保険適用となりました。先進医療での治療は2023年2月時点で行っておりません。

陽子線治療を通して、患者さん、同窓の先生方、関係者の皆様のお役に立てばと考えておりますので、引き続きよろしくお申し上げます。（吉尾 記）

## 高齢者総合医療講座

2022年3月から2023年2月までの報告をさせていただきます。

人事では、1月から6月まで総合内科学教室より大村大輔医師が、7月から12月まで腎・免疫・内分泌代謝内科学教室より森本栄作医師がそれぞれ半年間勤務しました。本年1月より消化器・肝臓内科学教室より高原政宏医師が赴任・診療にあたっています。

2022年12月で講座が設立され、8年目に入りました。

同門の諸先生方には引き続きご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお申しいたします。（芦田 記）

## 運動器外傷学講座

運動器外傷学講座は運動器外傷に関する新規治療の開発を目的とし、平成28年に開設されました。現在、運動器外傷に対する臨床研究および基礎研究を積極的に行っています。岡山県だけでなく、中四国および全国の外傷治療の促進に取り組んでいます。スタッフは中田英二（准教授）、依光正則（講師）の2名です。

臨床では、救急部と連携し、多発外傷や高エネルギー外傷など重度外傷や、骨盤骨折・寛骨臼骨折、偽関節など、他院で治療に難渋している症例を当院に受け入れ、治療を行っています。基礎研究では、大学院生を指導し、組織機能修復学講座（宝田教授）と連携し、iPS細胞を用いた骨欠損の組織再生などに取

り組んでいます。また、学会活動としては、日本骨折治療学会を中心として多くの学会で積極的に発表を行っています。

今後とも先生方の御指導・御鞭撻のほどよろしくお申し上げます。（中田 記）

## 地域救急・災害医療学講座

中尾篤典教授兼任のもと、上原・上田の助教2名により運営しています。

新型コロナウイルス感染者数増加により救急搬送困難例が増加しております。地域救急医療の最後の砦としての役割を果たすべく、重症症例に限らず、発熱や呼吸困難などを含めた症例を積極的に受け入れております。当院においても病床逼迫が起きており、救急患者受け入れのために多くの患者様の転院について岡山西大寺病院をはじめとした地域拠点病院をお願いしております。いつにも増して患者様の迅速な受け入れを快諾いただき改めて御礼申し上げます。

臨床面では関係各科と協力しながら重症COVID-19患者の診療、また大学病院に集約しやすい多発外傷、重症頭部外傷、重度の四肢・骨盤骨折などの重症外傷、重症小児症例、院外心停止などを多く診療しております。各専門診療科の先生方には、初期診療、集中治療管理後の継続診療も含め、様々な場面で多大なご協力をいただいております。この場を借りて深謝申し上げます。

また、研究面では外傷、心停止、集中治療に関連する臨床研究、また敗血症に関連する基礎研究に従事し、教育面でも救急隊との定期的な勉強会や院内の心肺蘇生の講義など幅広く取り組んでいる所存です。

さらに、来年度より当院ドクターカーの現場出動を行う予定としております。今までのECMO搬送に加えて多くの重症患者様に対応する体制を整え、岡山市東区の救急患者様への早期診断・治療に結びつけていきたいと考えております。

今後とも地域救急医療を支えるべく邁進していく所存でありますので、御指導・御鞭撻のほど何卒宜しくお申し上げます。

（上田 記）

## 岡山県南東部（玉野）総合診療医学講座

玉野市と岡山大学総合内科学との連携で開講している講座です。開講6年目を迎え、引き続き玉野市を中心とした岡山県南東部における地域医療に多面的な貢献を行うことを目標のひとつとして活動いたしました。

地方独立行政法人玉野医療センターの一翼を担う玉野市民病院において、引き続き内科診療を担当いたしました。総合内科医として、離島を含めた地域の病院・院外と連携しつつ診療を行う中で、担当教官の専門である伝統医学（漢方医学）領域、循環器科領域の診療を積極的に行いました。訪問診療にも引き続き参加し、地域医療を実務で支える機会となっております。

同院では内科専門医を目指す専攻医の受け入れが行われており、その指導にも携わりました。また、地域医療体験実習（1年生・3年生）を行う学生の受け入れも行われ、当講座の教員



が実習指導に加わるとともにその評価も行いました。医療現場を肌で感じることでできる実習であり、学習意欲の向上につながるなど貴重な経験になったという学生の言葉が多く聞かれます。新型コロナウイルス流行が続く中、専攻医・実習生の受け入れにご協力いただきました関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

岡山大学においては、総合内科・総合診療科での診療を担当いたしました。教育面では、総合内科・総合診療科においてこれまで同様に学生の臨床実習を担当いたしました。基本実習では全ての学生に伝統医学的診療を体験する実習を行い、選択実習において総合内科・総合診療科を選択した学生には、より深く伝統医学に触れられるような実習を継続しております。そして、伝統医学の卒前ならびに卒後・生涯教育の機会として定期的に勉強会を開催し、その普及に努めました。（植田 記）

## 岡山県南西部（笠岡）総合診療医学講座

いつも同窓会の皆様方には大変お世話になっております。本講座は、2017年4月に笠岡市と総合内科学の連携で開講した講座です。笠岡市を中心とした岡山県南西部における地域医療学に関する研究・教育と、診療による地域社会への貢献につなげることを目的としています。人事に関しましては、引き続き、山崎辰洋助教と堀口で業務にあたっております。

診療面では、新規紹介患者様を増やすべく地域連携室との連携強化を図っております。また、健診業務の充実、多様化する内視鏡業務への対応に従事しております。健診結果の丁寧な説明と主治医との連携により健診件数は徐々に増加しております。当講座開設時より内視鏡診療の充実にも力を入れており、継続的な受療行為の推進に役立っていると考えています。岡山大学病院および藤井病院からも応援医師を派遣して頂き、救急・外来・入院診療の充実が図られています。常勤医として専攻医も定期的に派遣されており、スタッフの豊富な経験に若手医師のフットワークの軽さが加わっております。近隣の医療機関の先生方におかれましては引き続き病病連携、病診連携をお願い申し上げます。

教育については当講座の伝統として、引き続き卒前・卒後教育に力を入れています。岡山大学医学部より、早期地域医療体験実習（1年生）、地域医療体験実習（3年生）を受け入れ、離島医療やへき地医療といった医療の現状を学べる地域医療学習の場を提供しています。初期臨床研修医には複数医師の指導により感染症、悪性腫瘍、心血管系疾患をはじめ多様な疾患の診療経験を積んで頂いています。笠岡市と岡山大学で奨学生制度契約を締結し、将来の井笠地区の医療を担う若手医師の育成にも経済面で取り組んでおります。

研究については、総合内科で立案された地域医療現場に即した研究の論文化及び新規研究への取り組みを引き続き行っております。

COVID-19蔓延による、診療・教育・研究の変化に柔軟に対応しながら地域医療の核となるべく地道に取り組んでまいりたいと思います。引き続き総合内科学教室と連携しつつ岡山県南西部の医療を盛り上げてまいりたいと思いますので、今後とも

よろしく願いいたします。

（堀口 記）

## 岡山県北西部（新見）総合診療医学講座

2018年4月に当講座が開講して、5年目となりました。現在の勤務体系は、木曜日に湯川診療所（豊永地区）に花山准教授が出張し、水曜日に神代（こうじろ）診療所・新郷（にいざと）診療所（いずれも神郷（しんごう）地区）に大塚勇輝助教が出張しております。僻地医療の質の向上のために、教育・研究で貢献するべく活動しております。教育面では、総合診療専門医の専攻医プログラムにある長岡寛和医師（神代診療所勤務）の指導を担当し、診療所での健康教室の開催、病児保育に関する新見市役所への要望など、複数の地域保健活動のサポートを経験できました。湯川診療所の井上智博所長が、内科学会地方会で、診療所で経験した症例を発表され、そのサポートを頂きました。花山准教授は、豊永市民センターで「がん検診のお話」と題した市民公開講座を実施しました。研究面では、湯川診療所で多施設共同研究の多施設共同研究の「J-DOME研究」に参加開始しました。大学においては、2022年に当講座関連で29本の論文執筆があり、大塚勇輝助教がそのうちの19本を筆頭執筆者であり、日本病院総合診療医学会のシンポジストやセミナー講師を複数担当し、精力的に活動しました。診療面では、発熱外来対応を継続し、新型コロナのワクチン（5回目）とインフルエンザワクチンの接種を進めました。上部消化管内視鏡検査、心エコーなどの精密検査も引き続き実施し、巨細胞性動脈炎の症例に生物製剤の導入を開始し、僻地診療所においても難病診療を実施しております。新見の僻地医療を支え、地域医療の向上に向けて研究を進展させ、教育に力を入れていく所存でございます。コロナ禍で大変な時期でございますが、今後とも皆さまのお力添え・ご指導をよろしく願い申し上げます。

（花山 記）

## 瀬戸内（まるとめ）総合診療医学講座

本講座は、平成31年4月に香川県丸亀市のまるとめ医療センターと総合内科学の連携のもと開講された寄付講座で、開講から4年になろうとしています。准教授1名（萩谷）・助教2名（岡・高瀬）の体制で、外来診療を中心に丸亀の地域医療の一端をサポートしています。病棟でも令和4年4月より内科専攻医プログラム在籍中の田中秀一医師が常勤医として勤務をはじめから、スムーズな入院診療につなげることができています。これまでの4年間で7本の研究論文（感染症・老年医療分野）、8本の症例報告を英文誌に報告しました。

当講座では、今後もまるとめ医療センターを中心とした中讃地域における地域医療の実践を基盤としながら、臨床教育・地域医療研究を進めていくことで、若手医師が地域医療に従事しながら継続的なキャリアアップ（学位・専門医取得）を実現する体制を構築することを目指して活動してまいります。

（萩谷 記）

## くらしき総合診療医学教育講座

本講座は、2020年4月に、総合内科学講座と倉敷成人病センターの連携のもと、倉敷エリアにおける地域医療現場での教育・臨床・研究を基盤とし、円滑で持続的な医師・医療人の育成を使命とする寄附講座です。三好智子が准教授として、赤穂宗一郎が助教として、着任しております。

臨床現場での教育活動としては、倉敷成人病センターで、初期研修医・専攻医の教育を担当しております。初期研修医とは一般外来で年間約100症例の指導を行い、上部500件／年、下部200件／年にわたる内視鏡検査での技術指導に加え、抄読会、症例レポート添削なども行っております。

学部教育活動としては、主に総合内科・総合診療科での臨床実習での外来指導・発表指導を行っております。医学科3年生の内科総論や4年生の臨床実技入門、1～5年生の行動科学I～Vの授業も担当しています。更に、次年度は岡山大学医学部医学科の国際認証受審があり、その準備も進めています。

生涯学習活動としては、オンラインで市民公開講座 高校生メディカルスクールで高校生に医学科紹介を行ったり、卒後臨床研修指導医養成講習会、岡山県医師会臨床研修指導医養成講習会や三重大学主催 医学生・研修医等をサポートするための会で講演も行いました。

学術活動としては、三好准教授が医学教育研究（筆頭2編、特集筆頭1編、特集共著5編、寄稿1編）、コロナ禍における医療人の燃え尽きに関する研究（筆頭1編、共著1編）、赤穂助教が基礎研究（筆頭1編、共著1編）の誌上発表を行いました。更に、赤穂助教は研究助成金4件を獲得しました。

本講座は、初期研修医および専攻医の育成、多職種連携教育、臨床研究、医学教育研究などを通し、地域医療に貢献していく所存です。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。（三好 記）

## 周産期医療学講座

2021年7月に福山市からの寄付で開設された本講座も7月で3年目を迎えます。昨年11月から衛藤英理子講師に代わり大平安希子助教が本講座のスタッフに就任し、引き続き私、長尾との2名体制です。今年もミッションとして与えられた、「周産期母子医療センターを中心とした公的医療機関の分娩機能の充実・効率化による安全・安心に産出できる体制の整備、婦人科腫瘍診療の拡充を通し、圏域における効果的な産婦人科医療体制を構築すること」を目指して活動していきます。

現在、福山市民病院において大平助教の指導下に臨床検査技師による胎児スクリーニング検査外来の実践、長尾による婦人科悪性腫瘍手術、腹腔鏡手術の支援を通して周産期、悪性腫瘍の両領域の診療の充実を図っています。また、母体血を用いた出生前遺伝学的検査（NIPT）を中心に遺伝診療の支援も行っています。市民に向けては、「11月3日はいいお産の日～安心・安全な妊娠・出産を withコロナ～」というタイトルで大平助教が公開講座（YouTube配信）を行いました（配信期間：2022年11月3日～2023年3月31日）。また、今年3月には女性

の健康週間にあわせてHPVワクチン接種の啓蒙のための公開講座も予定しています。

周産期母子医療センターの開設を見据え、引き続き当講座に与えられたミッションの実践を継続して参ります。周産期医療学講座をよろしく願いたします。（長尾 記）

## 赤磐（あかいわ）総合診療医学講座

本講座は、2022年4月に赤磐市と総合内科学の連携で開講した講座です。講座が開設されてから間もなく1年が経とうとしています。2022年秋の異動はなく、引き続き灘・福安の2名が所属し、赤磐市国民健康保険佐伯北診療所で診療を行っております。患者さんの顔と名前が一致するようになり診療の効率が上がってきたため、教育や研究の準備を進めているところです。

本講座は赤磐市からの寄付による講座ですが、主たる診療の場である佐伯北診療所は市境に近く、周辺の美作市、美咲町、和気町からも多数の患者が訪れています。開業医の高齢化による閉院で、周辺の医療機関が減少してきており、地域における佐伯北診療所の重要性は高まる一方です。年始には赤磐市長の訪問もあり、行政からの期待も強く感じているところです。

まだ具体的な研究成果は出せておりませんが、引き続きご指導のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。（灘 記）

## 周産期・小児救急医療学講座

周産期・小児救急医療学講座は、井原市の要請に基づいて設置され、開設期間は令和4年11月から5年間です。担当教員は産科・婦人科学分野より早田（准教授）、救命救急・災害医療学分野より青景聡之先生（助教）の2名であり、井原市民病院を拠点とした岡山県南西部の周産期医療・小児救命医療体制の整備・構築を目的といたします。

井原市民病院では、平成18年に産婦人科常勤医の退職に伴い分娩を停止したため、妊婦は隣接する福山市や笠岡市まで足を運び、妊婦健診ならびに産出せざるを得ない状況が今日まで続いております。働き方改革により全国的に分娩施設が集約化されることは間違いなく、現存の産婦人科診療施設を支援、維持し、共倒れしない方策が迫られています。医師偏在等による医師不足が進むなか、井原市においても安心安全な周産期医療を提供するため、周産期セミオープンシステムを導入し、井原市の妊婦が地域で妊婦健診ができるよう地域医療のあり方に向けた研究を行います。本体制により、妊娠初期より妊婦は井原市民病院で妊婦健診を受け、妊娠後期は分娩施設のある井原市近隣のクリニックや病院で管理を行うことで、分娩の安全性と妊産婦の利便性を保ちながら、それぞれの医療機関の特性を生かした役割分担が可能となります。セミオープンシステム自体は珍しい仕組みではありませんが、週2回の産婦人科外来診療のみで妊婦の安全性は担保されるのか、医師不足地域と同様の体制を運用する場合の問題点・改良点をあぶり出し、丁寧に検証したいと考えております。

救急医療分野においては、従来の高齢者救急対応に加え、小児救急傷病に対して軽症例の急患対応能力、重症化サイン



を的確に認知できる能力および重症例を高次施設へ搬送する「Hub病院」の役割を担う能力等の養成を到達目標としております。

今後ともご指導、ご支援を賜りますよう、何卒宜しく願い申し上げます。(早田 記)

## 肝・腎疾患連携推進講座

令和4年4月1日より、開講となりました肝・腎疾患連携推進講座ですが、活動の柱は2つあり、一つは肝臓と腎臓に病変が多発する肝腎嚢胞性疾患の実態調査です。現在、講座の母体である医療法人創和会（しげい病院・重井医学研究所附属病院）の先生方にご相談させていただき、岡山県透析医部会にご協力を仰ぐ形で全県調査を行う予定です。現在、一次アンケートを発送し終わり、倫理委員会に再申請予定です。ご協力いただいております同門ご施設に深く感謝申し上げます。二つ目の活動はメタボリックシンドローム関連臓器障害の代表である慢性腎臓病と慢性肝疾患の予防・受診・受療の啓発推進活動です。生憎のコロナ禍で現地開催での啓発活動がなかなか開催できませんでしたが、令和5年3月5日に漸く、倉敷で「肝・腎かなめの健康講座」と題した啓発講演会を開催する運びとなりました。しげい病院・岡山大学病院肝炎相談センターと協力して、肝炎ウイルス検査・尿検査の重要性を啓発したいと考えております。

肝疾患と腎疾患を一網打尽に発見、改善していくことに邁進してまいります所存です。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。(高木 記)

## むくみを科学する先進リンパ学講座

2022年4月から2023年3月までの活動報告をいたします。

当講座は、本学・株式会社テクノ高槻・浜松ホトニクス株式会社3者の共同研究講座であり、リンパ浮腫に関する診断治療器を、本学のシーズを基に、各企業の先端技術にて開発上市するものであります。

研究は、第46回日本リンパ学会総会・シンポジウム（6月／東京）、Plastic Surgery The Meeting（10月／ボストン）、第31回日本形成外科学会基礎学術集会・ランチョンセミナー・イブニングセミナー（10月／岡山）、第3回リンパ外科セミナー・シンポジウム（10月／岡山）、第49回日本マイクロサージャリー学会・シンポジウム（11月／浜松）にてそれぞれ発表し、参加者と深い議論を交わすことができました。本講座が進める機器開発が現場で強く求められていることを痛感しております。4月以降も、韓国形成外科学会など国内外の学会にて講演する予定です。

また、12月に第2回岡山大学リンパ解剖セミナーを主催いたしました。北海道から九州まで計47名の参加を頂くことができました。どの参加者様も地域でリンパ浮腫治療の最前線で活躍されている方々で、本学が有するリンパ解剖の知識とそれから応用される診断治療法を高度なレベルで共有することができました。このネットワークを通じて本講座の研究開発の啓蒙をしていく所存です。本年度も第3回を開催いたします。

我々は、今後も最先端の医療の開発、地域医療への貢献、若い人材の育成を目指して、研鑽を重ねて参ります。同窓の先生方におかれましては、引き続き変わらぬご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。(品岡 記)

## 医療情報化診療支援技術開発講座

令和4年9月に共同研究講座として開設されました。本講座は、経済産業省の主導する「高等教育機関における共同講座創造支援事業」の支援を受けてプラスマン合同会社と岡山大学整形外科との産学連携によって設置されました。同事業は全国で23施設が認定されましたが、これは医療分野で唯一であり、かつ、医療分野以外の全分野を入れても中四国で唯一の採択となりました。これまで整形外科学教室では、原発性骨悪性腫瘍のX線画像を読影するプログラム医療機器開発を行って参りましたが、骨の悪性腫瘍は希少疾患であり、一般的に希少疾患は対象患者数が少ないことから企業の支援が受けにくく、医療機器開発に難渋します。しかしながら、この度、プラスマン合同会社の御協力を得て、医療現場のニーズと、企業側の開発をうまく繋ぐことで研究を行う事が可能となりました。そこで、適切なニーズを見出し、開発案を出せる医療側と、社会実装を目指して薬事戦略を考える企業側との取り組みなどの成果を講義として配信し、医療デジタル人材の育成を行うことも目指しております。2022年度は医療AIのトピックに関する特別講義を多数扱い、オンラインで無料公開も行いました。講義を通じて、医療側と企業側との新たな研究シーズが生まれていく事を目標の一つとしています。

また、本講座は近年急速に発展している、医療におけるデジタルトランスフォーメーション（DX）事業に積極的に関与していきます。DX化は、患者さんへ優れた医療を提供するだけでなく、医療従事者の業務効率化も行えます。理想とする医療の実現を目指して、本講座はAI以外の様々なデジタル分野の発展にも寄与して参ります。稼働したばかりの講座ですので、どうぞ皆様のご指導ご鞭撻のほど何卒宜しく願い申し上げます。(長谷井 記)

## 検査部

総合内科大塚文男教授が検査部長を併任しています。本年度は三原主任技師と佐々木技師が退職します。業務上では、夜間休日の外来患者用にCOVID-19PCR検査の新規機器が導入され、今までの約1/3の時間で結果報告できるようになりました。教育関係では、本学保健学科学生、倉敷芸術科学大学学生の臨地実習を受け入れました。研究・学会活動では、全国学会で8演題、地方学会で4演題発表しました。資格関係では、辻技師が、日本臨床神経生理学会専門技術士、横山技師が二級臨床病理技術士（微生物）、草谷、平畑、松田、宮本技師が医療情報技師、青江副技師長、三宅技師がバイオインフォマティクス、寛技師が認定臨床微生物検査技師を取得しました。表彰関係では、武本技師が画論30th The Best Image in Ultrasound超音波（心臓部門）で最優秀賞を受賞しました。

検査部は今後も患者サービスに努めてまいりたいと考えています。今後とも検査部をどうぞよろしくご厚意申し上げます。  
(東影 記)

## 手術部

同窓会の皆様におかれましては益々ご活躍のことと存じます。

近年、Web会議の形式で開催されていた全国国立大学病院手術部会議が三年ぶりに九州大学の主幹で11月21日に福岡で現地開催されました(第59回)。

当院からは増山部長、水原師長の二名が参加いたしました。本会議では、恒例の文部科学省職員の医療人材育成や、医師の働き方改革などの大学病院を取り巻く諸課題についての講演があり、諸問題の共有がなされました。全体の討議事項としては、手術部従事者の待機手当支給、手術映像の個人情報保護、手術部位のマーキング方法についてなどが議題として取り上げられ、積極的な意見交換がなされました。度重なる新型コロナウイルス感染症の流行波により手術室の使用制限などもありましたが、手術件数は回復しており、令和3年度総手術件数は令和2年度より約400件増加し、8,957件、手術部外手術・検査件数は1,248件で、全国的にはそれぞれ8位、1位の件数でした。令和3年11月8日より大動脈緊急症拠点病院(県内総数5病院)に指定され、急性大動脈解離などの緊急手術が大きく増加しています。新型コロナウイルス感染症の症例もあり、チームで振り返りやシミュレーションを実施しながら、対応のアップデートを行っています。今後は他の4病院との連携を深め無理のない対応を目指します。令和4年秋の開設を目指していましたが外来手術センターは、外来手術センターおよび現行手術室の手術枠の決定・変更、医療機器の納期延長などの問題で開設時期が遅延していました。この度、皆様のご尽力により令和5年3月6日に開設されることになりました。外来手術センターは、歯学部棟3階に三つの手術室を擁し、開設後は、眼科、耳鼻科、形成外科、皮膚科などの外来手術が行われる予定です。手術枠の増加によりさらなる手術件数増加が予想されますが、安全に手術が行えるようチーム一丸となり取り組んで参ります。新型コロナウイルス感染症の第8波の影響は限定的で、現在手術制限は実施せず、定期手術、緊急手術に対応しております。今後とも皆様のご指導、ご協力をよろしくお願い致します。

(岩崎、水原 記)

## 総合リハビリテーション部

千田益生教授のもと、PT27名、OT7名、ST4名、看護師1名、クラーク2名(交代制)で日常業務をこなしております。医師は教授1名、講師1名、助教1名、医員2名です。COVID-19など感染対策のため、現在も外来と入院のリハ時間を分け行っております。

第6回日本リハビリテーション医学会秋季学術大会は千田教授が大会長で、2022年11月4～6日岡山で開催いたしました。テーマは「Diversity and Inclusion～リハビリテーション医学

の多様性と包括性」でした。Webと現地のハイブリッド開催で行いました。天候にも恵まれ、感染対策もしっかり行い、安全に3日間開催することができました。「チーム岡大」として岡大病院内の様々な分野の先生にご講演をいただき、全国のリハビリテーション医学会にも大変好評でした。私も先生方のお話をゆっくり聞いて大変勉強になりました。お忙しい中、ご講演いただきました先生方、本当にありがとうございました。

日常業務・学生実習などは、3密を避けて、手洗いなど感染防止策を徹底しています。学生選択実習や初期研修医がリハ研修(実習)を行っています。全科からリハ紹介をいただいておりますので、どの科を専門にする医学生・研修医にとっても有意義な研修(実習)となるよう努力しています。リハ専攻医は現在他病院で研修中です。リハ専門医不在の大病院も多くあり、早く専門医が増えることを切に願っております。

3月で千田教授が退官されます。4月からは新体制で頑張っていきます。至らない点もあるかもしれませんが、お気づきの点がございましたら、お知らせいただけると幸いです。引き続き、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

(堅山 記)

## 輸血部

令和5年度下半期においても、安全な輸血療法と血液製剤の適正使用を目標に、医師、看護師、検査技師が一丸となって業務に励んでおります。

業務面では、CAR-T療法をはじめとする細胞療法の件数が増加し、造血幹細胞採取もこれまでどおり実施しており、ほぼ毎週のように(日によっては2件並行で)アフエレーシスを実施しています。このような細胞療法業務の増加と、自己血貯血依頼数の減少に伴い、これまで平日すべての曜日で対応してきた自己血貯血枠ですが、実施曜日を限定させて頂いております。診療科の先生方におかれましては、何卒ご理解とご協力のほどお願い申し上げます。

最近の嬉しいニュースとして、開結稀技師が認定輸血検査技師資格を取得し、輸血部所属の4名全員は認定技師となりました。名実ともに輸血のエキスパートが院内に1名増えたこととなります。益々の活躍を期待します。人事面ですが、輸血部医員は住居優一、浦田知宏、谷勝真、阿部将也4名の体制です。それ以外のメンバーは、これまでと変わらず頑張っております。引き続きご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

(藤井(伸) 記)

## 血液浄化療法部

血液浄化療法部は、和田淳部長(腎・免疫・内分泌代謝内科学教授)のもと、スタッフ医師2名(田邊克幸、岡本修吾)、医員5名(高橋謙作、中島有理、中土井崇人、御船朋代、加納弓月)で診療にあたっています。入院中の慢性維持透析患者の透析管理、新規の透析導入、急性腎不全患者の透析管理、難治症例に対する血漿交換等の体外循環治療について、看護師、臨床工学技士と協力して診療に取り組んでおります。



新型コロナウイルス感染症の透析医療への影響は依然として終息が見えず、関連病院の先生方も苦慮されているところかと存じます。血液浄化療法部は、一昨年に比べると受け入れ件数が増加傾向であるものの、未だ新型コロナウイルス感染症の流行以前の状況には戻っておらず、今年度の血液透析及びアフェレシス療法のための受け入れ件数は年間1600件を超える程度でした。新型コロナウイルス感染透析患者の受け入れは、感染対策の面から人員的に厳しいところではありますが、非感染の入院患者の血液浄化療法は制限をせずに受け入れられており、コロナ禍以前と同様な治療件数に対応できるよう努力していきたいと思っております。今後も安全な血液浄化療法を提供できるよう取り組んでまいりますので、同門の先生方、関連病院の先生方におかれましては引き続きご支援をお願い申し上げます。

(田邊 記)

## 光学医療診療部

AI（人工知能）が人々のさまざまな生活の場面に取り入れられるようになりましたが、内視鏡の世界もその例外ではありません。胃カメラや大腸カメラの検査では、画面にポリープや癌が写り込むと、そこに四角のマーカーが現れてアラームで知らせてくれる、そういった機能をもつ内視鏡システムが開発され、私たちの日々の検査で用いられる時代が訪れつつあります。完成度はまだもう少し、というところですが、「疲れない目」を手に入れることは、日々目の衰えを感じるベテラン（？）内視鏡医にとってはとても大きな力となります。今後のAI内視鏡の発展に期待したいと思えます。

第8波の到来に伴い病院スタッフのコロナ感染者も増加している状況において、光学医療診療部も同様に散発的にスタッフの感染者が出ています。胃カメラの際、患者さまはマスクをしていないため感染したスタッフが検査を行うと、検査をうけた患者さまは即濃厚接触者になってしまいます。幸いクラスターを生じることなくこれまで過ごしてきましたが、引き続きコロナ対策には細心の注意を払ってゆくとともに、今年こそはコロナが落ち着き、さまざまな制限が解かれる日が来ることを心待ちにしています。

これからも安全・安心・確実な内視鏡診療を目指し、スタッフ一同精進して参りますので引き続きご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

(加藤 記)

## 高度救命救急センター

当高度救命救急センターをご支援くださり、心より御礼申し上げます。

新型コロナウイルスの感染蔓延の状態はまだまだ続いておりますが、当センターではコロナ禍における平時救急の破綻を防ぐため、救急搬送応需を徹底し、救急搬送数は令和3年に2181件、令和4年は3924件を応需してきました。現在の診療体制には、患者受け入れに協力頂いている各診療科とセンターに所属し活躍される整形外科、脳神経外科、口腔外科スタッフが不可欠であり、感謝申し上げます。

昨年度より新たに2名の病院救急救命士が採用となり、指導医師のもと特定行為を行う環境を整え、医療スタッフのタスクシフト、タスクシェアを進めて参りました。ドクターカーの現場出動の準備も順次進めています。岡山市北消防署のピックアップ方式（消防と連携して医師を現場出動させる方式）と合わせて、病院前救護の充実化をすすめています。ICU部門では重症呼吸不全管理（ECMOを含む）、急性血液浄化療法、心停止蘇生後管理（目標体温管理）などの高度治療の他に、治療が奏功せず終末期に至った患者様の最大限の支援にも力を入れています。患者の権利である臓器提供の機会を損なわないよう体制づくりの成果もあり、年間5名の提供症例を経験させて頂いています。小児救命救急センターが令和4年8月より設置され、当センターは最大限の支援を行い、地域のリーダーシップを果たす一助になればと思います。特に外傷、院外発症の小児重篤患児の受け入れは重要な役割と感じています。春からは新しく救急医を目指す医師が仲間入りしますので、今後一層のご支援のほどお願いいたします。

日頃よりお世話になっております近隣医療機関の先生におかれましても日常の忙しい勤務に加え、当院センターからの多くの患者様の転院を快く受け入れて頂きましたことを深く感謝申し上げます。今後もかわらぬご支援をよろしくお願い申し上げます。

(塚原 記)

## 周産母子センター

コロナ禍で全国的に出生数が減少している中、引き続き当センターには県内外から多数の症例をご紹介いただいております。大変感謝いたしております。

当センターは合併症妊娠や習慣流産・不育症、周産期合併症などのハイリスク妊娠・分娩管理だけでなく、正常妊娠例や生殖補助医療（ART）にも積極的に対応しているのが特色です。分娩時大出血などの産科救急には、高度救命救急センターや麻酔科、放射線科などと協同で母児救命に取り組んでいます。また先天性心疾患に代表される胎児異常症例につきましては、小児循環器科、心臓血管外科、小児外科、脳神経外科、小児麻酔科など関係各科と協同で診療に従事しております。

当センターには産科部門（周産期および生殖内分泌）とNICU（新生児集中治療室）部門があり、増山 寿産科婦人科教授がセンター長、鎌田泰彦が副センター長・准教授、産科婦人科の牧 尉太が産科部門長、小児科の吉本順子がNICU部門長を務めております。産科部門は、衛藤英理子講師以下周産期専従医ならびに生殖内分泌専従医を中心に産婦人科専攻医とともに診療にあたっております。NICU部門は、塚原宏一小児医科学教授の指導下に、新生児専従医の鷲尾洋介准教授（小児急性疾患学講座）、渡邊宏和、岡村朋香、森本大作、佐藤剛史を中心に運営しております。

現在の病床数は、入院棟4階東病棟に産科（母体）18床、NICU 6床、新生児室12床。4階西病棟に産科（母体）4床がそれぞれ配置されています。NICUが常に満床状態であることは喫緊の課題であり、母体搬送依頼をお受けできないなど、地域の先生方に多大なるご迷惑をお掛けしております。今後の安

定した周産期医療の供給のためにも、NICUおよびGCU（回復期治療室）、MFICU（母体胎児集中治療室）の拡充を現在予定している次第です。

地域の周産期医療の中核の一つとして診療にあたりとともに、日本周産期・新生児医学会の母体・胎児専門医の基幹研修施設、新生児専門医の指定研修施設として専門医の育成にも力を注いでおります。同窓の先生方におかれましては、引き続きご支援とご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

（鎌田 記）

## 腫瘍センター

当センターでは、田端教授、香川准教授（消化管外科）、榎本（呼吸器内科）の3人体制で、COVID-19流行下におきましても患者様が安心・安全にがん治療を行うことができるよう、各部署からのご協力をいただきながら引き続き活動しております。

COVID-19禍においても腫瘍センターでは28床の病床で延べ900人／月以上の患者様の外来化学療法を行っております。特定の曜日に患者様が集中していたこともあり、1日の利用枠の調整をさせていただき、おかげさまで曜日によるばらつきも少なくなり、待ち時間の短縮にもつながっております。引き続き、感染対策にも十分留意しながら治療を行っていききたいと思っております。

当センターでは標準治療が終了となった患者様を対象とした特定臨床研究である「遺伝子プロファイリングに基づく推奨治療による患者申出療養」を中国・四国地方における唯一の分担施設として引き続き担当しており、遠方から多くの患者様をご紹介いただいております。

また、院内総合がんセンターボードとして、隔月でテーマを決めてレクチャー形式の勉強会を開催しております。COVID-19流行の影響で、引き続きオンライン形式で行っておりますが、他医療機関からの参加も可能ですので、もし興味ございましたら当院腫瘍センターのホームページからお申込みいただけましたらと思います。

今後も、歯科医師、薬剤師、看護師、歯科衛生士、がん相談事務員など多職種からなるチーム医療を実践していきたいと思っております。診療科・職種の枠を超えて質の高いがんのチーム医療を実践できる場、さらには地域で求められるがん医療に対応できる人材育成のための研修の場の提供を目指しております。同窓の先生方におかれましては、今後もご支援とご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

（榎本 記）

## 内分泌センター

内分泌センターでは内分泌内科・外科・コメディカルが一丸となって全身多臓器に及ぶ多様な内分泌疾患に対して関連各科と緊密に連携しながら日々診療を行っております。中四国を中心に全国の同窓の先生方から患者様をご紹介頂き、内分泌センターカンファレンス等にて各専門の立場から活発な意見交換を行いつつ、1症例毎に多彩な病態を呈する内分泌疾患に対してチームで取り組むとともに、専門医育成や学生・研修医教育に

も尽力しております。

2022年度下半期の学会活動として、日本内分泌学会臨床内分泌代謝Update・日本甲状腺学会・日本神経内分泌学会・日本生殖内分泌学会・間脳下垂体副腎系研究会・間脳下垂体腫瘍学会・日本乳癌学会中国地方会・内分泌学会中国地方会・中国四国甲状腺外科研究会など、内分泌代謝領域の主要な学会・研究会に参加し、数多くの学会発表を行いました。

最後になりましたが今後とも同窓の諸先生方の御指導・御支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

（稲垣 記）

## 臓器移植医療センター

本年度もセンター長の前田嘉信病院長のもと、3人の副センター長（八木孝仁、豊岡伸一、杉本誠一郎）の体制で、移植医療を円滑に遂行すべく日々業務を行っております。コロナ禍も3年を経過し、全国の脳死下臓器提供数は回復しており、2022年の診療実績は肺移植6例（生体1例、脳死5例）、肝移植14例（生体12例、脳死2例）、腎移植7例（生体7例）でした。肺移植のうち2例は、技術的にも困難な慢性拒絶に対する再肺移植でしたが、無事に成功しております。腎移植では、スタッフの入れ替わりや医学的理由で延期・中止となった症例の影響で、例年より症例数が減少しましたが、その間にマニュアル再構成や働き方改革も踏まえて体制を整え、2023年に臨んでおります。各チームともより一層上のレベルを目指しone teamで移植医療に取り組んでおります。

人事面では、腎移植チームの荒木元朗が2022年12月に岡山大学学術研究院医歯薬学域泌尿器病態学分野の教授に着任しました。増加の一途を辿る腎不全に対する唯一の根本的治療である腎移植の普及に貢献すべく、科としても積極的に移植医療を支持・支援し、益々重要となってくる若手教育にも力を注いで参ります。また、2022年4月から三重大学肝胆膵・移植外科より肝移植の臨床協力医として赴任していた早崎碧泉が、9月に半年間の国内留学を終えており、今後の三重での移植医療の発展が期待されます。

なお、心移植については2018年に心移植施設を辞退しておりましたが、辞退の要因となった植え込み型補助人工心臓実施施設の認定を申請し、心移植の再開に向けて、黒子洋介を中心に着々と準備を進めております。

新型コロナウイルスの5類感染症への移行の準備が進むなか、日本屈指の多臓器の移植施設として移植医療の発展に貢献できるよう活動して参る所存ですので、引き続きご指導ご鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。

（杉本 記）

## 超音波診断センター

超音波診断センターは、2011年4月に開設され、12年目を迎えました。

大塚文男センター長（総合内科学教授）、大西秀樹副センター長（消化器内科）、高谷陽一助教（循環器内科）のもと、循環器領域・消化器領域の他にも血管領域（頸部、下肢、末梢血管等）や体表領域（乳腺、甲状腺、関節等）など広範囲にわたる



超音波検査を行っております。

ここ数年のコロナウイルスの感染対策としてのマスクとゴーグルの着用にも慣れ、技師も感染に留意しながら日々の検査を施行しています。検査制限を設けた時期もありましたが、診療科よりの要望も多く、現在では以前と変わらない検査件数に戻っております。

コロナ以降、講演会や学会なども開催が難しくなりましたが、オンラインの時期を経て、徐々に現地でも開催されるようになってきました。日本超音波検査学会や超音波医学会、日本心エコー図学会のみならず、動脈硬化学会においても積極的に学会参加や研究発表を行い、各自研鑽につとめています。また、業務時間後や休日に自宅から気軽に参加できるオンラインの講習会も多く、知識の向上に役立っています。

現在、超音波指導医2名、超音波専門医2名、超音波検査士5名（消化器領域、循環器領域、血管領域、体表臓器領域、健診領域）が資格を有し、生理検査室と協力し心電図認定技師2名が超音波検査（循環器領域）の習得に励んでおります。

育休の要員もあり、臨床のご要望に応える事が難しい場面もございますが、スタッフ一同協力し、患者様の診療のために邁進してまいります。（信定 記）

## 糖尿病センター

当センターでは、岡山県からの受託事業である「岡山県糖尿病医療連携推進事業」の事務局に加え、平成26年度から「糖尿病看護認定看護師チーム岡山」と「CDEJ（日本糖尿病療養指導士）チーム岡山」の事務局、平成31年度から岡山市より受託しました「岡山市糖尿病・肥満対策事業」の事務局も担当しています。岡山大学病院での糖尿病診療では、多職種によるチーム医療の深化、インスリンポンプ、リアルタイム持続血糖測定器の導入、減量・代謝改善手術等の先進糖尿病治療の推進に取り組んでいます。

「岡山県糖尿病医療連携推進事業」では、県内の糖尿病診療レベルの向上と医療連携体制の構築及び県民への普及啓発を目的とした活動を進めています。新型コロナウイルス感染症の影響を受け、中止となっていました「おかやま糖尿病サポーター認定研修会」を令和4年より再開しました。令和5年2月現在で312施設の「糖尿病総合管理医療機関（かかりつけ医）」が岡山県知事及び岡山県医師会から認定されており、約1,600名の多職種からなる「おかやま糖尿病サポーター」と共に、地域密着型の糖尿病診療・連携体制（「おかやまDMネット」）の構築を推進しています。

また、国策として進められている糖尿病性腎症重症化予防対策に関しまして、岡山県では平成30年3月に「岡山県糖尿病性腎症重症化予防プログラム（岡山方式）」を策定しました。市町村毎の取組が実施されておりますが、令和3年度から可能な部分については県下統一した形で当該プログラムを推進し、県全体の、また、各市町村における本プログラムのアウトカム評価を行っております。

最後になりますが、四方賢一教授が会長を務めます第38回日本糖尿病合併症学会が令和5年10月20日21日に岡山コンベン

ションセンターにて開催されます。同窓の先生方におかれましては、引き続きご協力・ご支援の程何卒よろしくお願い申し上げます。（和田嵩平 記）

## ジェンダーセンター

人事面では大きな変化はありません。当センターの特徴として遠方に在住する受診者が多く、COVID-19の影響で流行地域に在住の方の受診や手術が中止、延期になる状況が続いていましたが、ようやく規制も緩みつつあるところです。一昨年から中学生以下の初診患者が激増しており、1年間に10名前後だったものが50名前後となっています。心身の発達や学童期・思春期特有の問題への対応も含めた包括的な診療が求められるようになりました。

日本精神神経学会のガイドラインに準拠して毎月開催している岡山大学ジェンダークリニック性別適合手術適応判定会議は、引き続きMicrosoft Teamsを使ったWEB会議で行なっています。ジェンダークリニック立ち上げを検討している遠方の病院、大学、認定資格取得希望者等の参加も続いています。判定会議への参加は、GID学会認定医資格を取得する際にも求められますので、その点でもWEBでの判定会議の開催は、ジェンダー診療の普及に寄与しています。

岡山市こころの相談センター所長の太田順一郎先生が委員長を務める日本精神神経学会の性同一性障害に関する委員会での診断・治療ガイドラインの改訂作業が大詰めを迎えています。当ジェンダーセンターからは難波センター長と松本がワーキンググループのメンバーとして改訂作業にあたっています。その他、岡山大学ジェンダークリニックのメンバーである保健学科の中塚幹也教授、さとうクリニックの佐藤俊樹院長もワーキンググループに参加しています。順調にいけば2023年3月か4月には発表の予定です。2名の精神科医ないし心理関係の専門家（臨床心理士・公認心理師）の意見書を根拠に、医療チームの合議で身体的治療の適応の可否を決めるという診療の流れ自体には大きな変化はありませんが、性同一性障害から性別不合への病名変更並びに精神疾患カテゴリーからの移動への対応、児童思春期の患者への心理社会的対応の追記、ホルモン療法の具体的な薬剤名と使用量の記載等が行われています。

診療にあたってはまだしばらくはCOVID-19対策を横目に見ながら、という状況が続くものと思われそうですが、今後も必要な医療を必要な方に届けるべく尽力したいと考えております。

（松本 記）

## 炎症性腸疾患センター

炎症性腸疾患（IBD）センターは2016年にIBDを専門に診療するために消化器内科、消化管外科、小児科、小児外科が中心となって設立されたセンターです。引き続きセンター長の平岡佐規子、副センター長の近藤喜太（消化管外科併任）を中心に精力的にセンター運営を行っております。本邦におけるIBD患者は増加傾向のままであり、当センターのみならず全国のIBD専門外来の逼迫が喫緊の課題となっておりますが、当センター

では状態が安定したIBD患者の逆紹介につきまして近隣の開業医、そして基幹病院の諸先生方に多くのご協力をいただくことで円滑な運営ができており、深謝申し上げます。また当センターへの紹介患者につきまして年々増加傾向にあり、こちらも諸先生方のおかげと考えております。引き続き病診連携、病病連携についてご協力をいただけますと幸いです。

2023年1月現在、IBD外来診療については、月曜：平岡／衣笠（内科）／近藤（外科）／塚原／津下（小児科）、火曜：井川（内科）、水曜：野田（小児外科）／井口（内科）、木曜：平岡／竹井（内科）、金曜：平岡／山崎／川野（内科）にて行っております。またIBDは多様な腸管外合併症を伴うこともあります。多くの診療科、そして看護師・栄養士・薬剤師などのコメディカルとの連携により質を落とすことなく診療にあたることであります。既存治療に抵抗を示す重症・劇症例など、緊急性の高い症例については、これまで同様、時間外でも対応しておりますし、5ASAアレルギーを疑う症例、そもそもIBDかどうか診断に悩む症例など、重症度に関わらずお困りの患者さんがおられましたら、当センターまでお気軽にご連絡いただけますと幸いです。

まだまだ終息する兆しの見えないコロナ禍にあって、感染トリアージ、受診・面会への制限などやむを得ない点がありますが、引き続き、IBD患者さんの「最後の砦」病院として努力してまいります、ご高配のほど宜しくお願い致します。

（井口、平岡 記）

## 運動器疼痛センター

慢性疼痛治療部門では、本年度も山口大学ペインセンターとの共同事業として、川崎医科大学とともに「令和4年度慢性疼痛診療システム普及・人材養成モデル事業」に採択いただき、岡山地区ではみなみ整形外科のクリニック（高田英一院長）とも連携して慢性疼痛医療過疎の現状を打破するために痛みの診療を実践可能な人材育成、地域における慢性疼痛診療の普及・拡大に取り組んでおります。

痛みセンター多職種連携研修会は、2022年度はハイブリッド形式で4回行い、現地参加、Web参加を併せてのべ127名の多く医療者のご参加を頂きました。本研修会においては、鉄永副センター長から慢性の痛みと便秘、HPVワクチン後の痛みへの対応に加え、後期高齢者質問表の痛み診療における有用性の検討と普及に向けた取り組みについてもご紹介させていただきました。また、2021年に改定された慢性疼痛診療ガイドラインの理解と普及のため、医師、歯科医師、薬剤師、看護師、理学療法士、作業療法士、心理士、ソーシャルワーカー等を対象とした慢性疼痛診療ガイドライン研修会を2022年9月15日に現地参加で開催しました。また、例年通り、痛みリエゾン外来に関わるすべての職種の先生方による岡山大学教養教育科目「痛みの発生メカニズムと医療」を6月10日から開講し、Webによるオムニバス形式で合計15コマの講義を行いました。授業評価アンケートでは、本年も「良い」「非常に良い」が97%と極めて高い評価をいただきました。引き続き、将来の医療を担う医療系学生を対象に痛みの治療の重要性と診療の実践についての

教育を継続して参ります。

慢性疼痛治療部門での毎月1回の合同Webカンファレンスには岡山大学病院・岡山赤十字病院・川崎医科大学附属病院・光生病院に岡山医療センターの5施設が参加し、岡山大学病院痛みリエゾン外来を受診された患者さんの治療方針について多職種検討会を行っております。Webでの患者情報共有に制限がある中、積極的にご参加いただいた関係者の皆様に御礼申し上げます。また、リウマチ性疾患治療部門でも月1回の合同カンファレンスにはWebでの参加が可能となりました。診断や治療に難渋している症例の検討会はもちろん、前回もお伝えしましたように、産婦人科の先生方のご協力のもと、WOCBA患者さんへの対応も強化してまいります。

同窓会の先生方におかれましては、引き続きのご支援・ご指導のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。（西田 記）

## 核医学診療室

核医学診療室では5名の診療放射線技師が常駐し、SPECT/CT装置2台、SPECT装置2台にて、核医学検査を行っています。令和4年8月から令和5年1月の核医学検査件数は約930件となっています。全ての核医学検査に、放射線科診断専門医がレポートを作成しています。

核医学診療室では、その他に放射性同位元素を用いた放射線治療も行っております。子宮頸癌などに対するIr-192を用いた高線量率密封線源治療、前立腺癌に対するI-125を用いた低線量率密封小線源治療、神経内分泌腫瘍に対するLu-177を用いたペプチド受容体核医学内用療法（peptide receptor radionuclide therapy：PRRT）、甲状腺癌転移巣に対するI-131を用いた放射性ヨード内用療法、去勢抵抗性前立腺がんの骨転移に対するRa-223療法も継続して行っています。令和4年8月から令和5年1月のRI内用療法件数は約40件となっています。

今後とも臨床各科の皆様方のご指導およびご協力のほどよろしくお願い致します。（児島 記）

## 結石治療室

結石治療室では、おもに尿路結石症に対する体外衝撃波結石砕石術を行っています。この治療は尿路結石に対する最も侵襲の低い治療であり、入院せずに無麻酔で施行が可能です。

尿路結石の治療は、近年めざましい進歩を遂げています。特に内視鏡の進歩は著しく、細径化によって多くの症例が経尿道的内視鏡下手術や経皮的腎結石砕石術で対応可能となりました。そのため体外衝撃波結石砕石術は件数として減少傾向にあります。しかしながら、大学病院の性質上、他院での治療困難症例を受け入れることが多く、このような難治症例では複数の治療法を組み合わせる必要がある場合があります。体外衝撃波結石砕石術は、以前の簡便な治療という位置づけから、今後は内視鏡手術の補助的役割という位置づけへ変化しつつ、引き続き尿路結石治療の重要な一翼を担い続けるものと考えます。



今後も積極的に体外衝撃波結石碎石術を含め、総合的な結石治療を推進して参りますので、皆様のご協力をよろしくお願ひ申し上げます。  
(荒木 記)

## てんかんセンター

岡山県認定のてんかん診療支援施設である岡山大学病院てんかんセンターでは、伊達勲センター長（脳神経外科）のもと、秋山倫之副センター長（小児神経科）、脳神経外科、小児神経科、精神科神経科、脳神経内科の脳神経系診療科、関連診療科・部・病棟が連携しながら、内科から外科的治療に至るまでの包括的かつ高度なてんかん診療を日々行っています。

新型コロナウイルス感染症の波が繰り返しておりますが、難治てんかんの精査入院（長時間ビデオ脳波検査によるてんかん発作診断、外科治療適応の評価など）は、十分な感染対策を行いながら問題なく継続中です。てんかん外科に関しては、やや難易度の高い症例にも取り組んでおり、経験を積み上げている状況です。てんかん症例院内カンファレンスは、月2回の定期開催を続けております。また、県内の診療連携・レベル向上目的に月1回の症例検討webカンファレンスを継続しており、脳神経系診療科医師の他、臨床検査技師なども参加し、活発な討論を行っております。

教育・啓発活動に関しては、1月に岡山県養護教諭研修会でのてんかんに関する講演を行い、2月には学校教諭を対象としたてんかんの講習会をweb会議により行いました。また、3月のPurple day（国際てんかん啓発の日）のイベントとして岡山県と総社市の協力のもと、備中国分寺五重塔のライトアップを行いました。また、卓球プロリーグチームである岡山リベッツとのコラボレーションによる疾患啓発活動も昨年度と同様に行いました。

今後とも同窓の先生方のご指導、ご支援をよろしくお願ひ申し上げます。  
(秋山 記)



下山 敦士

## 海外への留学者一覧

令和5年4月1日現在

分野名	氏名	卒年次	留 学 先	期 間
分 子 医 学	植 木 靖 好	平 6	Indiana University, Indianapolis, USA. E-mail: Uekiy@iu.edu	2000. 10～未定
	関 次 男	平 6	Department of Medical Education California University of Science and Medicine (CalMed) School of Medicine, U.S.A. E-mail: SekiT@calmedu.org	1998. 7～未定
	浅 野 恵 一	平30院	Icahn School of Medicine at Mount Sinai, New York, U.S.A.	2018. 4～未定
病 理 学 (免疫病理)	内 野 かおり	令3院	University of Montreal, Canada	2021. 6～2年間
	大 倉 隆 宏	平 21	Massachusetts General Hospital pediatrics, Boston, U.S.A.	2022. 4～2024. 4
疫 学・衛生学	鈴 木 越 治	平 17	Department of Epidemiology, Harvard T.H. Chan School of Public Health, Boston, U.S.A.	2022. 6～
消 化 器・ 肝 臓 内 科 学	中 川 裕	平 1	Columbia University in the City of New York, U.S.A.	
	恩 地 正 浩	平 19	Institut für Molekulare Biotechnologie GmbH, Vienna, Austria	2015. 10～未定
血 液・ 腫 瘍・ 呼 吸 器 内 科 学	梅 村 茂 樹	平 11	Georgetown University, Washington, U.S.A.	2018. 9～
	荻 野 敦 子	平 12	Dana Farber Cancer Institute Lowe Center for Thoracic Oncology, Boston, U.S.A. E-mail:ogino8186@gmail.com	2009. 7～未定
	小 山 幹 子	平 12	Fred Hutchinson Cancer Research Center, Seattle, U.S.A.	
	池 川 俊 太 郎	令2院	Dana Farber Cancer Institute, Boston, U.S.A.	2021. 1～
腎・免疫・ 内 分 泌 代 謝 内 科 学	杉 本 光	平 1	Beth Israel Deaconess Medical Center, Boston, U.S.A. E-mail: hikarusugimoto@yahoo.co.jp	1998. 9～未定
	渡 辺 晴 樹	平 19	The Feinstein Institutes for Medical Research, U.S.A.	2020. 9～2023. 8
	三 瀬 広 記	平 20	MD Anderson Cancer Center, Texas, U.S.A.	2019. 6～
	山 村 裕 理 子	平 23	University of Glasgow, U.K.	2019. 1～未定
	林 啓 悟	平 24	Harvard TH Chan School of Public Health, Boston, U.S.A.	2021. 1～未定
	福 島 和 彦	令3院	Massachusetts General Hospital, Boston, U.S.A.	2022. 2～
	山 口 哲 志	平 23	Division of Endocrinology, Cincinnati Children's Hospital Medical Center 3333 Burnet Ave, Cincinnati, Ohio 45229, U.S.A.	2023. 4～未定
	浅 野 洋 介	平 26	University Health Network, Toronto, Ontario, Canada	2023. 4～未定
消 化 器 外 科 学	梶 原 義 典	大学院生	Brigham and Women's Hospital, Harvard Medical School, Boston, U.S.A.	2022. 4～2025. 3
	九 十 九 悠 太	平 21	Harvard T.H. Chan School of Public Health, U.S.A.	2022. 6～2024. 6
	森 末 遼	令3院	Massachusetts General Hospital 55 Fruit Street Boston, MA 02114	2023. 4～2025. 3
呼 吸 器・ 乳 腺 内 分 泌 外 科 学	富 山 浩 司	平 12	Univeraity of Rochester, NY, U.S.A.	
	植 村 忠 廣	平 6	Allegheny General Hospital Pennsylvania, U.S.A.	
	目 崎 久 美	平 22	University of Tronto, Tronto General Hospital, Canada	2018. 4～
	難 波 圭	平 22	Memorial Sloan Kettering Cancer Center, U.S.A.	2019. 12～
	三 浦 章 博	平 23	Center for Human Development, U.S.A.	2020. 10～
	山 本 治 慎	平 23	University of Tronto, Canada	2021.4～2023.3(予定)
	中 田 憲 太 郎	平 23	Duke University, U.S.A.	2022. 8～
整 形 学 外 科 学	岡 崎 勇 樹	平 25	Hospital for special surgery, New York, U.S.A.	2022. 4～2年間
	篠 原 健 介	平28院	Rady Children's Hospital San Diego Orthopedics/Scoliosis, U.S.A.	2022. 7～2023. 7
	釜 付 祐 輔	平 22	Oslo Sports Trauma Research Center (Norwegian School of Sport Sciences), Norway	2022. 8～2023. 7
皮 膚 科 学	杉 原 悟	平 27	University of Queensland Diamantina Institute, Australia	2022.5～2024.3(予定)
泌 尿 器 病 態 学	光 井 洋 介	令1院	Cleveland Clinic, U.S.A.	2021. 6～未定
	別 宮 謙 介	平 14	Medical University of Vienna Währinger Gürtel 18-20, 1090 Wien, Austria	2022. 10～2023. 9
	坪 井 一 朗	平 28	Medical University of Vienna Währinger Gürtel 18-20, 1090 Wien, Austria	2022. 10～未定
麻 酔 学 蘇 生 学	佐 野 美 奈 子	大学院生	The Hospital for Sick Children, Sick Kids, Toronto, Canada	
総 合 学 内 科 学	西 村 義 人	平 27	University of Hawaii Internal Medicine, U.S.A.	2020. 9～
	原 田 洸	平 28	Mount Sinai Beth Israel, U.S.A.	2021. 7～
循 環 器 内 科 学	網 岡 尚 史	平 22	Univeraity of Kentucky, Saha Cardiovascular Research Center, U.S.A.	2021. 5～未定
	江 尻 健 太 郎	平31院	Johns Hopkins Bloomberg School of Public Health, U.S.A.	2021. 9～未定
	市 川 啓 之	平 24	Harbor-UCLA Medical Center, David Geffen School of Medicine, University of California, Los Angeles	2022. 7～未定
心 臓 血 管 外 科 学	甲 元 拓 志	平 1	University of Wisconsin Medical School, Wisconsin, U.S.A.	
	本 浄 修 己	平17院	The Hospital for Sick Children, University of Toronto, Toronto, Canada	2004. 12～未定
	大 崎 悟	平18院	University of Wisconsin Hospital and Clinics, Madison, U.S.A.	2006. 8～未定
	小 林 泰 幸	平 24	The Hospital for Sick Children, Canada	2021. 7～
	門 脇 幸 子	大学院生	The Hospital for Sick Children, Tronto, Canada	2019. 7～
	木 佐 森 永 理	大学院生	Children's National Hospital NW, Washington	2022. 7～





## 令和5年度 岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会合同総会について

会員の皆様におかれましては、新型コロナウイルス感染症対応のため、第一線で医療にご尽力されていることに感謝と敬意を表します。

さて、約3年間猛威を振るった新型コロナウイルス感染症も、このGW明けには5類に移行いたします。

しかしながら、これまでの新型コロナウイルス感染状況、また、会員の皆様の安全を最優先する観点から、令和5年度岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会合同総会は、昨年と同様、次のとおり行うこととしましたので、お知らせします。会員の皆様におかれましては、ご自愛の上、ご活躍されますよう祈念申し上げます。

### ◎岡山医学会・鶴翔会・岡山大学関連病院長会合同総会

岡山医学会、鶴翔会、岡山大学関連病院長会、一般社団法人鶴翔会の運営に必要な決算報告等は、昨年同様、鶴翔会報号外として関係資料を郵送し書面によるご協議をお願いいたします。

### ◎岡山医学会主催特別講演会（新任教授講演）

日時 令和5年6月3日（土）13時25分から

会場 岡山大学医学部鹿田キャンパス 鹿田会館（旧生化学棟）講堂

※ 来場者は、鶴翔会会員に限定させていただきます。

（マスクの着用にご協力願います。）

各教授の講演はZoomによりライブ配信いたします。

質問等は、会場のみとします。（オンラインでの質問等のご容赦下さい。）

#### 講演プログラム

13：25～	開会あいさつ	岡山医学会 会長（医学部長）		
13：30～14：00	岡山大学の医工連携で開発したCTガイド下IVR用ロボット	放射線医学	平木 隆夫 教授	
14：00～14：30	頑強な脳の形作りに貢献する神経前駆細胞の運命決定機構の研究	人体構成学	川口 綾乃 教授	
14：30～15：00	分裂病に惹かれ、8年越しの花嫁へ	精神神経病態学	高木 学 教授	
15：00～15：30	形態学と分子遺伝学を融合したがんの分子病理研究	腫瘍病理学	山元 英崇 教授	
15：30～16：00	泌尿器科の進歩と未来：ロボット手術と腎移植	泌尿器病態学	荒木 元朗 教授	
16：00～16：30	消化器癌の撲滅をめざして——早期診断のための囲い込みとliquid biopsyの新展開	消化器・肝臓内科学	大塚 基之 教授	
16：30～	閉会あいさつ	岡山医学会 副会長（病院長）		

### ◎岡山医学会賞各賞授賞式

日時 令和5年6月3日（土）16時40分から（新任教授講演会終了後）

場所 岡山大学医学部鹿田キャンパス 鹿田会館（旧生化学棟）講堂

※授賞式の様子は、新任教授講演終了後にZoomによりライブ配信いたします。

なお、岡山医学会賞各賞受賞者については、鶴翔会会報号外及び岡山医学会雑誌の誌上で顕彰させていただきます。

※岡山医学会主催特別講演会（新任教授講演）及び岡山医学会賞各賞授賞式にオンライン参加を希望される会員は、次のURL又はQRコードから、必ず事前登録してください。（会場での聴講をご希望の場合は申し込み不要です。）

URL : <https://forms.gle/2EY3HcRvV4X4h98r8>  
パスワード : kakusho（すべて半角文字です。）



事前登録の締め切りは、令和5年5月19日（金）です。

友野印刷（株）から、後日招待メールが届きますので、メールをご確認ください。

事前登録締め切り後に参加を希望される場合は、鶴翔会事務局までご連絡ください。

（問い合わせ先）

鶴翔会事務局

〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1 岡山大学医学部内

電話 : 086-235-7060 FAX : 086-235-7052

e-mail : dosokai@md.okayama-u.ac.jp



早春の倉敷館2009年

井上 一



## 会費納入について（お知らせ）



ご存知ですか？

### コンビニエンスストアからの払込みが可能になりました！

お近くのコンビニで、お買物ついでに、帰宅途中や、土日祝でも、ご負担なくお支払いいただけます。手数料もかかりません。

鶴翔会では、総会、会報や会員名簿の発行など同窓会としての一般的な活動だけでなく、医学科学生に関する大学行事への協賛、医学インターンシップなどの支援、卒業生への記念助成など医学科の教育研究の支援活動を行っております。こうした活動は会員の皆様からの会費により支えられています。年額3,000円の会費納入にご理解ご協力くださいますようお願い申し上げます。

### ●会費の納入方法

#### 1. 会報に同封の専用払込用紙（払込手数料は鶴翔会負担）

金額の訂正、通信欄への連絡事項のご記入がある場合はコンビニでは受付できませんので郵便局から払込みください。

\*ゆうちょ銀行は、現金を使った払込みにおいて、2022年1月17日から手数料を新設しており、1件ごとに料金110円が払込人にかかります。

#### 2. 自動引落し

毎年払い込むのが面倒…というお忙しい先生方に便利です。毎年7月にご指定の口座からお引落しいたします。ご希望の方は手続用紙をお送りいたしますので鶴翔会事務局までご連絡ください。

#### 3. インターネット・モバイルバンキング

ご利用の金融機関でネットバンキングをお申込みされていたら、直接お振込みが可能です。お振込みの際は会員番号及び氏名を必ず入力してください。

#### 【振込銀行 口座名】

- ・中国銀行 清輝橋支店（チュウゴクギンコウ セイキバシシテン）  
普通預金 1591434  
鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

#### ・ゆうちょ銀行

※ゆうちょ銀行から振込の場合  
記号 15410 番号 38020041  
鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

※ゆうちょ銀行以外から振込の場合

店名 五四八（ゴヨンハチ）店番548  
普通預金 3802004  
鶴翔会会費口（カクショウカイカイヒグチ）

### ●お得な会費制度もあります

- ・一時に25年間分の会費75,000円を終身会費としてお納めいただきますと以後の会費請求はございません。振込金額を75,000円に訂正してお振込みください。
- ・満77歳になられたときはお申し出により会費が免除になります。

令和4年度卒年次別会費納入状況

令和5年2月末現在

卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率	卒年次	会員数	請求者数	納入者数	納入率
昭16以前	25	0		-	40	56	43	34	79%	10	105	98	46	47%
17	2	0		-	41	70	57	35	61%	11	96	89	37	42%
17専	2	0		-	42	68	56	33	59%	12	99	92	31	34%
18	4	1	1	100%	43	77	65	45	69%	13	100	96	32	33%
18専	5	1	0	0%	44	66	53	36	68%	14	94	74	29	39%
19	2	0	0	-	45	72	66	44	67%	15	92	74	28	38%
19専	5	1	1	100%	46	81	69	43	62%	16	98	76	26	34%
20	5	1	0	0%	47	78	70	46	66%	17	100	82	28	34%
20専	9	2	2	100%	48	91	85	55	65%	18	98	85	25	29%
21	4	0	0	-	49	102	88	57	65%	19	98	83	26	31%
22	4	2	0	0%	50	71	66	43	65%	20	91	75	24	32%
23	9	3	2	67%	51	107	98	66	67%	21	104	84	30	36%
23専	10	3	2	67%	52	101	91	44	48%	22	94	85	31	36%
24	5	2	1	50%	53	73	65	39	60%	23	107	87	28	32%
24専	26	11	3	27%	54	119	111	63	57%	24	98	76	20	26%
25	7	2	0	0%	55	112	105	67	64%	25	95	90	32	36%
25専	23	11	3	27%	56	107	97	63	65%	26	105	95	26	27%
26	9	6	3	50%	57	124	112	63	56%	27	105	93	23	25%
26専	15	8	3	38%	58	112	104	63	61%	28	114	106	18	17%
27	16	11	7	64%	59	123	117	60	51%	29	120	110	17	15%
27専	6	3	1	33%	60	112	102	49	48%	30	112	101	21	21%
28	21	10	4	40%	61	112	107	55	51%	31	122	108	11	10%
29	17	11	6	55%	62	118	112	65	58%	令2	119	112	4	4%
30	20	9	7	78%	63	129	124	69	56%	3	110	107	27	25%
31	29	21	9	43%	平1	106	95	61	64%	4	122	119	20	17%
32	27	18	9	50%	2	120	113	59	52%	学部卒計 6,484 5,652 2,544 45%				
33	32	27	16	59%	3	111	97	54	56%	長期滞納者請求 2,454件 納入者 82件 3.3%				
34	42	28	16	57%	4	117	106	60	57%	備考. 上記一覧表は本学部卒業者の状況であるが、他大学卒業後本学大学院の修了者及びその他会員の状況は次のとおり。				
35	50	39	21	54%	5	109	104	43	41%	卒年次 会員数 請求者数 納入者数 納入率				
36	44	36	25	69%	6	118	110	52	47%	大学院卒 1,597 1,052 340 32%				
37	41	33	23	70%	7	108	92	38	41%	その他 1,638 1,451 862 59%				
38	51	41	23	56%	8	101	97	46	47%	合計 9,719 8,155 3,746 46%				
39	51	42	24	57%	9	97	95	42	44%					

注：  
 ① 会費の前納制度として、一時に25年分・75,000円（終身会費）の納入方法の制度もありますので、ご利用ください。（会則第10条附則）  
 ② 会則第10条の規程により、満77歳に達したときは、会員の申し出により会費を免除することができますので、お申し出ください。



## 令和4年度 Student Doctor認定式

令和4年12月23日（金）午後1時30分から、岡山大学医学部医学科 Student Doctor 認定式がJunko Fukutakeホールにおいて執り行われました。学生代表に Student Doctor認定書が授与され、先輩から激励のエールとアドバイスが送られました。



## 令和4年度 岡山大学医学部医学科 学位記授与式

令和5年3月24日（金）、岡山大学学位記授与式が岡山県総合グラウンド体育館（ジップアリーナ岡山）で執り行われました。

同日午後、鹿田キャンパスJ-Hallにて医学部医学科の学位記授与式が挙行されました。今年度は保護者の参列が可能となり、保護者の方が見守る中、卒業生一人一人の名前が読み上げられた後卒業生総代に学位記が授与され、コロナ禍の下で最終学年を過ごした頼もしい124名の医学生が学舎から新しい第一歩を踏み出しました。

卒業生の皆様におかれましては、これからのご活躍を心よりお祈り申し上げます。



## 第117回 医師国家試験の結果

### 全国（国公立）の合格状況

		出願者数	受験者数	合格者数	合格率
全 国 計	新卒	9,703	9,459	8,972	94.9
	全体	10,586	10,293	9,432	91.6
(参考：第116回)	新卒	9,473	9,232	8,774	95.0
	全体	10,353	10,061	9,222	91.6

### 中国・四国地区国立大学における合格状況

大 学 名	合 格 率 (%)	順 位			備 考
		中四国 (9校中)	全国立 (43校中)	全国 (82校中)	
鳥取大学	92.1	5 (9)	27 (43)	53 (79)	
島根大学	88.5	8 (4)	38 (25)	70 (50)	
<b>岡山大学</b>	<b>91.2</b>	<b>7 (7)</b>	<b>33 (32)</b>	<b>61 (62)</b>	
広島大学	86.5	9 (6)	43 (31)	76 (60)	
山口大学	92.0	6 (3)	28 (22)	54 (45)	
徳島大学	95.2	2 (1)	9 (20)	25 (42)	
香川大学	95.9	1 (5)	3 (30)	16 (56)	
愛媛大学	95.0	3 (2)	12 (21)	30 (43)	
高知大学	93.5	4 (8)	17 (42)	37 (77)	

※ ( ) 内は、昨年度の順位を表す。

### 岡山大学の医師国家試験年度別合格状況

試験年月	新卒者	既卒者	受験者	新 卒 者 率		既 卒 者 率		計		順 位		備 考
				新 合 格	率	合 格	率	計	率	国立	全国	
16.3	98	5	103	89/98	90.8	5/5	100.0	94/103	91.3	20/43	29/80	
17.2	102	10	112	98/102	96.1	7/10	70.0	105/112	93.8	12/43	20/80	
18.2	98	7	105	93/98	94.9	4/7	57.1	97/105	92.4	15/43	30/80	
19.2	98	8	106	93/98	94.9	4/8	50.0	97/106	91.5	21/43	30/80	
20.2	92	8	100	87/92	94.6	5/8	62.5	92/100	92.0	22/43	36/80	
21.2	104	7	110	98/103	95.1	2/7	28.6	100/110	90.9	28/43	51/80	(新卒者1名は未受験)
22.2	94	12	103	87/93	93.5	6/10	60.0	93/103	90.3	24/43	44/80	(新卒者1名は未受験)
23.2	107	10	116	94/106	88.7	5/10	50.0	99/116	85.3	39/43	68/80	(新卒者1名は未受験)
24.2	98	20	116	95/98	96.9	12/18	66.7	107/116	92.2	15/43	33/80	
25.2	95	10	103	90/95	94.7	6/8	75.0	96/103	93.2	8/43	23/80	
26.2	105	8	113	97/105	92.4	5/8	62.5	102/113	90.3	25/43	46/80	
27.2	105	12	117	101/105	96.2	6/12	50.0	107/117	91.5	26/43	46/80	
28.2	115	10	125	109/115	94.8	6/10	60.0	115/125	92.0	18/43	38/80	
29.2	120	8	128	113/120	94.2	6/8	75.0	119/128	93.0	14/43	21/80	
30.2	112	12	124	110/112	98.2	5/10	50.0	115/122	94.3	6/43	19/80	
31.2	122	7	129	117/122	94.3	2/7	28.6	117/122	90.7	23/43	44/80	
2.2	119	13	132	111/119	93.3	6/12	50.0	117/131	89.3	39/43	70/80	
3.2	110	13	123	108/110	98.2	6/13	46.2	114/123	92.7	20/43	41/80	
4.2	122	8	130	115/122	94.2	2/8	25.0	117/130	90.0	32/43	62/81	
5.2	124	13	137	119/124	95.9	6/13	46.0	125/137	91.2	33/43	61/82	



## 事務局からのお知らせ

### ●アンケート実施の予定について

岡山医学同窓会報「鶴翔会」をより良い紙面にしていくため次号10月発行の会報でアンケートを実施予定ですのでお知らせいたします。

多くの先生方にご回答をいただけますようお願い申し上げます。



### ●会員名簿2022年版の発行について

2022年12月に会員名簿を発行いたしました。

会員の先生方で名簿をご希望でしたら鶴翔会事務局までご連絡ください。

1冊7,000円でご購入いただけます。

### ●鶴翔会のホームページをご存じでしょうか

リニューアルした、鶴翔会ホームページをぜひご覧ください。



- ・同窓会報のバックナンバー（前号～過去5年間まで）が閲覧いただけます。
- ・Newsでは、その時々のお知らせを発信していきます。

### ■ご勤務先・ご住所などご連絡先の変更がございましたらお知らせください。

鶴翔会ホームページの「事務局より」から、変更届フォーム、または下記QRコードをご利用ください。

メール・FAX・お電話でのお届けも受け付けております。



変更届フォーム

### ■鶴翔会会報へのご投稿をお待ちしております。

随時、原稿を受け付けておりますので、奮ってご寄稿くださいますようお願いいたします。投稿内規につきましては会報の「岡山より」鶴翔会会報投稿内規、または鶴翔会ホームページの「同窓会報について」でご確認いただき、郵送、またはメールにてご寄稿ください。

会員の皆様に、より見やすく親しんでいただけるよう努めてまいりますので、ご活用くださいますようお願いいたします。

お問合せ・ご連絡は

鶴翔会事務局 TEL：086-235-7060 FAX：086-235-7052

E-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

HP：https://kakushoukai.oumed.okayama-u.ac.jp/

## 鶴翔会だより 『教育研究を進めるもの3』

岡山医学振興会代表理事  
(昭和54年卒、名誉教授)  
**山田 雅夫**

新しい門出の時を迎え、鶴翔会の皆様には、ますますご清栄のことと拝察申し上げます。新型コロナウイルス感染症からの出口を模索する中、引き続き皆様の懸命のご尽力に敬意を表します。また、那須新学長のもと、大学・医学部の新体制の御安航をお祈り申し上げます。今年、年初から岡山の高校駅伝、サッカー優勝という朗報があり、若い力に元気をもらっています。

岡山医学振興会では、皆様からのご支援をいただき、毎年、教育研究助成の公募・選考を進めております。この当財団の行う教育研究助成ですが、新型コロナウイルス感染症の出口戦略を一気に加速し、若手の研究者の活動をさらに活発に支援するため、今年度の助成の規模を増額したいと考えております。例えば、しばらく途絶えていた国際学会への出張、海外の研究施設への研修渡航・留学など、これまでに研究実績を着実に蓄積し、時期を伺っていたけれど実現できなかった研究者の渡航を支援することを考えております。

教育助成につきましては、VR (Virtual Reality) 技術の医療教育へ応用などが期待されます。研究助成につきましては、従来は若手研究者がPI (Principal Investigator) となる過程を、特に序盤から中盤のあたりで応援する視点で進めて参りました。PIというのは、少し馴染みがないかもしれませんが、その条件として一般的には、1) 独立した研究課題と研究スペースを持つこと、2) 研究グループを組織して研究を行っている場合は、そのグループの責任者であること、3) 大学院生の指導に責任を持つこと、4) 論文発表の責任者であること、などが考えられ、割と幅広い概念です。そのため、既にPIとして確立しつつあり、卓越した業績をあげつつある、例えば若手の教授・准教授等の方が、これまでは、残念ながら選に漏れることもあったかもしれません。今年度からは、この点も少し改善できるかもしれません。また助成に当たっては以前よりジェンダー平等を重視して進めております。

このように考えてくると、是非とも鶴翔会の皆様にも、『教育研究を進めるもの』という共通理解のもと、次世代の岡山での教育研究を一步前に進めるため、さ

らなるご寄付をお願いすることを、これまで以上に積極的に進めたいと考えております。ただ、新型コロナウイルス感染症の前は、岡山大学医学部150周年の一連の行事「岡山大学の10年ルネッサンス」の大事業に遠慮して、ご寄付の声を大きく申し上げることはなかったのですが、来るべき次の50年の門出を応援していただきたく、当財団にご寄付をお願いする次第です。鶴翔会のご厚意により、会報をお送りするときに、岡山医学振興会の寄付のための振り込み用紙を添付させていただいております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

特に、医学部・病院で若手のご指導に携わっている教授の皆様には、是非ご賛同いただき、ご自身、教室のスタッフ、またご同門の先生からのご寄付の呼びかけを宜しく申し上げます。必ずや、教室の若手の研究者の支援という形で返ってくるものとお考え下さい。さらに、新型コロナウイルス感染症まん延により、対面での学術集会在が控えられておりましたが、今後は急速に戻ってくると思います。ご自身、教室で主宰される学会や研究会の運営費用を募る場合も、当財団を通していただくと、税制上の優遇措置もあり、ご同門の先生方、関連病院にとっても大きなメリットがあると思います。これにつきましては、当財団事務室までご相談下さい。当財団は記念会館の3階にあります。



岡山大学病院医科系診療科別役付職員一覧

病院長 前田 嘉信  
 副病院長〔企画・総務運営担当〕 森実 真  
 同〔診療（医科）・防災担当〕 増山 寿  
 同〔教育（医科）担当〕 伊野 英男  
 同〔研究（医科）担当〕 和田 淳  
 同〔医療安全管理担当〕 塚原 宏一

令和5年4月1日現在

診療領域	診療科	科 長	副 科 長	医 局 長	外来医長	病棟医長	教育医長
内 科	総合内科・総合診療科	大塚 文 男	花 山 宜 久	本 多 寛 之	長谷川 功	大 國 皓 平	谷 山 真 規 子
	消化器内科	大塚 基 之	平 岡 佐 規 子	川 野 誠 司	堤 康 一 郎	衣 笠 秀 明	井 口 俊 博
	血液・腫瘍内科	前田 嘉 信	松 岡 賢 市	市 原 英 基	浅 田 騰	藤 原 英 晃	横 本 剛
	呼吸器・アレルギー内科	前田 嘉 信	大 橋 圭 明	市 原 英 基	浅 田 騰	肥 後 寿 夫	横 本 剛
	腎臓・糖尿病・内分泌内科	和田 淳	江 口 潤	田 邊 克 幸	松 本 佳 則	辻 憲 二	森 永 裕 士
	リウマチ・膠原病内科	和田 淳	松 本 佳 則	田 邊 克 幸	松 本 佳 則	辻 憲 二	森 永 裕 士
	循環器内科		中 村 一 文	赤 木 達	三 好 亨	高 谷 陽 一	吉 田 雅 言
	脳神経内科	石 浦 浩 之	山 下 徹	森 原 隆 太	中 野 由 美 子	柚 木 太 淳	武 本 麻 美
感染症内科	大塚 文 男						
外 科	消化管外科	藤 原 俊 義	寺 石 文 則	田 邊 俊 介	近 藤 喜 太	重 安 邦 俊	前 田 直 見
	肝・胆・膵外科	榎 田 祐 三	藤 智 和	田 邊 俊 介	高 木 弘 誠	高 木 弘 誠	藤 智 和
	呼吸器外科	豊 岡 伸 一	杉 本 誠 一 郎	杉 本 誠 一 郎	岡 崎 幹 生	山 本 寛 斉	三 好 健 太 郎
	乳腺・内分泌外科	枝 園 忠 彦	岩 谷 胤 生	杉 本 誠 一 郎	高 橋 侑 子	岩 谷 胤 生	突 沖 貴 宏
	泌尿器科	荒 木 元 朗		枝 村 康 平	小 林 知 子	西 村 慎 吾	岩 田 健 宏
	心臓血管外科	笠 原 真 悟		小 谷 恭 弘	廣 田 真 規	川 畑 拓 也	小 林 純 子
	小児外科	野 田 卓 男			尾 山 貴 徳	谷 本 光 隆	尾 山 貴 徳
	小児心臓血管外科	笠 原 真 悟					
感覚・皮膚・運動機能科	整形外科	尾 崎 敏 文	西 田 圭 一 郎	雑 賀 建 多	藤 原 智 洋	鉄 永 智 紀	齋 藤 太 一
	形成外科	木 股 敬 裕	難 波 祐 三 郎	妹 尾 貴 矢	難 波 祐 三 郎	松 本 洋	太 田 智 之
	皮膚科	森 実 真	川 上 佳 夫	三 宅 智 子	横 山 恵 美	平 井 陽 至	梶 田 藍
	眼科	森 実 祐 基		塩 出 雄 亮	藤 原 美 幸	細 川 海 音	森 澤 伸
	耳鼻咽喉科	安 藤 瑞 生		菅 谷 明 子	檜 垣 貴 哉	牧 野 琢 丸	前 田 幸 英
脳・神経・精神科	精神科神経科	高 木 学	寺 田 整 司	岡 久 祐 子	千 田 真 友 子	酒 本 真 次	竹 之 下 慎 太 郎
	脳神経外科		安 原 隆 雄	藤 井 謙 太 郎	平 松 匡 文	石 田 穰 治	佐 々 田 晋
	麻酔科蘇生科	森 松 博 史		松 岡 義 和	小 坂 順 子	金 澤 伴 幸	谷 真 規 子
小児・産科・女性科	小児科	塚 原 宏 一	岡 田 あ ゆ み	馬 場 健 児	藤 井 智 香 子	栗 田 佳 彦	吉 本 順 子
	小児循環器科	塚 原 宏 一					
	小児神経科	小 林 勝 弘	秋 山 倫 之	秋 山 倫 之	柴 田 敬	土 屋 弘 樹	秋 山 麻 里
	小児血液・腫瘍科	塚 原 宏 一					
	小児麻酔科	岩 崎 達 雄					
	小児放射線科	平 木 隆 夫					
	小児心身医療科	岡 田 あ ゆ み					
産科婦人科	増 山 寿	中 村 圭 一 郎	衛 藤 英 理 子	光 井 崇	小 川 千 加 子	久 保 光 太 郎	
放射線科	平 木 隆 夫		富 田 晃 司	児 島 克 英	吉 尾 浩 太 郎	宇 賀 麻 由	
救命救急科	中 尾 篤 典	内 藤 宏 道	湯 本 哲 也	塚 原 紘 平	本 郷 貴 識	小 崎 吉 訓	
病理診断科	柳 井 広 之		西 田 賢 司			西 田 賢 司	
緩和支援医療科	田 端 雅 弘	片 山 英 樹					
臨床遺伝子診療科	平 沢 晃	山 本 英 喜	山 本 英 喜	山 本 英 喜		山 本 英 喜	

## 鶴翔会会報 投稿内規

項目	字数(程度)	内容
ご挨拶	800	(学内) 学長・学部長・病院長就任、定年退任、教授就任 (学外) 学長・教授就任、関係機関の長就任等
謹弔		名誉教授・名誉会長・会員などご逝去のとき
医学部(病院)の動き		医学部・附属病院の変革、新設部門などについて
会員の近況		受賞・表彰、近況報告等
学会・研究会だより		学会・研究会等報告、開催通知
支部だより	1600	各支部の支部総会報告
同期会だより	1600	同期会報告、開催通知
関連病院だより		岡山大学関連病院長会 新規入会病院紹介
学生だより	1600	西医体報告、解剖実習体験記等
海外だより	2000	海外留学、在住時の体験記や海外旅行記等
歴史の広場		岡山大学医学部にまつわる歴史について
随想	1600	
会員のこえ		会員の意見・感想等
教室だより	800	医学部・大学院・病院診療施設の現況報告
岡山より		事務局より報告事項
編集後記		会報担当幹事又は事務局が担当
挿絵		

1. 字数はあくまで目安です。
2. 4月号のメ切は1月末、10月号のメ切は7月末です。
3. 上記以外の内容であっても受け付けております。ただし、特定の個人への誹謗中傷等、掲載に相応しくないとされるものについては、編集委員会において審議後、掲載をお断りする場合があります。
4. 原稿、挿絵はデータ(word、JPEG等)にて下記メールアドレスまでお送りいただければ幸甚ですが、紙原稿やお写真を下記宛てご郵送いただいても結構です。  
※メールにてお送りくださった場合、必ず当方より原稿受領及び御礼の返信をさせていただきます。当方からの返信がない場合は、メールが正しく届いていない可能性がありますので、お問い合わせ願います。

原稿送付先・連絡先

鶴翔会

〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1

TEL: 086-235-7060 FAX: 086-235-7052

E-mail: dosokai@md.okayama-u.ac.jp



## 編 集 後 記

会報134号をお届けします。

新型コロナウイルス感染症の第8波はこの編集後記を執筆している時点（2月中旬）ではかなりおさまってきています。ウィズコロナへの動きが進んでおり、3月13日にマスク使用の自己判断ができるようになり、5月8日に現在の感染症2類から5類への移行が予定されています。スムーズにウィズコロナ状況が作られていくことを祈ります。

本年春にWBC（ワールドベースボールクラシック）が6年ぶりに開催され、日本代表の宮崎合宿に多くの観客が詰めかけていると報道されています。3月上旬には大谷翔平選手らメジャーリーガーも全員日本チームに合流し、大変な盛り上が期待されます。この号が皆様のお手元に届く頃には結果が出ていますが、果たして日本はどのような成績をあげているのでしょうか。

鶴翔会会報をより多くの皆様に読んでいただくためのステップの一つとして、アンケートをお願いする予定にしています。よりよい紙面作りのためにご協力を

何卒よろしくお願い申し上げます。また、昨年より開始した年会費のコンビニエンスストアからの入金、土曜日曜も可能なためか、利用される会員数が増えています。今後も会員の皆様が便利に感じる方法を探り入れていきたいと思っております。

本号にありますように多くの先生方が定年退任され、一方で多くの先生方が新たに就任されています。ご挨拶を掲載いたしました。退任される先生方には大学・医学部の研究・教育・管理運営へのご貢献に感謝申し上げます。そして就任される先生方にはどうぞ岡山大学・医学部の発展のためにお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

私は過去4年間にわたり、編集幹事を務めて参りましたが、脳神経外科教授を定年退任するにあたり編集幹事を和田 淳教授に交代いたします。これまでの皆様からの本誌へのご支援に深謝申し上げます。ありがとうございました。

（伊達 勲）

発 行 鶴翔会（岡山医学同窓会）  
会報幹事 伊達 勲  
鶴翔会会報編集委員 前田嘉信、  
大橋俊孝、森實祐基、木浦勝行、  
伊達 勲、頼藤貴志、豊岡伸一、  
森実 真、柳井広之、和田 淳、  
川口綾乃  
久保俊英（岡山医療センター）、  
武内恵太（医学科6年生）、  
六車明日香（医学科6年生）  
〒700-8558 岡山市北区鹿田町2-5-1  
電 話 （086）235-7060・7061  
F A X （086）235-7052  
E-mail : dosokai@md.okayama-u.ac.jp  
<http://kakushoukai.oumed.okayama-u.ac.jp>

印 刷 友野印刷株式会社  
電 話 （086）255-1101  
F A X （086）253-2965

乱丁・落丁はお取りかえします。





## 鶴翔会会員向けサービスのご案内

### ○ 岡山大学勤務医師賠償責任保険サービス

鶴翔会では会員の方々を対象に、(株)損害保険ジャパンの団体勤務医師賠償責任保険を取り扱っています。  
鶴翔会ホームページにパンフレットを掲載していますのでご覧ください。

#### 特徴・メリット

- 個人で保険に加入するより、保険料が断然お得（20%も割安）
- 会員の先生であれば勤務先に関係なく利用できます
- 期間中に、勤務先を異動しても保険は有効
- 契約は1年更新

※加入を希望される場合は、必要書類をお送りしますので、鶴翔会事務局までご連絡ください。

鶴翔会事務局 TEL：086-235-7060 FAX：086-235-7052  
e-mail：dosokai@md.okayama-u.ac.jp

鶴翔会では、三井住友トラスト・カード(株)と提携して



三井住友トラストVISAゴールドカードをご案内しております。

三井住友トラストVISAゴールドカードSなら… **初年度年会費無料！**

2年目以降も前年度の  
ご利用金額が10万円以上で

▶▶ **年会費無料が続きます！**

前年度のご利用金額が10万円未満でも ▶▶ 年会費 2,750 円 (税込)



新規入会&ご利用で **最大 20,000 円相当ポイントプレゼント**  
※  
2023年8月31日まで

※1ポイント1円でポイント交換した場合です。交換内容によっては1ポイント1円にならない場合もございます。

キャンペーンにはエントリーが必要です。詳細は下記のURLにてご確認ください。

オンライン オンライン申込み専用URL <https://www.smtcard.jp/lp/gold-sp.html>

★団体コード入力欄には **【72190】** を半角英数字でご入力ください

弊社公式サイト(<https://www.smtcard.jp/>)などからのお申込みは、上記年会費特典が適用になりませんのでご注意ください。



紙のお申込書の請求・お問い合わせは、下記の三井住友トラスト・カード株式会社まで

電話 **0120-370-070** 受付時間:9:00~17:00  
(土・日・祝日・12/30~1/3を除く)

メール **Moushikomi@smtcard.jp**

ご請求の際は、右記①~⑤の  
内容をお伝えください。

- ①郵便番号
- ②ご住所
- ③お名前（メールの場合：よみがなもお願いします）
- ④お電話番号
- ⑤所属団体名：鶴翔会（団体コード **S72190**）

個人情報の取扱いに関する同意文言：私は申込書請求のために提供する個人情報を貴社が次の目的達成のために利用することに同意します。  
[弊社は「個人情報の保護に関する法律」に基づき適正な保護を講じたうえで、管理・利用させていただきます。なお、個人情報の利用目的およびその範囲については、入会申込書送付先にVISAカード入会申込書を送付することに限定します。]

※入会審査の結果、ご希望に添えない場合もございますのでご了承ください。

2022- 営 -0064

## 裏表紙の写真

外来診療棟と鹿田パーキングモール

令和2年（2020年）竣工

慢性的な駐車場不足と利用者の利便性向上を目的に、同年5月、病院外来診療棟に隣接して、立体駐車場等のアメニティーモールが完成した。同施設には、コンビニエンスストアと調剤薬局2店舗が入居し、建物全体がユニバーサルデザインを採用するなど、利用者の利便性、安全性に配慮した空間に生まれ変わった。



# 鶴翔会

岡山医学同窓会報